千葉県文化財センター調査報告第497集

首都圏中央連絡自動車道
埋蔵文化財調査報告書１

袖ケ浦市南岩井作遺跡（吉野田遺跡）・西御祈祷谷古墳群・
新開１遺跡，木更津市新開２遺跡

平成16年12月

国　土　交　通　省

財団法人　千葉県文化財センター

首都圏中央連絡自動車道
埋蔵文化財調査報告書 1

袖ケ浦市南岩井作遺跡(吉野田遺跡)・西御祈祷谷古墳群・
新開 1 遺跡，木更津市新開 2 遺跡

序　　文

財団法人千葉県文化財センターは，埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され，以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県文化財センター調査報告第497集として，国土交通省の首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴って実施した袖ケ浦市南岩井作遺跡（吉野田遺跡）・西御祈祷谷古墳群・新開１遺跡，木更津市新開２遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，古墳時代の集落が発見されるなど，この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり，この報告書が学術資料として，また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関，また，発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成16年12月22日

財団法人千葉県文化財センター
理事長　清　水　新　次

凡　例

1　本書は，国土交通省による首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書は，下記の遺跡を収録したものである。

南岩井作遺跡	千葉県袖ケ浦市吉野田字南岩井作19－２	（遺跡コード229-028）
西御祈祷谷古墳群	千葉県袖ケ浦市玉野字西御祈祷谷1,201ほか	（遺跡コード229-027）
新開１遺跡	千葉県袖ケ浦市吉野田字岩井作47－２	（遺跡コード229-029）
新開２遺跡	千葉県木更津市伊豆島字新開1,201－１	（遺跡コード206-026）

※遺跡名について…『千葉県埋蔵文化財分布地図（４）－君津・夷隅・安房地区（改訂版）』（財団法人千葉県文化財センター　2000，以下『分布地図』）における遺跡名との対応関係は，それぞれ以下のとおりである。

南岩井作遺跡（吉野田遺跡）：『分布地図』では「南岩井作遺跡」と記載されているが，発掘調査は「吉野田遺跡」として行った。今回整理・報告するに当たり，混乱のないよう「南岩井作遺跡（吉野田遺跡）」と表記することとした。遺跡範囲は今回の調査範囲に等しい。

西御祈祷谷古墳群：『分布地図』では，同じ遺跡を指して「袖ケ浦市西御祈祷谷古墳群」，「木更津市玉野台古墳群」と二重に記載されているが，明らかに袖ケ浦市側に位置することから，「西御祈祷谷古墳群」として調査・報告することとした。なお，調査の結果，古墳と考えられていたもののすべてが塚である事が判明したが，遺跡名はそのまま「古墳群」とした。

新開１・２遺跡：昭和58年に新開遺跡調査委員会によって，「新開遺跡」として吉野田配水場建設に伴う調査が行われたが，今回調査・報告する「新開１遺跡」・「新開２遺跡」は，その北方の尾根上に当たる。その場所も『分布地図』では「新開遺跡」と記載されているが，今回調査・報告するに当たって，便宜上袖ケ浦市側を「新開１遺跡」，木更津市側を「新開２遺跡」と呼び分けた。それぞれの遺跡範囲は今回の調査範囲に等しい。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は，国土交通省の委託を受け，財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者，実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆は，第１章第１節１・３(３)，第２節３，第３章第１節，第６章第４節を副所長兼主席研究員　土屋治雄が，第３章第２節以下の奈良・平安時代以降の遺物について，および第６章第３節を上席研究員　半澤幹雄が担当し，その他の執筆と編集は研究員　高梨友子が担当した。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，千葉県教育庁教育振興部文化財課，袖ケ浦市教育委員会，木更津市教育委員会，浅野雅則氏，稲葉昭智氏，小林清隆氏，宮本敬一氏の御指導・御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は，下記のとおりである。

第１図　国土地理院発行　１/50,000地形図「木更津」・「姉崎」

第２図　袖ケ浦市発行　　袖ケ浦市地形図No.44（ⅠX-ME 33-４）

第５図　国土地理院発行　１/25,000地形図「木更津」・「上総横田」

8　周辺地形航空写真は，京葉測量株式会社による平成12年撮影のものを使用した。

9　本書で使用した図面の方位はすべて座標北である。測量値については日本測地系を使用した。

10　遺構名は，発掘調査時の名称を踏襲した。西御祈祷谷古墳群・新開１遺跡・新開２遺跡については同じ尾根筋上に所在するため，２遺跡以上にまたがる遺構があるが，それらについては最初に検出された遺跡の遺構として調査・報告した。遺構と所属する遺跡の対応関係は，第１表のとおりである。なお，上層確認トレンチ出土遺物については，グリッドにふりかえて報告している。

11　遺構実測図中の「Ｋ」は撹乱を表している。

12　遺物実測図の断面について，黒丸は胎土に繊維が混入していることを表し，黒塗りは須恵器を表している。

13　各遺物表中の計測値について，（　）付き数値は，完形でない場合の現存値である。
ただし，石器に限っては，全て（　）無しで現存値とした。

本文目次

第１章　はじめに …… 1

第１節　調査の概要 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査の経過 …… 2

3　調査の方法 …… 4

第２節　遺跡の概要 …… 10

1　遺跡の位置 …… 10

2　周辺の遺跡 …… 10

3　周辺の塚群 …… 13

4　基本層序 …… 14

第２章　南岩井作遺跡（吉野田遺跡） …… 20

第１節　中・近世 …… 20

1　掘立柱建物跡 …… 20

2　溝状遺構 …… 20

第２節　遺構外出土遺物 …… 23

第３章　西御祈祷谷古墳群 …… 24

第１節　中・近世 …… 24

1　塚 …… 24

2　溝状遺構 …… 33

第２節　遺構外出土遺物 …… 34

1　縄文時代 …… 34

2　弥生時代以降 …… 39

第４章　新開１遺跡 …… 41

第１節　縄文時代 …… 41

1　土坑 …… 41

2　礫群 …… 41

3　包含層出土遺物 …… 41
第２節　弥生～古墳時代 …… 62
1　竪穴住居跡 …… 62
第３節　奈良・平安時代 …… 71
1　方形周溝状遺構 …… 71
第４節　中・近世 …… 73
1　溝状遺構 …… 73
2　土坑 …… 74
第５節　遺構外出土遺物 …… 74

第５章　新開２遺跡 …… 79
第１節　旧石器時代 …… 79
1　基本層序 …… 79
2　出土遺物 …… 79
第２節　縄文時代 …… 81
第３節　弥生～古墳時代 …… 88
1　竪穴住居跡 …… 88
第４節　奈良・平安時代以降 …… 95
1　塚 …… 95
2　溝状遺構 …… 95
第５節　遺構外出土遺物 …… 99

第６章　まとめ …… 102
第１節　縄文時代 …… 102
第２節　弥生～古墳時代 …… 114
第３節　奈良・平安時代 …… 116
第４節　中世以降 …… 118
1　西御祈祷谷塚群の築造理由 …… 118
2　西御祈祷谷塚群の特徴 …… 118
3　塚の築造時期について …… 118

報告書抄録 …… 巻末

挿図目次

第１図　遺跡の位置（１：50,000）…… 1
第２図　調査区と周辺地形（１：2,500）…… 5
第３図　グリッド設定図…… 7
第４図　下層確認グリッド設定図…… 9
第５図　周辺の遺跡（１：25,000）…… 11
第６図　基本層序(１)…… 14
第７図　基本層序(２)…… 15
第８図　基本層序(３)…… 16
第９図　基本層序(４)…… 17

南岩井作遺跡（吉野田遺跡）
第10図　南岩井作遺跡（吉野田遺跡）
遺構配置図…… 21
第11図　掘立柱建物跡と出土遺物…… 22
第12図　南岩井作遺跡（吉野田遺跡）
遺構外出土遺物…… 23

西御祈祷谷古墳群
第13図　西御祈祷谷古墳群　遺構配置図…… 25
第14図　SM-001・008…… 26
第15図　SM-002と出土遺物…… 27
第16図　SM-003と出土遺物…… 28
第17図　SM-004…… 29
第18図　SM-005…… 30
第19図　SM-006…… 31
第20図　SM-007…… 32
第21図　SD-002土層断面と出土遺物…… 33
第22図　SM-006下遺構…… 34
第23図　第１群土器…… 35
第24図　第２群土器…… 35
第25図　第３群土器…… 35
第26図　第５群土器…… 35
第27図　第６群土器…… 35
第28図　縄文時代石器…… 37
第29図　西御祈祷谷古墳群
遺構外出土遺物…… 39

新開１遺跡
第30図　新開１遺跡・新開２遺跡
遺構配置図(１)…… 42
第31図　新開１遺跡・新開２遺跡
遺構配置図(２)…… 43
第32図　SK-002・SK-004・SK-005…… 44
第33図　礫群…… 44
第34図　第１群土器…… 45
第35図　第２群土器…… 45
第36図　第３群土器(１)…… 46
第37図　第３群土器(２)…… 47
第38図　第３群土器(３)…… 48
第39図　第３群土器(４)…… 49
第40図　第４群土器…… 49
第41図　第５群土器…… 50
第42図　縄文時代石器(１)…… 55
第43図　縄文時代石器(２)…… 56
第44図　縄文時代石器(３)…… 57
第45図　SI-005…… 63
第46図　SI-006と出土遺物…… 64
第47図　SI-007と出土遺物…… 64
第48図　SI-008と出土遺物…… 65
第49図　SI-009と出土遺物…… 65
第50図　SI-010と出土遺物…… 66
第51図　SI-011と出土遺物…… 67
第52図　SI-012と出土遺物…… 68
第53図　SI-015…… 69
第54図　SI-015出土遺物…… 70
第55図　SM-010と出土遺物…… 72
第56図　SS-001…… 73
第57図　SD-014出土遺物…… 74

第58図　SK-001…… 74
第59図　新開１遺跡　遺構外出土遺物…… 75

新開２遺跡
第60図　基本層序…… 79
第61図　旧石器時代石器…… 80
第62図　第１群土器…… 81
第63図　第２群土器…… 81
第64図　第３群土器(１)…… 82
第65図　第３群土器(２)…… 83
第66図　第４群土器…… 83
第67図　第５群土器…… 84
第68図　第６群土器…… 84
第69図　縄文時代石器…… 86
第70図　SI-001と出土遺物…… 89
第71図　SI-002と出土遺物…… 90
第72図　SI-004と出土遺物…… 92
第73図　SI-013・014…… 93
第74図　SI-013・014出土遺物…… 94
第75図　SM-009…… 96
第76図　SM-009出土遺物…… 97
第77図　SD-003出土遺物…… 98
第78図　SD-012出土遺物…… 98
第79図　SD-008出土遺物…… 98
第80図　新開２遺跡　遺構外出土遺物…… 99

まとめ
第81図　第１群土器重量別分布図…… 103
第82図　第２群土器重量別分布図…… 104
第83図　第３群土器重量別分布図…… 105
第84図　第４群土器重量別分布図…… 106
第85図　第５群土器重量別分布図…… 107
第86図　第６群土器重量別分布図…… 108
第87図　礫個数別分布図…… 111
第88図　礫重量別分布図…… 112
第89図　礫石材別組成…… 113
第90図　礫被熱率…… 114
第91図　弥生～古墳時代の遺構…… 115
第92図　奈良・平安時代の遺構と遺物…… 117

表 目 次

第１表　西御祈祷谷古墳群・新開１遺跡・
新開２遺跡　遺構一覧表…… 8

南岩井作遺跡（吉野田遺跡）
第２表　南岩井作遺跡（吉野田遺跡）
縄文時代石器観察表… 23
第３表　南岩井作遺跡（吉野田遺跡）
縄文時代石器組成表… 23
第４表　南岩井作遺跡（吉野田遺跡）
掲載土器観察表…… 23
第５表　南岩井作遺跡（吉野田遺跡）
非掲載遺物重量表…… 23

西御祈祷谷古墳群
第６表　西御祈祷谷古墳群　縄文土器表…… 36
第７表　西御祈祷谷古墳群
縄文時代石器観察表…… 38
第８表　西御祈祷谷古墳群
縄文時代石器組成表…… 38
第９表　西御祈祷谷古墳群
縄文時代礫組成表…… 38
第10表　西御祈祷谷古墳群
掲載土器観察表…… 39
第11表　西御祈祷谷古墳群
掲載銭貨一覧表…… 40
第12表　西御祈祷谷古墳群
非掲載遺物重量表…… 40

新開１遺跡
第13表　新開１遺跡　縄文土器表…… 51
第14表　新開１遺跡　縄文時代石器観察表…… 58
第15表　新開１遺跡　縄文時代石器組成表…… 58
第16表　新開１遺跡　縄文時代礫組成表…… 59
第17表　新開１遺跡　掲載土器観察表…… 76
第18表　新開１遺跡　非掲載遺物重量表…… 77

新開２遺跡
第19表　新開２遺跡　旧石器時代石器観察表… 80
第20表　新開２遺跡　旧石器時代石器組成表… 80
第21表　新開２遺跡　縄文土器表…… 84
第22表　新開２遺跡　縄文時代石器観察表…… 86
第23表　新開２遺跡　縄文時代石器組成表…… 87
第24表　新開２遺跡　縄文時代礫組成表…… 87
第25表　新開２遺跡　掲載土器観察表…… 100
第26表　新開２遺跡　掲載銭貨一覧表…… 101
第27表　新開２遺跡　非掲載遺物重量表…… 101

まとめ
第28表　縄文時代礫組成表…… 113

図版目次

図版１　遺跡周辺航空写真

南岩井作遺跡（吉野田遺跡）
図版２　SB-001

西御祈祷谷古墳群
図版３　西御祈祷谷古墳群・新開１・新開２遺跡
調査前状況
西御祈祷谷古墳群・新開２遺跡
調査前状況
図版４　調査前全景
盛土除去後全景
図版５　SM-001・008調査前状況
SM-001・008盛土除去後
SM-002表土除去後
図版６　SM-002盛土除去後
SM-002銭貨出土状況
SM-003調査前状況
図版７　SM-003盛土除去後
SM-004調査前状況
SM-004盛土除去後
図版８　SM-005調査前状況
SM-005表土除去後
SM-005盛土除去後
図版９　SM-006調査前状況
SM-006盛土除去後
SM-007調査前状況
図版10　SM-007表土除去後
SD-002
SD-006下遺構

新開１遺跡
図版11　新開１・新開２遺跡　完掘状況
図版12　新開１・新開２遺跡　完掘状況
新開１遺跡　完掘状況
図版13　SK-002・004・005
SK-002
礫群
図版14　SI-005
SI-006
SI-006遺物出土状況
図版15　SI-007
SI-008
SI-009
図版16　SI-010
SI-011

SI-012
図版17　SI-015
SI-015遺物出土状況
SM-010とSD-016
図版18　SM-010周溝断面
SS-001
SK-001

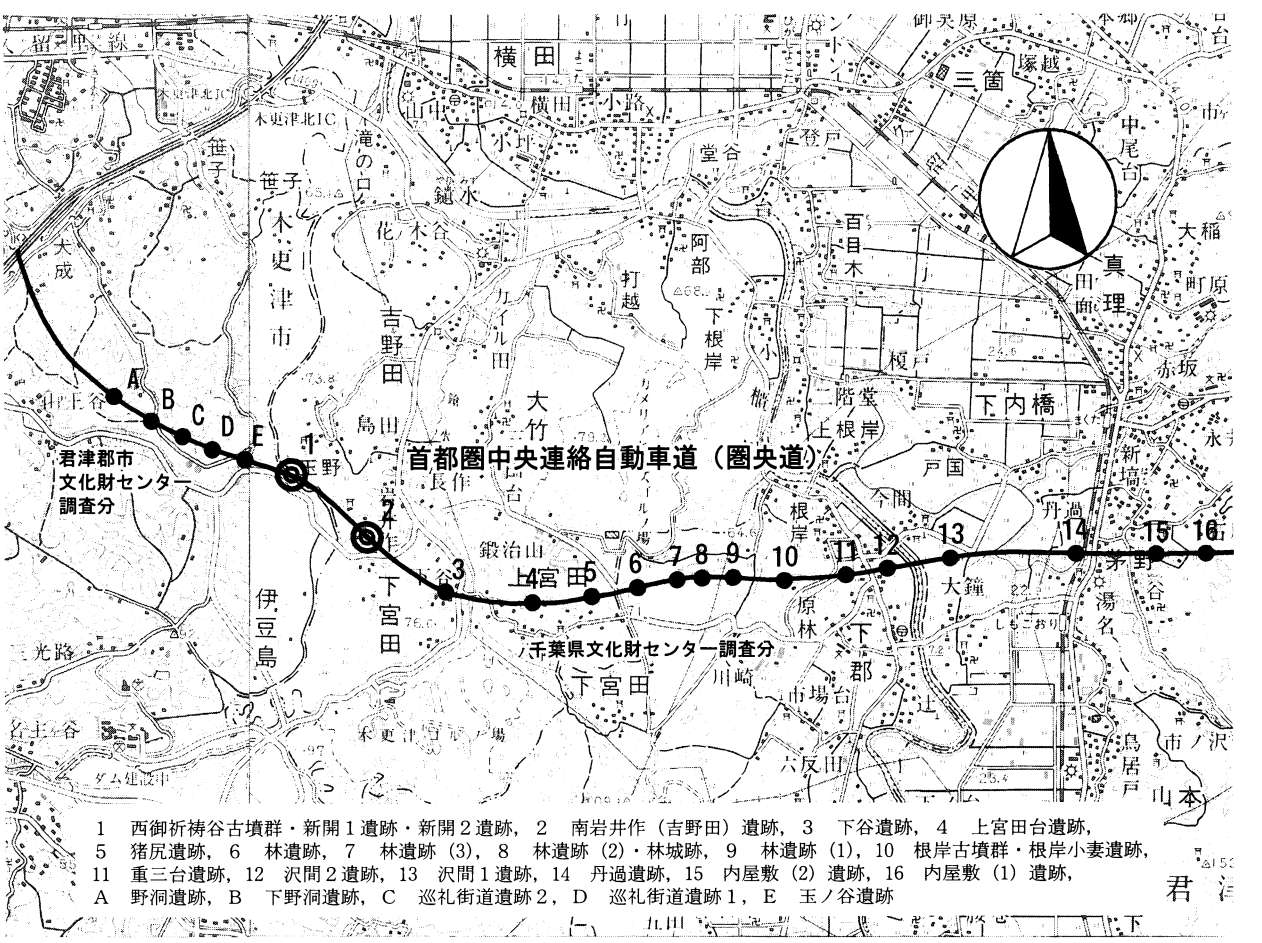
新開２遺跡
図版19　E5-46拡張区東壁セクション
SI-001
SI-001遺物出土状況
図版20　SI-002
SI-004
SI-013・014
図版21　SM-009　石祠（正面）
SM-009　石祠（側面）
SM-009　石祠（側面）
図版22　SM-009調査前状況
SM-009表土除去後
SM-009盛土除去後
図版23　SM-009下溝状遺構
SD-003
SD-004
図版24　SD-005
SD-006
SD-007
図版25　SD-008
SD-010
SD-012
図版26　南岩井作遺跡（吉野田遺跡）出土遺物
西御祈祷谷古墳群出土銭貨
図版27　西御祈祷谷古墳群出土縄文土器
図版28　西御祈祷谷古墳群出土縄文時代石器
西御祈祷谷古墳群出土
奈良・平安時代以降遺物
図版29　新開１遺跡出土縄文土器（第１・２群）
図版30　新開１遺跡出土縄文土器（第３群）(１)
図版31　新開１遺跡出土縄文土器（第３群）(２)
図版32　新開１遺跡出土縄文土器（第３群）(３)
図版33　新開１遺跡出土縄文土器（第４・５群）
新開１遺跡出土縄文時代石器(１)
図版34　新開１遺跡出土縄文時代石器(２)
新開１遺跡出土縄文時代石器(３)
図版35　新開１遺跡出土土器(１)
図版36　新開１遺跡出土土器(２)
新開１遺跡出土土器(３)
図版37　新開１遺跡出土遺物
図版38　新開２遺跡出土旧石器
新開２遺跡出土縄文時代石器
図版39　新開２遺跡出土縄文土器（第１・２群）
図版40　新開２遺跡出土縄文土器（第３群）
図版41　新開２遺跡出土縄文土器(第４・５・６群)
図版42　新開２遺跡出土土器(１)
図版43　新開２遺跡出土土器(２)
新開２遺跡出土土器(３)
図版44　新開２遺跡出土遺物
新開２遺跡出土玉類・銭貨

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　調査に至る経緯

首都圏中央連絡自動車道（圏央道）は，都心から半径およそ40km～60kmの位置に計画された総延長約300kmに及ぶ環状の自動車専用道路である。千葉県内は，平成９年に開通した東京湾アクアラインで神奈川県と繋がり，房総半島を横断して太平洋側の茂原市に至り，東上総の台地を北上し，山武地域へと繋がっていく。この路線のうち，袖ケ浦市から木更津市の区間がまず事業化された（第１図）。用地内には数多くの遺跡が所在することから，その取扱いについて，千葉県教育委員会と国土交通省・日本道路公団との間で慎重な協議が重ねられた。その結果，現状保存が困難な部分については，やむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなった。木更津ＪＣＴから東へ約25kmの区間は日本道路公団が事業主体となり，財団法人君津郡市文化財センターが発掘調査を実施し，それより東の区間については国土交通省が事業主体となり，財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。



第１図　遺跡の位置（1:50,000）

2　調査の経過

今回報告する４遺跡の発掘調査は，平成13年度から平成15年度にかけて断続的に行われた。整理作業は，平成15年度・平成16年度にそれぞれ実施し，平成16年度に報告書を合冊・刊行することとなった。発掘調査および整理作業に関わる各年度の作業内容および担当職員は以下のとおりである。

(１)発掘調査

○平成13年度

西御祈祷谷古墳群

期　間　平成13年10月15日～平成14年２月15日

内　容　本調査　古墳７基（塚８基）

担当者　南部調査事務所長　高田博　　主席研究員　土屋治雄

○平成14年度

南岩井作遺跡（吉野田遺跡）

期　間　平成14年５月１日～平成14年５月31日

内　容　確認調査　上層780㎡/780㎡，下層20㎡/780㎡

本調査　　上層０㎡，下層０㎡

担当者　南部調査事務所長　鈴木定明　　研究員　城田義友

新開１遺跡

期　間　平成14年６月３日～平成14年７月31日

内　容　確認調査　上層200㎡/1,916㎡，下層38㎡/1,916㎡

本調査　　上層1,816㎡，下層０㎡

担当者　南部調査事務所長　鈴木定明　　研究員　城田義友　　研究員　高梨友子

新開２遺跡

期　間　平成14年４月１日～平成14年６月28日

内　容　確認調査　上層320㎡/3,200㎡，下層128㎡/3,200㎡

本調査　　上層2,200㎡，下層０㎡

担当者　南部調査事務所長　鈴木定明　　上席研究員　石川誠　　研究員　高梨友子

○平成15年度

新開１遺跡

期　間　平成16年２月２日～平成16年２月17日

内　容　確認調査　上層－㎡/624㎡，下層12㎡/624㎡

本調査　　上層624㎡，下層０㎡

担当者　南部調査事務所長　鈴木定明　　研究員　鶴岡健

(2)整理作業

○平成15年度

南岩井作遺跡（吉野田遺跡）

期　間　平成15年４月１日～平成15年４月30日

内　容　水洗・注記～原稿執筆の一部

担当者　南部調査事務所長　鈴木定明　　研究員　高梨友子

西御祈祷谷古墳群

期　間　平成15年５月１日～平成15年６月30日，平成15年11月１日～平成15年11月14日

内　容　水洗・注記～原稿執筆の一部

担当者　南部調査事務所長　鈴木定明　　研究員　高梨友子

新開１遺跡

期　間　平成15年11月17日～平成16年１月31日，平成16年３月１日～平成16年３月31日

内　容　水洗・注記～原稿執筆の一部

担当者　南部調査事務所長　鈴木定明　　主席調査員兼市原調査室長　相京邦彦　　研究員　高梨友子

新開２遺跡

期　間　平成16年１月19日～平成16年３月31日

内　容　水洗・注記～原稿執筆の一部

担当者　南部調査事務所長　鈴木定明　　上席研究員　半澤幹雄　　研究員　高梨友子

○平成16年度

南岩井作遺跡（吉野田遺跡）

期　間　平成16年４月１日～平成16年４月30日

内　容　原稿執筆の一部～報告書刊行

担当者　南部調査事務所長　高田博　　研究員　高梨友子

西御祈祷谷古墳群

期　間　平成16年５月６日～平成16年５月14日

内　容　原稿執筆の一部～報告書刊行

担当者　南部調査事務所長　高田博　　研究員　高梨友子

新開１遺跡

期　間　平成16年５月17日～平成16年６月30日

内　容　原稿執筆の一部～報告書刊行

担当者　南部調査事務所長　高田博　　研究員　高梨友子

新開２遺跡

期　間　平成16年４月１日～平成16年４月30日

内　容　原稿執筆の一部～報告書刊行

担当者　南部調査事務所長　高田博　　上席研究員　半澤幹雄

３　調査の方法（第２～４図）

(1)グリッド設定

首都圏中央連絡自動車道建設に関わる発掘調査では，遺跡の数も多く，遺跡の面積も大きいため，それぞれの遺跡毎に公共座標に基づいたグリッド設定を行っている。しかし，今回報告する遺跡の場合，南岩井作遺跡（吉野田遺跡）を除く３遺跡は同じ尾根筋上に所在している。新開１遺跡と新開２遺跡は，尾根の中心を縦走する市境によって区別されているに過ぎず，また，西御祈祷谷古墳群は，位置的には新開１遺跡の上層遺構と捉えることができるため，発掘調査に当たっては，共通のグリッドを設定して用いることとした。

グリッド設定は，Ｘ＝－71.0km，Ｙ＝＋15.5kmを起点として，20ｍ×20ｍの方眼を被せ大グリッドとした。大グリッドは，北から南にＡ,Ｂ,Ｃ,…西から東に1，2，3，…と呼称し，更に大グリッドの中を２ｍ×２ｍの小グリッドに100分割して，北西隅から00，01，…，南東の隅を99とした。これにより，大グリッドと小グリッドの組み合わせでD4-65，K10-25というように，小地区名の表示を行えるようにした。

なお，南岩井作遺跡（吉野田遺跡）については，発掘調査時にはグリッド設定を行わなかったが，ほかの３遺跡の至近距離に所在することから，整理作業段階で同じ方眼を被せ，報告することとした。

個々の遺跡についての調査方法は以下のとおりである。

(2)南岩井作遺跡（吉野田遺跡）

調査対象面積780㎡について，全面的に表土を剥いで確認調査を行ったところ，灰褐色粘質砂を主体とする盛土層や，黒褐色～暗褐色を呈する粘質土の再堆積層が比較的厚く堆積していることが判明した。地山層は砂質土であり，中・近世の所産と考えられる掘立柱建物跡などが検出された。

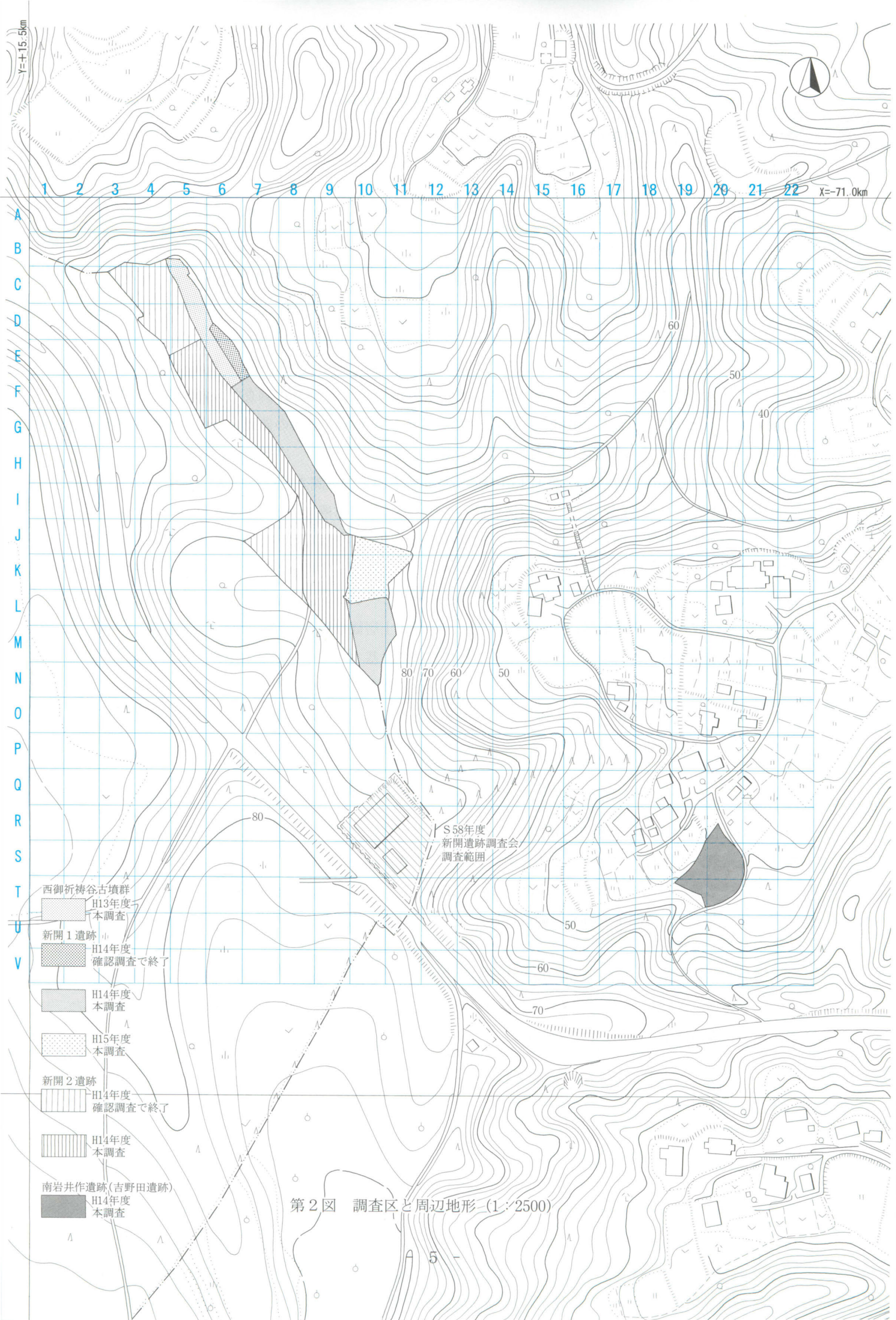
上層調査終了後，２ｍ×２ｍの確認グリッドを設定して下層確認調査も行ったが，旧石器時代の遺構・遺物は確認できなかった。

(3)西御祈祷谷古墳群

発掘調査当初は７基の古墳群と考えられており，調査開始前に，全体の地形測量とラジコンヘリによる空中写真撮影を実施した。また，１基ごとに平面方向からの写真撮影も行った。

調査前状況の写真撮影を一通り終えると，７基を通した土層断面観察用のベルトを１本設定し，そのベルトに直交するベルトをそれぞれに設定して，発掘作業を開始した。

発掘作業は，まず現表土層を盛土層まで平均に除去した。その結果，方形に造られていたことが判明し，それぞれ図面作成を行った後，盛土層を築造当時の表土(地山)まで平均に除去する作業を行った。そして地山面を精査した結果，北宋銭などが出土し，中世以降の塚であることが明らかとなった。盛土土層断面図，平面図を作成し，写真撮影を行い，塚の発掘作業を終了したが，他に削平された塚が存在する可



第2図　調査区と周辺地形（1：2500）

能性があるため，塚群の南側に確認トレンチを入れて調査を行った。その結果，最も北側に塚がもう１基存在し，合計８基からなる塚群であることがわかった。

(4)新開１遺跡

当初，新開１遺跡として調査対象とされていたのは，J10～N10グリッドを中心とする平坦地のみの1,440㎡であった。ただし，このうち北半分の624㎡は未買地で，実際に調査可能とされていたのは，L10・M10グリッドを中心とする816㎡であった。ところが，先に調査を開始していた新開２遺跡の成果から，連続する尾根上にも遺構があることが推定されたため，当初遺跡と考えられていなかった痩せ尾根上の部分に試掘トレンチを入れてみたところ，新開２遺跡と同様，古墳時代中期頃と考えられる竪穴住居跡が確認された。そこでその部分を新開１遺跡追加分1,100㎡として，新たに調査対象に加えた。そして確認調査を行った結果，合計で1,916㎡となった調査対象面積のうち，遺構の確認されなかった範囲を除く1,816㎡について，平成14年度に上層本調査を行うこととなった。

当初の未買地624㎡については，平成15年度に買収が済み，上層本調査を行った。

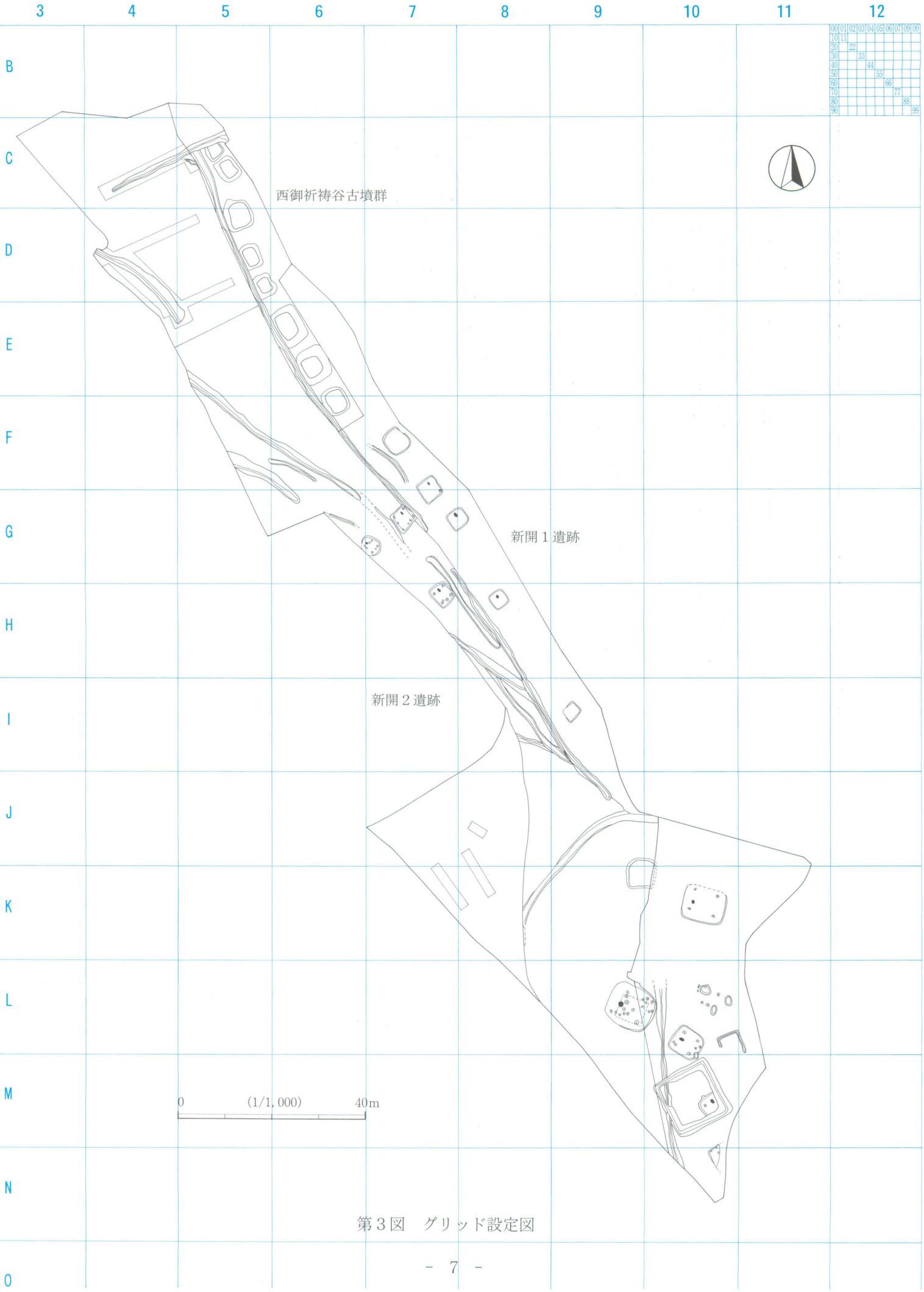
上層の本調査は，確認調査によって遺構が検出された面まで，重機で表土を剥いで開始した。平坦地の少ない複雑な地形上に立地しているためか，遺構検出面は同一層ではなかった。主な遺構は古墳時代の竪穴住居跡と古代以降の溝状遺構であり，竪穴住居跡については，十字に土層観察用のベルトを設定して掘り進めていき，適宜記録写真撮影を行いながら，それぞれセクション図，遺物出土状況図，平面図，炉実測図などを作成した。溝状遺構についても同様に，随所に土層観察用のベルトを設定して調査を行った。縄文時代早期の遺物包含層も検出されたが，これについては基本的に小グリッド単位で一括して遺物の取上げを行った。遺構調査を全て終了した後，ラジコンヘリにより遺跡の空撮を行った。

上層の調査終了後，２ｍ×２ｍの確認グリッドを設定して，下層の確認調査を行ったが，旧石器時代の遺構・遺物は検出されなかった。

(5)新開２遺跡

発掘調査は，調査対象面積3,200㎡の10％の320㎡について，まずトレンチを設定して確認調査を行った。その結果，古墳時代中期頃を主体とする集落と，古代以降から機能したと考えられる溝状遺構などが確認され，遺構が検出されなかった範囲を除く2,200㎡について，上層本調査を行うこととなった。上層遺構の調査方法は，新開１遺跡や西御祈祷谷古墳群と同様である。全ての遺構を完掘後，ラジコンヘリによる空撮を行った。

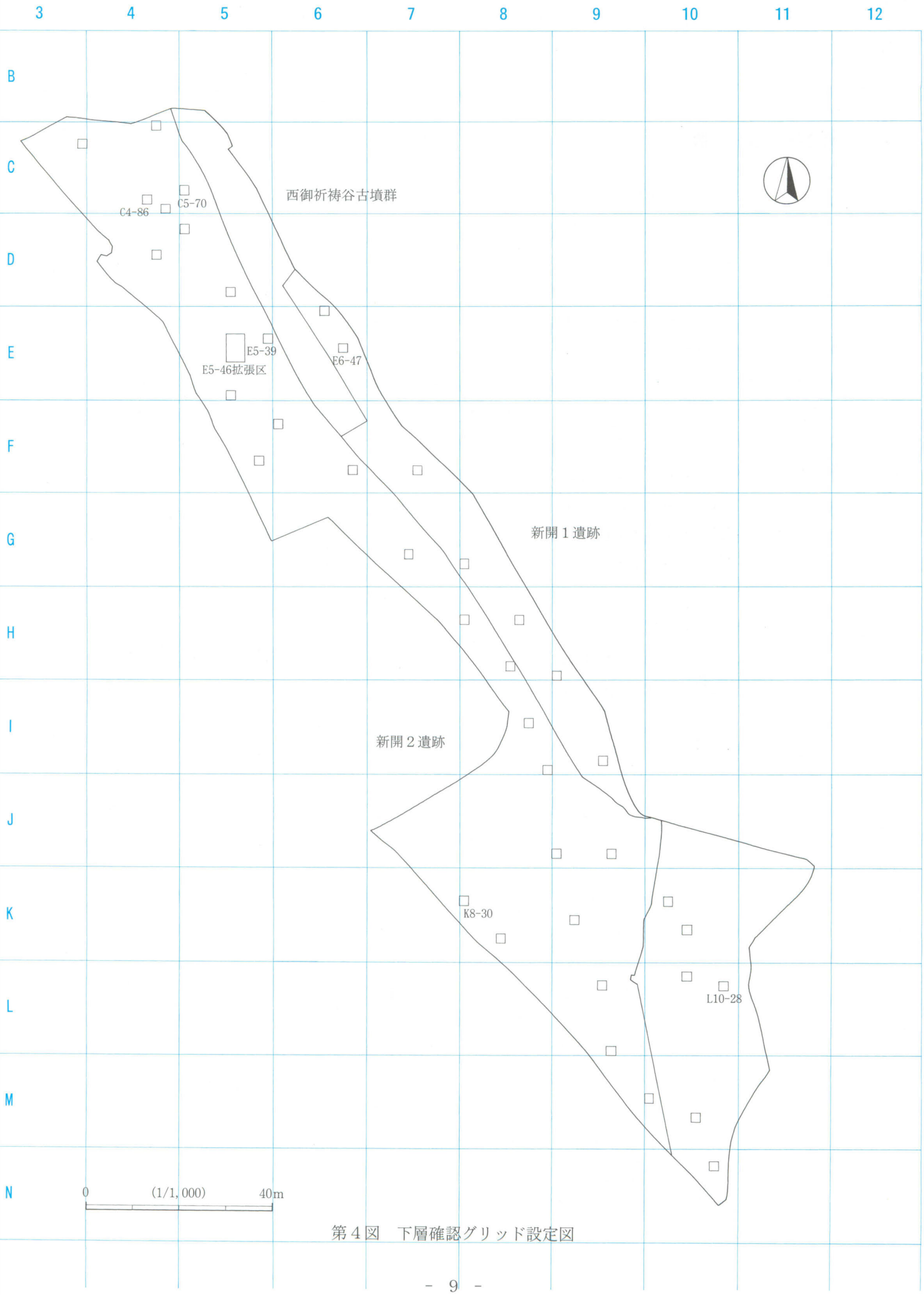
上層の調査終了後，２ｍ×２ｍの確認グリッドを設定して，下層の確認調査を行った。その結果E5-46グリッドのⅦ～Ⅸa層上面付近でチャートの剥片が数点出土したため，周囲を拡張して広がりを確認したが，遺構・遺物は全く確認されなかった。


3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
西御祈祷谷古墳群
新開１遺跡
新開２遺跡
0
(1/1,000)
40m

第３図　グリッド設定図

第１表　西御祈祷谷古墳群・新開1遺跡・新開2遺跡　遺構一覧表

	西御祈祷谷	新開1	新開2	欠番	時期	備　　考
住居跡			SI-001		古墳中期	SD-001に切られる
			SI-002		古墳中期	
				SI-003		埋没谷
			SI-004		古墳前期	
		SI-005			古墳中期?	
		SI-006			古墳中期	
		SI-007			古墳中期	
		SI-008			古墳中期?	
		SI-009			古墳?	
		SI-010			古墳	
		SI-011			古墳	SM-010に切られる
		SI-012			古墳前期?	
			SI-013		古墳中期	
			SI-014		弥生後期	床面レベルはSI-013よりやや高い
		SI-015			古墳前期	
溝状遺構	SD-001	SD-001			中世以降	硬化面あり，SD-008とつながる可能性あり
	SD-002		SD-002		平安～近世	断面Ｖ字形，硬化面あり，宝永火山灰含む
			SD-003		平安～中世	硬化面あり
			SD-004		平安～中世	硬化面あり
			SD-005		平安～中世	硬化面あり
			SD-006		中世以降?	
			SD-007		中世以降	硬化面あり
		SD-008	SD-008		近世以降	硬化面あり，SD-001とつながる可能性あり，Ｙ字状
			SD-009		近世以降	硬化面あり，SD-008に切られる
			SD-010		近世以降	硬化面あり，宝永火山灰含む，SD-009に切られる
			SD-011		中世以降	硬化面あり
			SD-012		平安～中世	硬化面あり
			SD-013		中世以降	硬化面あり
		SD-014			平安～中世	硬化面あり
				SD-015		急斜面の崩落，遺構ではない
		SD-016			近世以降	硬化面あり，宝永火山灰含む，SM-010を切る
	SD-006下遺構				奈良・平安?	周溝状
土坑		SK-001			中世以降	
		SK-002			縄文早期	炉穴
				SK-003	近世以降	近世以降の人骨，寛永通宝のみ採集
		SK-004			縄文早期	
		SK-005			縄文早期	
塚	SM-001				中世～近代	
	SM-002				中世～近代	
	SM-003				中世～近代	
	SM-004				中世～近代	
	SM-005				中世～近代	
	SM-006				中世～近代	
	SM-007				中世～近代	
	SM-008				中世～近代	SD-002に切られる
			SM-009		近世以降	明治紀年銘の石祠，南接して人骨（SK-003）
方形周溝状遺構		SM-010			奈良・平安	主体部なし，SD-016に切られる
		SS-001			奈良・平安?	主体部なし



第４図　下層確認グリッド設定図

第２節　遺跡の概要

１　遺跡の位置

遺跡の所在する袖ケ浦市・木更津市は，房総半島のほぼ中心部に位置しており，西側は東京湾に面している。両市の地形は，主として丘陵部と沖積平野部とに分かれる。君津市南端を水源とし東京湾に注ぐ小櫃川が袖ケ浦市の中央部を東から西に流れており，その北側と南側は広い沖積平野となっており水田が営まれている。そしてその沖積平野の南側に，複雑に開析された房総丘陵が展開する。

西御祈祷谷古墳群・新開１遺跡・新開２遺跡は，北流して小櫃川中流に注ぐ鎗水川西岸の，標高約80mの丘陵尾根上に立地している。平坦地のほとんどない痩せ尾根上で，最も標高の高い中央部を袖ケ浦市と木更津市との境界線が縦に貫いており，西御祈祷谷古墳群はその袖ケ浦市側に，尾根の先端から市境ラインに添うように一列に並んで位置している。新開１遺跡は，西御祈祷谷古墳群と連続して尾根上の東側部分を占め，市境を挟んで西側の木更津市側には新開２遺跡が位置する。新開１遺跡にはやや平坦な部分も含まれるが，縁辺は急斜面となっており沖積地へと落ちていく。新開２遺跡は，緩斜面に立地している。南岩井作遺跡（吉野田遺跡）は，新開１遺跡の南東方向の急斜面下の沖積地に立地している。

西御祈祷谷古墳群・新開１遺跡・新開２遺跡の南方では，現在はダムによって堰き止められている矢那川が東京湾に向かって西流している。

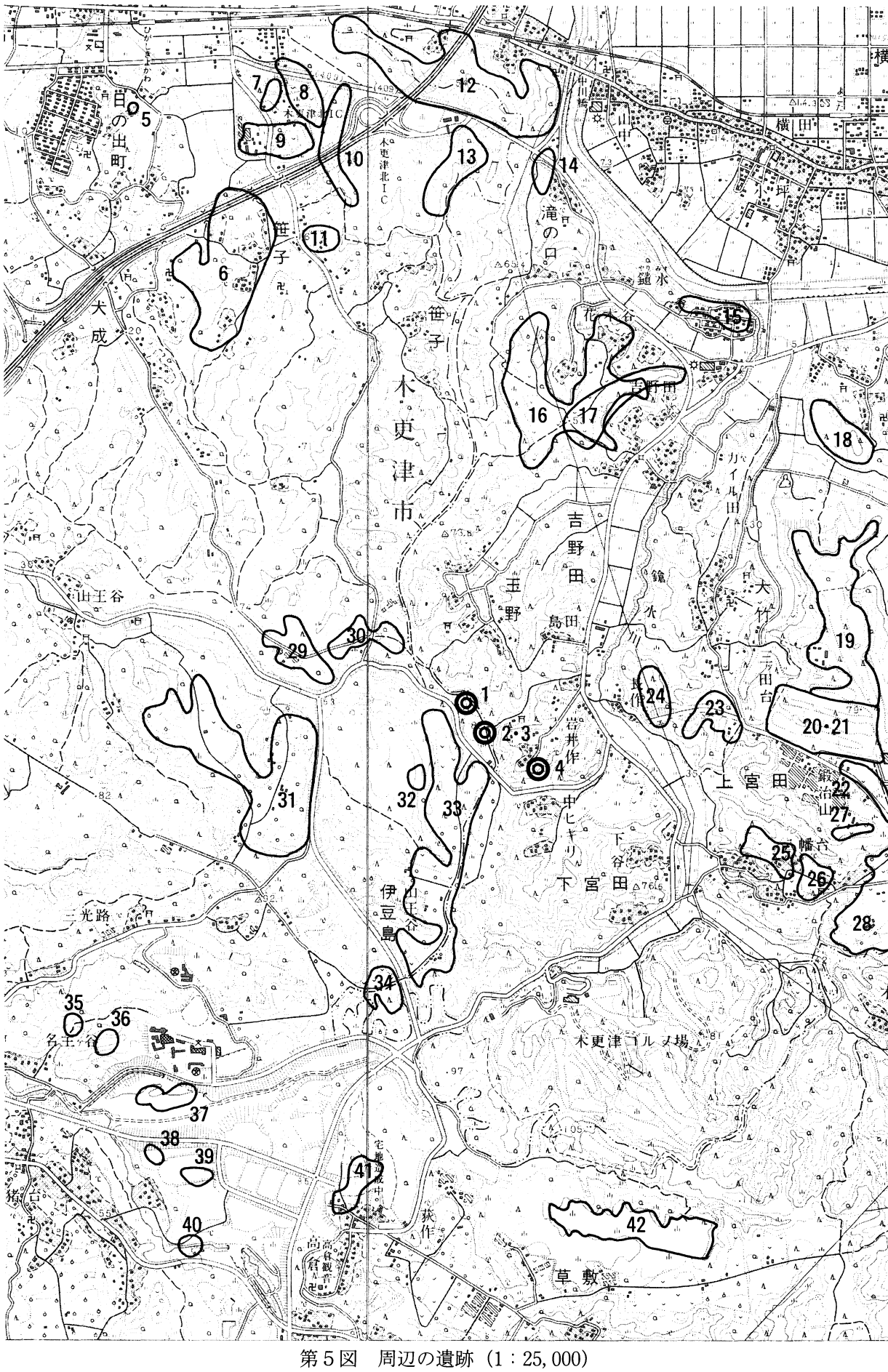
２　周辺の遺跡（第５図）

南岩井作遺跡（吉野田遺跡）・西御祈祷谷古墳群・新開１遺跡・新開２遺跡の周辺には遺跡が多く分布し，各時代毎に特徴的な地域色を見せている。それらについて，発掘調査の行われた遺跡を中心に概観してみたい。

旧石器時代は，遺跡周辺ではローム層の認められない場所も多く，報告例が少ない。矢那川沿いの二重山遺跡(37)[1]でⅣ～Ⅴ層段階の石器集中と礫群が検出されている以外は，滝ノ口向台遺跡(16)[2]や久野遺跡(42)[3]の上層調査で，ナイフ形石器などの旧石器が僅かに出土しているのみであったが，最近，圏央道建設に伴う君津郡市文化財センターによる玉ノ谷遺跡(30)[4]の調査で，Ⅵ～Ⅸ層段階の剥片がまとまって出土し，注目される。

縄文時代は，早期の遺構・遺物が多く認められる。撚糸文土器や沈線文土器，条痕文土器などを伴って，炉穴や陥穴，礫群などが検出される例が多い。早期の遺構は，石仏遺跡(33)[5]，玉ノ谷遺跡(30)[4]などで竪穴住居跡が，三ツ田台遺跡(20)[6]，上南原遺跡(22)[7]，上ノ山Ｂ遺跡(39)[8]などで炉穴などの土坑が，笊田遺跡(19)[9]，大竹長作古墳群(24)[10]，林遺跡(28)[11]，石仏遺跡(33)[5]，上ノ山Ｂ遺跡(39)[8]，久野遺跡(42)[3]などで礫群が検出されている。さらに，遺構は検出されないものの，早期の土器や礫などが出土した遺跡として，滝ノ口向台遺跡(16)[2]，巡礼街道遺跡(29)[12]，上桑田谷遺跡(31)[13]，下細野遺跡(34)[14]，御所塚遺跡(41)[15]などを挙げることができる。

前期以降は，早期に比べ閑散とした遺跡の展開状況である。中台Ａ遺跡(８)[16]，玉ノ谷遺跡(30)[4]で前期とみられる竪穴住居跡が，嘉登遺跡(23)[17]，久野遺跡(42)[3]で中期の竪穴住居跡が，笊田遺跡(19)[9]，三ツ田台遺跡(20)[6]，嘉登遺跡(23)[17]，石仏遺跡(33)[5]で後期の竪穴住居跡がそれぞれ数軒ずつ検出された程度である。また，伊豆島貝塚(32)[18]は，後期の地点貝塚として注目される。



第５図　周辺の遺跡（1：25,000）

続く弥生時代も比較的遺跡が少なく，遺跡周辺では主に弥生時代後期～古墳時代前期にかけての居住域が小規模に展開するようである。ただし，小櫃川に近い遺跡では，先行して中期～後期の集落や方形周溝墓群が営まれるようである。滝ノ口向台遺跡(16)[2]で中期～後期の環濠を有する集落が，笊田遺跡(19)[9]で中期の竪穴住居と方形周溝墓群が，中台Ａ遺跡(８)[13]でも中期の方形周溝墓が検出されている。

弥生時代後期とみられる竪穴住居跡が検出されたのは，中台Ａ遺跡(８)[16]，中台Ｂ遺跡(９)[19]，四留作第１古墳群(10)[20]，椿古墳群(12)[21]，大作古墳群(14)[22]，三ツ田台遺跡(20)[6]などで，林遺跡(28)[11]では弥生時代末期～古墳時代前期にかけての方形周溝墓群が検出された。

古墳時代になると，主に小櫃川沿いで大規模な古墳群が営まれるのが特徴的である。出現期古墳や前期古墳も含まれており，滝ノ口向台古墳群(17)[23]の８号墳は，レーダー探査結果により，県内最大の前方後方墳であることがほぼ確実視されている。また，９号墳は東海系土器や銅鏃などを出土した出現期古墳として知られている。椿古墳群(12)[21]ＳＸ－３は前期の方墳で，やはり東海系土器や銅鏃，鉄剣，鉄槍などが出土している。

中期～後期の古墳・古墳群としては，前方後円墳を含み総数100基もの古墳で構成されるとみられる椿古墳群(12)[21]をはじめ，順礼海道古墳(５)[24]，山崎古墳群(７)[25]，中台Ａ遺跡(８)[16]，四留作第１古墳群(10)[20]，四留作第２古墳群(11)[26]，馬場作古墳群(13)[27]，大作古墳群(14)[22]，鬼塚古墳群(15)[28]，平ヶ作古墳群(18)，嘉登遺跡(23)[17]など，枚挙にいとまがない。

後期～終末期と考えられる古墳も，主に鎗水川西岸の遺跡で少しずつ営まれるのも特徴で，次の奈良・平安時代の火葬墓に引き継がれていくようである。

集落としては古墳時代は前期が中心になるようである。三ツ田台遺跡(20)[6]や中台Ａ遺跡(８)[16]，久野遺跡(42)[3]で前期～後期の竪穴住居跡が数軒ずつ確認されたのをはじめ，嘉登遺跡(23)[17]や笊田遺跡(19)[9]，石仏遺跡(33)[5]で前期～中期とみられる竪穴住居跡が数十軒単位で確認された。昭和58年の新開遺跡の調査[29]でも，古墳時代前期の竪穴住居跡が検出されている。古墳時代中期～後期以降は，遺跡周辺は一般的な集落から遠のいていったとも言える状況である。

奈良・平安時代になると，遺跡周辺では，笊田遺跡(19)[9]で竪穴住居跡が確認されている以外は，一般的な集落はほとんどみられなくなる。二重山遺跡(37)[1]や久野遺跡(42)[3]で当該期の竪穴住居跡群が検出されているが，これは一般の集落とは異なる，工人集団の集落と推定されるものである。この時代に多く認められるのは，須恵器・瓦の窯跡や製鉄関連遺跡などの生産関連遺跡，そして墓域である。

製鉄関連遺跡は，精錬炉の検出された二重山遺跡(37)[1]，山ノ下製鉄遺跡(40)[30]などをはじめ，上ノ山Ａ遺跡(38)[8]，上ノ山Ｂ遺跡(39)[8]，久野遺跡(42)[3]などで鍛冶工房や鍛冶関連施設が確認されている。

窯跡は，上名主ヶ谷第１窯跡群(35)[31]・上名主ヶ谷第２窯跡群(36)[31]などがあり，須恵器窯や瓦窯，須恵器瓦共用窯などが検出された。出土した瓦は，今回報告する新開１遺跡出土の瓦とは異なる，凸面に太い縄タタキが施されるものである。

墓域としては，火葬墓，方形墳墓などが多く認められるのが特徴である。火葬墓，方形墳墓が検出された遺跡としては，椿古墳群(12)[21]，三ツ田台遺跡(20)[6]，嘉登遺跡(23)[17]，林遺跡(28)[11]，玉ノ谷遺跡(30)[4]，石仏遺跡(33)[5]などが挙げられ，このうち三ツ田台遺跡(20)[6]では，石櫃も検出されている。このほか，墓域ではないが，久野遺跡(42)[3]で複数の基壇建物跡が検出され，山寺・山林寺院と考えられることが特筆される。

中世以降は，この周辺は遺跡としてはあまり明らかになっていない。真里谷武田氏との関連が指摘され，２度の落城が伝えられる笹子城(６)[32]の一部が調査され，15世紀後半～16世紀を中心とする多量の遺物を伴った整地面が確認されたのみである。

３　周辺の塚群

君津地域に所在する塚は，４市で合計516基が確認されている。内訳は袖ケ浦市121基，木更津市162基，君津市170基，富津市63基である。袖ケ浦市内に所在する塚121基の中で塚群(２基以上)として確認されているものは25群あり次の通りである[33]。

中・近世

仏塚	袖ケ浦市大曽根	円形	中・近世	２基
墓山塚群	袖ケ浦市大曽根	円形	中・近世	４基
蓮華寺塚群	袖ケ浦市大曽根	円形	中・近世	２基
堀込塚群	袖ケ浦市神納	円形	中・近世	３基
中辻台塚群	袖ケ浦市神納	円形	中・近世	２基
文脇塚群	袖ケ浦市野里	円形	中・近世	２基
日ノ台塚群	袖ケ浦市野里	円形	中・近世	３基
高塚塚群	袖ケ浦市阿部	円形	中・近世	３基
八幡台塚群	袖ケ浦市上宮田	円形	中・近世	４基
欠塚群	袖ケ浦市上宮田	円形	中・近世	３基
上宮田台塚群	袖ケ浦市上宮田台	円形	中・近世	４基
上鬼塚塚群	袖ケ浦市滝ノ口	円形	中・近世	３基
天王坂塚群	袖ケ浦市川原井	方形	中・近世	２基
根澄山塚群	袖ケ浦市川原井	双円形・上円下方形・円形	中・近世	３基
飯王山塚群	袖ケ浦市高谷	円形	中・近世	２基
市ヶ原塚群	袖ケ浦市高谷	不整円形・円形	中・近世	３基
清水川台塚群	袖ケ市代宿	方形	中・近世	３基
尾畑台塚群	袖ケ浦市下根岸		中・近世	６基
熊野神社内塚群	袖ケ浦市横田		中・近世	２基

近世

豊前台塚群	袖ケ浦市川原井	円形	近世	２基
大谷塚群	袖ケ浦市川原井	円形	近世	２基
八幡神社内塚群	袖ケ浦市蔵波	方形	近世	２基
神田塚群	袖ケ浦市蔵波	円形	近世	２基
打越岱塚群	袖ケ浦市上泉	方形	近世	３基
谷ノ台塚群	袖ケ浦市神納	方形	近世	３基

また，袖ケ浦市以外の君津地域で５基以上の塚群は次の通りである。

湯名塚群	木更津市下郡	方形	中・近世	５基
宮下西谷塚群	君津市宮下	円形	中・近世	16基
尾車十三塚群	君津市尾車	円形	中・近世	13基
市宿十三塚群	君津市清和市場	円形	中・近世	14基
上新田塚群	君津市上新田	円形	中・近世	10基
三直Ｂ行人塚	君津市三直	円形	近世	29基
竹岡十三塚	富津市竹岡	円形	中・近世	13基
相野谷十三塚	富津市相野谷	円形	中・近世	13基

４　基本層序

新開１遺跡・新開２遺跡は，馬の背状の痩せ尾根上に立地しており，平坦面はほとんど存在しない。そのためか土層の堆積も不安定で，地点毎に大きく異なる様相を見せており，遺構検出面も同一の連続した層ではないと考えられる。従って，ここではある１か所をもって遺跡全体の基本層序とすることは避け，各地点周辺を代表する土層を全て示すこととした。

なお，どの地点においても立川ローム層が厚く堆積する傾向にあり，武蔵野ロームは見いだせなかった。また，地点によっては，標準的なローム層の堆積とは異なる様相を示す部分もあり，その場合は層名に暫定的にアラビア数字を用いて示した。

(1) L10-28グリッド（新開１遺跡）付近（第６図）

縄文時代早期の遺物が集中して出土する地点の基本土層である。遺物はⅡ層以上でしか出土せず，遺構検出面もⅡ層上面である。Ⅲ層については，色調から２層に分層できた。

Ⅰ層（黒褐色土層）上部約10cmは腐葉土。表土層。

Ⅱ層（褐色土層）やや赤味を帯びる。黒色土を斑に含み，しまりなし。
縄文時代早期遺物を包含する。

Ⅲ１層（暗黄褐色土層）ソフトローム層。遺物は包含しない。

Ⅲ２層（黄褐色土層）ソフトローム層。Ⅲ１層より明るい色調。

Ⅳ層（褐色土層）赤味を帯び，色調はⅡ層に類似する。一部ソフト化しているが，以下ハードローム層。

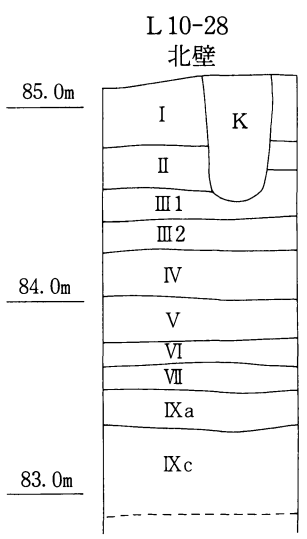
Ⅴ層（暗褐色土層）全体にやや黒ずんだ色調。暗緑色スコリア・橙色スコリアを含む。

Ⅵ層（明黄褐色土層）ＡＴ（姶良丹沢火山灰）が集中的に包含される。

Ⅶ層（暗褐色土層）暗緑色スコリア・橙色スコリアを含む。

Ⅸa層（暗褐色土層）下半にやや明るい部分があり，Ⅸb層と分層できる可能性もある。スコリアを含む。

Ⅸc層（暗褐色土層）暗い色調。スコリアを含む。



第６図　基本層序（１）

(2) K8-30グリッド（新開２遺跡）付近（第７図）

上層本調査対象範囲外となった地点の土層である。Ⅱb層とⅡc層が僅かながら確認できたが，付近からは遺構や遺物は検出されなかった。また，L10-28グリッド同様，Ⅲ層を色調により２層に分層できたが，L10-28のⅢ層とは対応しないようである。Ⅸc層も，色調とスコリアの量などによって２層に分層できた。Ⅸc層より下には，立川ローム層，武蔵野ローム層のいずれとも異なる暗黄褐色土，暗褐色土が厚く堆積していた。

Ⅰ層（黒褐色土層）表土層。しまりなし。

Ⅱb層（暗褐色土層）

Ⅱc層（暗褐色土層）Ⅱb層より暗い色調。

Ⅲ１層（暗黄褐色土層）均質。

Ⅲ２層（暗褐色土層）均質。

Ⅳ層（明褐色土層）暗緑色スコリア・橙色スコリアを少量含む。半分ソフト化している。

Ⅴ層（暗黄褐色土層）暗緑色スコリア・橙色スコリアを含む。

Ⅵ層（暗黄褐色土層）　ＡＴ（姶良丹沢火山灰）が集中的に包含される。暗緑色スコリア・橙色スコリア・黒色スコリアを含む。

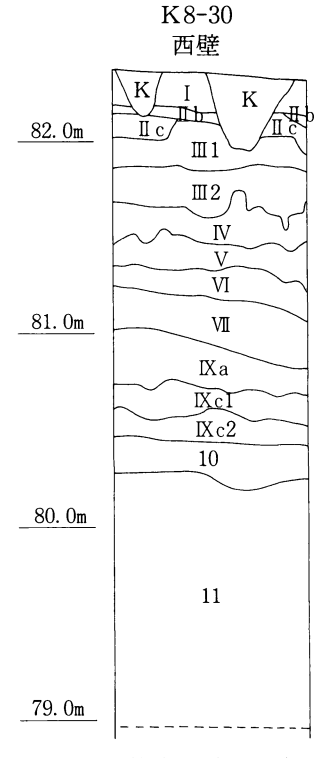
Ⅶ層（暗黄褐色土層）Ⅴ層より明るい色調。暗緑色スコリア・橙色スコリア・黒色スコリアをやや多く含む。

Ⅸa層（暗褐色土層）　暗緑色スコリア・橙色スコリア・黒色スコリアを多く含む。

Ⅸc１層（暗褐色土層）　暗褐色土中，最も暗い色調。暗緑色スコリア・橙色スコリア・黒色スコリアを多く含む。

Ⅸc２層（暗褐色土層）　Ⅸc１層よりやや明るい色調。暗緑色スコリア・橙色スコリア・黒色スコリアを含む。

10層（暗黄褐色土層）　暗緑色スコリア・橙色スコリア・黒色スコリアを含む。



第７図　基本層序（２）

11層（暗褐色土層）暗緑色スコリア・橙色スコリア・黒色スコリアを含む。明るさやスコリアの量などで分層できる可能性もあるが，明確ではない。

(3) C5-70グリッド（新開２遺跡）付近（第８図）

この付近は，黒色土系の土が厚く堆積している。埋没谷で，Ⅱ層が良好に形成され残存したものと考えられる。Ⅱ層と考えられる層については，色調などにより数層に分層可能であった。これらについて，縄文時代早期・前期の遺物を包含するのはⅡ１層のみであることから，Ⅱ１層をⅡc層相当，Ⅱ２層をⅢ層相当と考えることもできるが，Ⅵ層から押さえていき，Ⅱ１層をⅡa層相当，Ⅱ２層をⅡb層相当，Ⅱ３・Ⅱ４層をⅡc層相当と考えるほうが妥当であろう。色調については，黒味の強い順に，Ⅱ４層，Ⅱ３層・Ⅲ～Ⅳ層，Ⅱ１層・Ⅴ層である。同様なⅡ層の堆積の認められたグリッドとしては，ほかにC4-98,

D4-47，D5-10が挙げられる。なお，当グリッドの場合，Ⅴ層から一部Ⅶ層までソフト化が進んでいた。

Ⅱ１層（暗褐色土層）比較的均質。縄文時代早期・前期の遺物を少量包含する。

Ⅱ２層（明褐色土層）比較的均質。黄色味が強く，ソフトローム層に似る。遺物は包含しない。

Ⅱ３層（暗褐色土層）暗黄褐色土と黒色土が斑に混合。

Ⅱ４層（黒褐色土層）Ⅱ３層と類似するが，Ⅱ３層より黒色土が多い。

Ⅲ～Ⅳ層（褐色土層）上部ほど黒味が強く下部ほど赤味を帯びるが，分層は不能。

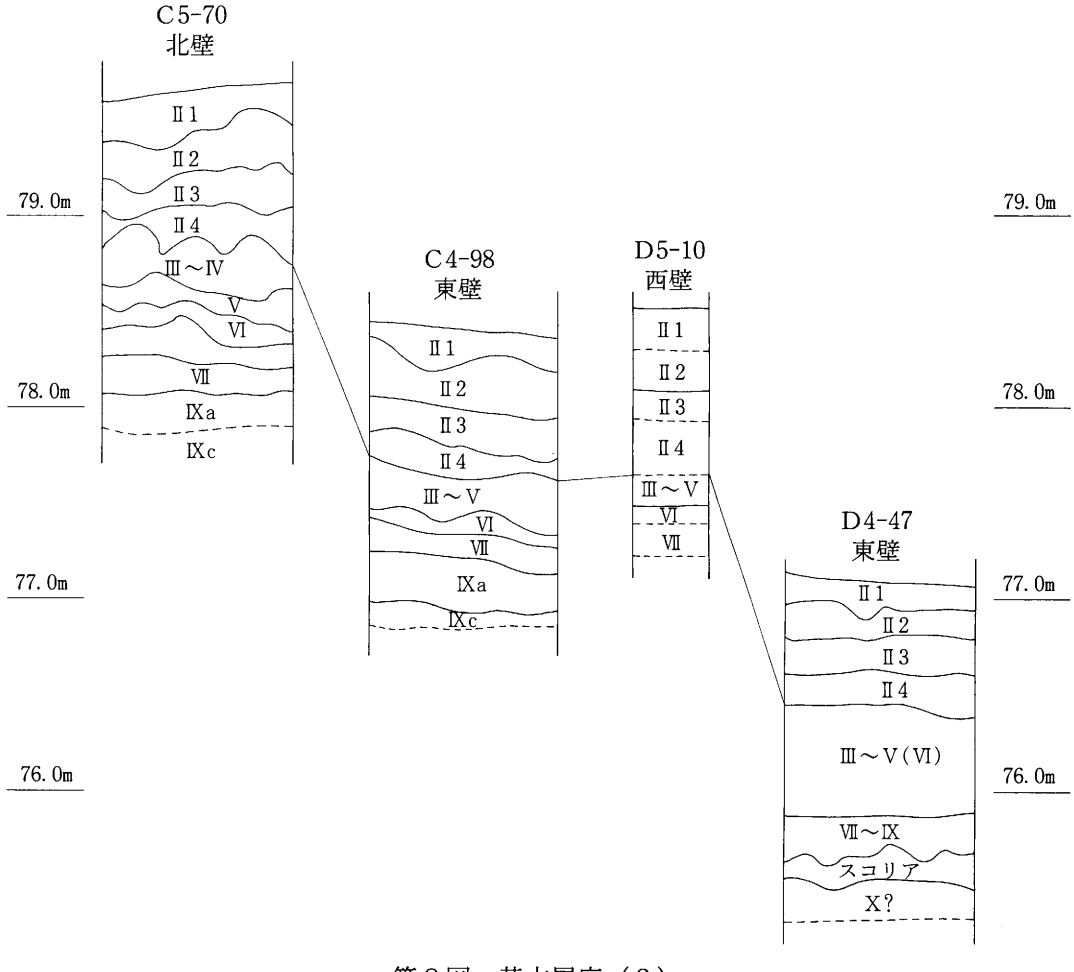
Ⅴ層（暗褐色土層）　橙色スコリアを含む。ソフト化している。他地点のⅤ層より暗い色調。

Ⅵ層（黄白褐色土層）ＡＴ（姶良丹沢火山灰）が集中的に包含される。暗緑色スコリア・橙色スコリア・黒色スコリアを含む。ソフト化している。

Ⅶ層（暗褐色土層）　暗緑色スコリア・橙色スコリア・黒色スコリアをやや多く含む。一部ソフト化している。

Ⅸa層（暗褐色土層）暗緑色スコリア・橙色スコリア・黒色スコリアを多く含む。

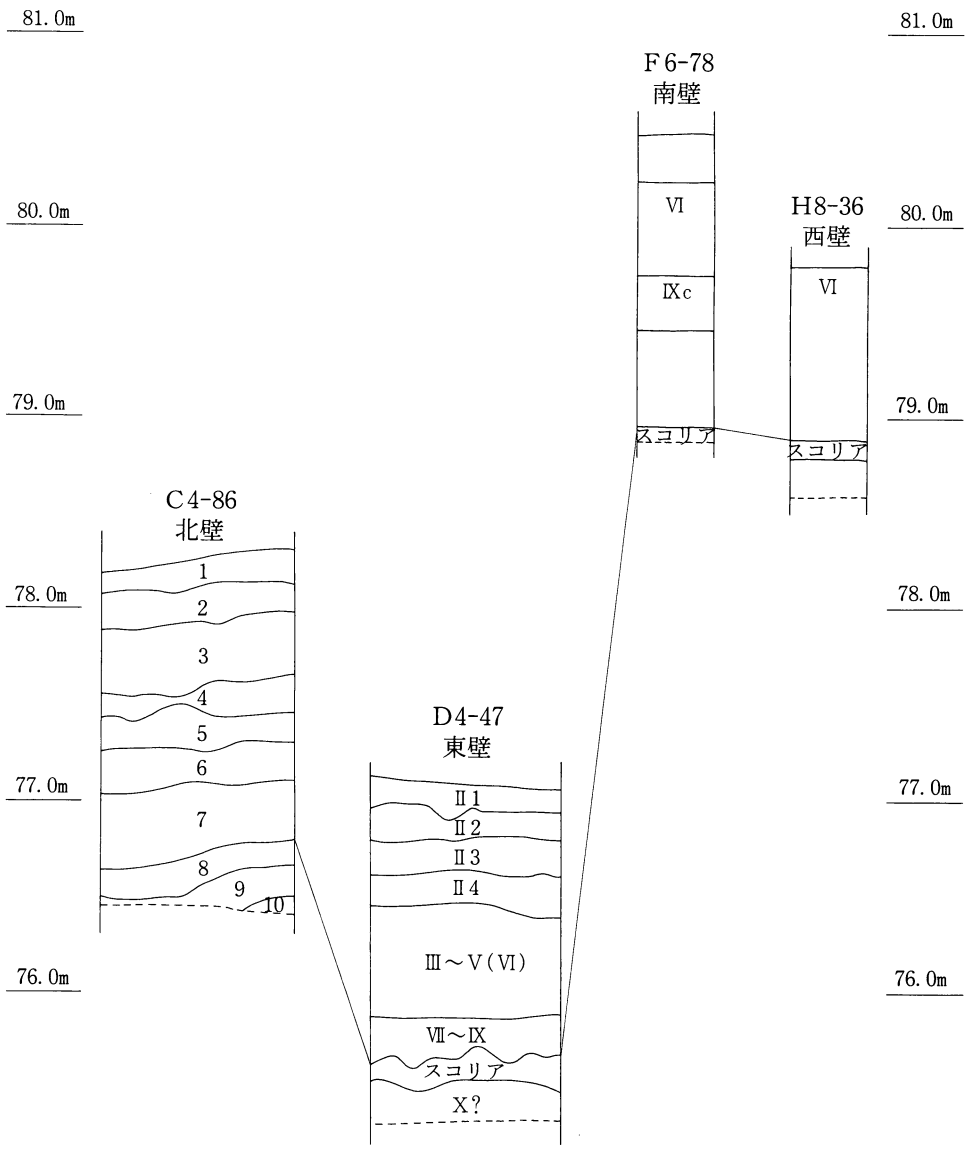
Ⅸc層（暗褐色土層）Ⅸa層よりやや暗い色調。暗緑色スコリア・橙色スコリア・黒色スコリアを多く含む。



第８図　基本層序（３）

(4) C4-86グリッド（新開２遺跡）付近（第９図）

標準的なローム層の堆積とは異なる状況を示す。特に，スコリア層が顕著に認められるのが特徴的である。８層と同様な橙色～黄白色のスコリア層が認められたグリッドとしてはほかに，D4-47，F6-78，H8-36が挙げられる。



第９図　基本層序（４）

１層（明褐色土層）ローム層に類似し，比較的均質。C5-70グリッドのⅡ２層相当。遺物は包含しない。標準土層のⅡb層相当か。

２層（暗褐色土層）比較的均質。色調の暗さで１層と分層されるが，C5-70グリッドのⅡ３層・Ⅱ４層ほど黒くはない。標準土層のⅡc層相当か。

３層（黄褐色土層）明瞭に分層される４層と，やや不明瞭な２層との間で，標準土層のⅢ～Ⅴ層相当と推測されるが，混然として分層不能。この層の下部までソフト化している。

4層・5層（黄白褐色スコリア層）白色スコリア，黄色スコリアを主体とする。橙色・黒色・暗緑色スコリアも含む。暗褐色土を少量含み，その量で分層可能である（5層のほうがやや多い）。相模野第1スコリア層相当か。

6層（暗褐色土層）橙色スコリア，黄色スコリアを多量に含む。黒色スコリア，暗緑色スコリアを含む。標準土層のⅦ～Ⅸ層相当と考えられるが，分層不能。

7層（暗褐色土層）橙色スコリア，黒色スコリア，暗緑色スコリアを多量に含む。

8層（橙色～黄白色スコリア層）上部に黄白色スコリア，下部に橙色スコリアが主体的に堆積する。暗褐色土を含む。相模野第2スコリア層相当か。

9層（暗褐色土層）黒色スコリア，暗緑色スコリアを僅かに含む。やや粘質。

10層（暗褐色土層）スコリアはほとんど含まない。やや粘質。

注1　神野信・半澤幹雄　1997　『矢那川ダム埋蔵文化財調査報告書1－木更津市二重山遺跡－』財団法人千葉県文化財センター

2　小高春雄ほか　1993　『滝ノ口向台遺跡・大作古墳群』財団法人千葉県文化財センター

3　小林清隆・新田浩三・糸原清・吉野健一　1999　『矢那川ダム埋蔵文化財調査報告書2－木更津市久野遺跡－』財団法人千葉県文化財センター

4　石井則孝ほか　1974　「木更津市笹子込山遺跡の研究」『史館』2号
木更津市教育委員会　1992　『木更津市内遺跡発掘調査報告書－蔵坪遺跡－』
財団法人君津郡市文化財センター　2004「玉ノ谷遺跡」『君津郡市文化財センター年報№21－平成14年度－』

5　諸墨知義　1991　『財団法人君津郡市文化財センター年報№9－平成2年度－』財団法人君津郡市文化財センター

6　田形孝一編　1991　『笊田遺跡・三ツ田台遺跡・大竹古墳群(1)』財団法人君津郡市文化財センター

7　井上賢・稲葉昭智　1995　『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅳ－向神納里遺跡・南上原遺跡・狐谷遺跡・大竹古墳群－』財団法人君津郡市文化財センター

8　安藤道由・中能隆　1996　『上ノ山A・上ノ山B・下根田A・下根田B・御所塚遺跡』財団法人君津郡市文化財センター

9　田形孝一編　1991　『笊田遺跡・三ツ田台遺跡・大竹古墳群(1)』財団法人君津郡市文化財センター

10　西原崇浩　1994　『嘉登遺跡・大竹長作古墳群』財団法人君津郡市文化財センター

11　井口崇　1987　『林遺跡』財団法人君津郡市文化財センター
能城秀喜　1994　『林遺跡Ⅱ』財団法人君津郡市文化財センター
中能隆　1999　『林遺跡Ⅲ』財団法人君津郡市文化財センター

12　千葉県教育委員会　2000　『千葉県埋蔵文化財分布地図(4)－君津・夷隅・安房地区（改訂版）』

13　伊藤聖一　1980　「木更津市上桑田谷遺跡採集資料」『さざなみ』19号

14　能城秀喜　1993　『財団法人君津郡市文化財センター年報№11－平成4年度－』財団法人君津郡市文化財センター

15　伊藤聖一　1979　「木更津市高倉御所塚遺跡採集資料」『さざなみ』16号

16　福田誠　1993　『中台A遺跡』財団法人千葉県文化財センター
山本哲也　1995　「中台A遺跡」『君津郡市文化財センター年報№12－平成5年度－』財団法人君津郡市文化財センター

斉藤礼司郎　1996　「中台Ａ遺跡」『君津郡市文化財センター年報№13－平成６年度－』財団法人君津郡市文化財センター
財団法人君津郡市文化財センター　1999「中台Ａ遺跡」『君津郡市文化財センター年報№16－平成９年度－』
17　西原崇浩　1994　『嘉登遺跡・大竹長作古墳群』財団法人君津郡市文化財センター
18　木更津市教育委員会　1990　『木更津市内遺跡発掘調査報告書－伊豆島貝塚・宮脇遺跡－』
19　山本哲也　1995　「中台Ｂ遺跡」『君津郡市文化財センター年報№12－平成５年度－』財団法人君津郡市文化財センター
20　豊巻幸正　1988　『四留作第１古墳群第１号墳』財団法人君津郡市文化財センター
西原崇浩　1999　『笹子遺跡群発掘調査報告書Ⅰ　四留作第１古墳群第12・13号墳　四留作遺跡（古墳下層遺構）』木更津市教育委員会
財団法人君津郡市文化財センター　1999　「笹子遺跡群　四留作第１古墳群」『君津郡市文化財センター年報№16－平成９年度－』
21　小久貫隆史・高梨友子　2001　『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書８－袖ケ浦市椿古墳群－』財団法人千葉県文化財センター
22　小高春雄ほか　1993　『滝ノ口向台遺跡・大作古墳群』財団法人千葉県文化財センター
23　萩原恭一・白井久美子・亀井宏行　2000　「君津市浅間神社古墳測量調査報告」『千葉県史研究』第８号
24　三浦和信・永浜真理子編　1980　『順礼海道古墳』順礼海道古墳調査団
25　斉藤礼司郎　1996　「山崎古墳群」『君津郡市文化財センター年報№13－平成６年度－』財団法人君津郡市文化財センター
26　當眞嗣史　1992『四留作第２古墳群第１号墳　四留作第１号塚・第２号塚』財団法人君津郡市文化財センター
斉藤礼司郎　1996「四留作第２古墳群・四留作塚群」『君津郡市文化財センター年報№13－平成６年度－』財団法人君津郡市文化財センター
27　財団法人君津郡市文化財センター　1997「馬場作古墳群」『君津郡市文化財センター年報№14－平成７年度－』
財団法人君津郡市文化財センター　1998「馬場作古墳群２・４号墳」『君津郡市文化財センター年報№15－平成８年度－』
28　溝口勝美・岸本雅人ほか　1980　『鬼塚古墳』鬼塚古墳発掘調査会
29　浅野雅則　1983　『新開遺跡発掘調査報告書』新開遺跡調査委員会
30　中能隆　1995　『山ノ下製鉄遺跡』財団法人君津郡市文化財センター
31　大川清　1967　「木更津矢那瓦窯址」『古代』49・50号
佐久間豊　1989　『木更津市上名主ヶ谷窯跡確認調査報告書』千葉県教育委員会
32　相京邦彦　2004　『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書14－木更津市笹子城跡－』財団法人千葉県文化財センター
33　注12に同じ。

第２章　南岩井作遺跡（吉野田遺跡）

第１節　中・近世

遺構は，調査区の北方に集中して検出された。いずれも主軸方向をほぼ等しくする掘立柱建物跡と考えられるピット群と溝状遺構である。全体的に遺物の出土量は少なく，時期の決定には難しい面もあるが，中世以降の所産と考えられる。なお，SD-001・002は近世以降と考えられ，欠番とした。

１　掘立柱建物跡

SB-001（第11図，図版２・26）

桁行２間(4.0m)，梁間２間(2.4m)の建物に復元できる。柱間は桁行で2.0m，梁間で1.2mである。柱穴掘形は径20cm～35cmの円形で，掘込みの深さは検出面から20cm～30cmである。明瞭な柱痕跡は確認できなかった。遺構南部に，柱穴に沿って深さ10cmほどの溝がＬ字状に廻っている。

遺物は柱穴掘形内から少量出土し，２点を図示した。１はチャート製の敲石と考えられる。やや赤味を帯びた色調を呈し，熱を受けた可能性がある。２は砂岩製の砥石と考えられる。最大長は140.1mm，最大幅は58mm，最大厚は54.1mm，重量は472.98ｇである。

SB-002（第11図）

部分的に柱穴が検出されなかったり，柱間が不揃いな部分もみられるが，桁行4.3m，梁間2.0m以上の建物に復元可能である。柱穴掘形は径20cm～30cmの円形で，掘込みの深さは検出面から20cm～45cmである。明瞭な柱痕跡は確認できなかった。

遺物は出土していない。

SB-003（第11図）

３か所の柱穴とみられるピットが，1.8m等間隔で並んで検出された。建物に復元することは難しいかもしれない。掘形は径30cm～45cmの円形で，掘込みの深さは検出面から15cm～50cmである。明瞭な柱痕跡は確認できなかった。

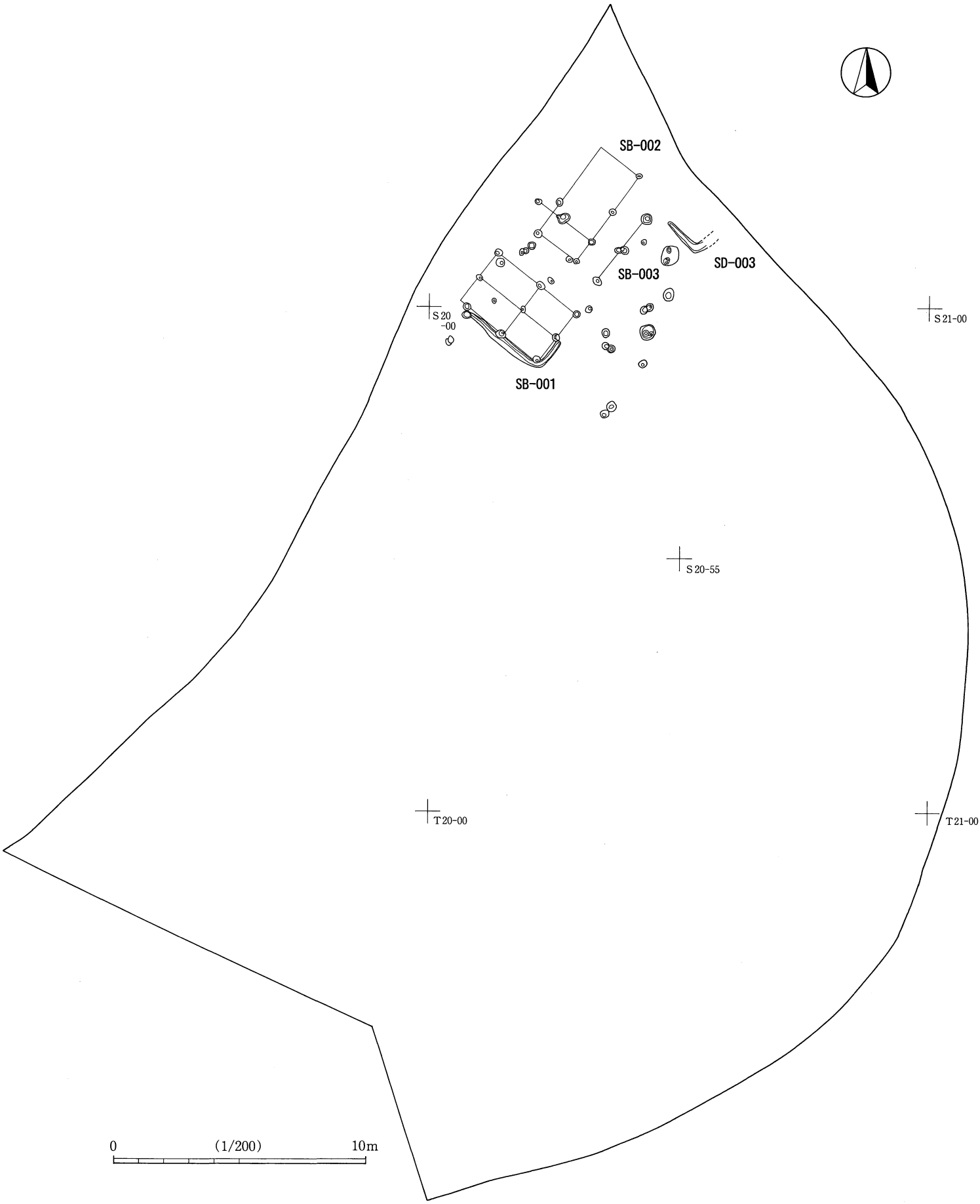
遺物は出土していない。

２　溝状遺構

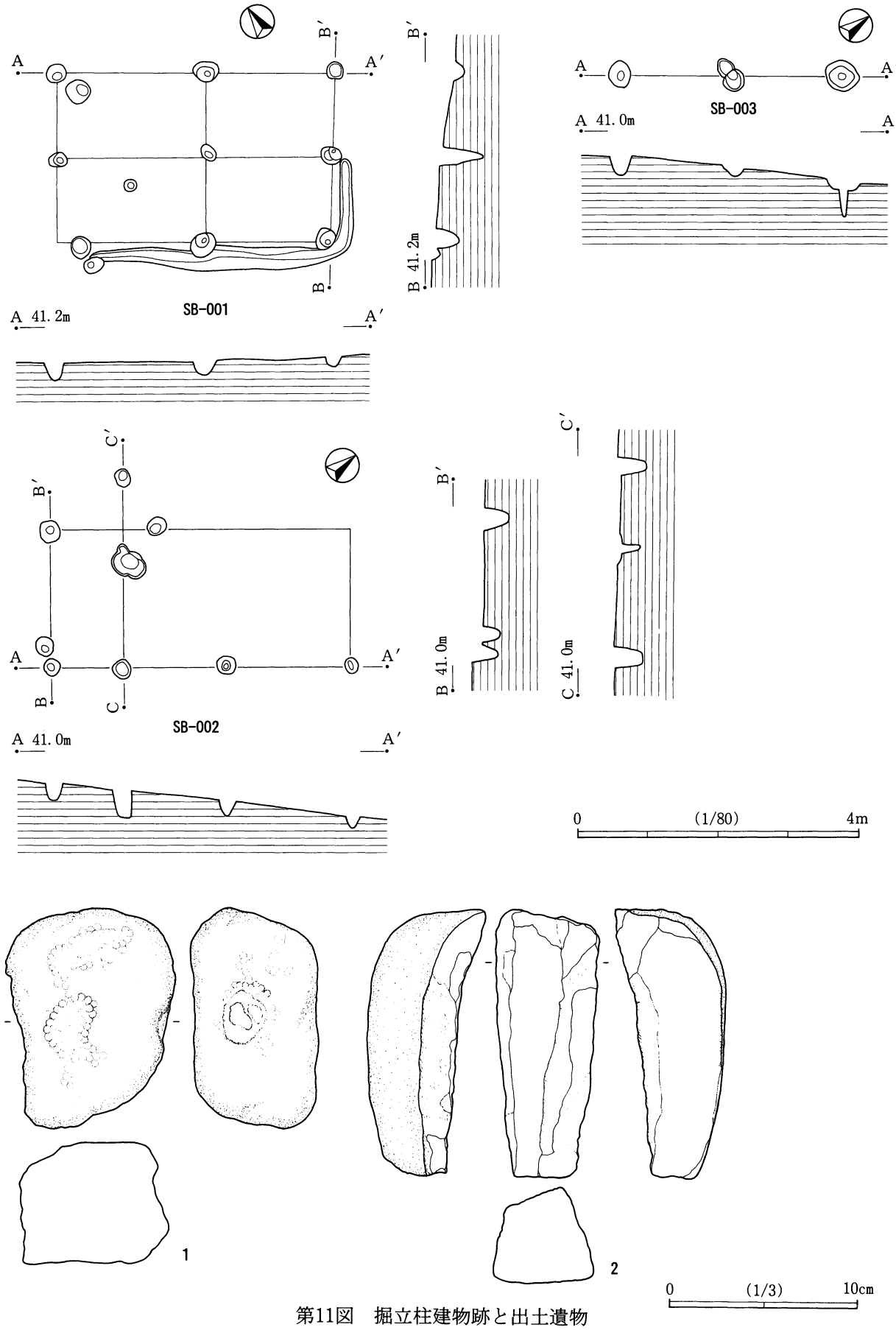
SD-003（第10図）

調査区の北東端付近に検出された。軸方向は，北西－南東方向からほぼ直角に北東－南西方向に折れる。検出された長さは約２m，幅は約30cm，検出面からの深さは約10cmで断面形は緩いＵ字形である。用途等は不明であるが，SB-001の柱穴に沿ったＬ字形の溝と軸方向がほぼ一致し，形態が類似する。

遺物は出土していない。



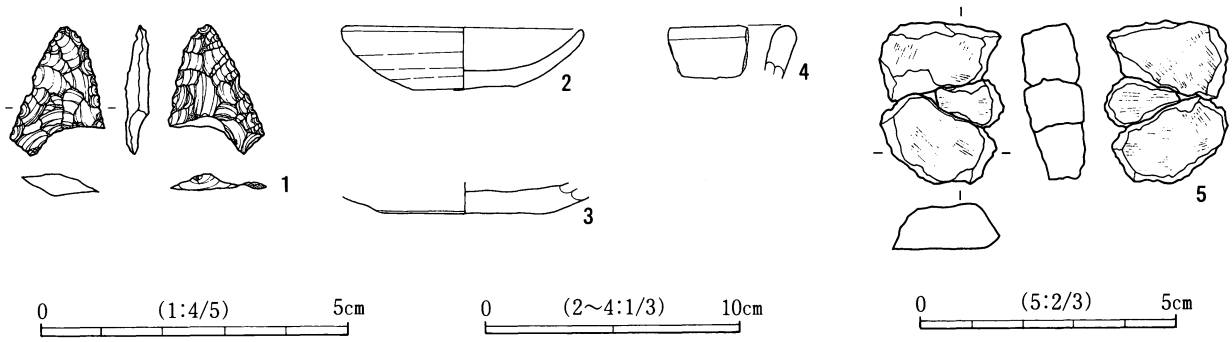
第10図　南岩井作遺跡（吉野田遺跡）遺構配置図



第11図　掘立柱建物跡と出土遺物

第２節　遺構外出土遺物（第12図，図版26）

１は黒曜石製の石鏃である。２は灰緑色～褐色の釉薬の施される皿である。露胎部は褐色，断面は灰褐色を呈す。３はカワラケと考えられる。磨耗が著しい。４は内耳鍋である。外面は煤けて黒色である。５は凝灰岩製の砥石である。最大長31.8㎜，最大幅23.9㎜，最大厚10.6㎜，重量8.07ｇである。



第12図　南岩井作遺跡（吉野田遺跡）遺構外出土遺物

第２表　南岩井作遺跡（吉野田遺跡）　縄文時代石器観察表

挿図番号	出土位置	遺物番号	種　類	石　材	最大長(㎜)	最大幅(㎜)	最大厚(㎜)	重量(ｇ)	備　考
第11図１	ＳＢ-001	0002	敲石	チャート	110.64	89.00	63.71	1027.16	被熱の可能性
第12図１	表採	0002	石鏃	黒曜石	20.60	15.54	4.10	0.71	

第３表　南岩井作遺跡（吉野田遺跡）　縄文時代石器組成表

	石　鏃	敲石類	計
SB-001		1	1
		1027.16	1027.16
表　採	1		1
	0.71		0.71
計	1	1	2
	0.71	1027.16	1027.87

※上段…個数(単位：個)　下段…重量(単位：ｇ)

第４表　南岩井作遺跡（吉野田遺跡）　掲載土器観察表

遺構番号	挿図番号	時代	種別	器種	遺存度	法量(cm) 口径	底径	頸径	胴径	器高	技　法	色調	胎土	焼成
SD-001	第12図2	近世	鉄釉	小皿	完形	9.4	4.0	－	－	2.5	ロクロ調整・底部回転ヘラケズリ	褐色	緻密	◎
											ロクロ調整	褐色		
遺跡一括	第12図3	中・近世		カワラケ	底部のみ全部遺存	－	(7.0)	－	－	(1.2)	ロクロ調整・底部手持ちヘラケズリ？(器面著しく磨耗)	橙褐色	緻密	△
											ロクロ調整	橙褐色		
遺跡一括	第12図4	中・近世		内耳鍋	口縁部破片	－	－	－	－	(2.1)	ロクロ調整	黒褐色	砂粒少量	○
											ロクロ調整	明褐色		

※技法・色調：上段…外面　下段…内面
焼成：◎…良好　○…普通　△…やや不良

第５表　南岩井作遺跡（吉野田遺跡）　非掲載遺物重量表（単位：ｇ）

遺構番号	土師器壺甕・鉢類	土師器杯・高杯類	須恵器	灰釉陶器	中世陶磁器	近世陶磁器	土製品類	瓦	石	鉄	合計
SB－001									1,541		1,541
遺跡一括	63	11			31	24			133	72	334

第３章　西御祈祷谷古墳群

第１節　中・近世

１　塚

調査対象は「古墳７基」であったが，調査の結果いずれも中・近世の塚であり，調査区北西端に削平された塚がさらに１基検出され，合計８基からなる塚群であることが明らかとなった。また，いずれにも古墳を転用した形跡は確認されなかった。

SM-001（第14図，図版５）

北西から南東に連なる塚群の北から２基目に位置する。塚の規模は南北約3.7m，東西約2.6mで，平面形が長方形の塚である。西側を通っているSD-001に削平された可能性が高く，当初は１辺約3.7mの方形に築造されていたものと推定される。旧表土（地山）を深さ約0.5m削り出し，その土で盛土したものと思われる。盛土の厚さは最大で0.86mである。盛土は３層に分けられ，土層断面によると，塚は方形に削り出した旧表土の周囲に土手状に盛土し，のち中央部や上部に盛土したと思われる。塚の主軸は，丘陵の向きと一致する北北西－南南東方向にとっている。

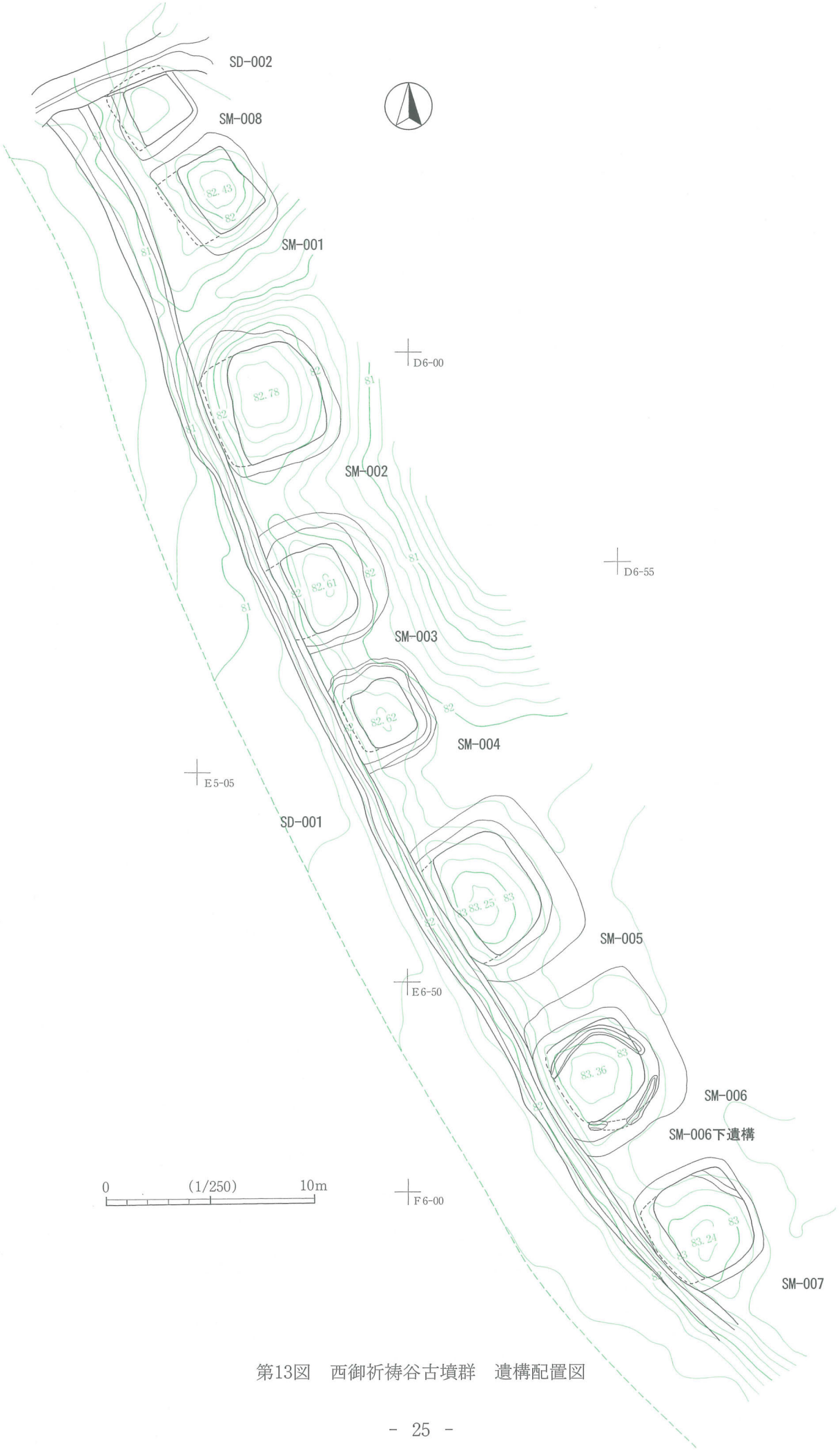
SM-008（第14図，図版５）

塚群の最北に位置する。塚の規模は南北約2.8m，東西約2.7mで平面形が不整方形の塚である。北側のSD-002と西側のSD-001に削平されている可能性が高く，当初は一辺約3.2mの方形に築造されていたものと推定される。旧表土（地山）を深さ0.56m削り出し，その土で盛土したものと思われる。盛土の厚さは最大で，0.24mである。盛土もかなり削平を受けている可能性がある。盛土は３層に分けられ，土層断面によると，塚は方形に削り出した旧表土の周囲に土手状に盛土し，次に中央部や上部に盛土したと思われる。塚の主軸は，丘陵の向きと一致する北北西－南南東方向にとっている。他の７基の塚に比べ改変が著しく遺存状態が悪い。

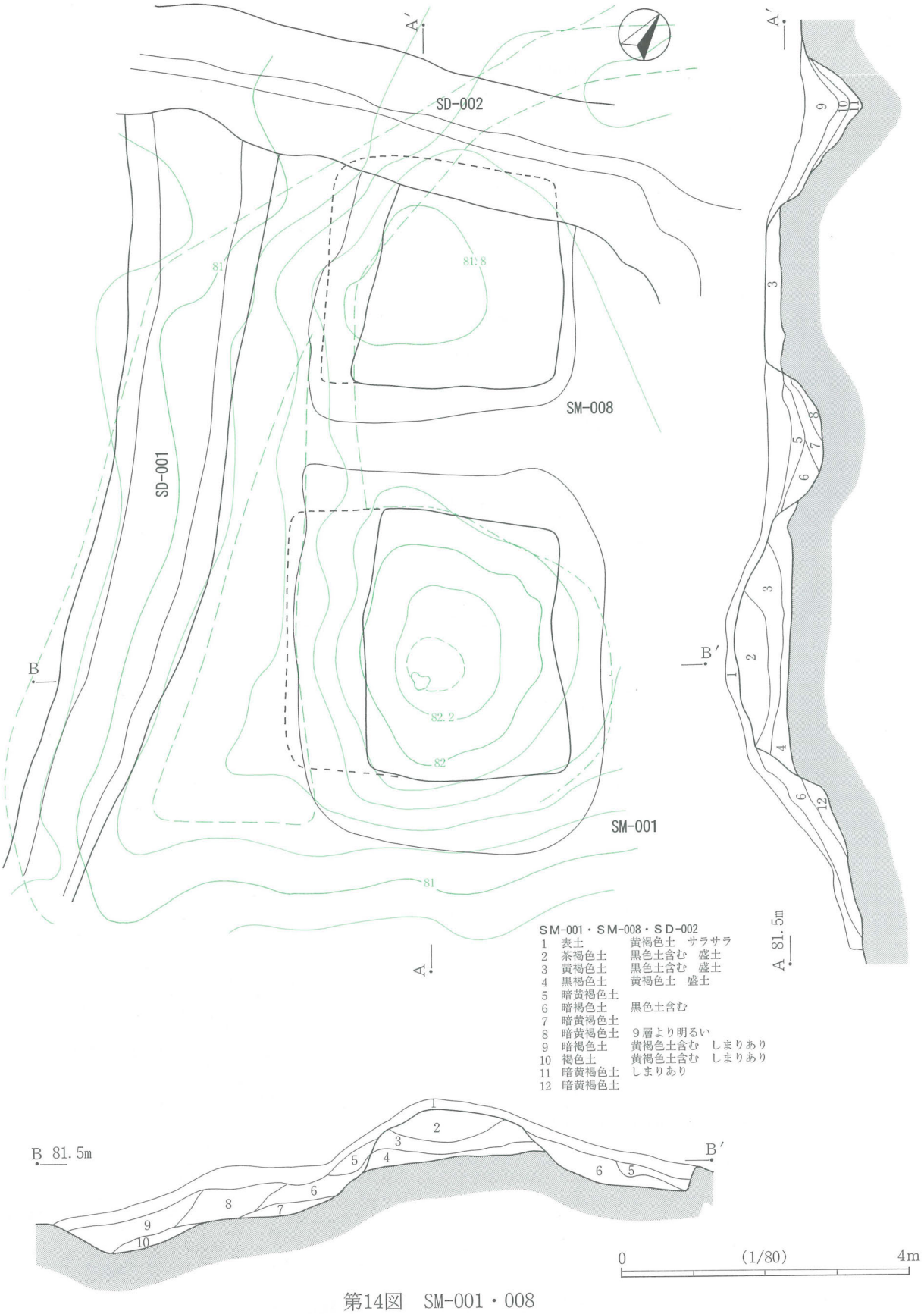
SM-002（第15図，図版５・６・26）

塚群の北から３基目に位置する。規模は南北で約5.3m，東西で約4.2mで平面形が長方形の塚である。西側を通っているSD-001に削平されている可能性が高く，当初は約5.3mの方形に築造されていたものと推定される。塚群中２番目の規模を持つ。旧表土（地山）を深さ約0.6m削り出し，その土で盛土したものと思われる。盛土の厚さは，約1.2mである。盛土は３層に分けられる。盛土土層断面によると，塚は方形に削り出した旧表土の周囲に方形に土手状に盛土し，次に上に盛土したと思われる。塚の主軸は，丘陵の向きと一致する北北西－南南東方向にとっている。

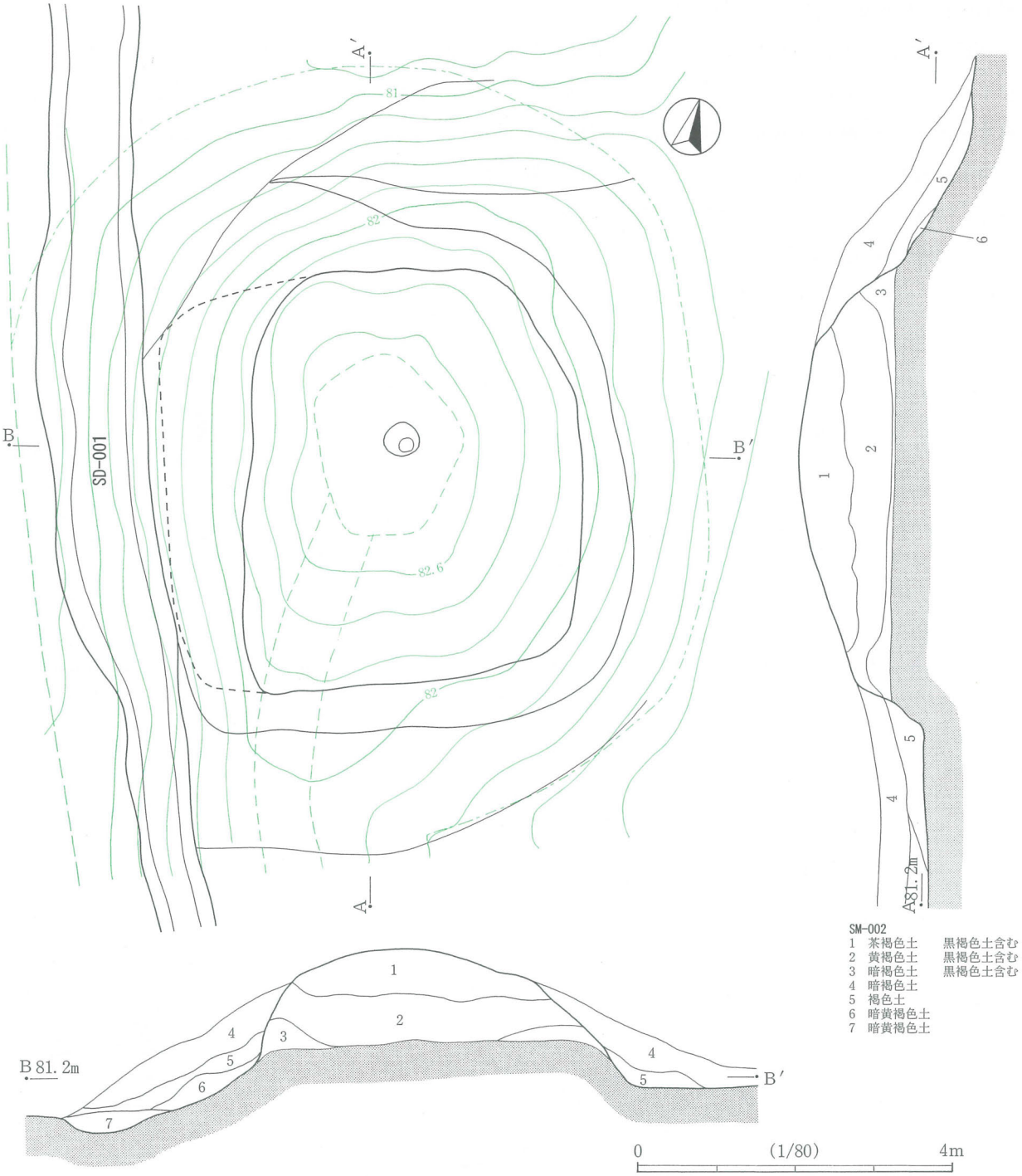
盛土を除去した旧表土面のほぼ中央部から銭貨が６点検出された。１・２は唐銭で，３・４は北宋銭，５は明銭である。もう１点は遺存状態が非常に悪く，図示できない。銭種も明らかにならない。

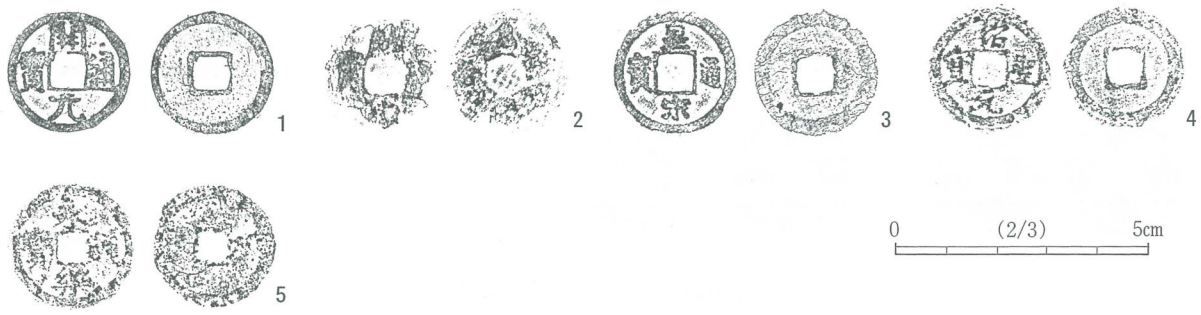


第13図　西御祈祷谷古墳群　遺構配置図



第14図 SM-001・008



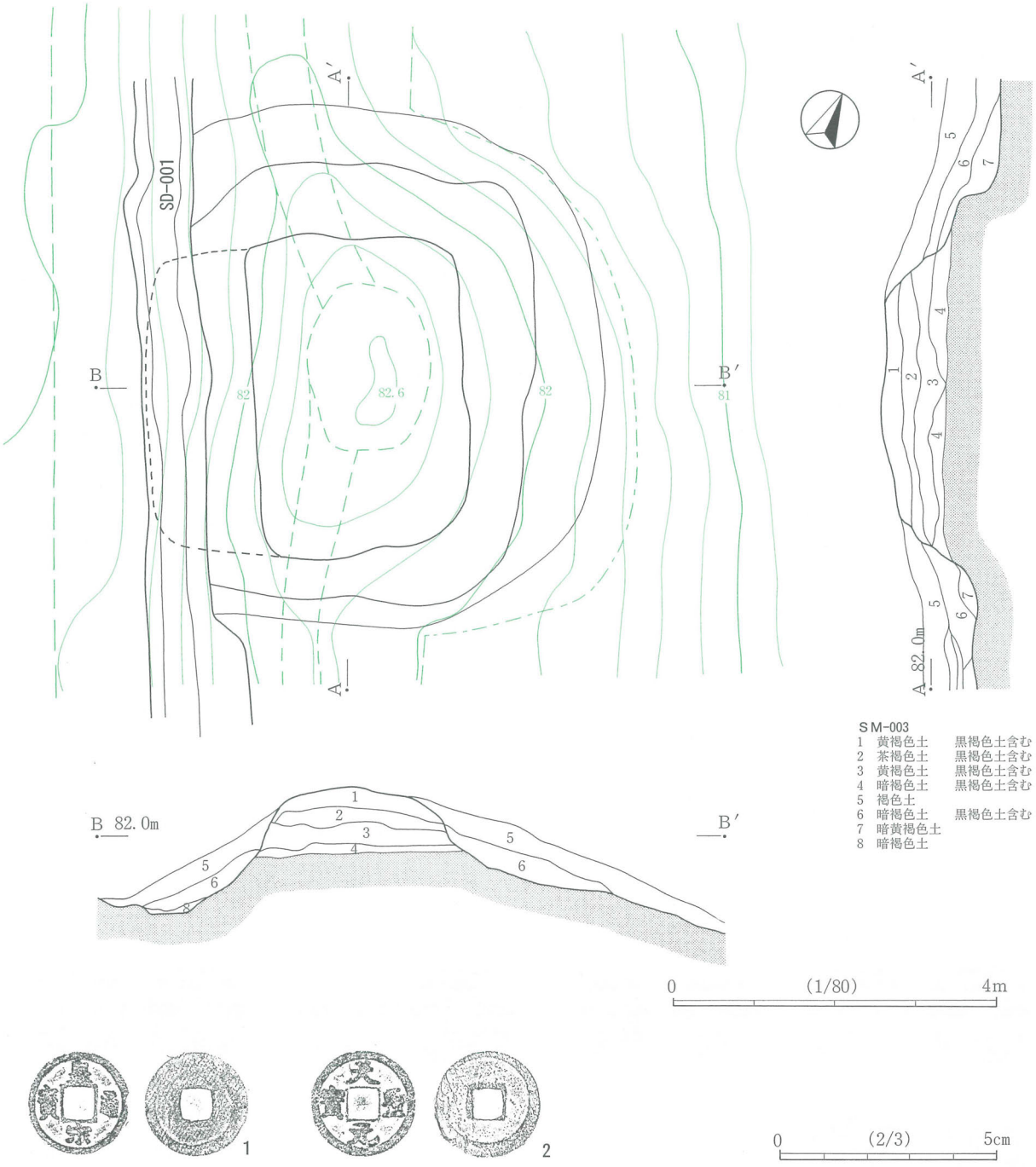


第15図　SM-002と出土遺物

SM-003（第16図，図版６・７・26）

塚群の北から４基目に位置する。規模は南北約４ｍ，東西約2.6ｍで，平面形が長方形の塚である。西側を通っているSD-001に削平されている可能性が高く，当初は一辺約４ｍの方形に築造されていたものと推定される。旧表土（地山）を深さ0.46ｍ削り出し，その土で盛土したものと思われる。盛土の厚さは最大で約0.8ｍである。盛土は４層に分けられ，土層断面によると塚は方形に旧表土を削り出し，その上に水平に盛土している。塚の主軸は，丘陵の向きと一致する北北西－南南東方向にとっている。

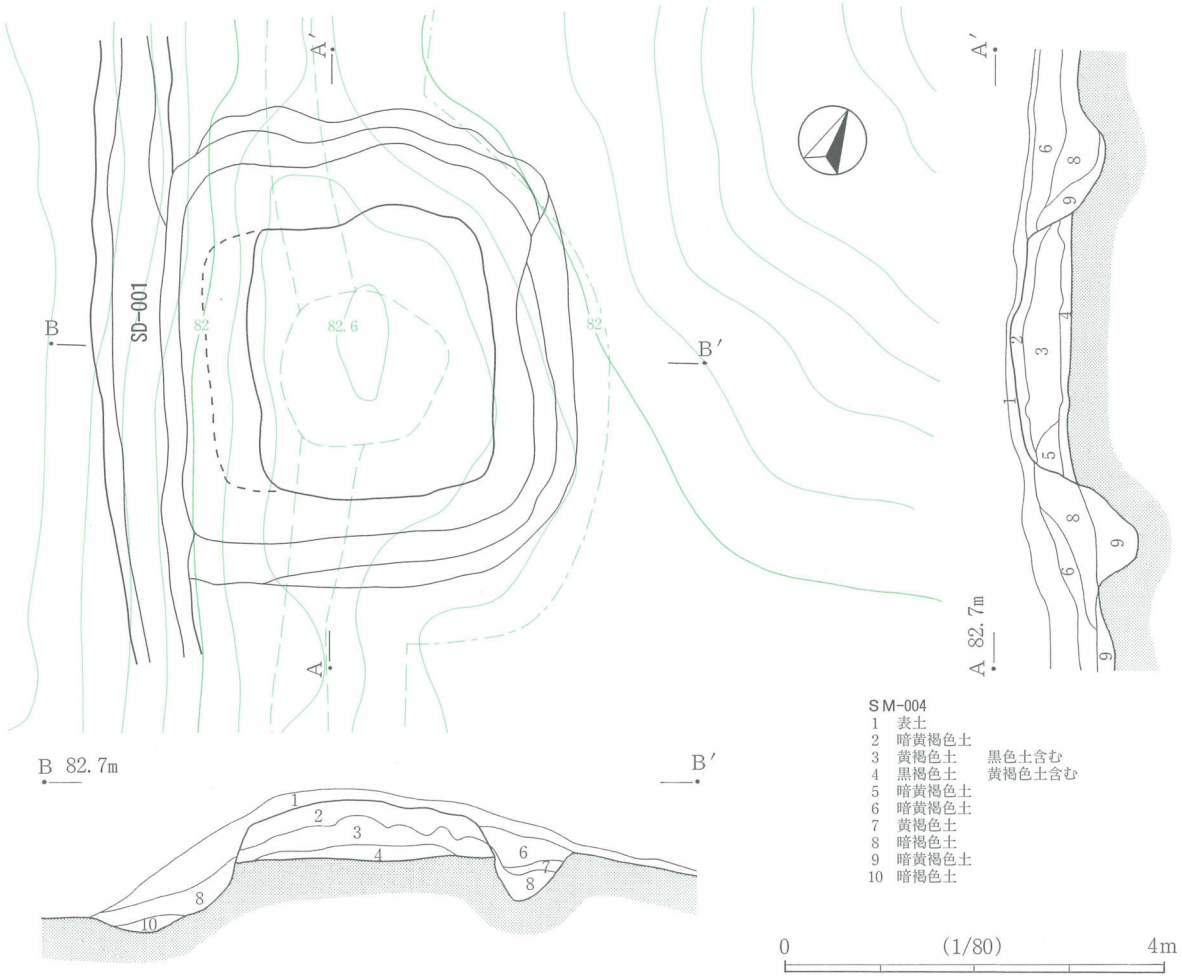
旧表土上から銭貨が２点検出された。１・２とも北宋銭である。



第16図　SM-003と出土遺物

SM-004（第17図，図版７）

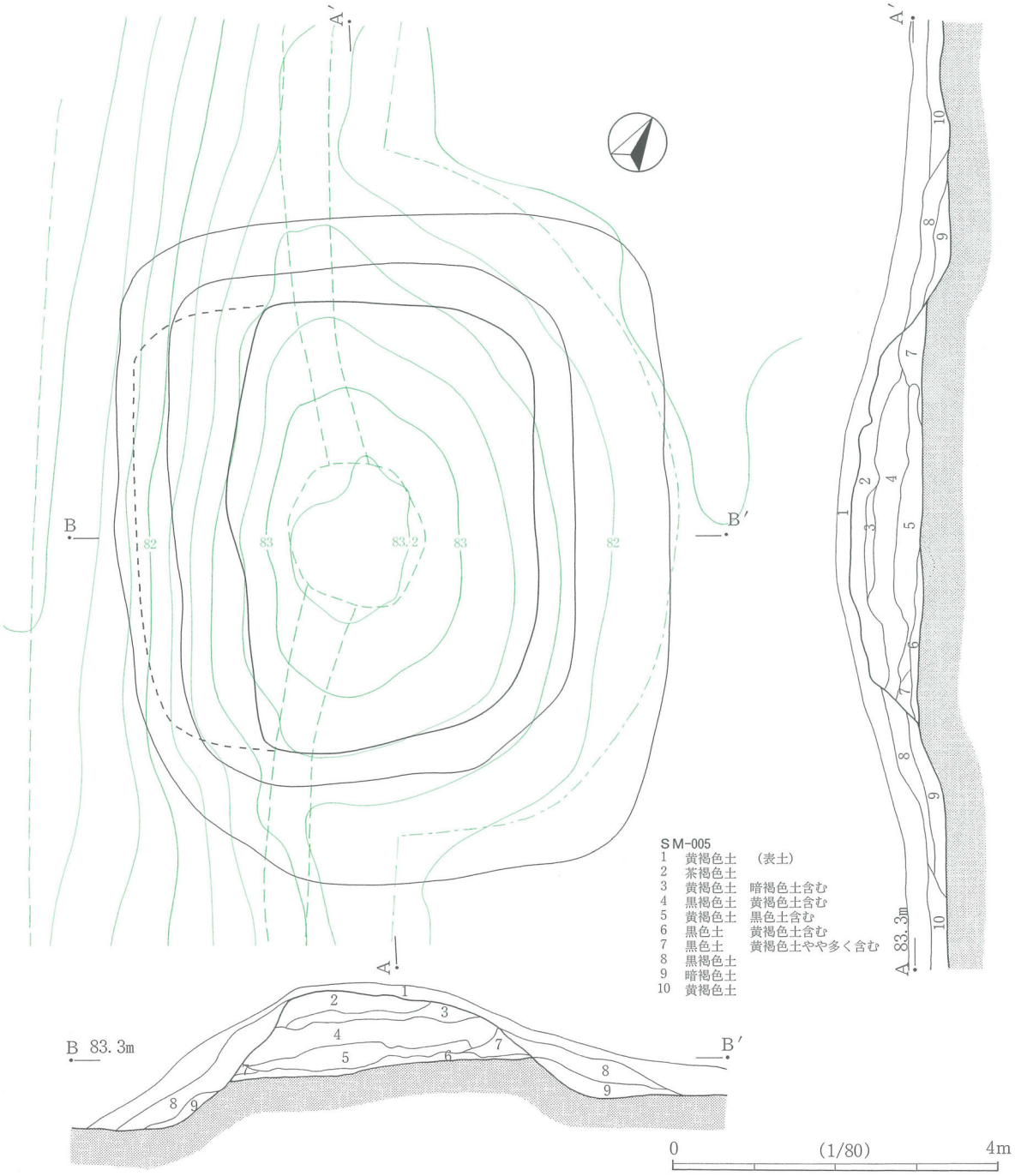
塚群の北から５基目に位置する。規模は南北約3.1m，東西約2.6mで平面形が長方形の塚である。西側を通っているSD-001に削平されている可能性が高く，当初は一辺約3.1mの方形に築造されていたものと推定される。旧表土（地山）の東側，北側，南側から最大幅0.8m，最大深さ約0.5mの溝がコ字形に検出された。西側からは検出されなかった。溝の断面形は一定ではないが椀形である。掘った溝の土で盛土したものと思われる。盛土の厚さは最大で，約0.7mである。盛土は４層に分けられ，中央部がやや厚いがほぼ水平に盛土している。塚の主軸は，丘陵の向きと一致する北北西－南南東方向にとっている。



第17図　SM-004

SM-005（第18図，図版８）

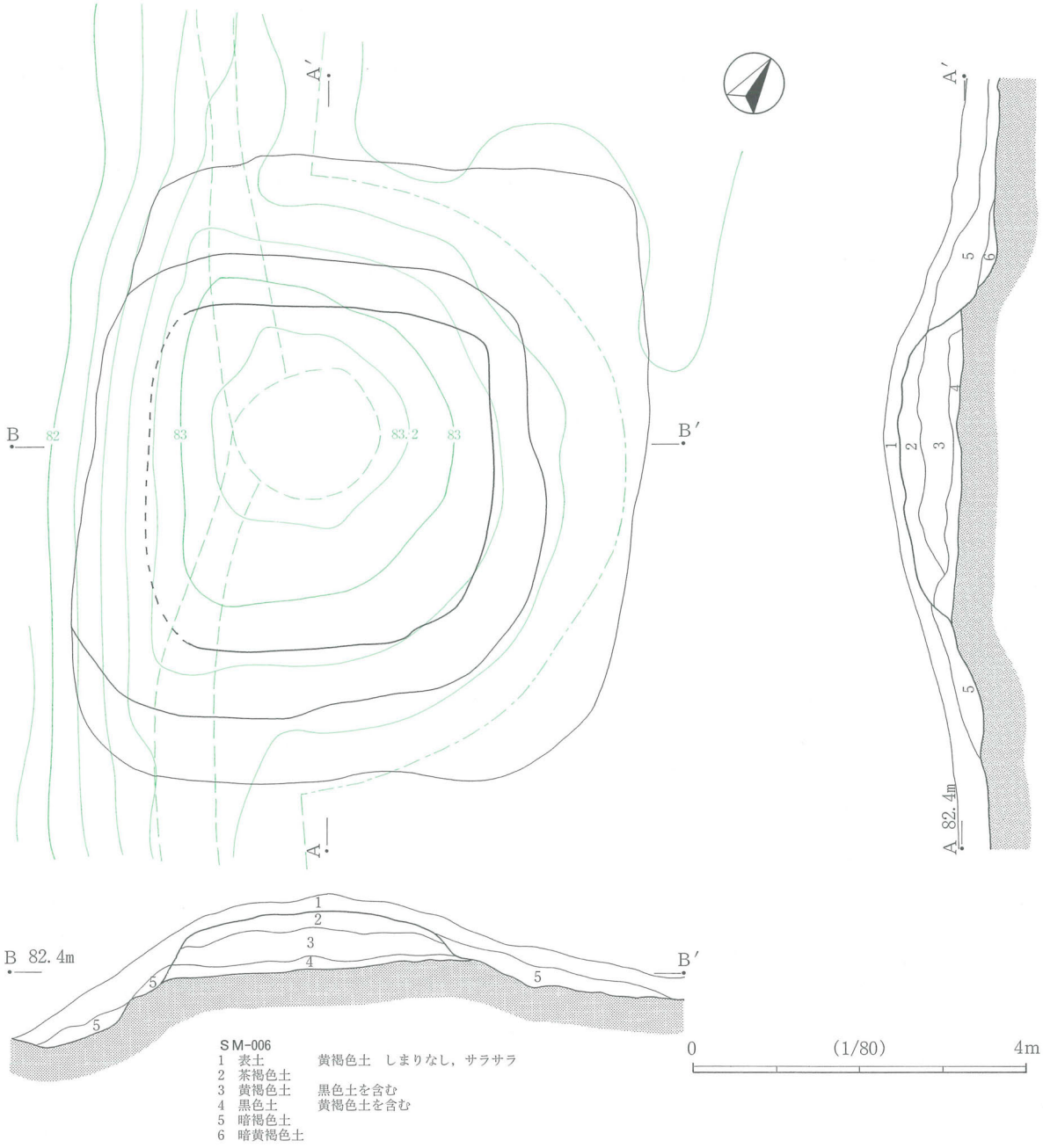
塚群の北から６基目に位置する。規模は南北約5.4m，東西約3.8mで平面形が長方形の塚である。西側を通っているSD-001に削平されている可能性が高く，当初は一辺約5.4mの方形に築造されていたものと推定される。塚群中最大の規模を持つ。旧表土（地山）を深さ約0.5m削り出し，その土で盛土したものと思われる。盛土の厚さは，最大で約1.1mである。盛土は６層に分層され，土層断面によると塚は方形に削り出した旧表土の周囲に土手状に盛土し，次に上部にほぼ水平に盛土したと思われる。塚の主軸は，丘陵の向きと一致する北北西－南南東方向にとっている。



第18図　SM-005

SM-006（第19図，図版９）

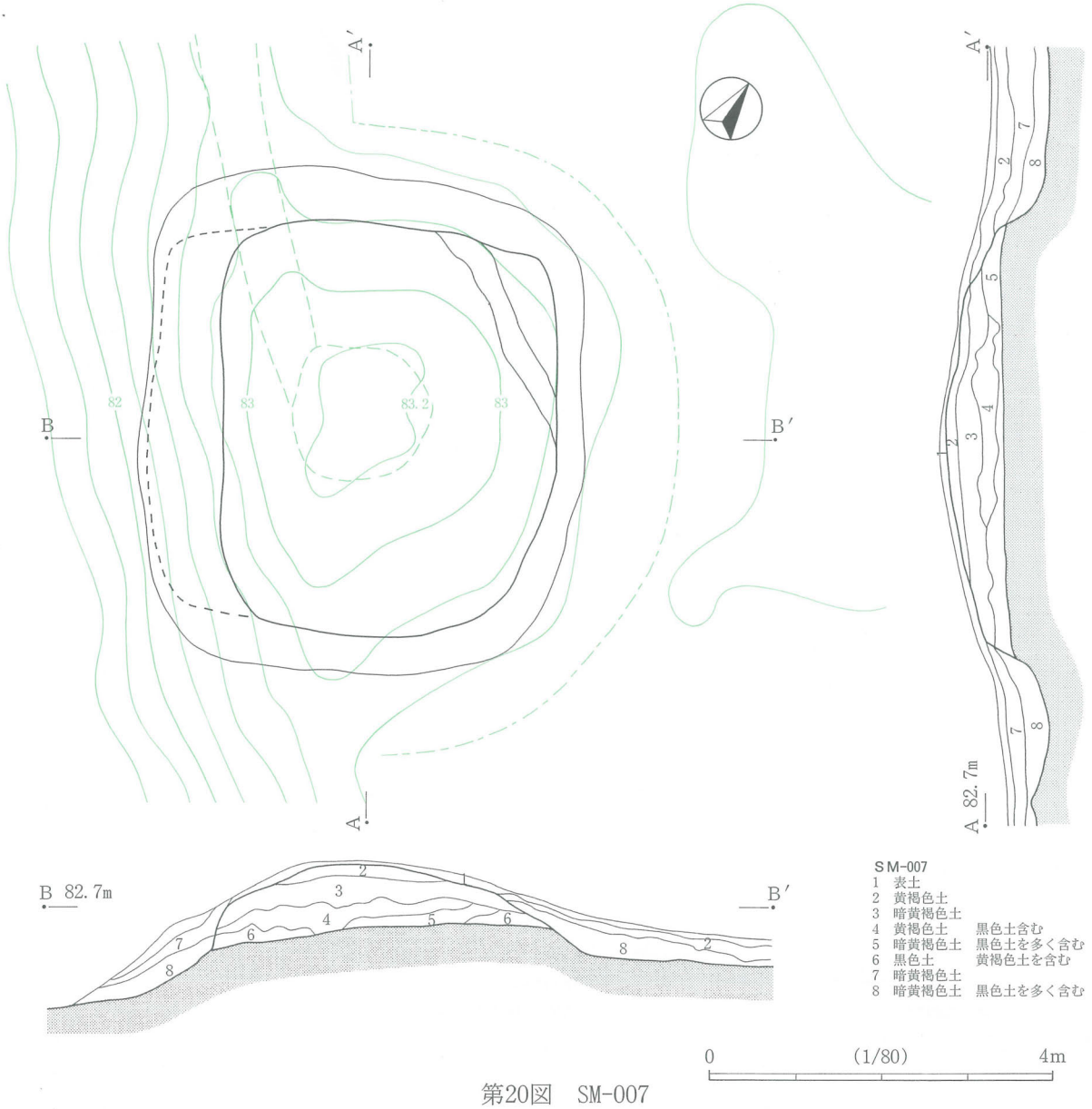
塚群の北から７基目に位置する。規模は南北で約4.1m，東西で約４ｍで平面形が長方形の塚である。西側のSD-001による削平は少ない。旧表土（地山）を深さ約0.4m削り出し，その土で盛土したものと思われる。盛土の厚さは，最大で約0.9mである。盛土は３層に分けられる。土層断面によると，塚は方形に削り出した旧表土上にほぼ水平に盛土している。塚の主軸は，丘陵の向きと一致する北北西－南南東方向にとっている。



第19図　SM-006

SM-007（第20図，図版９・10）

塚群の北から８基目に位置する。規模は南北約4.8m，東西約3.9mで平面形が長方形の塚である。西側を通っているSD-001に削平されている可能性が高く，当初は約4.8mの方形に築造されていたものと推定される。旧表土（地山）を深さ約0.3m削り出し，その土で盛土したものと思われる。盛土の厚さは約0.8mである。盛土は５層に分けられ，土層断面によると塚は方形に削り出した旧表土上にほぼ水平に盛土している。塚の主軸は，丘陵の向きと一致する北北西－南南東方向にとっている。



第20図　SM-007

2　溝状遺構

SD-001（第13図）

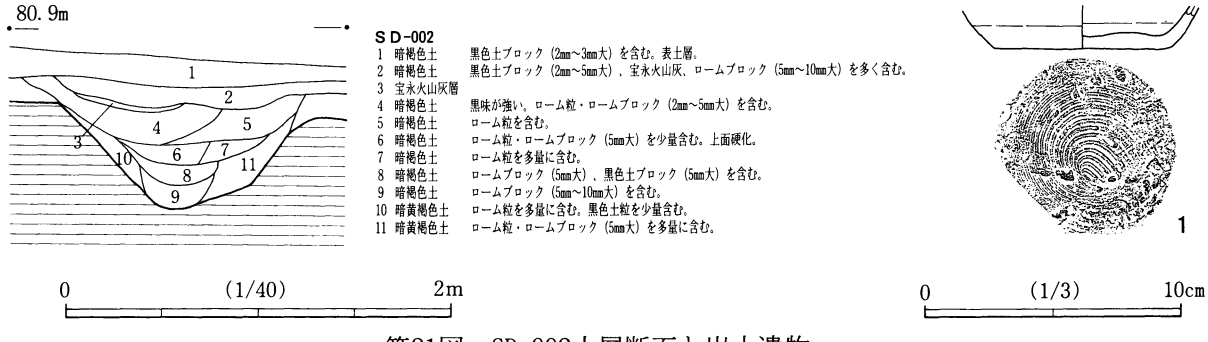
市境である尾根筋を，塚群に沿って北西－南東方向に直線的に伸びる溝状遺構である。北側は直交するSD-002で途切れ，更に北へは続かない。南側は新開１遺跡に続き，一端途切れるが，更に南のSD-008（新開２遺跡）に続くものと考えられる。検出された長さは全体で約96m，幅は約0.7m～1.8m，深さは約25cmで，断面形は緩いU字形である。硬化面が検出されたことから，道として機能していたものと考えられる。SD-002との新旧関係は明らかでないが，塚群を切っており，中世以降比較的最近まで機能していたものと考えられる。

遺物は，土師器の小破片が少量出土したのみである。混入品と考えられる。

SD-002（第13・21図，図版10・28）

調査区の北端で北東－南西方向に検出された溝状遺構である。西端は新開２遺跡の斜面を下って途切れる。東端も調査区外へ下っていくものと推定される。検出された長さは全体で約27m，幅約1.8m，深さ約80cmで，断面形はV字形である。上層には宝永火山灰の堆積が見られるが，最下層からは９世紀末葉頃の所産と考えられるロクロ土師器（第21図１）が出土した。最下面は硬化していたが，最下面以外にも硬化面が何枚か確認できることから，近世に至るまで，連綿と道として機能していたものと考えられる。

図示した遺物は１点である。１はロクロ土師器杯の底部である。体部外面下端は無調整で，底部外面には回転糸切り痕が残る。

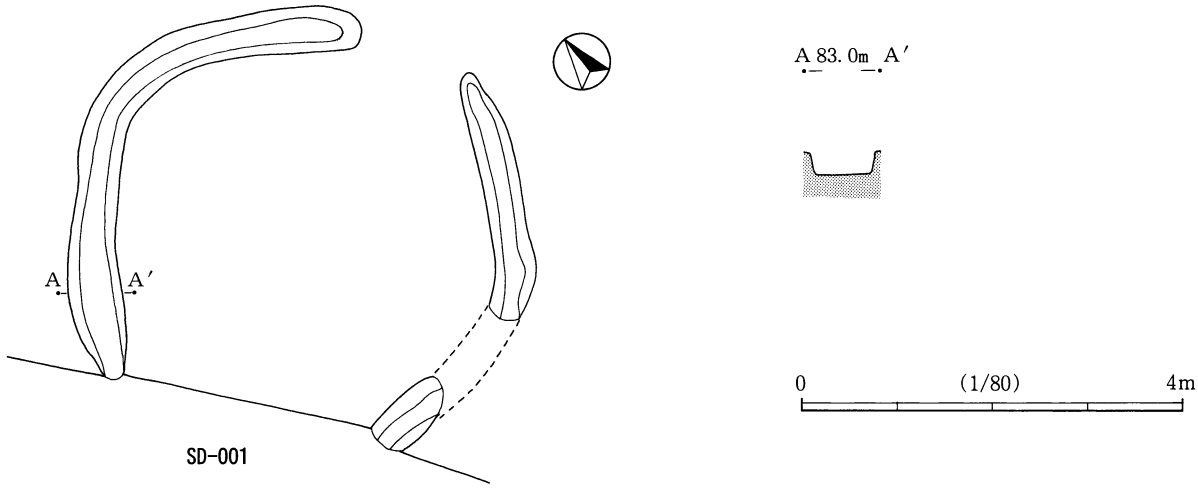


第21図　SD-002土層断面と出土遺物

SM-006下遺構（第22図，図版10）

SM-006の旧表土下で検出した周溝状遺構である。南西部はSD-001に切られるが，東部が一部途切れる隅丸方形を呈する。幅約0.45m，検出面からの深さは約25cmを測り，断面形は箱形である。塚の築造に関連する区画溝などとも考えられるが，軸方向がSM-006と合わないことから，塚以前の時代の，別の遺構である可能性が高いと言える。SM-006盛土中からは８世紀代に比定される須恵器の瓶（第29図１・２）が出土しており，これを当遺構に伴うものと考えると，方形墳墓とみることも可能であろう。

遺物は，縄文時代早期の土器片が１点出土したのみである。混入品と考えられる。



第22図　SM-006下遺構

第２節　遺構外出土遺物

１　縄文時代

（１）土器（第23～27図，図版27）

西御祈祷谷古墳群の塚の盛土中からは，早期を主体とするまとまった量の縄文土器や礫が出土している。隣接する新開１遺跡・新開２遺跡から同時期の遺物が多く出土しており，そこから出土したものと同一個体と考えられる土器片も存在することから，塚を造る際に，周辺の土を使って盛土したことが窺えるものである。

ここでは，出土した縄文土器について，新開１遺跡や新開２遺跡と同様に分類して報告することとする。

第１群土器　撚糸文系土器

第２群土器　主に三戸式・田戸下層式に比定される沈線文系土器

第３群土器　主に田戸上層式～子母口式に比定される沈線文系土器～条痕文系土器

胎土に繊維を含まないか少し含むもので，器面に雑な擦痕や条痕が施されるかまたは無文のもの

第４群土器　条痕文系土器

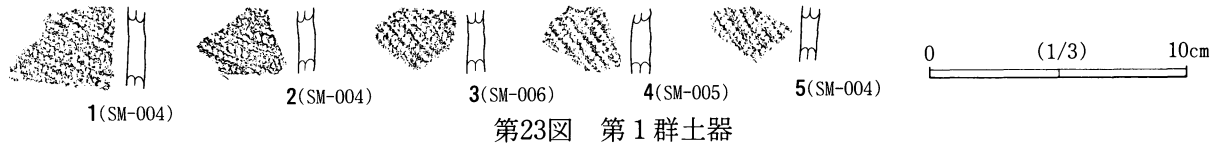
胎土に繊維を含み，表裏に貝殻条痕文の施されるもの

第５群土器　縄文時代前期の土器

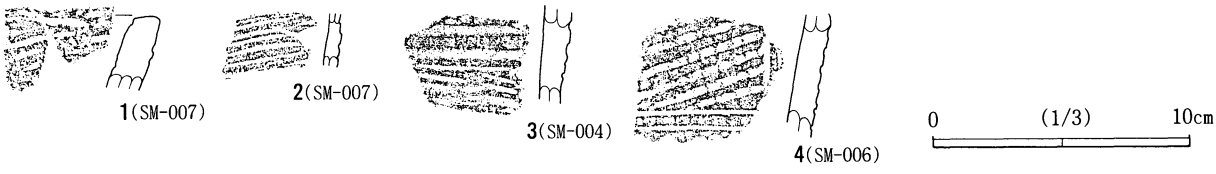
第６群土器　縄文時代中期以降の土器

第23図は第１群土器である。全て同一個体の胴部の破片と考えられ，胎土に砂粒と黄褐色粒子を多く含み，色調はやや赤味を帯びた明褐色を呈す。焼成は普通である。

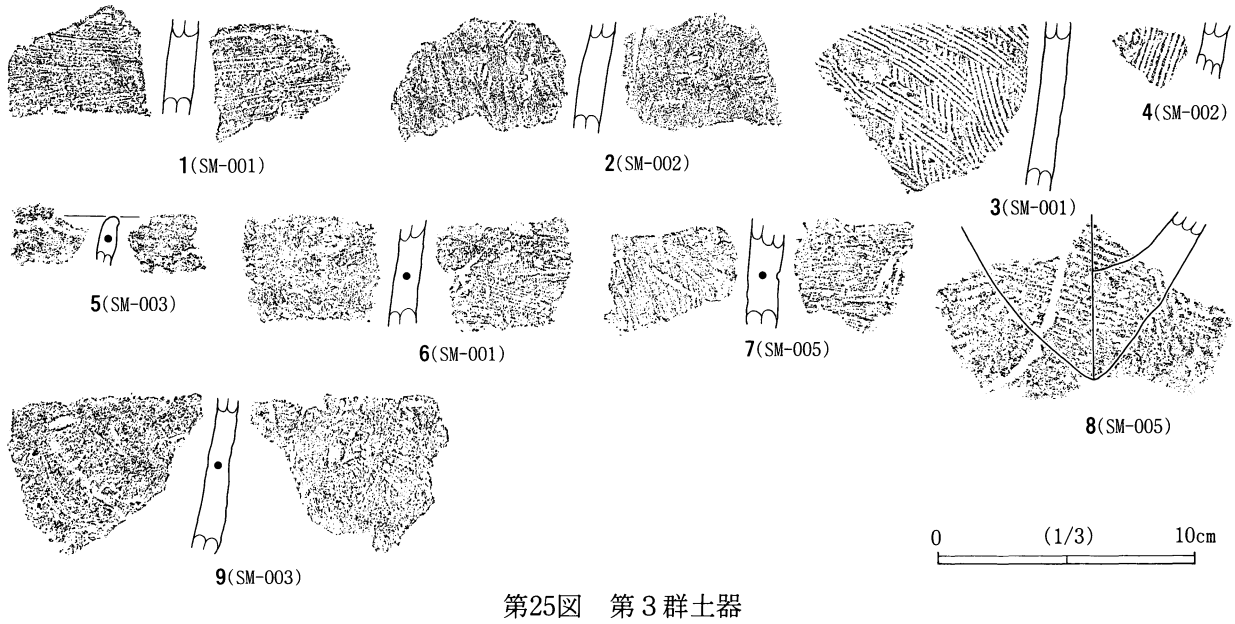
第24図は第２群土器である。１は口縁部の破片で，口唇部は平坦ないしやや内傾する。浅い並行沈線が施される。２は器厚の薄い土器で細い並行沈線が施される。色調はほかの第２群土器が淡褐色～明褐色の明るい色調を呈するのに対し，暗褐色を呈している。３・４は太沈線，細沈線によって施文されているもので，３は太沈線に並行するようにやや乱雑に細沈線が施される。４は斜めに並行太沈線が施され，その



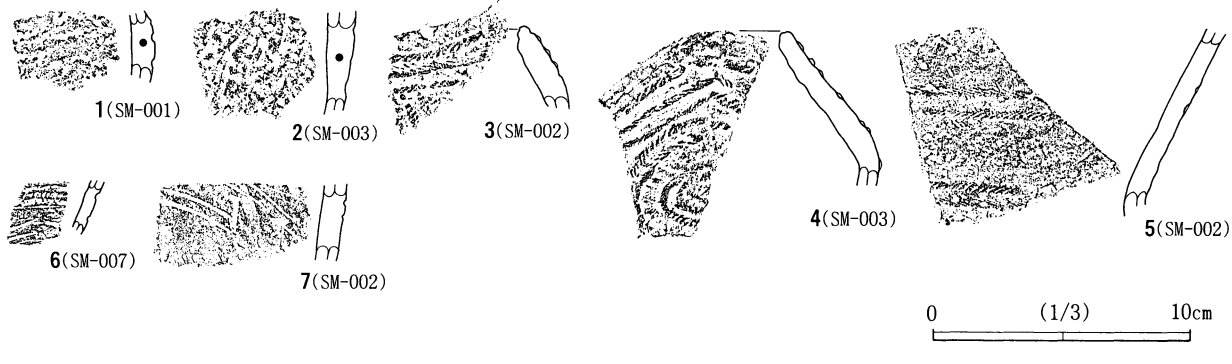
第23図　第１群土器



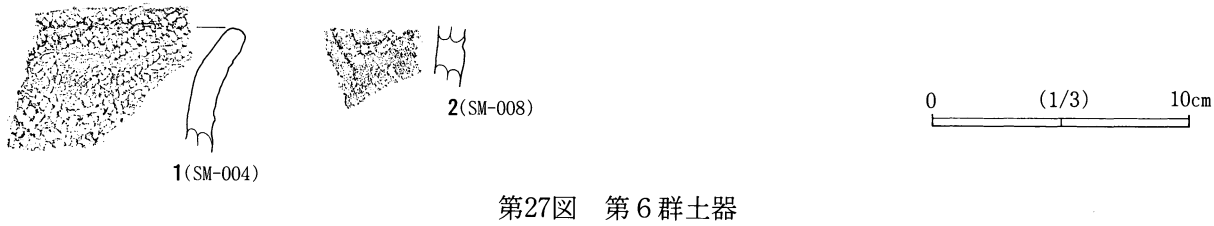
第24図　第２群土器



第25図　第３群土器



第26図　第５群土器



第27図　第６群土器

下に横位に並行細沈線が施される。

第25図は第３群土器である。１～４は繊維をほとんど含まない。１は内外面に擦痕が施される。２～４は焼成の良好なもので，外面に明瞭な条痕文が施される。外面は明褐色，よく磨かれた内面は暗褐色を呈し，同一個体と考えられる。１も２～４同様の条痕文が，擦痕またはナデによって消されていると考えられ，２～４と同一個体の可能性もある。５は口縁部の破片である。５～７・９はいずれも内外面に擦痕状の調整が観察される。８は，外面に条痕文が施される。

第26図は第５群土器である。１は貝殻腹縁文が施される。２は器面の磨滅が著しいが，縄文が施文されているようである。胎土に２㎜～３㎜大の小石を多量に含む。３・４は同一個体の波状口縁部破片である。爪形文の施された浮線が口縁部に沿って３条施され，その下では渦巻文を構成するようである。５はラッパ形に開く器形を呈すると考えられ，新開２遺跡の土器（第67図９）と同一個体と考えられる。僅かに隆起する隆線上に爪形文が施される。６・７は半截竹管により施文されるもので，６の上端には刺突文，押引文が見られる。

第27図は第６群土器である。１は口縁部破片で，口唇部にも縄文が施される。２は半截竹管による押引文が施される。

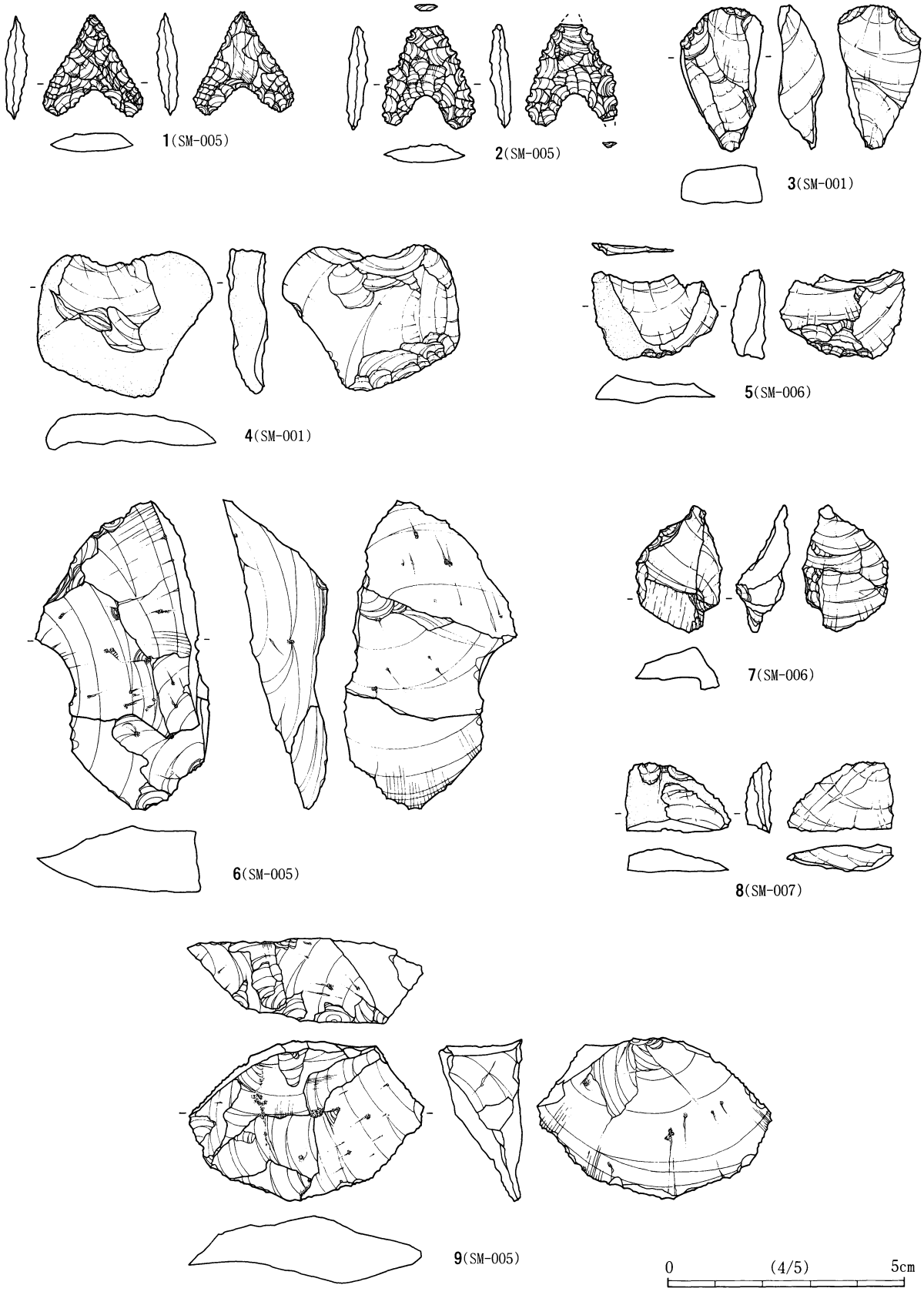
第６表　西御祈祷谷古墳群　縄文土器表

遺構番号	1群	2群	3群	4群	5群	6群	不明	合計
SM-001			8		1			9
			208.8		14.0			222.8
SM-002			2		2		1	5
			53.0		87.0		12.0	152.0
SM-003			5		5		1	11
			85.6		94.8		3.2	183.6
SM-004	5	1	2			1		9
	35.2	24.4	28.6			51.2		139.4
SM-005	2	1	5					8
	13.2	39.0	220.6					272.8
SM-006	1		2		1			4
	7.4		30.0		25.4			62.8
SM-007		1	4		3		1	9
		5.8	39.2		39.2		5.8	90.0
SM-008			7			1		8
			101.4			11.8		113.2

※上段…個数（単位：個）　下段…重量（単位：ｇ）

（２）石器（第28図，図版28）

１・２はいずれも黒曜石製の石鏃である。２は側縁が鋸歯状を呈する。３～５は楔形石器である。３は安山岩製で，左側面は自然面である。５は下端部に微細な剥離痕が見られる。６～９は剥片である。６は不純物を多く含み，透明感のない黒曜石製である。９と同一母岩の可能性が高い。７は珪質頁岩製で，背面下端部は剥離面である可能性もあるが，自然面と考えられる。８は安山岩製で，背面に自然面を残す。９は下端部に微細な剥離痕が観察される。６と同一母岩と考えられる。


1(SM-005)
2(SM-005)
3(SM-001)
4(SM-001)
5(SM-006)
6(SM-005)
7(SM-006)
8(SM-007)
9(SM-005)
0
(4/5)
5cm

第28図　縄文時代石器

第７表　西御祈祷谷古墳群　縄文時代石器観察表

挿図番号	出土位置	遺物番号	種　類	石　材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)	備　考
第28図１	SM-005	0012	石鏃	黒曜石	21.61	20.71	4.48	1.22	
第28図２	SM-005	0002	石鏃	黒曜石	21.90	19.32	4.80	1.20	
第28図３	SM-001	0002	楔形石器	チャート	30.20	38.71	8.65	9.56	
第28図４	SM-001	0002	楔形石器	安山岩	31.04	18.01	9.40	4.84	
第28図５	SM-006	0001	楔形石器	安山岩	21.50	25.21	6.82	2.80	
第28図６	SM-005	0002	剥片	黒曜石	67.62	36.90	20.11	26.77	９と同一母岩の可能性
第28図７	SM-006	0001	剥片	珪質頁岩	26.79	17.39	9.42	2.87	
第28図８	SM-007	0002	剥片	安山岩	14.31	22.01	5.15	1.92	
第28図９	SM-005	0002	剥片	黒曜石	33.85	49.18	17.88	21.03	６と同一母岩の可能性

第８表　西御祈祷谷古墳群　縄文時代石器組成表

	石鏃	楔形石器	剥片	計
SM-001		2		2
		14.40		14.40
SM-005	2		2	4
	2.42		47.80	50.22
SM-006		1	1	2
		2.80	2.87	5.67
SM-007			1	1
			1.92	1.92
計	2	3	4	9
	2.42	17.20	52.59	72.21

※上段…個数（単位：個）　下段…重量（単位：ｇ）

第９表　西御祈祷谷古墳群　縄文時代礫組成表

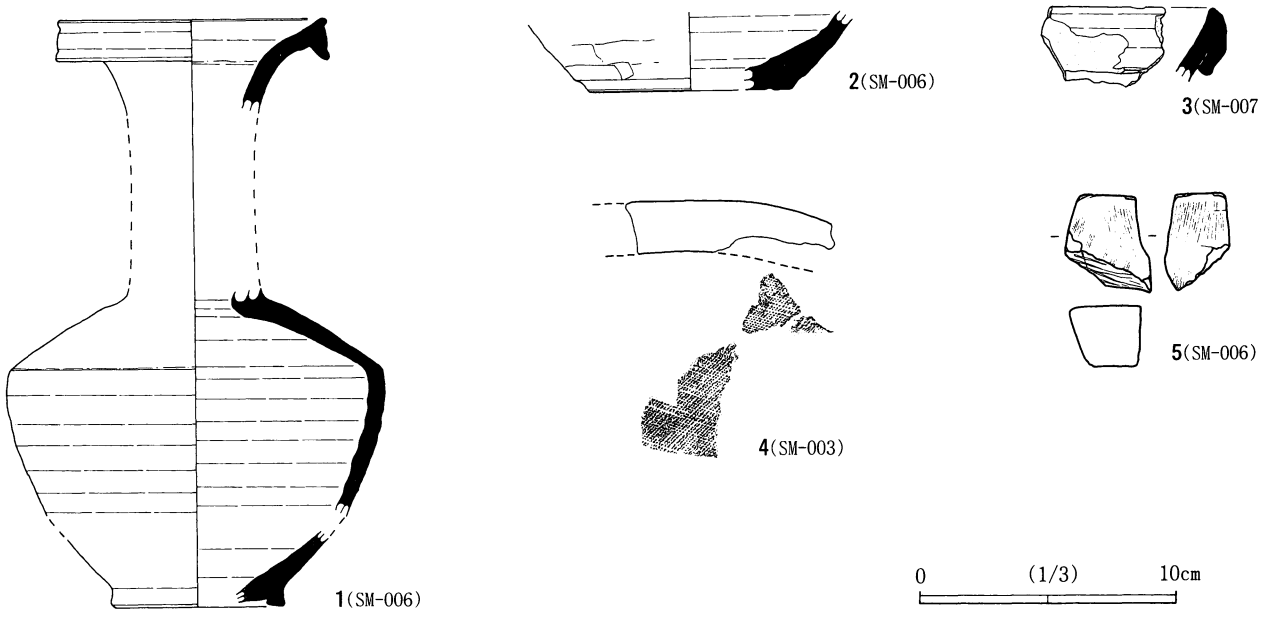
	砂岩				チャート				流紋岩				安山岩				泥岩				ホルンフェルス				その他				計
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	
SD-001					1 554.5				1 207.7																				2 762.2
SD-002	2 156.5	6 235.9			6 473.2	3 33.3				3 127.9																			20 1026.8
SM-001	1 524.4	2 70.1			7 335.9	5 332.7			1 145.9	11 970.9			1 49.8																28 2429.7
SM-002	2 127.9	4 233.8			4 66.1	3 223.4			3 266.1	3 91.1				1 14.9							1 196.5					1 110.5			22 1330.3
SM-003	1 115.7	3 247.3		1 8.3	2 81.6	1 83.1			2 201.1	1 108.1												1 15.2							12 860.4
SM-004	3 218.3	7 609.9			3 185.4	1 10.2			4 296.2	1 89.4												1 13.9							20 1423.3
SM-005	4 150.1	13 589.8	1 60.5		15 1045.9	21 1227.3			19 1577.9	11 856.1											2 220.5								86 5728.1
SM-006	6 106.4	7 840.1			7 77.9	7 310.9			6 472.7	3 142.5																			36 1950.5
SM-007	1 19.5	7 255.6			6 140.7	5 272.1			1 22.8	4 272.1											1 77.7								25 1060.5
F6										1 543.3																			1 543.3
計	20 1418.8	49 3082.5	1 60.5	1 8.3	51 2961.2	46 2493	0 0	0 0	37 3190.4	38 3201.4	0 0	0 0	1 49.8	1 14.9	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	4 494.7	2 29.1	0 0	0 0	0 0	1 110.5	0 0	0 0	252 17115.1

※Ａは焼成完形礫，Ｂは焼成破損礫，Ｃは自然礫（無焼成完形礫），Ｄは破損礫（無焼成破損礫）
上段…個数（単位：個）　下段…重量（単位：ｇ）

2　弥生時代以降（第29図，図版28）

1・2は，須恵器長頸瓶である。いずれもSM-006の盛土中から出土したものであるが，SM-006に伴うとは考えにくいためここで報告することとした。SM-006下遺構（第22図）に伴う可能性が高い。

1は，口頸部上半及び体部，底部の3か所に分かれるが，胎土が灰白色を呈するため同一個体として掲載した。口縁端部は下方に折返し幅広の口縁帯を有し，高台は貼付け高台である。肩部及び底部内面に顕著な釉，口縁部内面にごま塩状の釉が認められ，上方からの降灰が想定される。8世紀第2四半期を中心とする湖西産の須恵器と思われる。2は底部であろう。高台は削出し高台で，胎土は砂粒を含む。肩部，頸部の破片も認められるが図示するには至らなかった。1同様に湖西産の須恵器であろう。3は須恵器甕である。4は瓦である。凹面に布目，凸面にヘラケズリが施されていることから丸瓦であろう。5は凝灰岩製の砥石である。最大長は37.8mm，最大幅は33.1mm，最大厚は26.2mm，重さは34.32gである。



第29図　西御祈祷谷古墳群　遺構外出土遺物

第10表　西御祈祷谷古墳群　掲載土器観察表

遺構番号	挿図番号	時代	種別	器種	遺存度	法量(cm) 口径	底径	頸径	胴径	器高	技法	色調	胎土	焼成
SD-002	第21図1	平安	土師器	杯	底部のみ90%遺存	-	6.9	-	-	(1.7)	ロクロ調整・回転糸切り	明褐色	砂粒少量	○
											ロクロ調整	明褐色		
SM-006	第29図1	奈良	須恵器	長頸瓶	全体の30%遺存	(10.2)	(6.8)	(5.0)	(14.4)	(22.9)	ロクロ調整	黄灰色・自然釉	砂粒少量	○
											ロクロ調整	黄灰色・自然釉		
SM-006	第29図2	奈良	須恵器	長頸瓶	底部の20%遺存	-	(7.8)	-	-	(3.1)	ロクロ調整・回転ヘラケズリ	黄灰色	砂粒少量	○
											ロクロ調整	黄灰色		
SM-007	第29図3	奈良	須恵器	甕	口縁部破片	-	-	-	-	(2.9)	ロクロ調整	灰色	砂粒少量	○
											ロクロ調整	灰色		

※技法・色調：上段…外面　下段…内面
焼成：◎…良好　○…普通　△…やや不良

第11表　西御祈祷谷古墳群　掲載銭貨一覧表

挿図番号	遺構番号	銭種	書体	外縁外径(mm)		外縁内径(mm)		内郭外径(mm)		内郭内径(mm)		外縁厚(mm)	内面厚(mm)	量目(g)	初鋳年
				縦	横	縦	横	縦	横	縦	横				
第15図1	SM-002	開元通寶	真書	24.3	24.3	21.0	21.0	8.0	8.0	6.5	6.5	1.1	0.7	2.8	621(唐)
第15図2	SM-002	開元通寶	真書	(21.0)	(24.0)			8.5	8.5	7.5	7.5	(0.7)	(0.7)	(1.0)	621(唐)
第15図3	SM-002	皇宋通寶	真書	24.4	24.8	21.0	21.0	9.0	8.5	7.5	6.5	1.3	0.9	3.0	1038(北宋)
第15図4	SM-002	紹聖元寶	真書	23.7	23.7	19.5	19.5	8.5	8.0	6.5	6.5	1.3	0.8	2.6	1094(北宋)
第15図5	SM-002	永楽通寶	真書	24.3	23.5	19.5	19.0	7.0	6.5	6.0	5.5	1.2	0.6	2.2	1408(明)
第16図1	SM-003	皇宋通寶	真書	24.3	24.0	21.5	20.5	9.0	9.0	7.0	7.0	1.1	0.9	2.4	1038(北宋)
第16図2	SM-003	天聖元宝	行書	24.5	24.4	21.0	20.5	8.0	8.0	7.0	6.5	1.3	0.7	2.0	1023(北宋)
	SM-002	不明	不明									1.1	(0.5)	(1.0)	

第12表　西御祈祷谷古墳群　非掲載遺物重量表（単位：g）

遺構番号	土師器壺・甕・鉢類	土師器杯・高杯類	須恵器	灰釉陶器	中世陶磁器	近世陶磁器	土製品類	瓦	石	合計
SD-001		11								11
SD-002	30							42	1	73
SM-001		46								46
SM-002	91	21								112
SM-003	41	7								48
SM-005	77	38								115
SM-006	368	13								381
SM-007	49	17								66
SM-008	13	5								18

第４章　新開１遺跡

第１節　縄文時代

新開１遺跡では，K10・L10グリッドを中心として，縄文時代早期を主体とする遺物包含層および炉穴を含む土坑・礫群などが検出された。

１　土坑

SK-002（第32図，図版13）

L10-26・27・36・37グリッドに位置する。覆土や火床面は明確ではなかったが，炉穴と考えられる。少量の縄文土器片が出土した。当遺構の周辺からは，土器や礫が比較的集中して出土している。

SK-004（第32図，図版13）

L10-47・48・57・58グリッドに位置する。覆土はローム層に類似するやや暗い色調の土で，底面は堅緻ではない。土坑と考えたが，遺物も出土せず，遺構と認定するのは難しい面もある。

SK-005（第32図，図版13）

L10-39・49グリッドに位置する。覆土はローム層に類似するやや暗い色調の土で，底面は堅緻ではない。少量の縄文土器が出土し，土坑と考えたが，遺構と認定するのは難しい面もある。

２　礫群（第33図，図版13）

K11-59グリッドに位置する。中央に木根が入り込んでいるが，大型の焼礫が集中して出土したものである。礫を取り除いても明確な掘込みは検出できなかった。また，焼土の堆積なども認められなかった。

３　包含層出土遺物

（１）土器（第34～41図，図版29～33）

新開１遺跡から出土した縄文土器を，以下の第１群から第６群に分類した。

第１群土器　撚糸文系土器

第２群土器　三戸式・田戸下層式に比定される沈線文系土器

第３群土器　田戸上層式～子母口式に比定される沈線文系土器～条痕文系土器

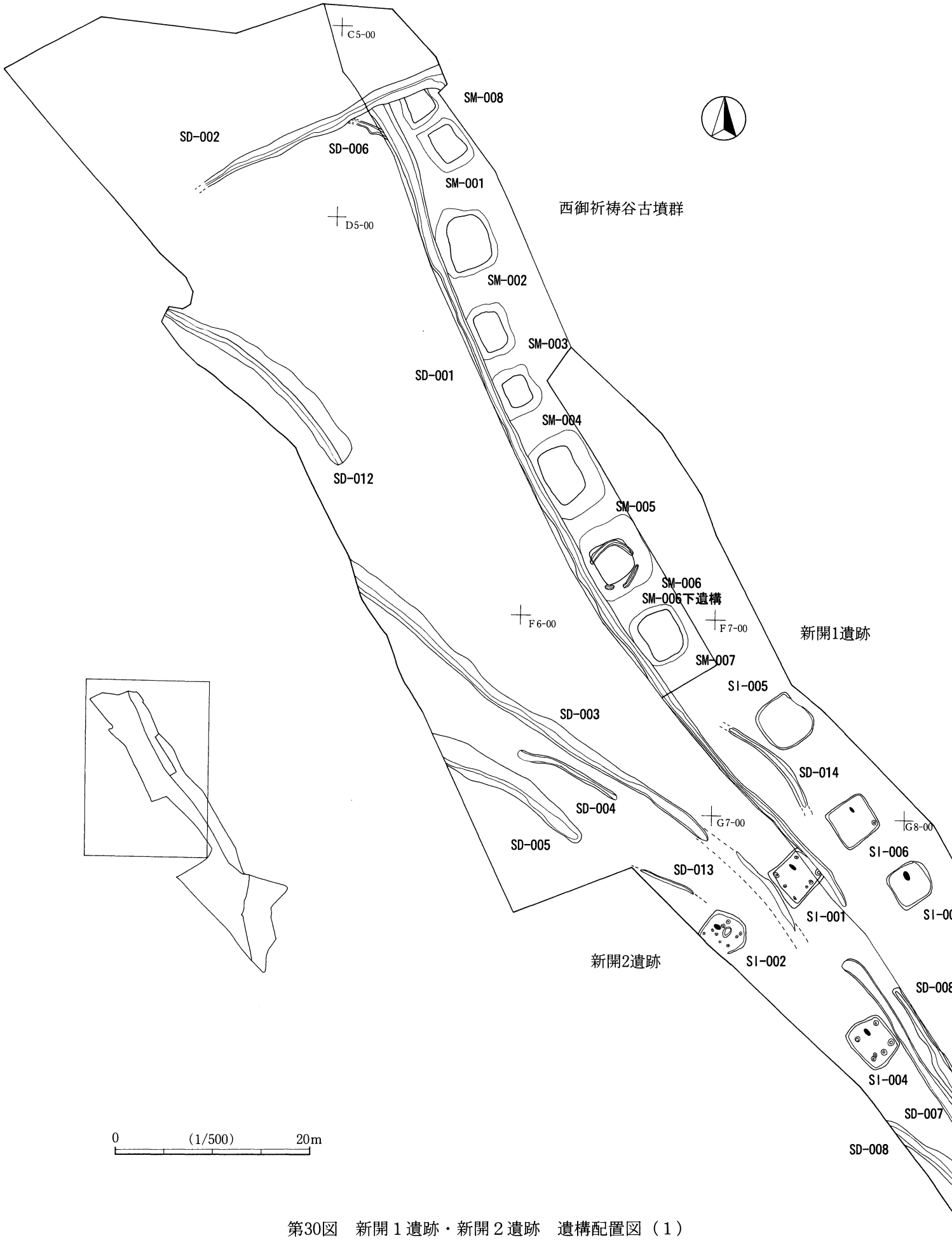
胎土に繊維を含まないか少し含むもので，器面に雑な擦痕や条痕が施されるか，または無文のもの

第４群土器　条痕文系土器

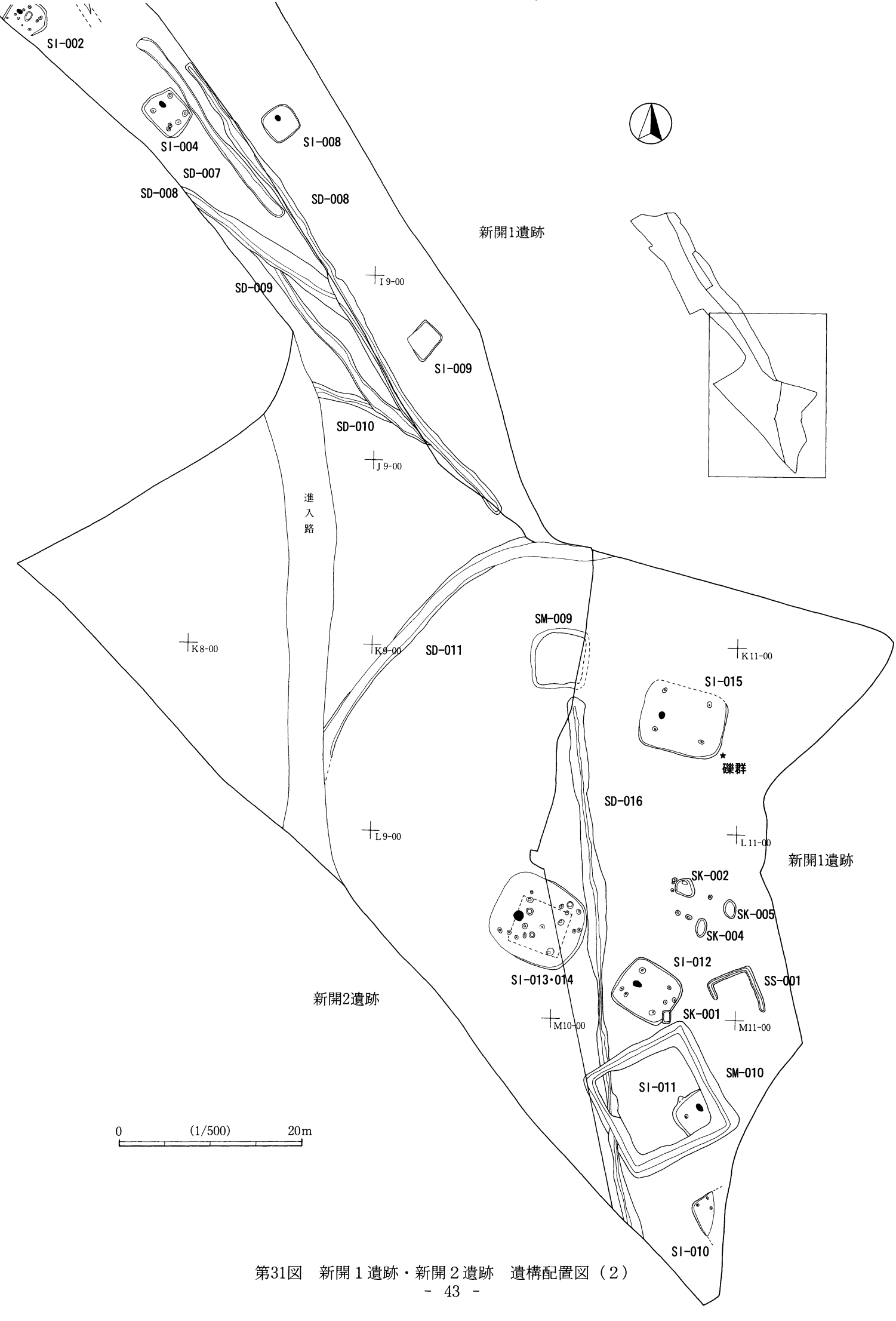
胎土に繊維を含み，表裏に貝殻条痕文の施されるもの

第５群土器　縄文時代前期の土器

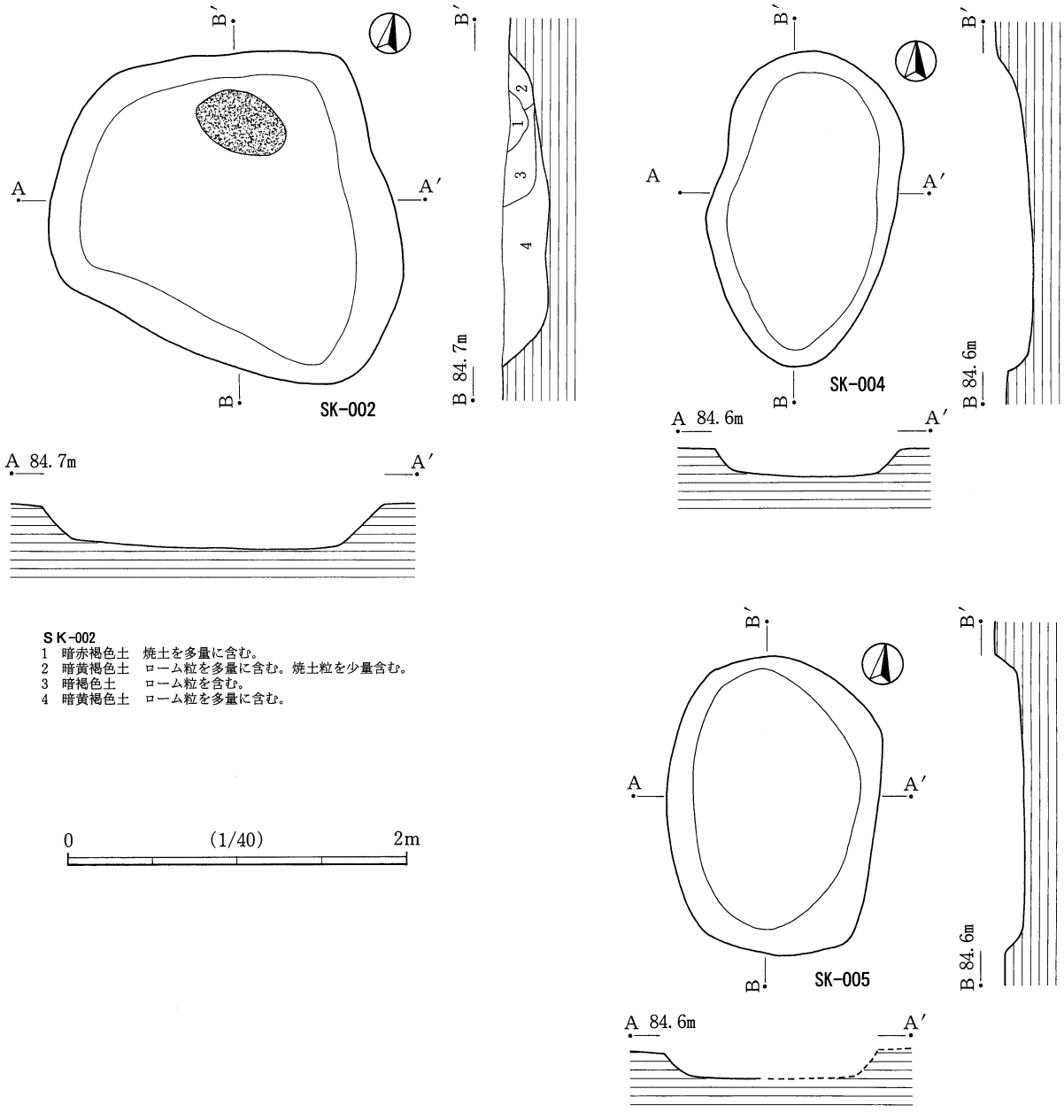
第６群土器　縄文時代中期以降の土器



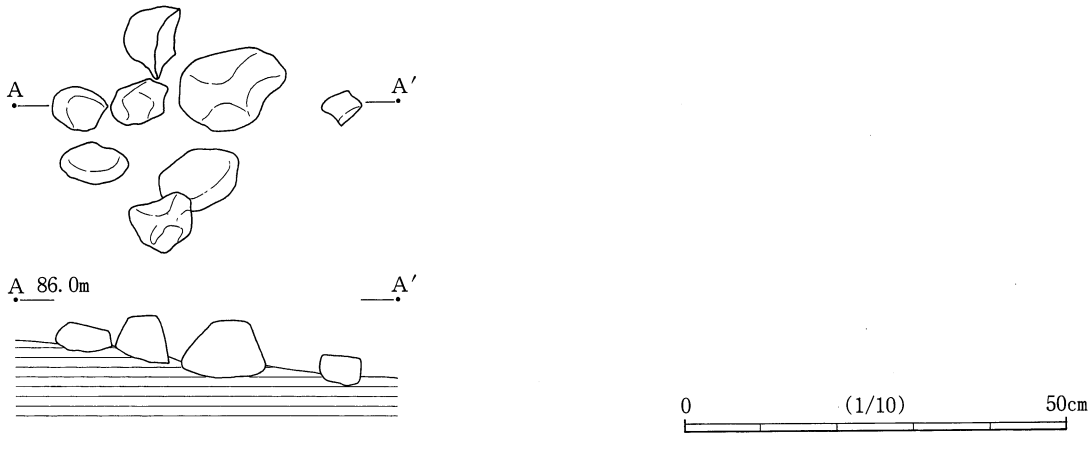
第30図　新開１遺跡・新開２遺跡　遺構配置図（１）



第31図　新開１遺跡・新開２遺跡　遺構配置図（２）



第32図 SK-002・SK-004・SK-005

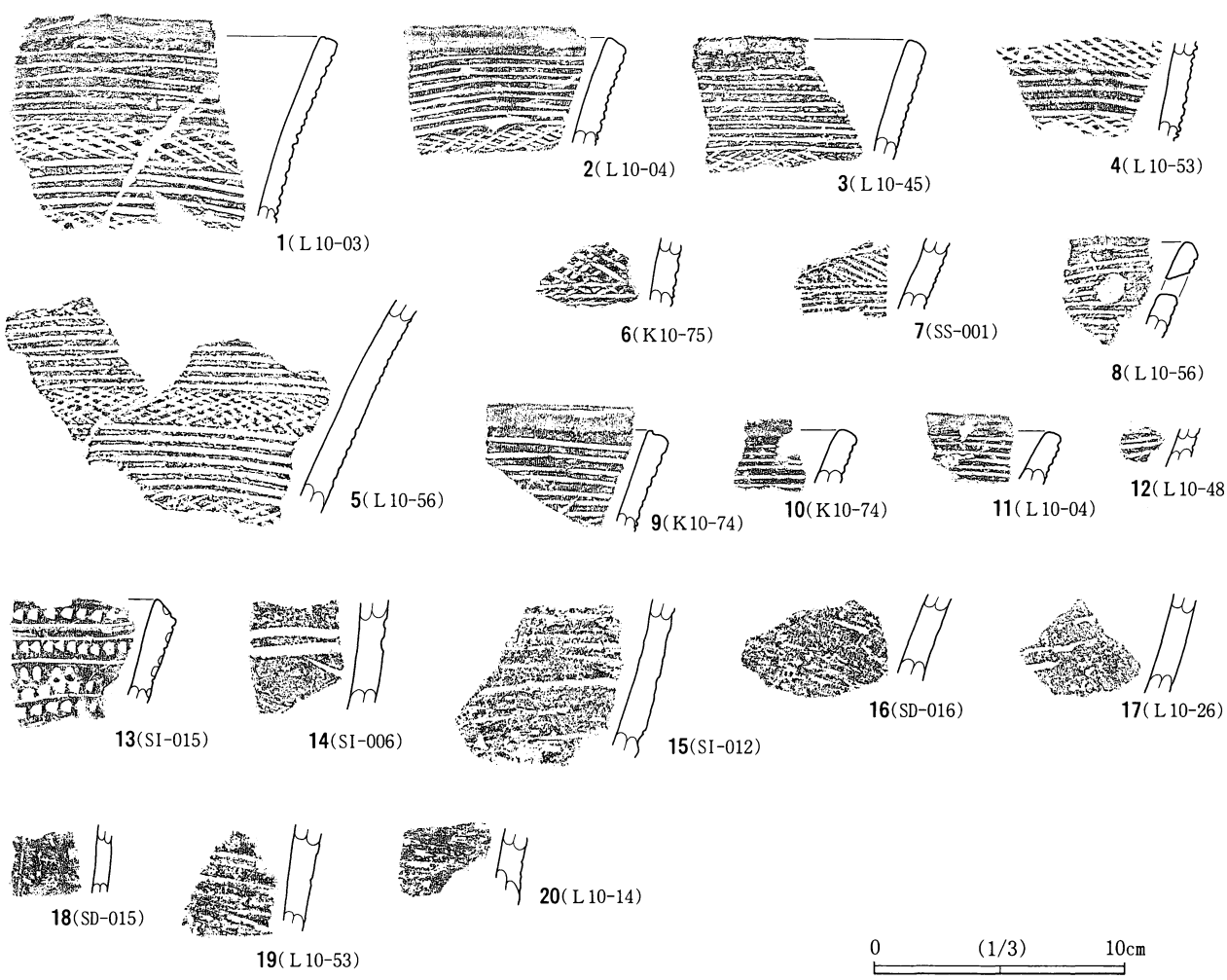


第33図 礫群

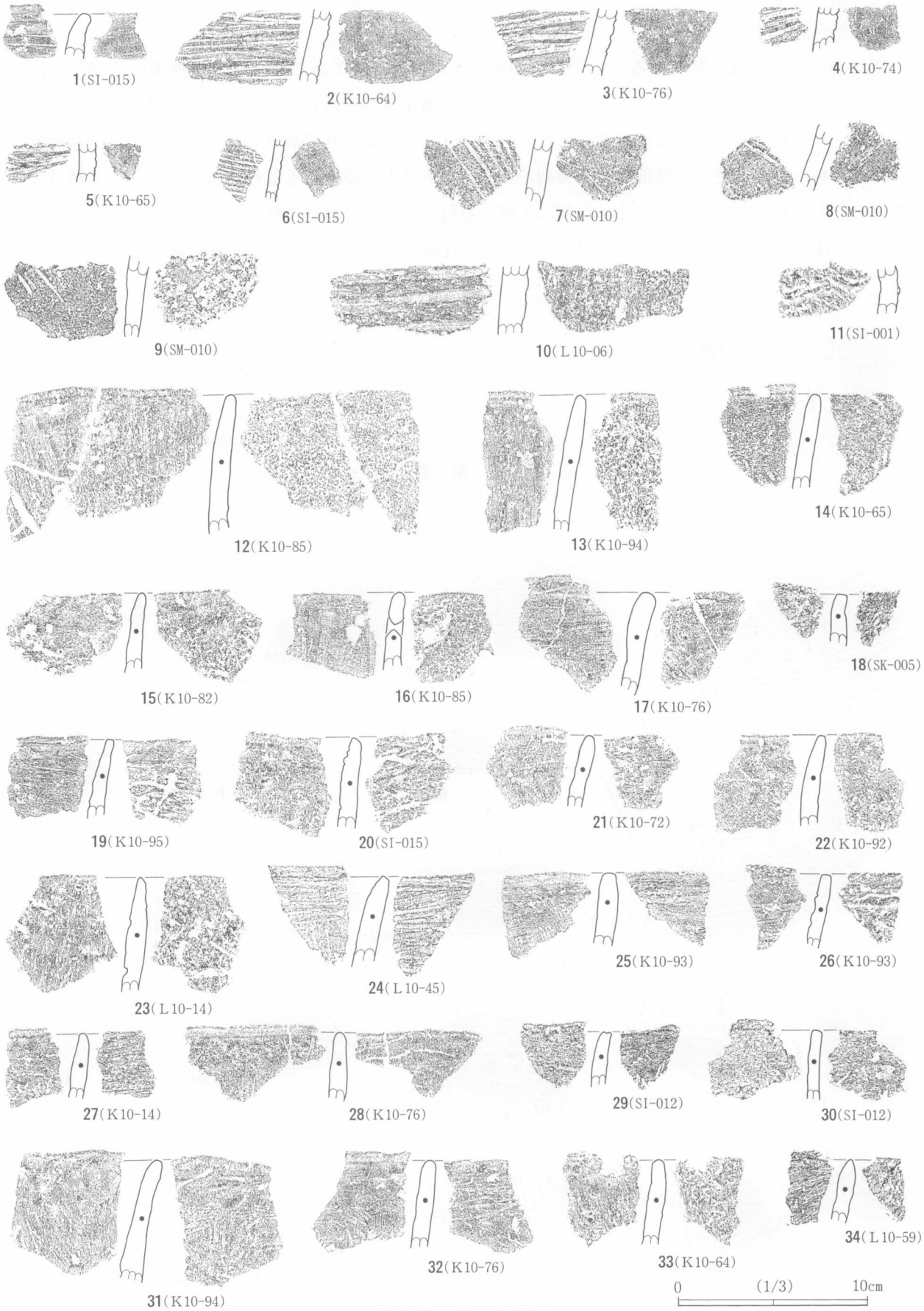
第34図は，第１群土器である。１・２とも胎土は砂を含むが緻密で，焼成は良好である。やや赤味を帯びた明褐色を呈する。

第35図は，第２群土器である。いずれも内面は丁寧に磨かれている。１～12は数条の並行細沈線により，横帯区画が形成されるものである。１～６には斜格子文が施される。７の文様は鍵状集合沈線文とみられる。８～12は並行細沈線のみがみられるもので，８には補修孔があけられている。13は半截竹管端部が刺突され，外そぎ状の口唇部にも刺突列が廻る。14も２本の横走する並行沈線の上下に，半截竹管端部によるとみられる刺突が施される。上部は沈線に並行に，下部は斜位に施され，やや離れたところには同じ角度で沈線もみられる。15はごく浅くて太い雑な沈線が施されている。16～20は無文である。

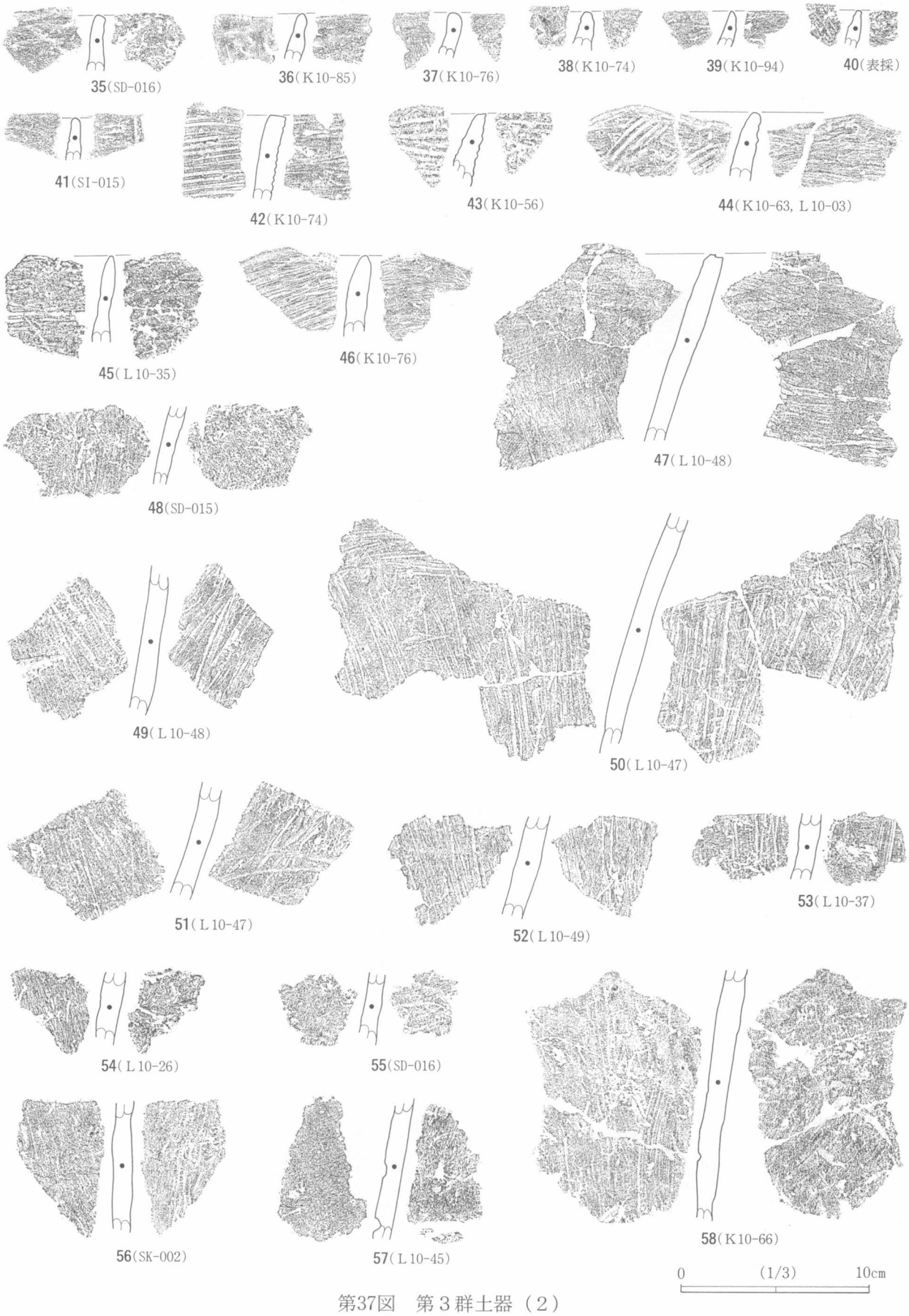
第34図　第１群土器



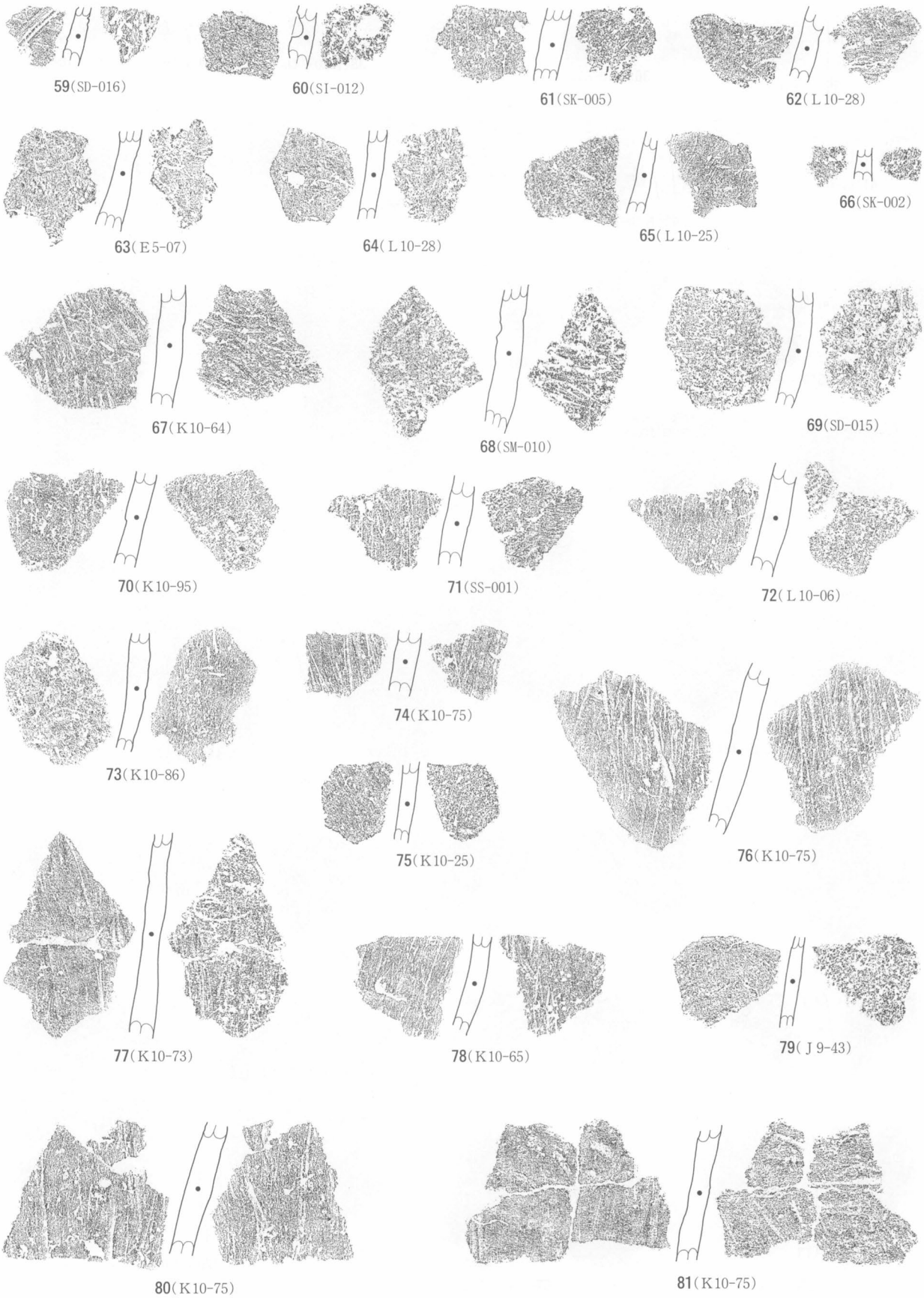
第35図　第２群土器


1(SI-015)
2(K10-64)
3(K10-76)
4(K10-74)
5(K10-65)
6(SI-015)
7(SM-010)
8(SM-010)
9(SM-010)
10(L10-06)
11(SI-001)
12(K10-85)
13(K10-94)
14(K10-65)
15(K10-82)
16(K10-85)
17(K10-76)
18(SK-005)
19(K10-95)
20(SI-015)
21(K10-72)
22(K10-92)
23(L10-14)
24(L10-45)
25(K10-93)
26(K10-93)
27(K10-14)
28(K10-76)
29(SI-012)
30(SI-012)
31(K10-94)
32(K10-76)
33(K10-64)
34(L10-59)
0 (1/3) 10cm

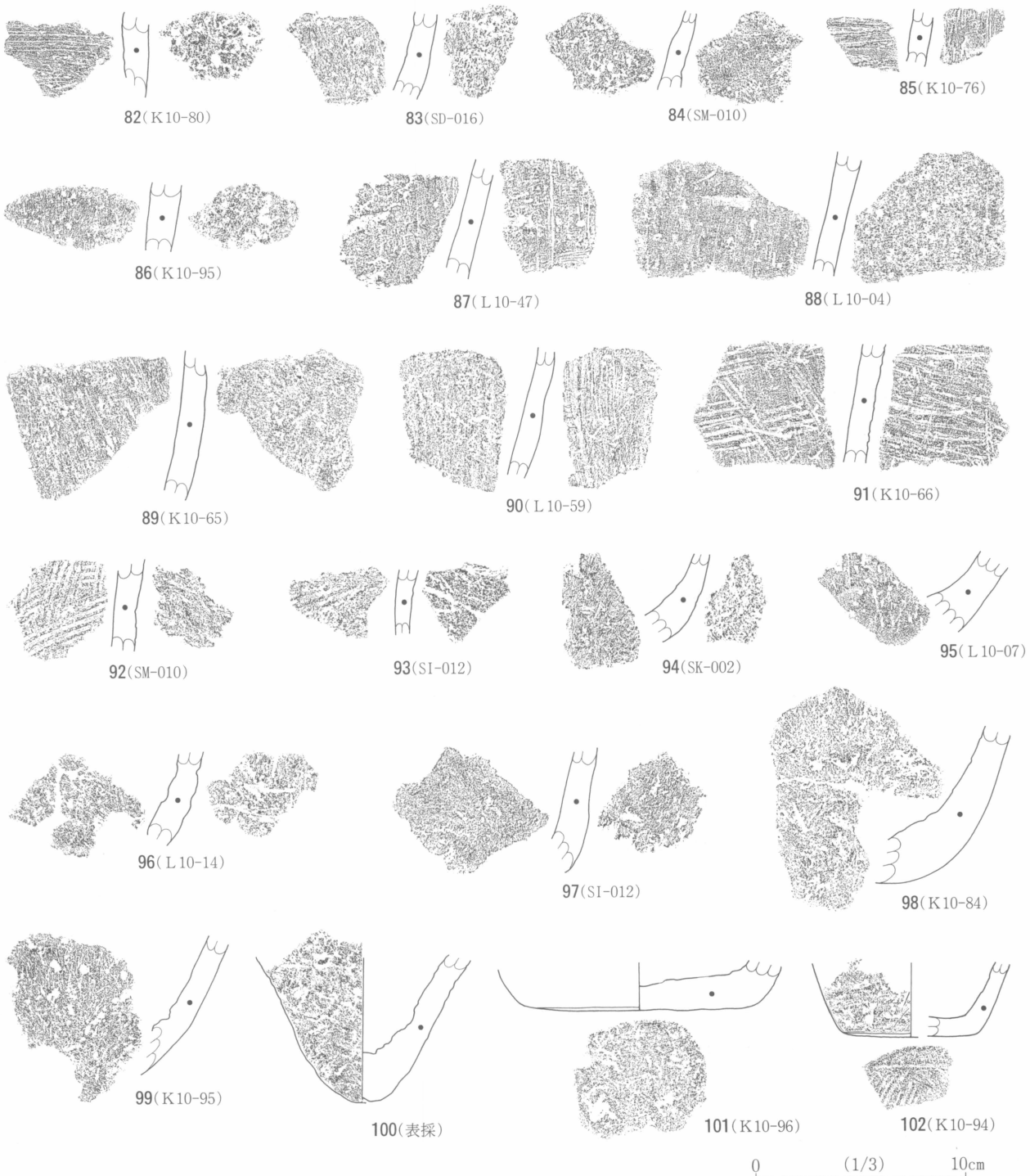
第36図　第３群土器（１）


35(SD-016)
36(K10-85)
37(K10-76)
38(K10-74)
39(K10-94)
40(表採)
41(SI-015)
42(K10-74)
43(K10-56)
44(K10-63, L10-03)
45(L10-35)
46(K10-76)
47(L10-48)
48(SD-015)
49(L10-48)
50(L10-47)
51(L10-47)
52(L10-49)
53(L10-37)
54(L10-26)
55(SD-016)
56(SK-002)
57(L10-45)
58(K10-66)
0
(1/3)
10cm

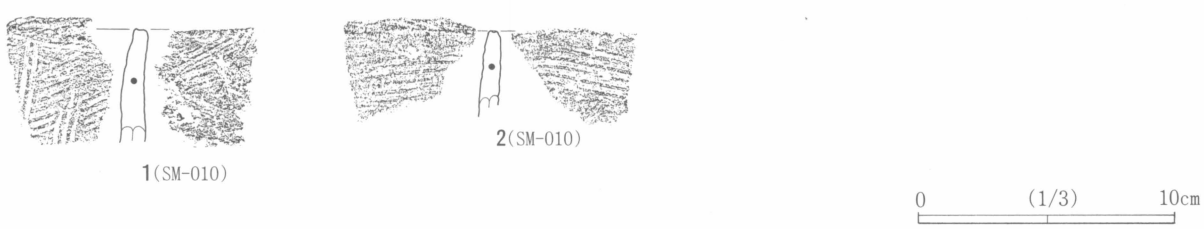
第37図　第３群土器（２）


59(SD-016)
60(SI-012)
61(SK-005)
62(L10-28)
63(E5-07)
64(L10-28)
65(L10-25)
66(SK-002)
67(K10-64)
68(SM-010)
69(SD-015)
70(K10-95)
71(SS-001)
72(L10-06)
73(K10-86)
74(K10-75)
75(K10-25)
76(K10-75)
77(K10-73)
78(K10-65)
79(J9-43)
80(K10-75)
81(K10-75)
0 (1/3) 10cm

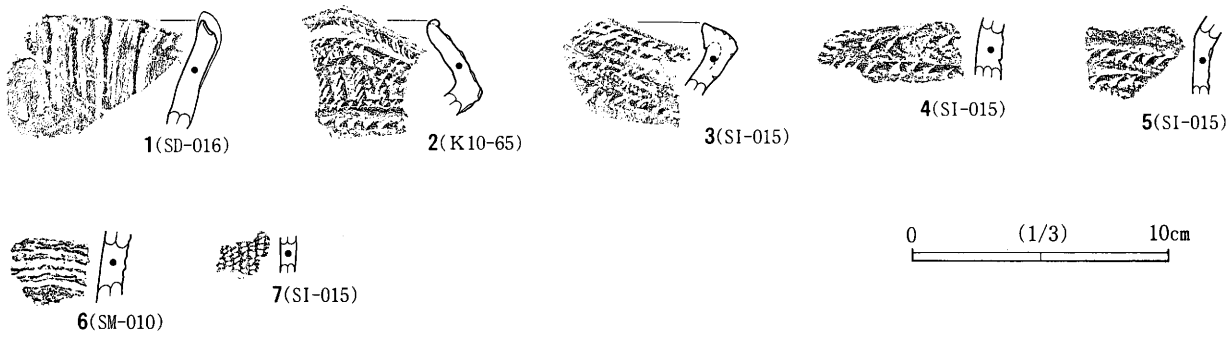
第38図　第３群土器（３）



第39図　第３群土器（４）



第40図　第４群土器



第41図　第５群土器

第36～39図は，第３群土器である。１は並行の細沈線がみられる。２～５は胎土に繊維を含まず，擦痕のような沈線が施されるものである。同一個体の可能性がある。６は貝殻条痕文とみられる。内面は丁寧に磨かれており，胎土に繊維は含まない。７～９は斜位に並行沈線が雑に施される。７・８は同一個体とみられる。10・11は胎土に大粒の砂粒を含む。12～41は胎土に繊維を含み，無文，あるいは雑な擦痕状の文様がみられる口縁部破片である。いずれも波状，またはごく緩い波状口縁になるとみられる。12～14は同一個体と考えられる。16には補修孔がみられる。17・18は口唇部がやや外反する。42～46は貝殻条痕文がみられる口縁部破片である。42の口唇部は面取りされている。43は胎土に砂粒を多量に含む。44～46は波状口縁と考えられる。47は口唇部が僅かに遺存するが，半截竹管端部などによる刺突が施されているようである。波状口縁とみられる。48～90は擦痕の施される胴部破片である。胎土に繊維を含むが僅かな量であるものも多い。91～93は外面に貝殻条痕文のみられる胴部破片である。94～100は内外面擦痕のみられる，尖底の底部破片である。101・102は平底の底部破片で，101の立上がり部には，繊維痕の可能性もあるが，縦に貝殻腹縁文が施されている可能性もある。102の外面には，条痕文のような文様が観察できるが，磨耗しており，明らかでない。

第40図は，第４群土器である。１・２はいずれも口縁部破片で，緩やかな波状を呈するとみられる。

第41図は，第５群土器である。１は，外そぎ状になっている口唇部から，細い粘土紐を縦位に貼り付けている。そしてその間に短沈線を施す。２・３はく字状に屈曲する器形の口縁部の破片で，貼り付けられた細い粘土紐上に爪形文が施される。３は口唇部が肥厚して内彎するが，２と３は同一個体とみられる。４・５は隆線上に爪形文が施される。同一個体とみられる。２・３とも同一個体である可能性もある。６はかなり器面の軟らかい段階で強く施文されたとみられる並行沈線がみられる。７は縄文を地文とする。

第13表　新開１遺跡　縄文土器表

遺構番号	1群	2群	3群	4群	5群	6群	不明	合計
SI-006		1	1					2
		27.4	12.0					39.4
SI-011			1					1
			22.4					22.4
SI-012		1	13					14
		55.2	170.8					226.0
SI-015	1	2	46		4		1	54
	4.3	28.7	524.0		50.7		3.9	611.6
SD-014			1					1
			2.4					2.4
SD-015		1	10					11
		8.1	140.1					148.2
SD-016		1	21		2			24
		31.2	247.7		25.5			304.4
SK-002			11					11
			106.2					106.2
SK-005			3					3
			43.4					43.4
SM-010			28	2	2		10	42
			328.7	35.7	12.8		103.7	480.9
SS-001		1	3					4
		14.2	67.6					81.8
K10-14			1					1
			6.5					6.5
K10-16			1					1
			6.9					6.9
K10-17			7					7
			65.8					65.8
K10-63			2					2
			15.7					15.7
K10-64			7					7
			194.4					194.4
K10-65			7		1			8
			173.7		19.5			193.2
K10-66			5					5
			180.7					180.7
K10-67			2				2	4
			44.2				17.1	61.3
K10-72			4					4
			35.4					35.4
K10-73			4					4
			76.4					76.4
K10-74		2	14					16
		36.0	118.6					154.6
K10-75		1	19					20
		13.6	398.0					411.6

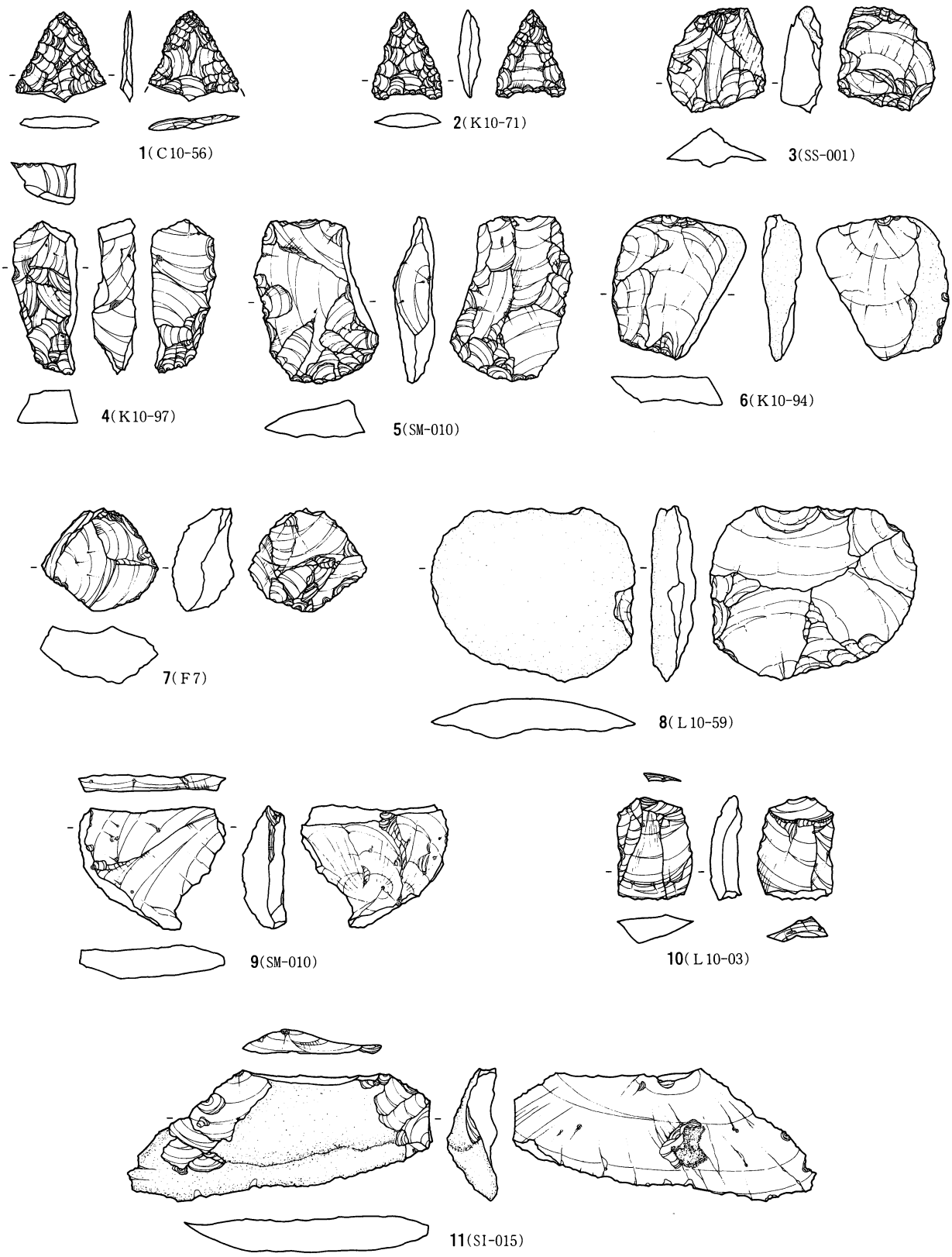
遺構番号	1群	2群	3群	4群	5群	6群	不明	合計
K10-76			24					24
			403.3					403.3
K10-77			1					1
			28.1					28.1
K10-82			7				1	8
			120.9				10.4	131.3
K10-83			4					4
			71.5					71.5
K10-84		1	8					9
		49.2	191.2					240.4
K10-85			8					8
			180.8					180.8
K10-86			6					6
			99.9					99.9
K10-93		1	7					8
		19.0	59.9					78.9
K10-94			6					6
			154.7					154.7
K10-95			15					15
			347.7					347.7
K10-96			5					5
			75.7					75.7
K10-97			4					4
			40.2					40.2
L10-03		2	9					11
		92.2	99.2					191.4
L10-04		2	7					9
		58.5	139.1					197.6
L10-05			6					6
			53.7					53.7
L10-06			5					5
			154.5					154.5
L10-07			1					1
			48.3					48.3
L10-13			4					4
			21.5					21.5
L10-14		1	20					21
		14.9	236.0					250.9
L10-15		1	3					4
		28.9	49.2					78.1
L10-16	1		1					2
	12.8		16.7					29.5
L10-17		1						1
		25.0						25.0
L10-18			1					1
			9.6					9.6

遺構番号	1群	2群	3群	4群	5群	6群	不明	合計
L10-25			2					2
			40.2					40.2
L10-26		1	6					7
		20.8	71.0					91.8
L10-27			3					3
			26.2					26.2
L10-28			4					4
			59.6					59.6
L10-29			1					1
			4.4					4.4
L10-35			4					4
			48.0					48.0
L10-36			4					4
			16.0					16.0
L10-37			4					4
			155.2					155.2
L10-38			1					1
			18.8					18.8
L10-39			1					1
			9.8					9.8
L10-45		1	7					8
		45.4	90.4					135.8
L10-46			10					10
			64.0					64.0
L10-47			8					8
			207.8					207.8
L10-48		1	3					4
		3.2	196.4					199.6
L10-49			10					10
			101.4					101.4
L10-55			3					3
			33.6					33.6
L10-56		2	4					6
		141.4	28.8					170.2
L10-59			5					5
			81.0					81.0
L10-68			3					3
			44.0					44.0
L10-69			4	1				5
			42.2	8.4				50.6
L11-91			1					1
			6.0					6.0
表採			4					4
			172.0					172.0

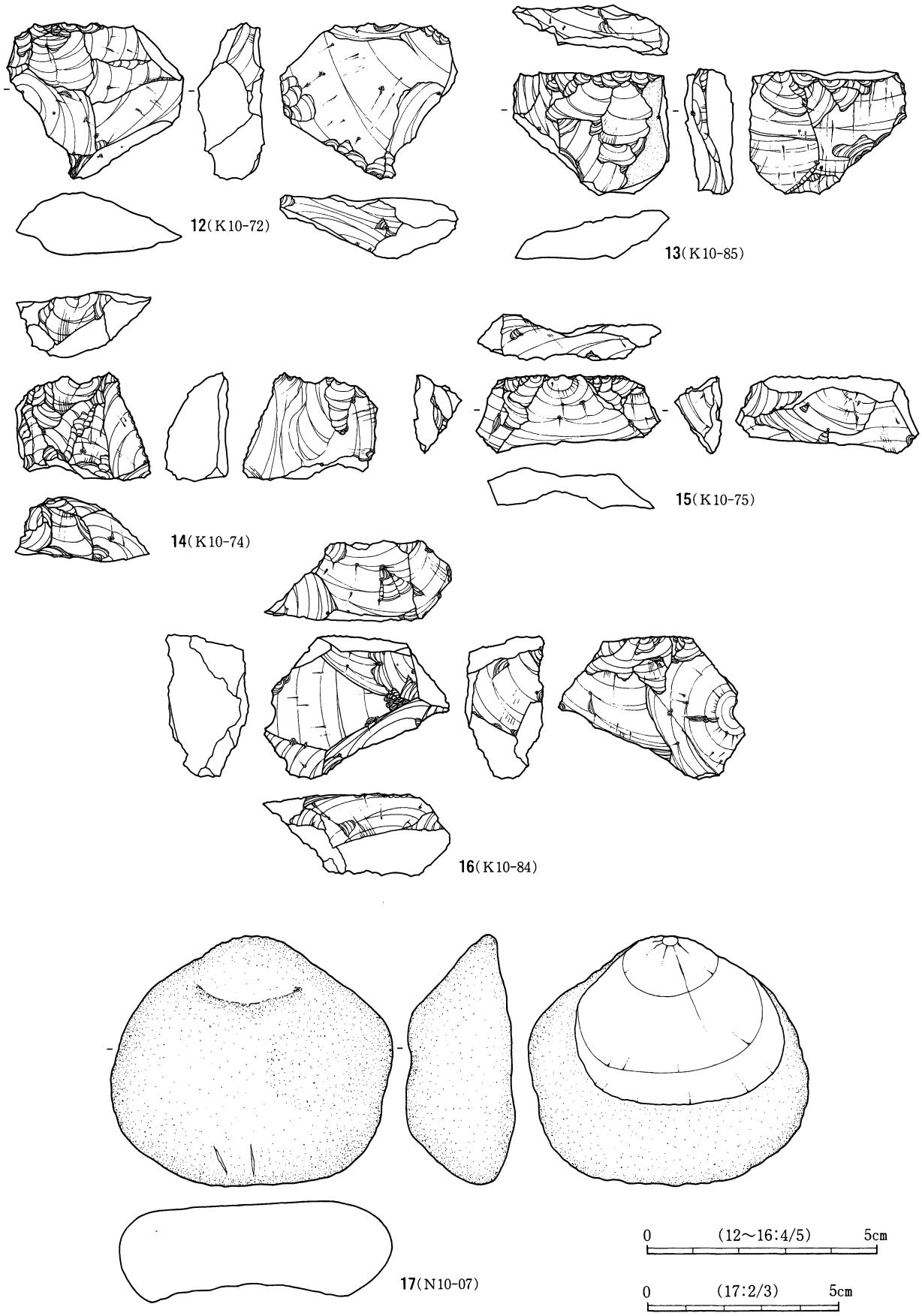
※上段…個数（単位：個）　下段…重量（単位：g）

（２）石器（第42～44図，図版33・34）

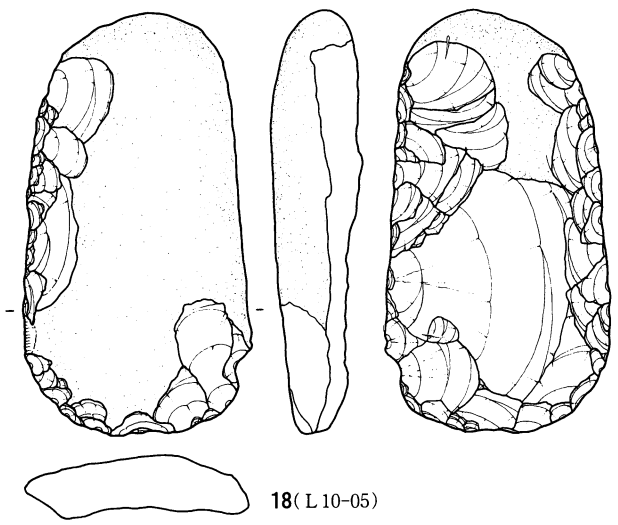
１・２は黒曜石製の石鏃である。１は，薄く丁寧なつくりである。左右とも基部を折損する。３～８は楔形石器である。３・６はチャート製，４・５・７は黒曜石製，８はホルンフェルス製である。３は腹面下端に細かい調整が施される。４は上部が折れているものと考えられる。８の背面は自然面である。９～11はいずれも黒曜石製の剥片である。11の上部は折れていると考えられる。不純物を含み，黒色と暗灰色の部分が縞状にみられる黒曜石を素材としている。背面には自然面が多く残されている。12は黒曜石製の石核で，打面転移を繰り返しながら剥片剥離を行ったものと考えたが，楔形石器である可能性もある。13～16は黒曜石製の石核である。17は安山岩製の石核である。やや扁平な拳大の礫から剥片が１枚剥離されている。18は砂岩製の打製石斧である。正面は自然面を大きく残し，左側縁から刃部にかけて細かい剥離痕が観察できる。裏面にも自然面を残す。19はホルンフェルス製の打製石斧である。正面はほぼ全面的に自然面が残されており，擦痕が観察される。裏面にも自然面が残されている。20は流紋岩製の敲石で，上下端に敲打痕が見られる。表面，敲打痕部分，折面ともに赤化しており，敲石として使用し破損後，転用されて被熱したと考えられる。礫組成表（第16表）に計上してある。21は砂岩製の敲石で，正面と裏面に弱い敲打痕が認められるほか，擦痕も若干観察される。

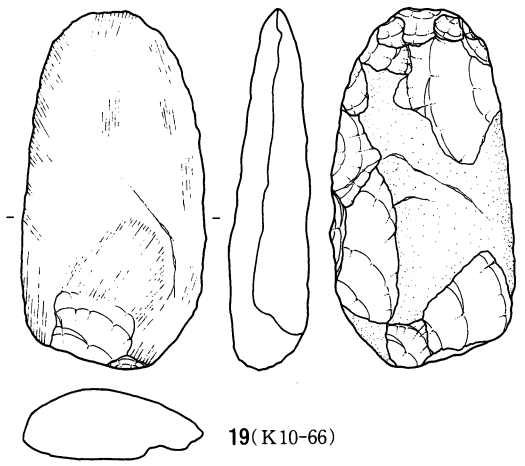


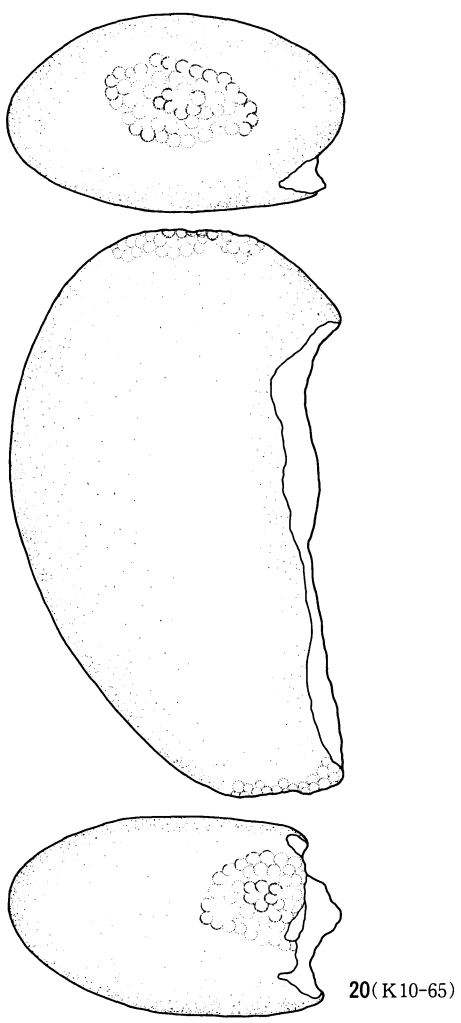
第42図　縄文時代石器（1）



第43図　縄文時代石器（2）







0 (2/3) 5cm

第44図　縄文時代石器（3）

第14表　新開１遺跡　縄文時代石器観察表

挿図番号	出土位置	遺物番号	種類	石　材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)	備　考
第42図1	C10-56	0001	石鏃	黒曜石	19.09	18.80	2.29	0.64	
第42図2	K10-71	0002	石鏃	黒曜石	18.61	14.75	4.35	0.91	
第42図3	SS-001	0001	楔形石器	チャート	22.15	20.41	8.45	3.04	
第42図4	K10-97	0001	楔形石器	黒曜石	32.01	13.68	8.90	3.87	楔形石器の一部？
第42図5	SM-010	0004	楔形石器	黒曜石	34.90	25.70	8.31	6.41	
第42図6	K10-94	0002	楔形石器	チャート	30.20	28.10	8.00	7.19	
第42図7	F7	0002	楔形石器	黒曜石	21.55	24.25	12.60	4.21	
第42図8	L10-59	0001	楔形石器	ホルンフェルス	36.89	43.00	9.15	15.37	
第42図9	SM-010	0009	剥片	黒曜石	25.40	30.76	8.80	5.58	
第42図10	L10-03	0002	剥片	黒曜石	21.70	16.11	6.31	2.21	
第42図11	SI-015	0007	剥片	黒曜石	27.2	63.50	10.35	13.92	
第43図12	K10-72	0002	石核？	黒曜石	34.41	38.38	13.60	14.23	楔形石器の可能性
第43図13	K10-85	0002	石核	黒曜石	27.50	33.99	10.60	9.73	
第43図14	K10-74	0002	石核	黒曜石	23.55	29.10	13.21	7.51	
第43図15	K10-75	0002	石核	黒曜石	16.70	39.60	9.95	4.82	
第43図16	K10-84	0002	石核	黒曜石	30.61	40.50	17.60	17.66	
第43図17	N10-07	0001	石核	安山岩	64.69	73.21	28.00	185.38	
第44図18	L10-05	0002	打製石斧	砂岩	88.12	43.70	16.92	78.61	
第44図19	K10-66	0002	打製石斧	ホルンフェルス	75.08	36.10	15.48	46.47	使用痕？磨痕有
第44図20	K10-65	0002	敲石	流紋岩	116.00	68.65	37.91	325.74	被熱の可能性
第44図21	SD-014	0001	敲石	砂岩	65.00	83.80	47.80	343.29	

第15表　新開１遺跡　縄文時代石器組成表

	石鏃	楔形石器	剥片	石核	石斧	敲石類	計
SI-015			1				1
			13.92				13.92
SD-014						1	1
						343.29	343.29
SM-010		1	1				2
		6.41	5.58				11.99
SS-001		1					1
		3.04					3.04
C10-56	1						1
	0.64						0.64
K10-65						1	1
						325.74	325.74
K10-66					1		1
					46.47		46.47
K10-71	1						1
	0.91						0.91
K10-72				1			1
				14.23			14.23
K10-74				1			1
				7.51			7.51
K10-75				1			1
				4.82			4.82

	石鏃	楔形石器	剥片	石核	石斧	敲石類	計
K10-84				1			1
				17.66			17.66
K10-85				1			1
				9.73			9.73
K10-94		1					1
		7.19					7.19
K10-97		1					1
		3.87					3.87
L10-03			1				1
			2.21				2.21
L10-05					1		1
					78.61		78.61
L10-59		1					1
		15.37					15.37
N10-07				1			1
				185.38			185.38
F7		1					1
		4.21					4.21
計	2	6	3	6	2	2	21
	1.55	40.09	21.71	239.33	125.08	669.03	1096.79

※上段…個数（単位：個）　下段…重量（単位：g）

第16表　新開１遺跡　縄文時代礫組成表

	砂岩				チャート				流紋岩				安山岩				泥岩				ホルンフェルス				その他				計
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	
SI-005										1 35.3																			1 35.3
SI-006	1 218.8																												1 218.8
SI-008										1 2.8																			1 2.8
SI-011		1 34.5				1 11.6																							2 46.1
SI-012		4 232.7				1 421.8		1 12.5	1 269.9	3 97.8		2 93.8						1 1.3				1 7.7				1 12.8			15 1150.3
SI-015	2 424.4	44 2482.7	4 1018.5	12 572.3	2 79.3	59 2365.5	12 1310.9		7 1017.4	44 4824.1	2 234.8				1 181.5	1 45.2						3 73.4	1 47.4	1 8.3		4 115.7	2 162.7	1 54.9	202 15019.0
SD-015	2 723.6	4 508.1			1 115.2	10 102.0			2 400.1	6 776.5														1 303.1					26 2928.6
SD-016	1 7.5	11 710.3	3 100.4		1 32.8	18 804.8	5 430.8	6 100.3	3 628.4	16 849.8	1 145.8	1 34.7											1 284.9						67 4130.5
SK-002		6 239.1			1 120.5	7 161.3			1 300.4	6 481.6												1 59.3							22 1362.2
SK-004		2 145.6				5 199.1				1 33.6																			8 378.3
SK-005										1 115.1																			1 115.1
SM-010	3 845.7	12 571.6			9 479.8	10 444.8	3 15.8		7 937.2	6 1164.1												1 23.9		2 51.2					53 4534.1
SS-001		4 137.7						1 30.4																					5 168.1
E6-05																						1 32.6							1 32.6
K10-05						1 46.0																							1 46.0
K10-14																										1 5.8			1 5.8
K10-15		6 117.2			1 16.5	10 417.4	1 255.2		4 724.2	1 9.3																			23 1539.8
K10-16						1 121.0		1 0.9		1 19.7																			3 141.6
K10-17		3 111.0				3 1.8				3 308.4																			9 421.2
K10-54						3 170.3				1 63.1																			4 233.4

	砂岩				チャート				流紋岩				安山岩				泥岩				ホルンフェルス				その他				計
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	
K10-55						1 136.1																							1 136.1
K10-63						5 97.6				3 246.4																			8 344.0
K10-64	1 345.0	3 180.1			2 117.7	9 204.2			3 328.4	7 584.3												2 156.5						1 32.9	28 1949.1
K10-65		7 617.5				4 193.2	2 171.4	1 6.3	1 123.1	2 412.0												1 160.2							18 1683.7
K10-66		7 523.8				14 125.9	2 199.3		1 120.4	5 698.4												1 26.1							30 1693.9
K10-67		9 1032.7	1 233.2		1 125.3	9 882.0			1 13.9	8 691.7																2 159.1			31 3137.9
K10-72		5 483.4						1 8.4	1 114.0	5 146.6														1 29.9					13 782.3
K10-73		9 947.2			1 58.9	5 88.4	1 208.3		1 155.5	6 519.4																			23 1977.7
K10-74		3 93.0			11 243.2				1 283.4	10 581.9																			25 1201.5
K10-75		7 981.0	1 37.4	2 21.6	1 131.2	21 1010.5		1 19.8	2 325.0	13 806.3				2 99.0								2 114.1		3 107.1		2 276.3		1 81.39	58 4010.7
K10-76		10 494.4	1 119.7			12 549.7			1 127.9	20 1489.8						1 99.4						1 130.5					1 8.1		47 3019.5
K10-77		1 51.5				1 46.6				1 85.7																			3 183.8
K10-78						1 20.5				3 133.4																			4 153.9
K10-82	1 80.2	4 127.5				2 89.5	1 178.0			1 76.9		1 4.9																	10 557.0
K10-83		3 222.1				3 67.8		1 103.3		3 98.5																			10 491.7
K10-84	1 32.1	2 194.9	1 251.1			5 134.8			1 159.9	3 300.7																	1 96.2		14 1169.7
K10-85		5 628.5			1 98.9	6 83.7		1 6.4	1 85.0	5 429.9												1 97.5							20 1429.9
K10-86	1 147.4	8 1335.7				11 679.9				18 1591.9																			38 3754.9
K10-93		4 160.4		1 1.1		2 95.3		1 10.0		1 138.8																			9 405.6
K10-94		2 118.5				6 380.1		1 40.5		6 450.3												2 152.1				1 41.0			18 1182.5
K10-95	1 228.6	6 704.1			2 281.2	8 370.4			2 264.9	12 538.2																			31 2387.4
K10-96				1 76.6		8 285.8				3 91.9																1 156.4		1 19.9	14 630.6
K10-97			1 5.6			2 71.9	1 6.1			1 21.7																			5 105.3
K11-40		1 95.0		1 44.8	1 23.5	4 240.9				1 112.2						1 52.1												1 6.2	10 574.7
K11-59		2 814.0				2 1065.6		1 674.9	1 234.2	2 1805.7		1 831.1												1 297.1					10 5722.6
L10-03		2 12.1		1 94.8		4 169.1			1 100.2	8 374.1																			16 750.3
L10-04		7 468.0	2 347.7		1 51.4	9 263.1				6 469.9														1 4.4					26 1604.5
L10-05		1 84.1	1 11.7	1 120.4		13 618.0		1 5.5	2 619.1	2 217.8														1 83.2					22 1759.8
L10-06		1 193.3				1 6.0			1 307.8	1 109.8																			4 616.9
L10-07		1 31.7								1 193.3																			2 225.0
L10-13		5 327.0				9 285.2		1 31.3		8 499.3																1 5.8	1 220.5		25 1369.1
L10-14		10 340.9				15 413.4				9 775.2																			34 1529.5
L10-15	1 65.0	7 428.2				14 403.6				7 476.2	1 165.5									1 20.6		1 11.1							32 1570.2
L10-16		14 1226.6				16 972.5			7 1352.9	16 1811.1												1 240.3							54 5603.4
L10-17		3 395.1			1 76.5	6 103.1				1 85.8																			11 660.5
L10-18										3 341.6																			3 341.6

	砂岩				チャート				流紋岩				安山岩				泥岩				ホルンフェルス				その他				計
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	
L10-19		1 15.3				4 73.9				2 80.2												1 52.1							8 221.5
L10-24		1 26.6				11 303.1																							12 329.7
L10-25		3 167.8				2 29.6			1 341.4	1 111.5				1 71.1															8 721.4
L10-26		5 246.5				7 209.3				3 171.1																			15 626.9
L10-27		6 216.1				9 198.9			1 102.7	6 408.7																			22 926.4
L10-28		1 50.1			1 139.8	15 415.3				3 146.7																			20 751.9
L10-29						1 59.6			1 262.7							1 6.5													3 328.8
L10-34		2 140.9				1 26.2				1 85.3																			4 252.4
L10-35		5 162.5			1 491.2	4 36.7				2 46.8								1 10.8											13 748.0
L10-36		3 206.9				16 403.4				1 77.6																			20 687.9
L10-37		2 173.8				5 312.9				5 440.2																			12 926.9
L10-38		3 124.6				1 35.2												1 56.1											5 215.9
L10-39		1 10.4				2 29.7																							3 40.1
L10-45		5 303.6				2 80.9				4 239.7								1 18.7											12 642.9
L10-46		1 30.4				3 93.3																							4 123.7
L10-47		4 244.8																											4 244.8
L10-48										1 80.9																			1 80.9
L10-49		2 77.8																											2 77.8
L10-55		1 27.4				1 13.5																							2 40.9
L10-56		1 67.6				2 28.9								1 20.2															4 116.7
L10-57		2 273.2				2 286.4																							4 559.6
L10-58					1 47.1	1 20.6	1 116.6																						3 184.3
L10-59		5 482.4				1 21.5				1 225.4																			7 729.3
L10-67					1 122.6					1 66.6																			2 189.2
L10-68	1 18.1	1 1.6				1 46.4				1 60.4																			4 126.5
L10-69						1 51.7																							1 51.7
L10-78										1 88.5																			1 88.5
L10-79		1 89.8																											1 89.8
L10-97		1 69.3																											1 69.3
L11-60		1 51.9								1 93.2																			2 145.1
L11-90		1 83.2				1 13.5																							2 96.7
L11-91						1 89.5																							1 89.5
M10-07						1 28.2																							1 28.2
G7									1 178.1																				1 178.1
表採		2 514.7								1 160.5												1 102.6							4 777.8
計	16 3136.4	307 22462.0	15 2125.3	19 931.6	41 2852.6	452 18330.0	29 2892.4	19 1050.5	57 9878.1	327 28771.2	4 546.1	5 964.5	0 0.0	4 190.3	1 181.5	4 203.2	0 0.0	4 86.9	0 0.0	1 20.6	0 0.0	21 1440.0	2 332.3	11 884.3	0 0.0	13 772.9	5 487.5	5 195.3	1362 98735.5

※Aは焼成完形礫，Bは焼成破損礫，Cは自然礫（無焼成完形礫），Dは破損礫（無焼成破損礫）
上段…個数（単位：個）　下段…重量（単位：g）

第２節　弥生～古墳時代

新開１遺跡で検出された弥生～古墳時代に比定される遺構は，竪穴住居跡９軒である。出土遺物はなるべく出土遺構とともに掲載したが，明らかに混入品とみられるものは遺構外出土遺物（第５節，第59図）として掲載した。

１　竪穴住居跡

SI-005（第45図，図版14）

Ｆ７-32～34・42～45・52～55・62～64グリッドに位置する。北東辺の壁の一部は検出できなかった。斜面で失われたと考えられる。プランはほぼ隅丸正方形を呈し，規模は北西－南東軸が5.3m，北東－南西軸が5.0mである。床面はほぼ平坦であるが，硬化面ははっきりせず，ピットや壁溝も検出できなかった。炉も検出されなかったが，南東コーナー部の遺構検出面で焼土の散布がみられた。当遺構は，住居跡と考えるのは難しい面もあるが，状況的には古墳時代中期頃の住居跡と考えてよいと思われる。

遺物は，遺構検出面から灯明皿として用いられたと考えられるロクロ土師器片（第59図６）が出土したが，混入品と考えられる。そのほかには土師器の小破片が少量出土したのみで，皆無に近い状況であった。

SI-006（第46図，図版14・35）

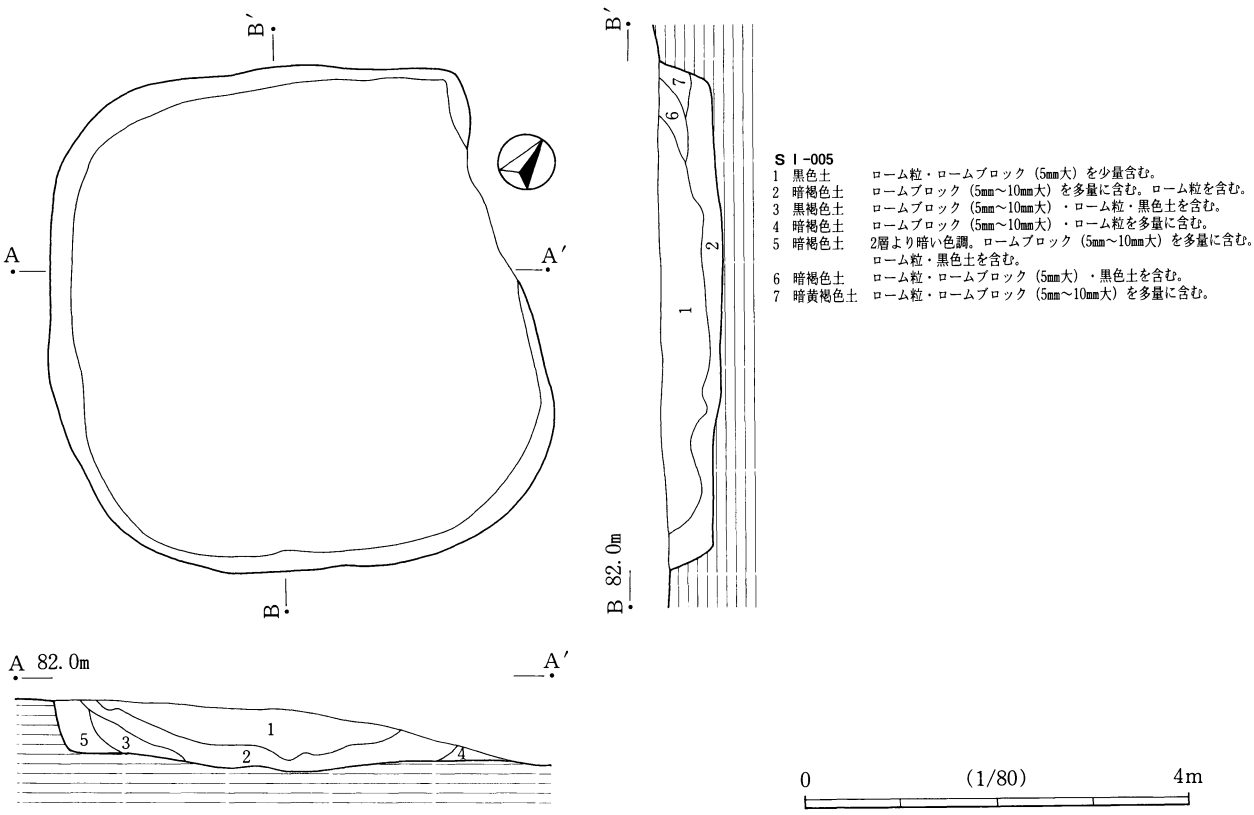
Ｆ７-86・87・95～98・Ｇ７-06～08・16・17グリッドに位置する。プランはほぼ正方形を呈し，規模は北西－南東軸が4.6m，北東－南西軸が4.4mである。主軸方位はN-36°-Wである。床面はほぼ平坦で，炉の周辺から東コーナー部にかけて硬化面が認められた。北コーナー部から北東壁にかけて，深さ最大約７cmほどの壁溝が検出された。柱穴は検出されなかったが，東コーナー部に貯蔵穴と考えられるピットが検出され，中から頸部以下のみほぼ完形の壺（第46図２）が正位で出土した。炉は中央ラインからやや東寄りに位置し，平面形は長径54cm，短径38cmの楕円形を呈し，深さは約３cmである。火床はあまり焼けていなかった。

図示した遺物は２点である。１は炉器台で，ほぼ完形である。床面に近いレベルから出土したもので，器面に輪積み痕や指頭圧痕を明瞭に残している。２は壺で，貯蔵穴と考えられるピットから出土したものである。外面と，内面頸部は赤彩されている。内外面とも磨滅がみられるが，特に内面の磨滅が著しい。

SI-007（第47図，図版15・35）

Ｇ８-29～31・39～41・49・50グリッドに位置する。プランは，東コーナー部のみ木根の撹乱によりはっきりしなかったが，ほぼ隅丸正方形を呈す。規模は一辺約4.1mである。主軸方位はN-35°-Wである。床面はほぼ平坦で，炉の周辺のみ硬化面が認められた。柱穴は検出されなかった。炉はほぼ中央ラインに位置し，平面形は長径90cm，短径52cmの楕円形を呈し，深さは約３cmである。火床はあまり焼けていなかった。

図示した遺物は１点で，床面に近いレベルから出土したものである。１は土師器の甕である。器面はやや磨滅している。



第45図　SI-005

SI-008（第48図，図版15・36）

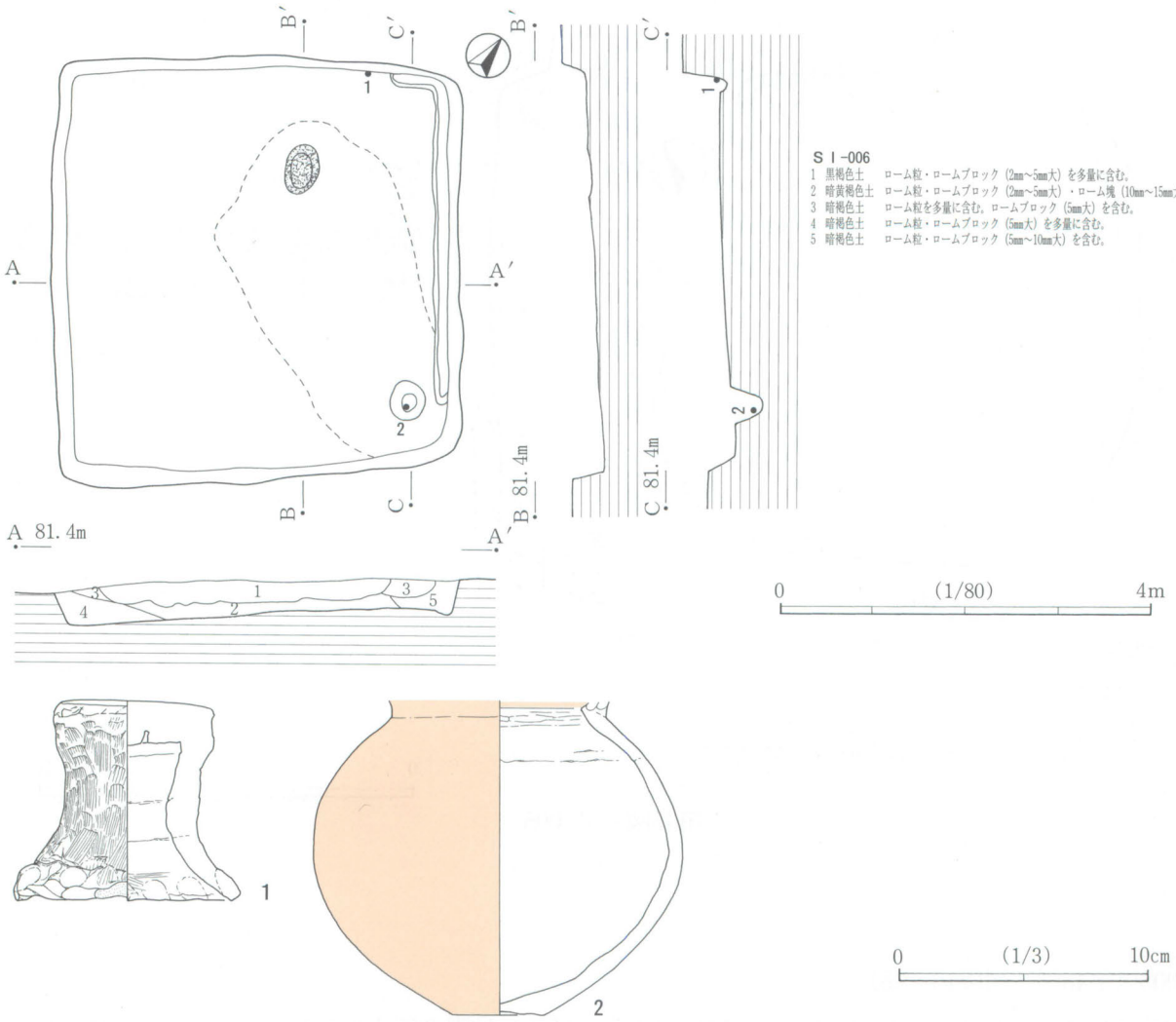
H8-04・05・13～15・23～25グリッドに位置する。プランは隅丸正方形を呈す。規模は一辺約3.6mである。主軸方位はN-35°-Wである。床面はほぼ平坦で，炉の周辺のみ硬化面が認められた。柱穴は検出されなかった。炉はほぼ中央ラインに位置し，平面形は長径71cm，短径52cmの楕円形を呈し，深さは約3cmである。火床はあまり焼けていなかった。

図示した遺物は1点で，覆土中から出土したものである。1は土師器の杯である。小破片から復元したものである。口唇部は平らに面取りされている。器面はやや磨滅しているが，内外面ともミガキが施される。赤彩は明らかでない。

SI-009（第49図，図版15・36）

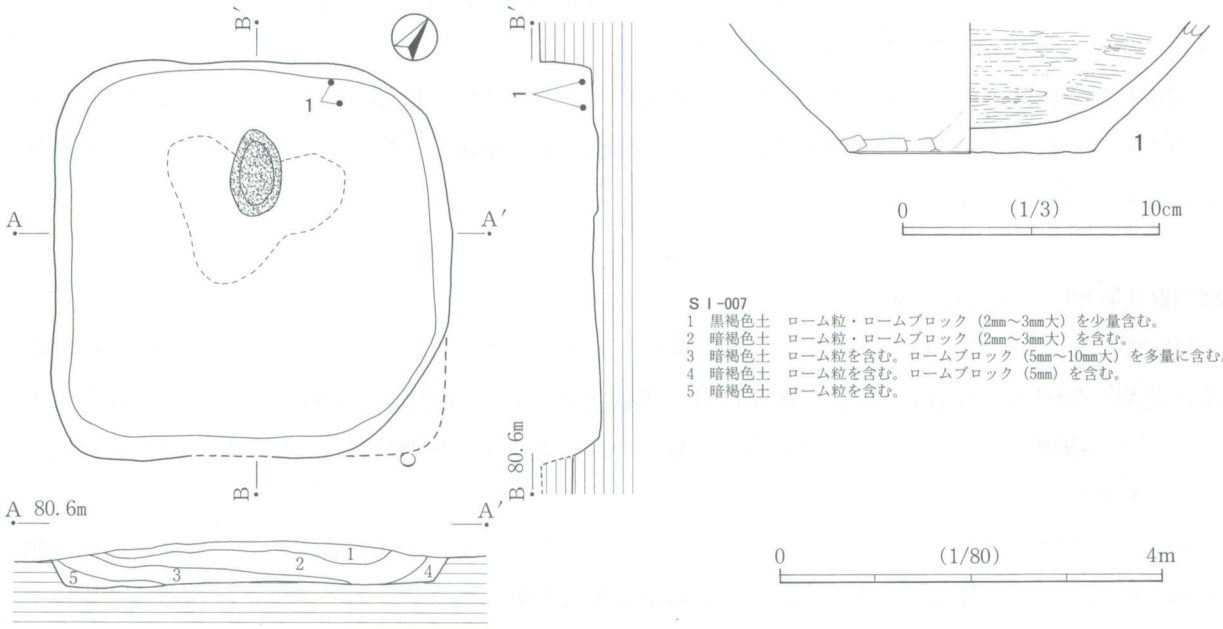
I9-22・23・31～33・42・43グリッドに位置する。プランは隅丸方形を呈し，規模は北西－南東軸が2.8m，北東－南西軸が3.4mである。床面はほぼ平坦であるが，硬化面も認められず，柱穴も検出されなかった。当遺構は，住居跡として考えるのが難しい面もあるが，状況的には古墳時代の住居跡と考えてよいと思われる。

図示した遺物は2点で，いずれも覆土中からの出土である。1は土師器甕である。輪積み痕部に刺突列がみられる。2は土師器壺である。折返し口縁部に縄文が施文され，その下端部には正面から棒状工具などにより押捺が施される。ミガキの施される内面は赤彩されている。



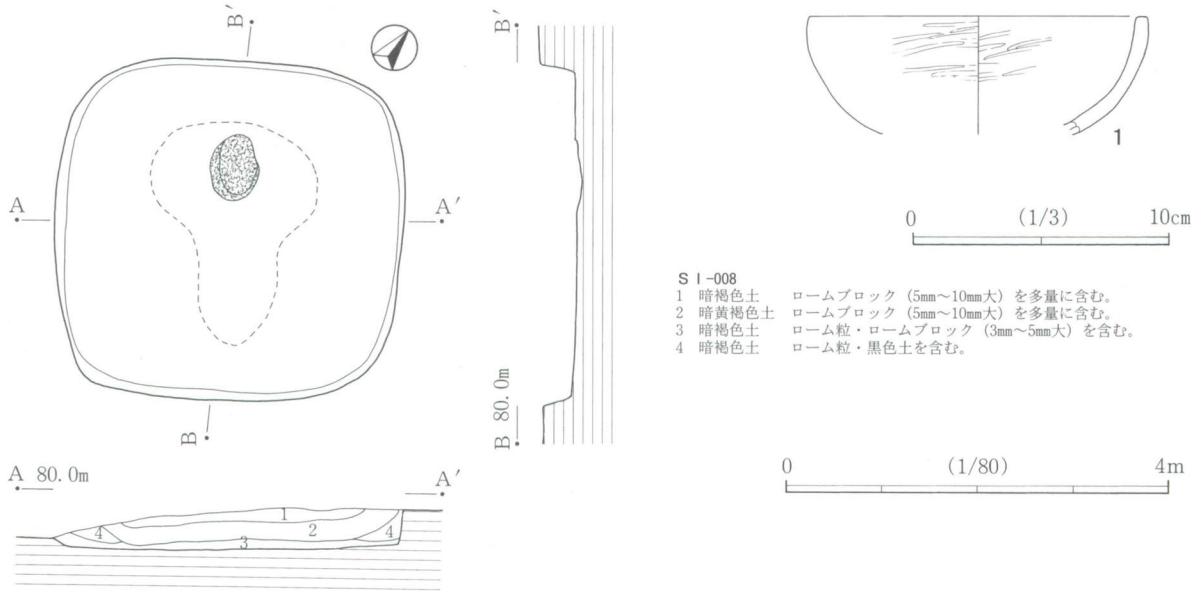
SI-006
1 黒褐色土　ローム粒・ロームブロック（2mm～5mm大）を多量に含む。
2 暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロック（2mm～5mm大）・ローム塊（10mm～15mm大）を多量に含む。
3 暗褐色土　ローム粒を多量に含む。ロームブロック（5mm大）を含む。
4 暗褐色土　ローム粒・ロームブロック（5mm大）を多量に含む。
5 暗褐色土　ローム粒・ロームブロック（5mm～10mm大）を含む。

第46図　SI-006と出土遺物

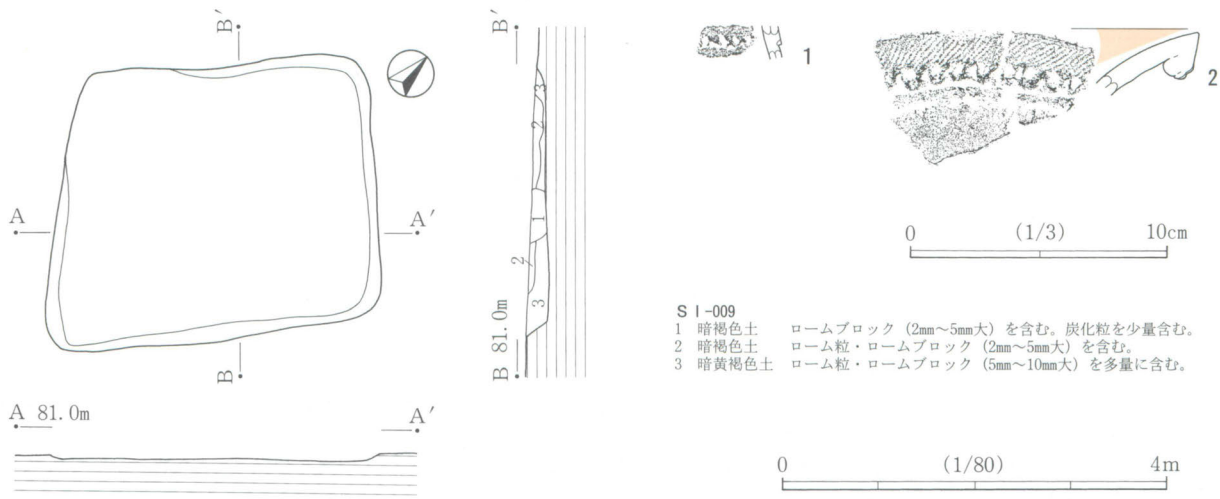


SI-007
1 黒褐色土　ローム粒・ロームブロック（2mm～3mm大）を少量含む。
2 暗褐色土　ローム粒・ロームブロック（2mm～3mm大）を含む。
3 暗褐色土　ローム粒を含む。ロームブロック（5mm～10mm大）を多量に含む。
4 暗褐色土　ローム粒を含む。ロームブロック（5mm）を含む。
5 暗褐色土　ローム粒を含む。

第47図　SI-007と出土遺物



第48図　SI-008と出土遺物

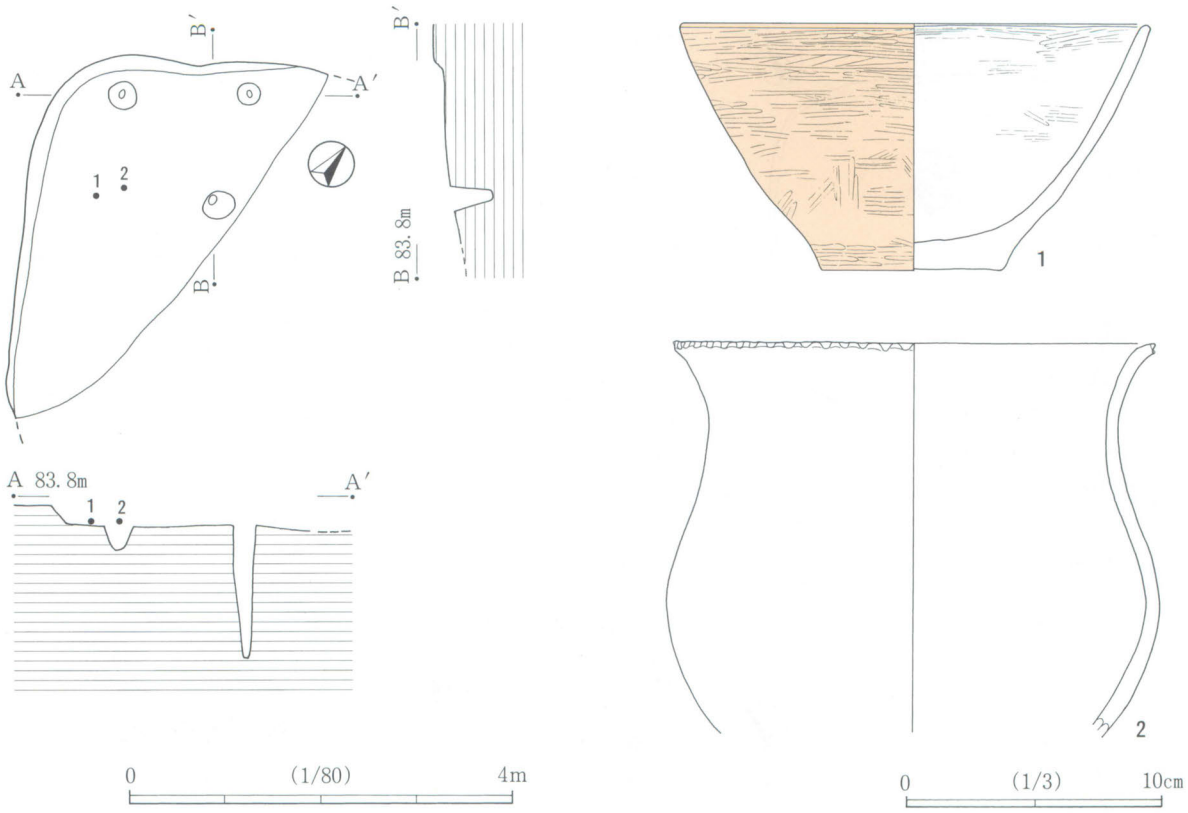


第49図　SI-009と出土遺物

SI-010（第50図，図版16・35・36）

M10-97・98・N10-07・08・17・18グリッドに位置する。東側は斜面で失われたと考えられ，検出できなかった。検出できた部分も辛うじての遺存状態で，検出時には床面直上の遺物がほとんど露出しているような状態であった。プランは隅丸方形を呈すと考えられるが，規模は明らかでない。床面はほぼ平坦であるが，硬化面ははっきりしない。ピットは３か所検出したが，その機能は明らかでない。炉は検出できなかったが，遺構検出面で遺存部中央付近に焼土の散布がみられた。覆土は，ローム粒・ロームブロック（５㎜大）を含む暗褐色土の単一層である。

図示した遺物は２点である。いずれも床面直上で出土した。１は土師器鉢である。胎土は緻密で，内外面ともミガキによって丁寧に仕上げられている。器面が磨耗しているが，外面は赤彩が施されているとみられる。内面も赤彩が施されていた可能性があるが，明らかでない。２は接合しない破片から復元実測を行ったものである。器面の磨滅が著しい。外面は全体に煤けて黒褐色を呈す。



第50図　SI-010と出土遺物

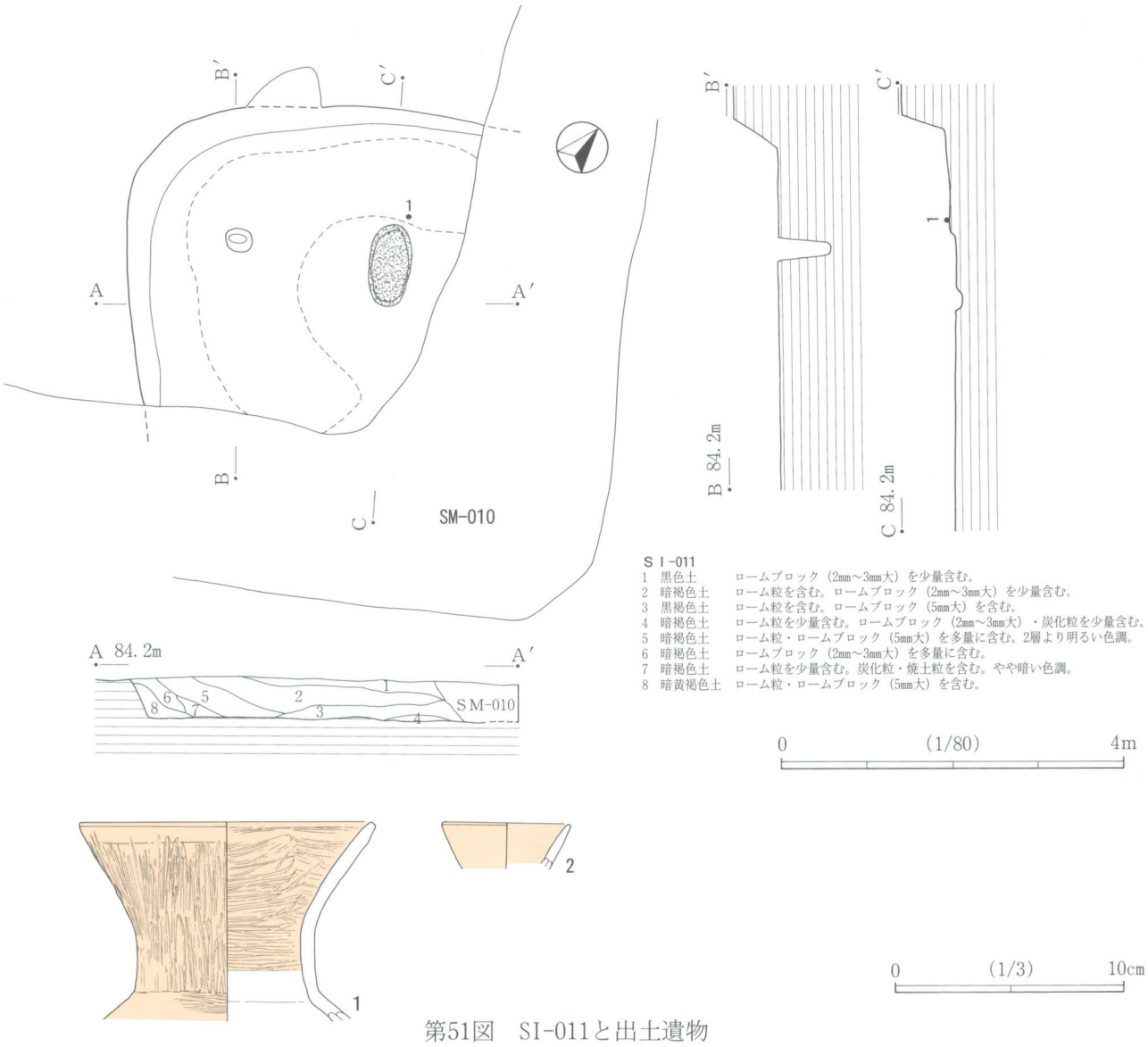
SI-011（第51図，図版16・35・36）

M10-37・38・46～48・56～59・67・68グリッドに位置する。東側はSM-010周溝と斜面により失われている。プランは隅丸方形を呈すと考えられるが，規模は明らかでない。主軸方位はN-36°-Wである。床面はほぼ平坦で，炉を囲むように西コーナー部を中心とした部分が硬化していた。ピットは主柱穴とみられるものを１か所検出した。炉は楕円形を呈し，規模は長径95cm，短径50cm，深さ約５cmである。火床はあまり焼けていなかった。

図示した遺物は２点である。１は土師器壺で，炉周辺の床面直上から出土した。内外面ともミガキによって丁寧に仕上げられ，焼成も良好である。内外面とも赤彩が施されているとみられる。２は覆土中から出土した。口縁部破片から復元実測を行ったもので，小型の壺とみられる。内外面とも赤彩が施されている。

SI-012（第52図，図版16・36）

L10-64・65・73～76・83～87・93～96・M10-04～06グリッドに位置する。プランは隅丸方形を呈し，規模は北西－南東軸が6.6m，北東－南西軸が6.0mである。主軸方位はN-59°-Wである。南東辺をSK-001に切られる。床面はほぼ平坦で，炉の周辺から南東辺の部分にかけて硬化面が認められた。壁溝は，深さ最大約７cmほどで，全周する。柱穴は，主柱穴とみられる４か所のほかに，入口ピットとみられるものが１か所，そのほかに２か所検出された。炉はほぼ中央ライン上に位置し，平面形は長径90cm，短径



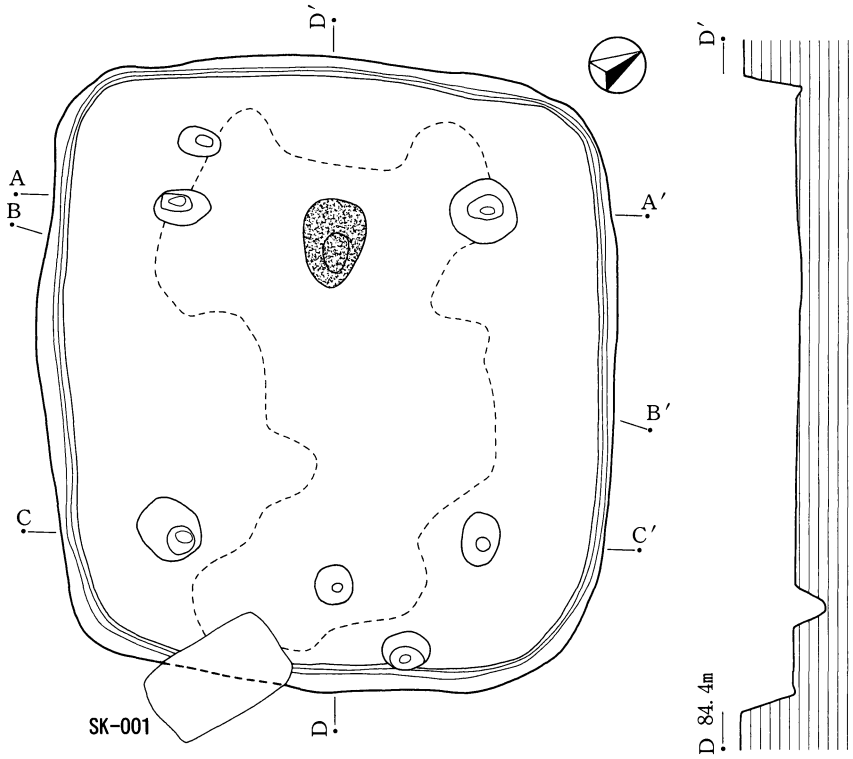
第51図　SI-011と出土遺物

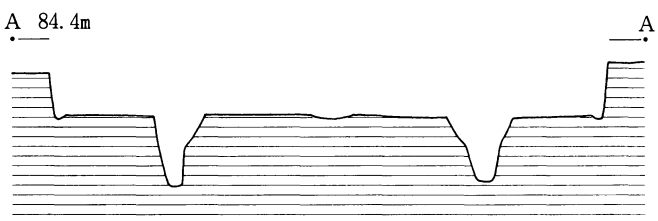
65cmの卵形を呈し，深さは約３cmである。火床はあまり焼けていなかったが，炉の周辺から炭が少量出土している。

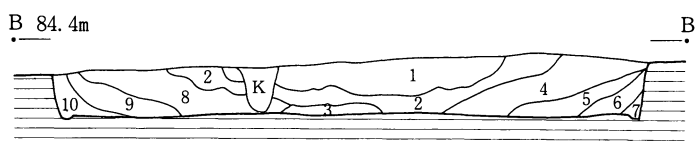
図示した遺物は２点である。いずれも覆土中からの出土である。１は輪積み痕のある甕で，胎土に２mm～３mm大の黄白色粒子と小石を多量に含む。口唇部は，上部と正面からの棒状工具などによる押捺である。２も甕とみられる。折返し口縁で，口唇部は棒状工具などによる正面からの押捺列である。

SI-015（第53・54図，図版17・35・36）

K10-25～29・34～39・44～49・54～59グリッドに位置する。北壁が斜面で失われたと考えられ，検出できなかったが，プランは隅丸長方形を呈し，規模は東西軸が9.2m，南北軸が推定7.2mである。主軸方位はN-75°-Wである。床面は北に向かって下がり，東側と南西コーナーに硬化面が認められた。また，南壁に沿うように，焼土や炭化材の堆積がみられたが，壁溝は検出されなかった。ピットは，主柱穴とみられるものが４か所検出された。炉はほぼ中央ライン上に位置し，長軸75cm，短軸65cmの楕円形を呈し，深さは約３cmである。火床はあまり焼けていなかった。







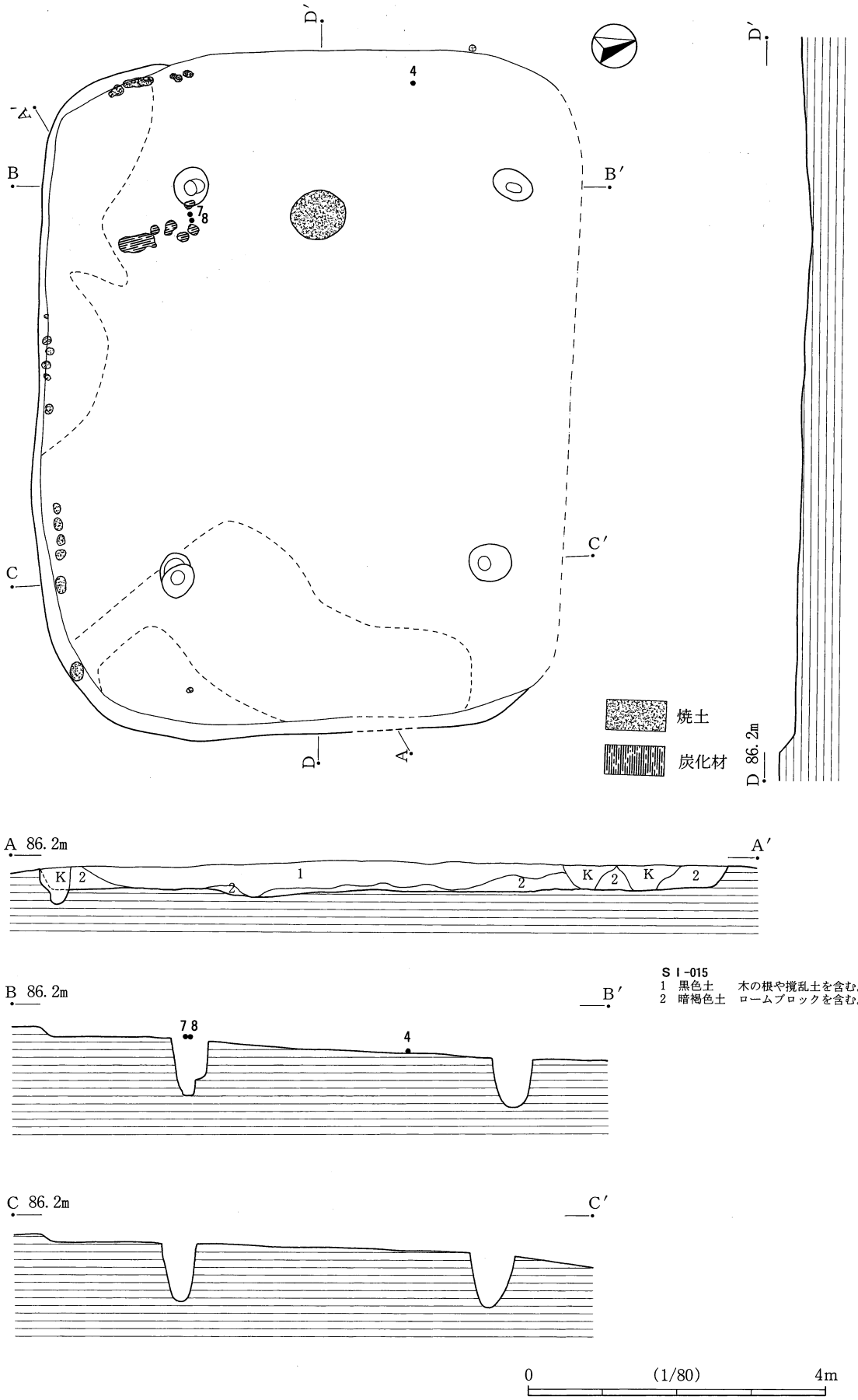
S I -012

1 黒色土　ローム粒を少量含む。
2 黒褐色土　ローム粒を含む。
3 黒褐色土　ローム粒・ロームブロック（2mm～3mm大）・炭化粒を含む。
4 暗褐色土　ロームブロック（2mm～5mm大）を含む。ローム塊（2cm～3cm大）を少量含む。
5 暗褐色土　ロームブロック（5mm大）を含む。
6 暗褐色土　ローム粒を含む。ロームブロック（2mm～3mm大）を少量含む。4層・5層より明るい色調。
7 暗褐色土　ロームブロック（5mm大）を含む。5層・6層より明るい色調。
8 暗褐色土　ローム粒を含む。ロームブロック（5mm大）・黒色土を少量含む。
9 暗褐色土　ローム粒を含む。ロームブロック（2mm～3mm大）を少量含む。
10 暗褐色土　ローム粒・ロームブロック（5mm大）を含む。焼土粒・炭化粒を少量含む。

0　(1/80)　4m

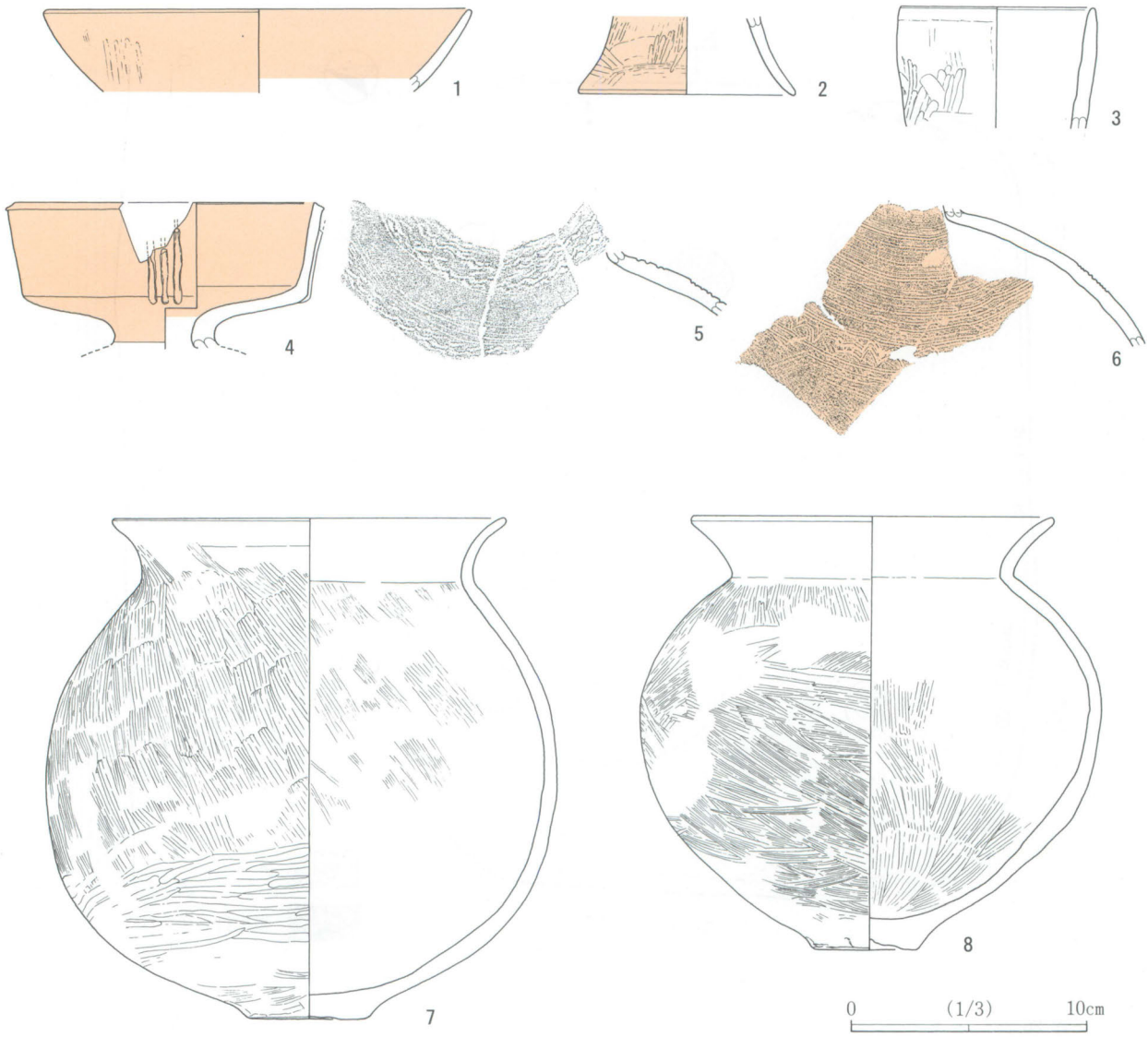
0　(1/3)　10cm

第52図　SI-012と出土遺物



SI-015
1 黒色土　木の根や撹乱土を含む。
2 暗褐色土　ロームブロックを含む。

第53図　SI-015



第54図　SI-015出土遺物

図示した遺物は８点である。４・７・８は床面近くから出土し，そのうち７・８は同じ場所から多数の破片となって出土した。そのほかは，覆土中からの出土である。１は土師器高杯である。内外面とも赤彩が施される。２の外面は丁寧にミガキが施され赤彩されているが，内面はナデで赤彩もない。壺の口縁部の可能性もある。３は壺と考えられる。内外面とも丁寧なミガキが施される。赤彩の痕跡は現状では確認できない。４～６は土師器壺と考えられる。４の口唇部は外そぎ状に丁寧に面取りされ，整えられている。口縁部はほぼ直角に屈曲し，さらに下へ直角に屈曲して，細い頸部につながる。頸内径は復元値で2.2cmである。頸部から肩部へも，破損部の観察によると，直角に近い程度に開いてつながるようである。口縁部には３本１単位の棒状浮文が貼付されているが，遺存部には１単位しか認められない。全周で３単位以下になると考えられる。内外面ともに赤彩が施される。５は細く浅い沈線で区画された中にＳ字状結節文がみられる。赤彩が施されていた痕跡もみられるが，器面が磨耗しており，範囲が明らかでない。６は櫛歯状工具によるとみられる並行沈線文と波状文が施される。外面は赤彩されており，４と同一個体の可能性もある。７・８は土師器甕である。７の胴部下半～底部にかけては，ハケ調整痕がミガキによって消されている。底部は上げ底気味である。８は内面にもハケ調整が施される。上げ底である。

第３節　奈良・平安時代

新開１遺跡で検出された奈良・平安時代に比定される遺構は，方形周溝状遺構２基である。遺構に伴わないで出土したロクロ土師器や瓦などの遺物もあるが，それらは遺構外出土遺物（第５節，第59図）として掲載した。

１　方形周溝状遺構

SM-010（第55図，図版17・18・37）

M10-05～07・13～18・22～28・31～39・42～49・52～59・63～69・73～78・84～86・M11-50グリッドに位置する。方形に廻る周溝のみ検出された遺構である。規模は，周溝上端外側で北西－南東軸13.3m，北東－南西軸13.1mを測り，平面的には周溝はほぼ正方形を描く。

周溝は，上端幅約2.0m，深さ約1.0mで，断面形は逆台形である。周溝の検出面は基本層序L10-28グリッドのⅡ層上面であるが，西側部分についてはSD-016に切られレベルが下がっており，他の部分より面を下げてプランを確認した。そのため，周溝の幅が細く見える部分があるが，本来はほかの部分と同じ幅であったと考えられる。周溝の覆土は主にロームブロックを含む黒色土～暗褐色土で，人為的に埋め戻されたような状況を呈しているが，南東辺の中央部（A-A′）付近にはローム質土が堆積する部分があり，いったん周溝を掘った後に，そこにローム質土を充填して土橋状の施設を設けていた可能性がある。

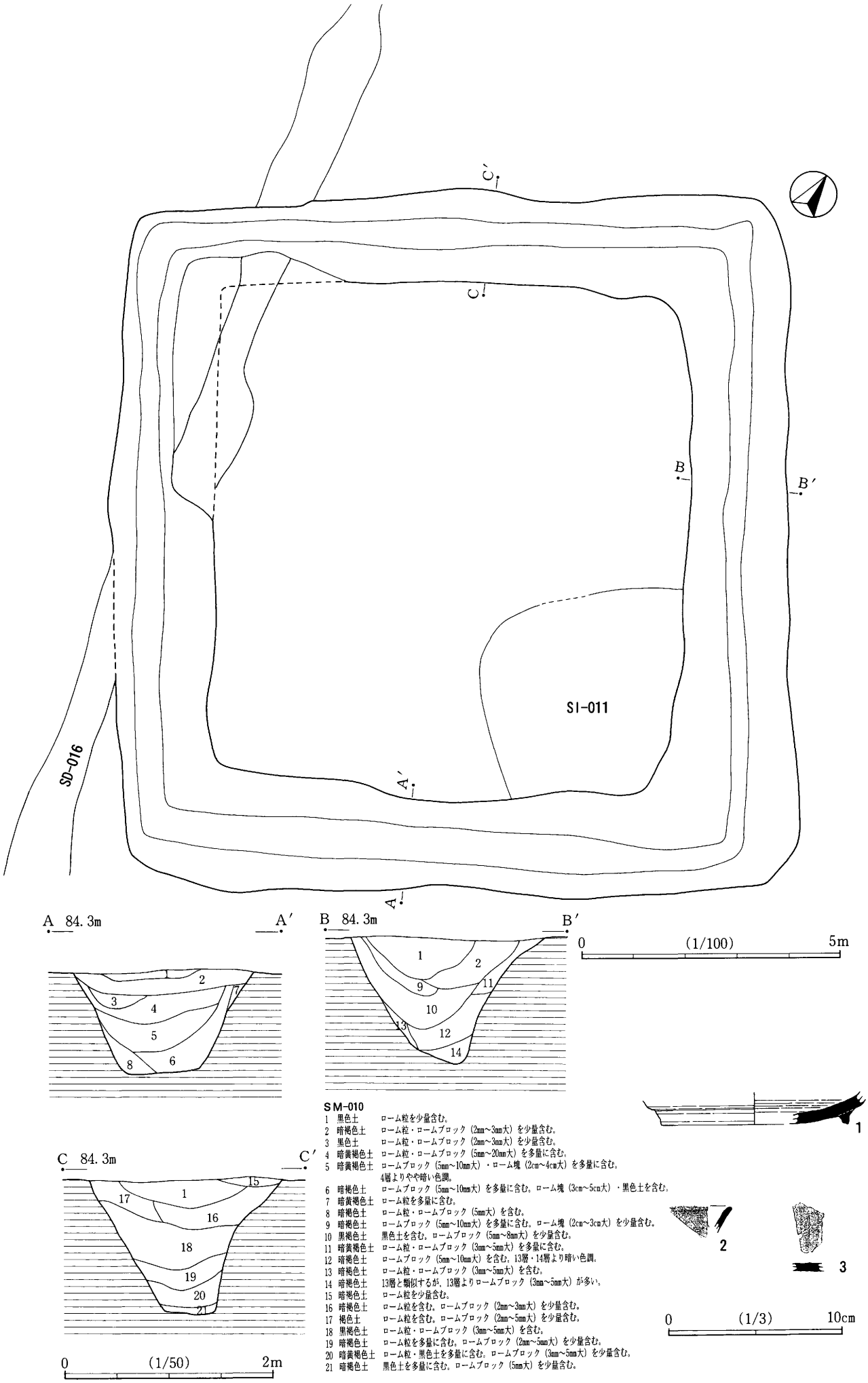
主体部とみられるものは検出されていない。周溝検出面で当遺構に切られるSI-011を検出したが，同面では主体部とみられる遺構は確認できず，周溝に囲まれた内側については更に確認面を下げてみたがそれでも検出できなかった。また，周溝壁面・底面も精査したが検出されなかった。

周辺の遺跡で，ほぼ同じ規模，同時代の同様な遺構はいくつも検出され，報告によって「方墳」「方形墳墓」「方形周溝状遺構」「方形区画墓」などと呼称されているが，当遺構もそれに類するものと考えられる。調査時には，規模や火葬墓が検出されないことなどから終末期古墳と考え，遺構に「ＳＭ」の接頭記号をつけたが，整理作業時に検討を加えた結果，古墳ではなく方形墳墓と考えたい。

図示した遺物は３点である。いずれも須恵器杯の小破片で，周溝覆土から出土したものであるが，出土遺物自体が僅少である中，当遺構の時期推定の手掛かりとなる遺物であると推測される。１は須恵器高台付杯の底部である。淡灰色を呈する。貼付け高台の外側に体部の立上がりが僅かに認められる。底部内面のロクロ目は顕著で，底部が僅かに突出すると思われ，８世紀中葉を中心とした湖西産の須恵器と思われる。２は須恵器杯の口縁部であろう。１の高台付杯の口縁部の可能性も考えられるが，外面は暗青灰色，内面は青灰色を呈し，１に比して暗いため別個体の可能性もある。３は須恵器蓋の破片であろう。

SS-001（第56図，図版18）

L10-78・79・88・89・L11-70・71・80・81・91グリッドに位置する。コ字形にめぐる周溝のみ検出された遺構である。規模は，周溝上端外側で北東－南西軸約5.0mである。周溝は，上端幅約45cm～60cm，深さ約20cmで，断面形はU字形である。周溝の検出面は基本層序L10-28グリッドのⅡ層上面である。南西辺の南端部は削平されたと考えられ検出できなかったが，北東辺の南端部は先には続かない。当遺構も，SM-010同様，方形墳墓と考えることができよう。

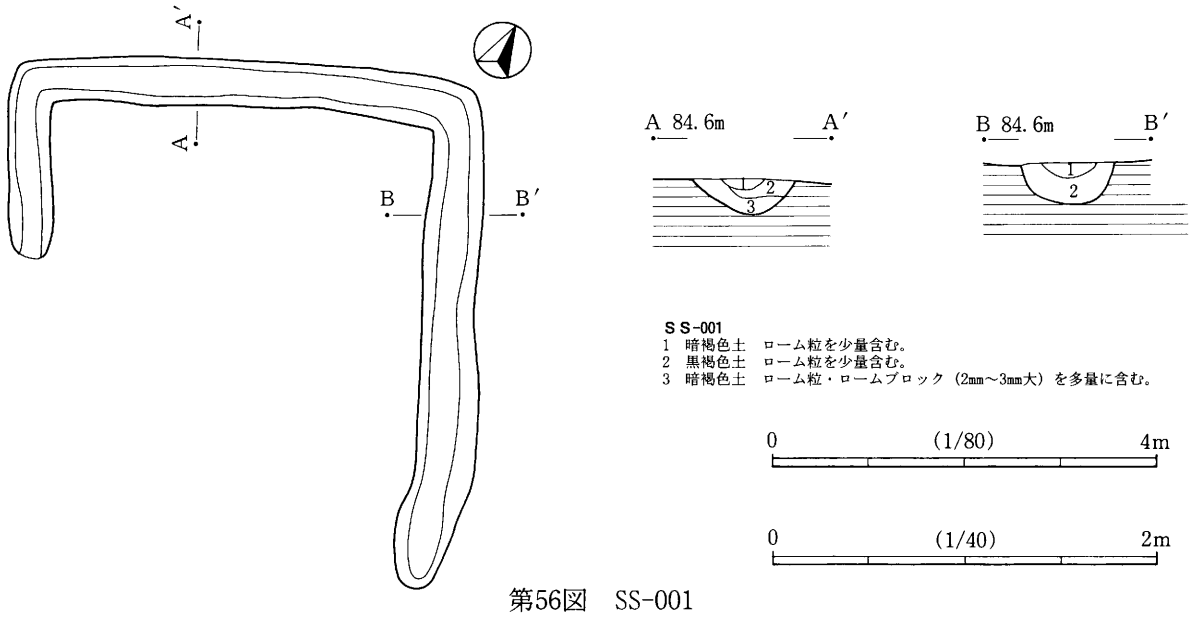


SM-010

1 黒色土　ローム粒を少量含む。
2 暗褐色土　ローム粒・ロームブロック（2mm～3mm大）を少量含む。
3 黒色土　ローム粒・ロームブロック（2mm～3mm大）を少量含む。
4 暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロック（5mm～20mm大）を多量に含む。
5 暗黄褐色土　ロームブロック（5mm～10mm大）・ローム塊（2cm～4cm大）を多量に含む。
4層よりやや暗い色調。
6 暗褐色土　ロームブロック（5mm～10mm大）を多量に含む。ローム塊（3cm～5cm大）・黒色土を含む。
7 暗黄褐色土　ローム粒を多量に含む。
8 暗褐色土　ローム粒・ロームブロック（5mm大）を含む。
9 暗褐色土　ロームブロック（5mm～10mm大）を多量に含む。ローム塊（2cm～3cm大）を少量含む。
10 黒褐色土　黒色土を含む。ロームブロック（5mm～8mm大）を少量含む。
11 暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロック（3mm～5mm大）を多量に含む。
12 暗褐色土　ロームブロック（5mm～10mm大）を含む。13層・14層より暗い色調。
13 暗褐色土　ローム粒・ロームブロック（3mm～5mm大）を含む。
14 暗褐色土　13層と類似するが、13層よりロームブロック（3mm～5mm大）が多い。
15 暗褐色土　ローム粒を少量含む。
16 暗褐色土　ローム粒を含む。ロームブロック（2mm～3mm大）を少量含む。
17 褐色土　ローム粒を含む。ロームブロック（2mm～5mm大）を少量含む。
18 黒褐色土　ローム粒・ロームブロック（3mm～5mm大）を含む。
19 暗褐色土　ローム粒を多量に含む。ロームブロック（2mm～5mm大）を少量含む。
20 暗黄褐色土　ローム粒・黒色土を多量に含む。ロームブロック（3mm～5mm大）を少量含む。
21 暗褐色土　黒色土を多量に含む。ロームブロック（5mm大）を少量含む。

第55図　SM-010と出土遺物

遺物は，混入品とみられる土師器の小破片（第59図３）が僅かに出土したのみで，皆無に近い状況であった。



第56図 SS-001

第４節 中・近世

新開１遺跡で検出した中・近世に比定される遺構は，溝状遺構１条と土坑１基である。土坑については基本的に時期不明であるが，中・近世の所産である可能性があるため，ここで報告する。

１ 溝状遺構

SD-014（第30・57図，図版37）

SI-005の南西側に，SD-001と並行に位置する溝状遺構である。北端と南端は削平され，検出できなかった。検出された長さは約10.8m，幅は約0.6m～1.0m，深さは約20cmで，断面形は緩いU字形である。底面が硬化しており，遺物と遺構の状況等から，平安時代～中世頃に機能していた道と考えられる。

図示した遺物は２点である。１はロクロ土師器杯の底部であろう。底部はわずかに円柱状に突き出し，底部外面には回転糸切り痕が残る。２は瓦の細片である。側面と凹面のみで凸面は欠失する。側面にヘラケズリが山形に２段施されることから平瓦と考えられる。

SD-016（第31図，図版17）

SD-008に引き続くように，市境にそって直線的に伸びる溝状遺構である。検出された長さは約38m，幅は約2.0m，深さは約60cmで，断面形は緩いU字形である。底面のほか，間層に硬化面がみられ，道として機能していたと考えられる。断面形は緩いU字形を呈し，覆土上層部には宝永火山灰が互層となって多量に堆積していた。

遺物は近世陶磁器などが少量出土した。

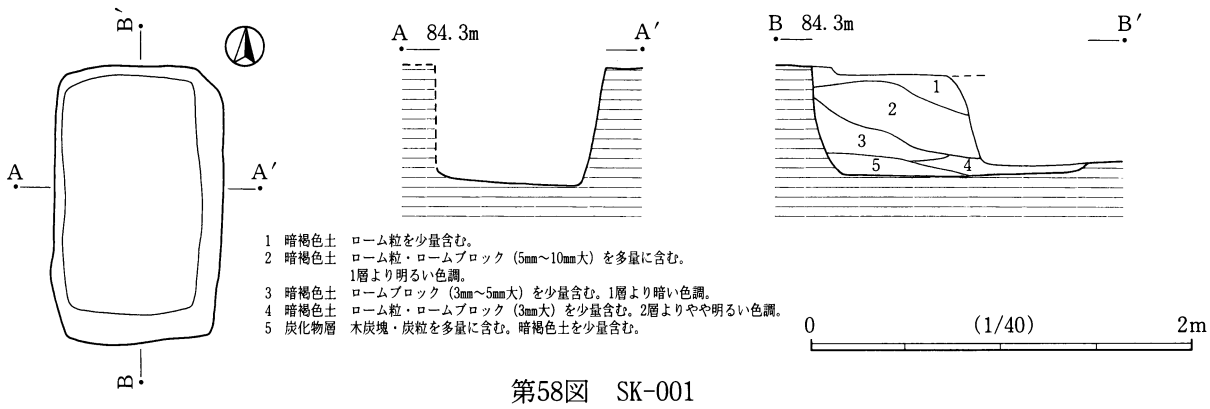
第57図　SD-014出土遺物

2　土坑

SK-001（第58図，図版18）

L10-96・M10-06グリッドに位置する。重複するSI-012を切る。平面形は南北軸約1.4m，東西軸約0.9mの長方形を呈し，深さは55cmである。平坦な底面には，敷き詰めたようにびっしりと木炭が堆積していた。炭焼窯と考えられる。

遺物は皆無で，時期は不明であるが，状況から中世以降の所産と推測される。昭和58年調査の新開遺跡でも同様の遺構が検出されている。



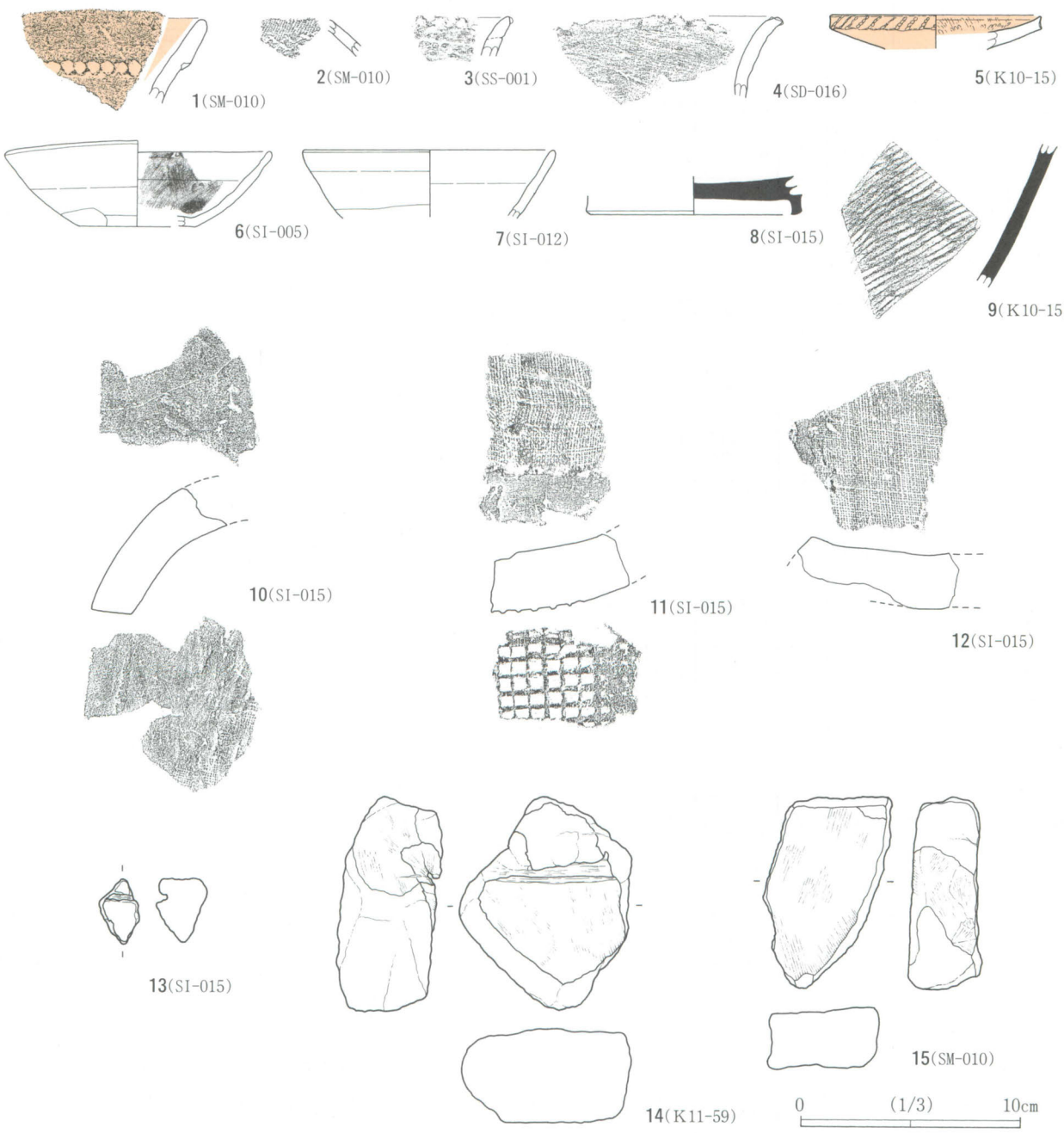
第58図　SK-001

第5節　遺構外出土遺物（第59図，図版35・37）

ここでは基本的に新開1遺跡の遺構外から出土した遺物を図示する。ただし，遺構覆土から出土していても，その遺構に伴わないと判断されるものも含む。

1・2はSM-010周溝覆土から出土したもので，壺の破片と考えられる。1は折返し口縁で，棒状工具の端部などによる刺突列が廻る。内外面とも赤彩が施される。2は縄文と2段のS字状結節文が観察される。3はSS-001周溝覆土から出土した甕で，輪積み痕が残される。口唇部は棒状工具端部などによる上部と正面からの刺突列が施される。4も甕で，口唇部には上部から棒状工具などによる押捺が施される。SD-016覆土中から出土した。5は器台の器受部破片と考えられる。口唇部に縄文原体等の圧痕ないし櫛歯状工具端部の刺突などが施される。6はロクロ土師器杯である。SI-005の検出面から出土したもので，全体の約70%遺存している。体部外面下端及び底部外面には手持ちヘラケズリが施される。糸切り痕があった可能性もあるが，底部の遺存状況が悪く，判然としない。内面半身は煤が付着し，2ないし3か所に灯芯の痕跡が認められることから灯明として使用されたものである。7はロクロ土師器杯の口縁部から体部である。小破片のため明らかでないが，体部下端に回転ヘラケズリと思われるヘラケズリが見られる。SI-012覆土中から出土した。8は須恵器高台付杯の底部である。高台は貼付け高台で，高台内及び底

部内面は調整が不明瞭になる程良く擦られており，転用硯として使用されたものと思われる。上総産，特に南河原坂の須恵器の可能性が高く，８世紀第３四半期を中心とする年代が考えられる。SI-015覆土中から出土した。９は須恵器甕の胴部破片である。並行のタタキ目がみられる。10は丸瓦である。凹面の布目はヘラケズリ及びナデ調整によりわずかに認められるのみである。11は平瓦である。凹面には布目と模骨痕，凸面には格子タタキ目が見られる。内側は黒灰色，外面は黄白色を呈し，酸化炎焼成で仕上げられている。右側面は焼成後に欠損するが，凸面の格子タタキ目が削られていることから側縁に近いものと推察される。左側は不正形な面であるが，焼成時の端面であり，雑に切られたものと判断される。12は瓦片である。凹面に布目と模骨痕が見られ，凸面の遺存部は少ないがタタキ目が認められないことから丸瓦と考えたい。左端面がわずかに残る。10～12はいずれもSI-015覆土中から出土したものである。13～15は砥石



第59図　新開１遺跡　遺構外出土遺物

である。13はSI-015から，15はSM-010周溝覆土中から出土したものである。13と14は黄褐色の軟質砂岩製で，同一個体である可能性が高い。金属の刃物を研いだとみられる痕跡が残る。13は最大長28.8mm，最大幅18.0mm，最大厚23.1mm，重さ7.00ｇである。14は最大長95.4mm，最大幅79.1mm，最大厚47.9mm，重さは301.91ｇである。15は７・８よりはやや硬質だが，やはり軟質の砂岩製で，最大長86.0mm，最大幅58.0mm，最大厚33.5mm，重さ192.88ｇである。正面と右側面に使用痕とみられる擦痕が観察される。

第17表　新開１遺跡　掲載土器観察表

遺構番号	挿図番号	時代	種別	器種	遺存度	法量(cm)					技法	色調	胎土	焼成
						口径	底径	頸径	胴径	器高				
SI-006	第46図1	古墳	土師器	炉器台	ほぼ完形	6.0	8.9	5.3	-	8.0	器受部ナデ・脚部ハケ調整・裾部指頭圧痕	褐色～黒褐色	乳白色微細粒少量	○
											ハケ調整後ナデ	褐色～黒褐色		
SI-006	第46図2	古墳	土師器	壺	頸部から下のみ全部遺存	-	3.6	(8.6)	14.8	(12.5)	ナデ	赤褐色～黒色(赤彩)	砂粒・乳白色微細粒多量	○
											ヘラナデ？(器面磨滅)	明褐色		
SI-007	第47図1	古墳	土師器	甕	底部の50%遺存	-	(9.6)	-	-	(5.0)	ヘラケズリ後ナデ	明褐色～黒褐色	やや緻密・砂粒少量	△
											ミガキ	暗褐色		
SI-008	第48図1	古墳	土師器	杯	口縁部の20%遺存	(13.0)	-	-	-	(4.6)	ミガキ	褐色	やや緻密・赤色粒子	△
											ミガキ	褐色		
SI-009	第49図1	古墳	土師器	甕	胴部破片	-	-	-	-	(1.4)	輪積み痕部押捺列	明褐色	赤色粒子少量	○
											ミガキ？	明褐色		
SI-009	第49図2	古墳	土師器	壺	口縁部破片	-	-	-	-	(2.4)	折返し口縁部縄文・押捺列・頸部ナデ	明褐色	砂粒多量	○
											ミガキ	赤褐色～明褐色(赤彩)		
SI-010	第50図1	古墳	土師器	鉢	全体の50%遺存	(18.4)	7.0	-	-	9.8	ミガキ	赤褐色～明褐色(赤彩？)	緻密	○
											ミガキ	赤褐色～明褐色(赤彩？)		
SI-010	第50図2	古墳	土師器	甕	頸部の40%遺存	(18.8)	-	(18.0)	(19.2)	(15.2)	ナデ	黒褐色(煤付着)	砂粒少量	△
											ミガキ	淡褐色		
SI-011	第51図1	古墳	土師器	壺	口縁部～頸部のみ全部遺存	12.8	-	7.7	-	(8.6)	ミガキ	赤褐色～明褐色(赤彩)	砂粒少量	◎
											口縁部ミガキ・頸部ナデ	赤褐色～明褐色(赤彩)		
SI-011	第51図2	古墳	土師器	壺	口縁部の20%遺存	(5.6)	-	-	-	(2.0)	ナデ	赤褐色(赤彩)	赤色粒子少量	○
											ナデ	赤褐色(赤彩)		
SI-012	第52図1	古墳	土師器	甕	口縁部の20%遺存	-	-	-	-	(4.5)	口唇部押捺列・輪積み痕	明褐色	砂粒・黄白色粒子	○
											ナデ	明褐色		
SI-012	第52図2	古墳	土師器	甕	口縁部破片	-	-	-	-	(2.4)	折返し口縁口唇部押捺・ナデ	淡暗褐色～黒褐色	黄白色粒子・砂粒	○
											ミガキ？	淡暗褐色		
SI-015	第54図1	古墳	土師器	高杯	口縁部の30%遺存	(18.0)	-	-	-	(3.5)	ナデ	赤褐色(赤彩)	砂粒少量	○
											ナデ	赤褐色(赤彩)		
SI-015	第54図2	古墳	土師器	脚部	裾部の30%遺存	-	(9.1)	-	-	(3.3)	ミガキ	赤褐色(赤彩)	砂粒少量	○
											横ナデ	明褐色		
SI-015	第54図3	古墳	土師器	壺	口縁部の30%遺存	(8.1)	-	-	-	(5.2)	ミガキ	黒褐色	砂粒少量	○
											ミガキ	黒褐色		
SI-015	第54図4	古墳	土師器	壺	口縁部の50%遺存	12.6	-	(4.2)	-	(6.2)	ミガキ？・棒状浮文	赤褐色(赤彩)	砂粒少量	○
											ミガキ？	赤褐色(赤彩)		
SI-015	第54図5	古墳	土師器	壺	頸部の20%遺存	-	-	-	-	(2.7)	沈線区画S字状結節文・ナデ	明褐色	赤色粒子多量、白色針状物少量	△
											ナデ	明褐色		
SI-015	第54図6	古墳	土師器	壺	頸部の15%遺存	-	-	(9.0)	-	(5.9)	櫛描文・ナデ	赤褐色(赤彩)	赤色粒子・白色粒子多量	○
											ナデ	明褐色		
SI-015	第54図7	古墳	土師器	甕	全体の70%遺存	(16.4)	5.1	(13.9)	21.5	20.9	ハケ調整後ミガキ・口縁部ヨコナデ	暗褐色～黒褐色	砂粒少量	○
											ハケ調整・口縁部ヨコナデ	暗褐色～黒褐色		
SI-015	第54図8	古墳	土師器	甕	全体の70%遺存	15.1	4.5	11.9	(19.5)	18.1	ハケ調整・口縁部ヨコナデ	暗褐色～黒褐色	砂粒少量	○
											ハケ調整・口縁部ヨコナデ	暗褐色～黒褐色		

遺構番号	挿図番号	時代	種別	器種	遺存度	法量(cm)					技法	色調	胎土	焼成
						口径	底径	頸径	胴径	器高				
SM-010	第55図1	奈良	須恵器	杯	底部破片	-	(10.7)	-	-	(1.8)	回転ヘラケズリ？・ロクロ調整	灰色	乳白色微細粒少量	○
											ロクロ調整	灰色		
SM-010	第55図2	奈良	須恵器	杯	口縁部破片	-	-	-	-	(1.5)	ロクロ調整	暗灰色・自然釉	緻密	○
											ロクロ調整	灰色		
SM-010	第55図3	奈良	須恵器	蓋	破片	-	-	-	-	(0.4)	ロクロ調整	灰色	緻密	○
											ロクロ調整	灰色		
SD-014	第57図1	古代	土師器	杯	底部の20%遺存	-	(6.0)	-	-	(1.2)	ロクロ調整・底部回転糸切り	淡褐色	砂粒少量	○
											ロクロ調整	淡褐色		
SM-010	第59図1	古墳	土師器	壺	口縁部破片	-	-	-	-	(3.8)	折返し口縁部下端刺突列・ナデ	赤褐色(赤彩)	砂粒	○
											ミガキ	赤褐色(赤彩)		
SM-010	第59図2	古墳	土師器	壺	口縁部破片	-	-	-	-	(1.8)	縄文・S字状結節文	赤褐色	砂粒少量	○
											ナデ	黄褐色		
SS-001	第59図3	古墳	土師器	甕	口縁部破片	-	-	-	-	(1.8)	輪積み痕	明褐色	砂粒少量	○
											ナデ	明褐色		
SD-016	第59図4	古墳	土師器	甕	口縁部破片	-	-	-	-	(3.6)	ナデ	褐色	砂粒	○
											ミガキ	黒色～褐色		
K10-15	第59図5	古墳	土師器	器台	口縁部の15%遺存	(9.4)	-	-	-	(1.5)	ナデ・口唇部刻み？	赤褐色(赤彩)	砂粒少量	○
											ミガキ	赤褐色(赤彩)		
SI-005	第59図6	平安	土師器	杯	全体の70%遺存	11.8	(5.2)	-	-	3.8	ロクロ調整・底部手持ちヘラケズリ	暗褐色	砂粒少量	○
											ロクロ調整	暗褐色～黒色(煤付着)		
SI-012	第59図7	平安	土師器	杯	口縁部の20%遺存	(11.2)	-	-	-	(3.0)	ロクロ調整・底部回転ヘラケズリ	淡暗褐色	緻密	○
											ロクロ調整	赤褐色		
SI-015	第59図8	奈良	須恵器	杯	底部の20%遺存	-	(9.8)	-	-	(1.7)	ロクロ調整	暗灰色	乳白色微細粒少量	○
											ロクロ調整	暗灰色		
K10-15	第59図9	古墳?	須恵器	甕	胴部破片	-	-	-	-	(6.3)	タタキ痕	灰褐色	砂粒少量	○
											ナデ	灰褐色		

※技法・色調：上段…外面　下段…内面
焼成：◎…良好　○…普通　△…やや不良

第18表　新開１遺跡　非掲載遺物重量表（単位：g）

遺構番号	弥生土器	土師器壺・甕・鉢類	土師器杯・高杯類	須恵器	灰釉陶器	中世陶磁器	近世陶磁器	土製品類	瓦	石	合計
SI-005		104	83								187
SI-006		113	87								200
SI-007			52								52
SI-008		11									11
SI-009		178	34								212
SI-010		107									107
SI-011		212	23								235
SI-012		597	43								640
SI-013		775	74								849
SI-014		479	44								523
SI-015		866	108	18							992
SD-015			3								3
SD-016		83	8				63				154
SM-010	35	379	94								508

遺構番号	弥生土器	土師器壺・甕・鉢類	土師器杯・高杯類	須恵器	灰釉陶器	中世陶磁器	近世陶磁器	土製品類	瓦	石	合計
SS-001		16									16
K10-14		57							10		67
K10-15		13									13
K10-16		31									31
K10-17		65	23								88
K10-35		5	6								11
K10-67			5								5
K10-72		8									8
K10-73		2								1	3
K10-74		5									5
K10-75		8									8
K10-76		8									8
K10-82										7	7
K10-83										7	7
K10-85										5	5
K10-93		1									1
K10-94		4								4	8
K10-95										18	18
K10-96		14									14
K11-60		5									5
L10		12								1	13
L10-13										3	3
L10-14										3	3
L10-15										1	1
L10-16										15	15
L10-24		2									2
L10-26										8	8
L10-29										1	1
L10-36										3	3
L10-55										3	3
L10-67		13									13
F7		28									28

第５章　新開２遺跡

第１節　旧石器時代

１　基本層序（第60図，図版19）

当遺跡は馬の背状の尾根筋に立地し，平坦地が少ないためか土層も不安定で，地点により様相が異なる。代表的な土層については第１章第２節に示したとおりであるが，ここでは特に，旧石器が出土した地点とその付近の土層について示した。

Ⅲ層（黄褐色土層）　ソフトローム層。Ⅳ層との境界は不明瞭で，部分的にⅣ層土が混入するように見える部分もある。

Ⅳ～Ⅴ層（暗黄褐色土層）　Ⅲ層との境界は不明瞭で，部分的にⅢ層土が混入するように見える部分もある。Ⅳ層とⅤ層との分層も不能。以下，ハードローム層。

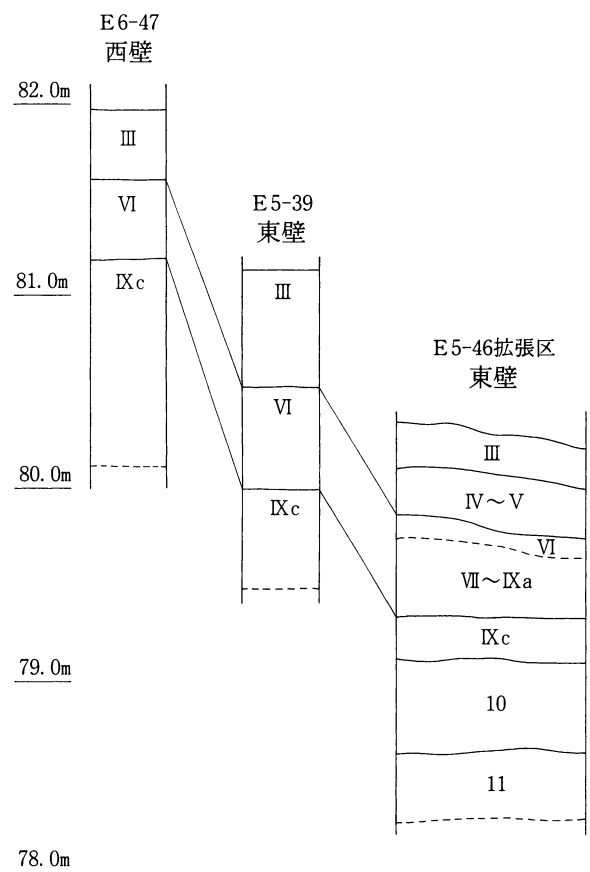
Ⅵ層（暗黄褐色土層）　ＡＴ（姶良丹沢火山灰）が集中的に包含される層であるが，不明瞭で，下層と混然としている。

Ⅶ～Ⅸa層（暗黄褐色土層）　上面の色調がやや明るめだが，Ⅵ層とはっきり分層できない。遺物を出土したのはこの層の上面である。

Ⅸc層（暗褐色土層）　暗い色調。暗緑色スコリア・橙色スコリア・黒色スコリアを多く含む。

10層（暗褐色土層）　Ⅸc層よりやや明るい色調。暗緑色スコリア・橙色スコリア・黒色スコリアを含む。

11層（暗褐色土層）　Ⅸc層よりやや明るい色調。スコリアをほとんど含まない。

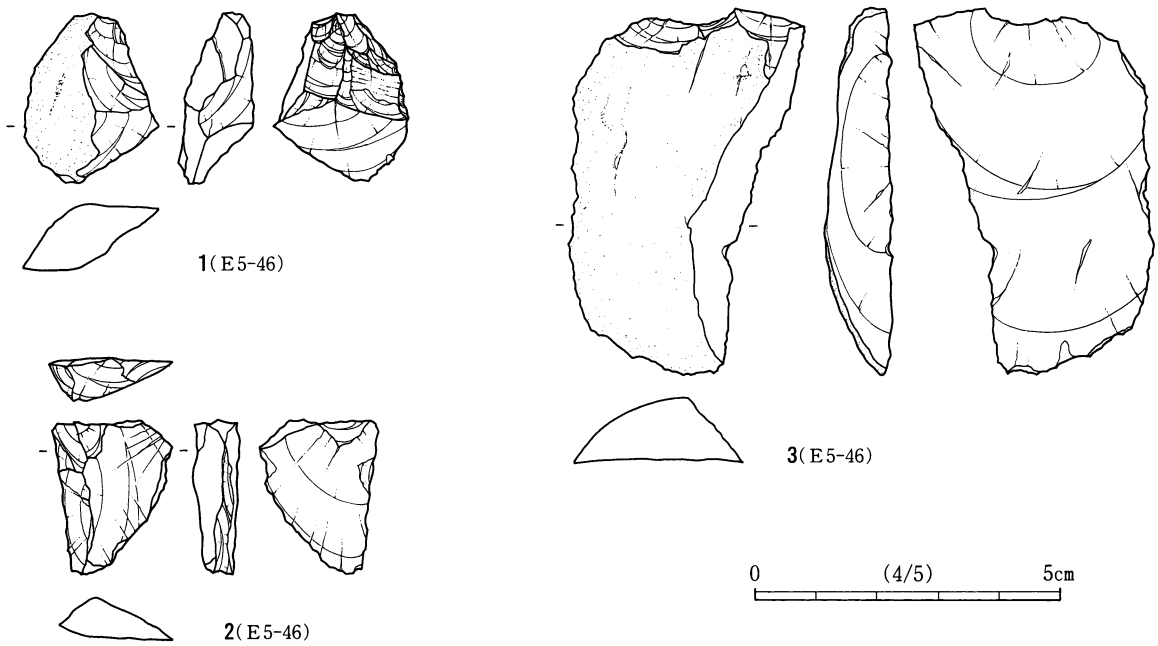


第60図　基本層序

２　出土遺物（第61図，図版38）

出土遺物は３点で，全て図示した。いずれもチャート製の剥片で，Ｅ５-46グリッドⅦ～Ⅸa層上面から近接して出土した。周辺を拡張して精査してみたが，ほかに遺物は出土しなかった。

１～３は同一母岩とみられるチャート製の剥片で，１・３は背面に自然面を残す。



第61図　旧石器時代石器

第19表　新開２遺跡　旧石器時代石器観察表

挿図番号	出土位置	遺物番号	種類	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
第61図1	E5-46	0001	剥片	チャート	28.11	21.56	11.85	5.80	ローム土付着
第61図2	E5-46	0001	剥片	チャート	24.91	19.49	7.31	3.31	ローム土付着
第61図3	E5-46	0001	剥片	チャート	60.29	39.06	11.30	23.30	ローム土付着

第20表　新開２遺跡　旧石器時代石器組成表

	剥片	計
E5-46	3	3
	32.41	32.41
計	3	3
	32.41	32.41

※上段…個数（単位：個）　下段…重量（単位：ｇ）

第２節　縄文時代

（１）土器（第62～68図，図版39～41）

新開２遺跡から出土した縄文土器を，以下の第１群から第６群に分類した。

第１群土器　撚糸文系土器

第２群土器　三戸式・田戸下層式に比定される沈線文系土器

第３群土器　田戸上層式～子母口式に比定される沈線文系土器～条痕文系土器

胎土に繊維を含まないか少し含むもので，器面に雑な擦痕や条痕が施されるか，または無文のもの

第４群土器　条痕文系土器

胎土に繊維を含み，表裏に貝殻条痕文の施されるもの

第５群土器　縄文時代前期の土器

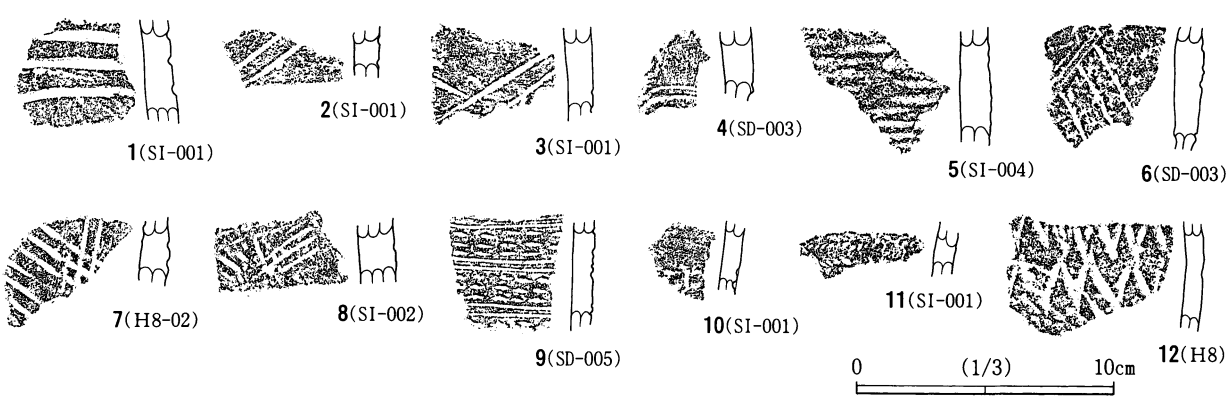
第６群土器　縄文時代中期以降の土器

第62図は第１群土器である。いずれも胎土に砂粒と黄褐色粒子を多く含み，器面は磨滅している。色調は，１は褐色，２は赤味を帯びた明褐色を呈す。

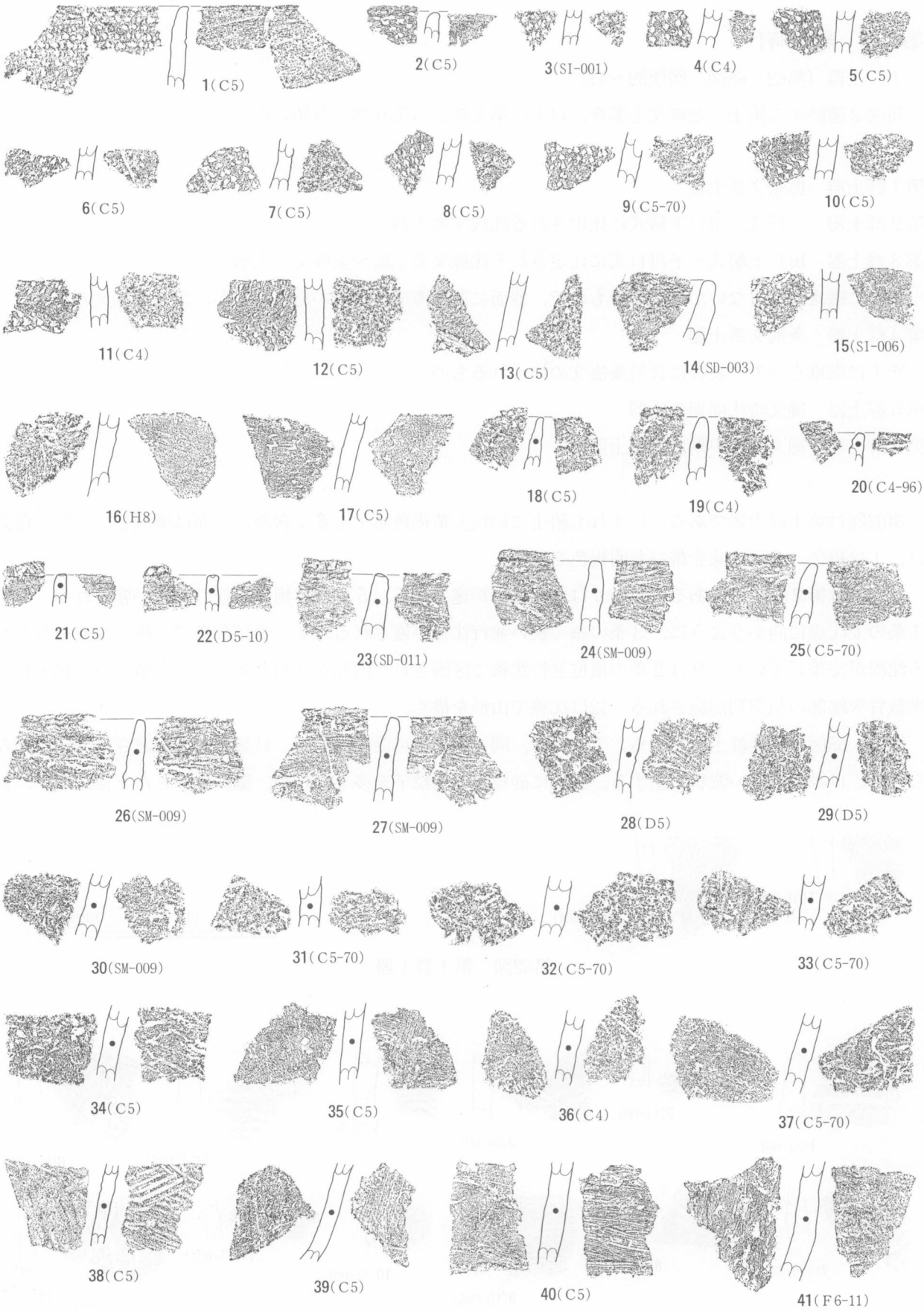
第63図は第２群土器である。１～４は並行沈線が施される。５は浅く幅広の並行沈線が施される。６は１条の太沈線に向かうように，３条の細く鋭い並行沈線が施される。７・８は数条で一組になるとみられる沈線が交差している。９は２条の横位並行沈線で区画された内部を３列の刺突列で充填する。10・11は半截竹管端部の刺突列が施される。12は沈線で山形を描く。

第64・65図は第３群土器である。１～13は，同一個体の可能性が高く，貝殻腹縁文が施されているとみられる。口縁部は緩い波状を呈する。胎土に砂粒・赤色粒子を多く含むが，繊維はほとんど含まない。14

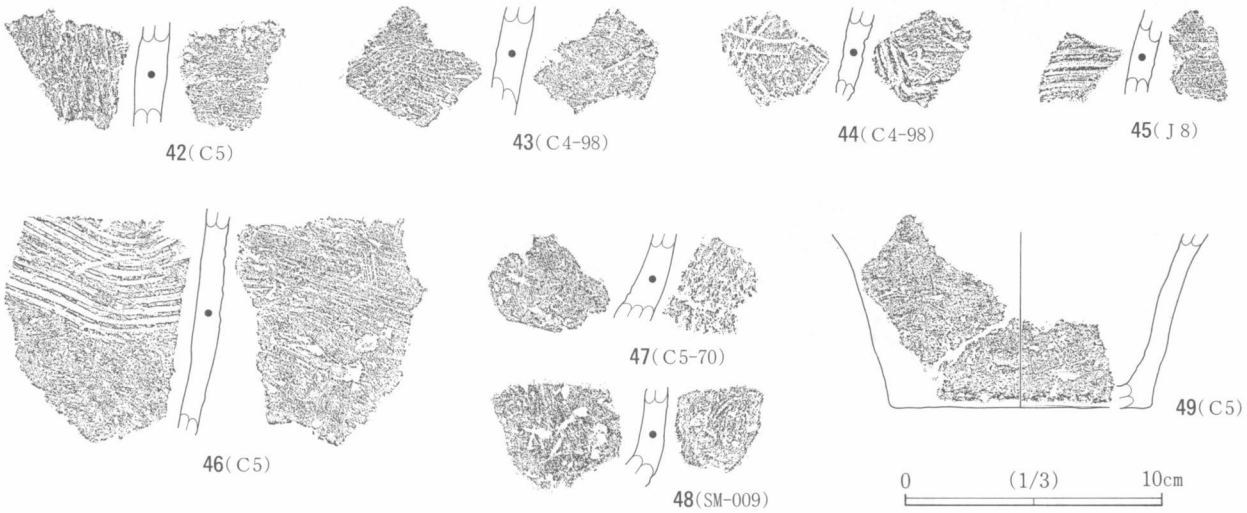
第62図　第１群土器



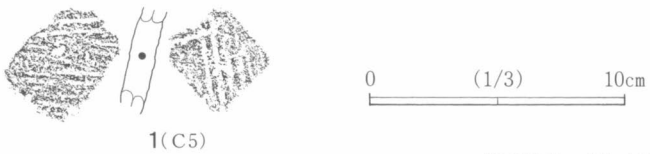
第63図　第２群土器


1(C5)
2(C5)
3(SI-001)
4(C4)
5(C5)
6(C5)
7(C5)
8(C5)
9(C5-70)
10(C5)
11(C4)
12(C5)
13(C5)
14(SD-003)
15(SI-006)
16(H8)
17(C5)
18(C5)
19(C4)
20(C4-96)
21(C5)
22(D5-10)
23(SD-011)
24(SM-009)
25(C5-70)
26(SM-009)
27(SM-009)
28(D5)
29(D5)
30(SM-009)
31(C5-70)
32(C5-70)
33(C5-70)
34(C5)
35(C5)
36(C4)
37(C5-70)
38(C5)
39(C5)
40(C5)
41(F6-11)
0
(1/3)
10cm

第64図　第３群土器（１）



第65図　第３群土器（２）



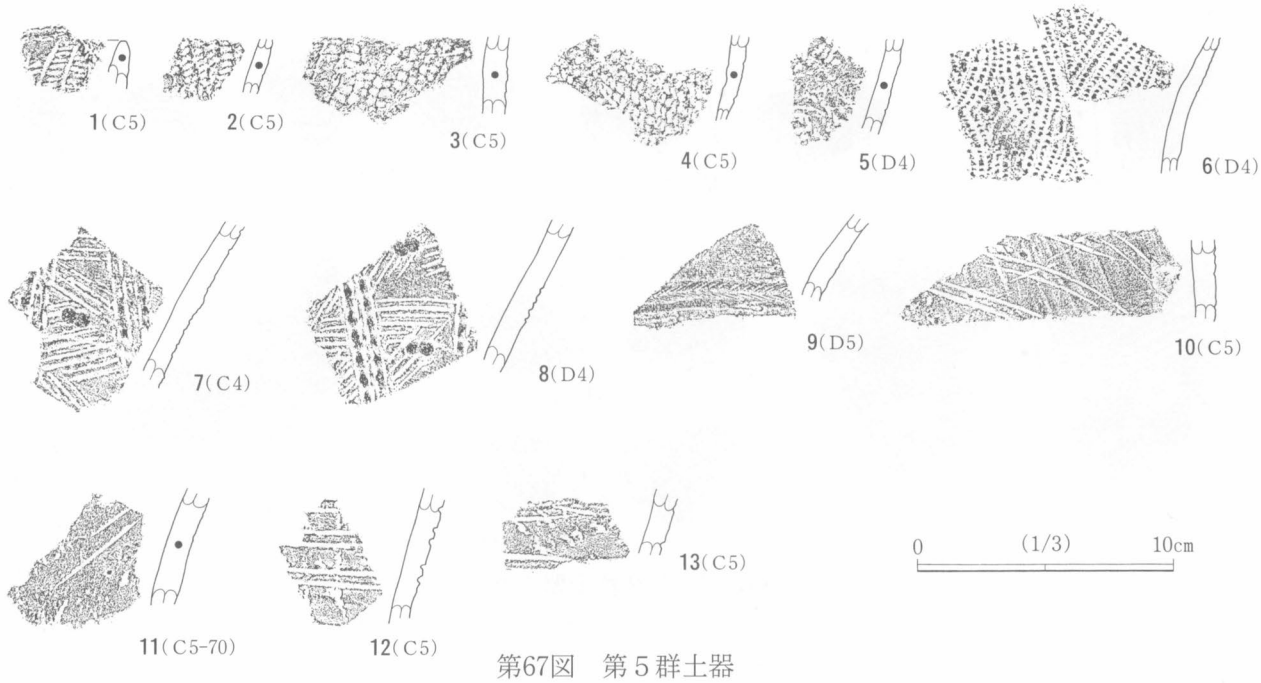
第66図　第４群土器

は無文で，波状口縁の頂部の破片である。15は器面が磨滅しているが，半截竹管によるとみられる沈線状の文様がある。18は器面の凹凸が著しい。口唇部は面取りされ，外面側の縁に刻みが施されている可能性もある。19の口縁部は緩い波状になる可能性がある。20・21は擦痕がみられる。口縁部は波状である。21は角状に面取りされた口唇部に半截竹管端部などによるとみられる刻みが観察される。22・23の口唇部には，半截竹管端部などによる刺突列が廻る。24・27の口唇部は面取りされ，口縁部は緩い波状になるとみられる。25・26も緩い波状口縁になるとみられる。28～37・39～45は擦痕が施される。38は内面に貝殻条痕文がみられる。46の外面には貝殻条痕文，内面には擦痕が施される。47・48も擦痕が施される。底部付近の破片と考えられる。49は平底の底部である。

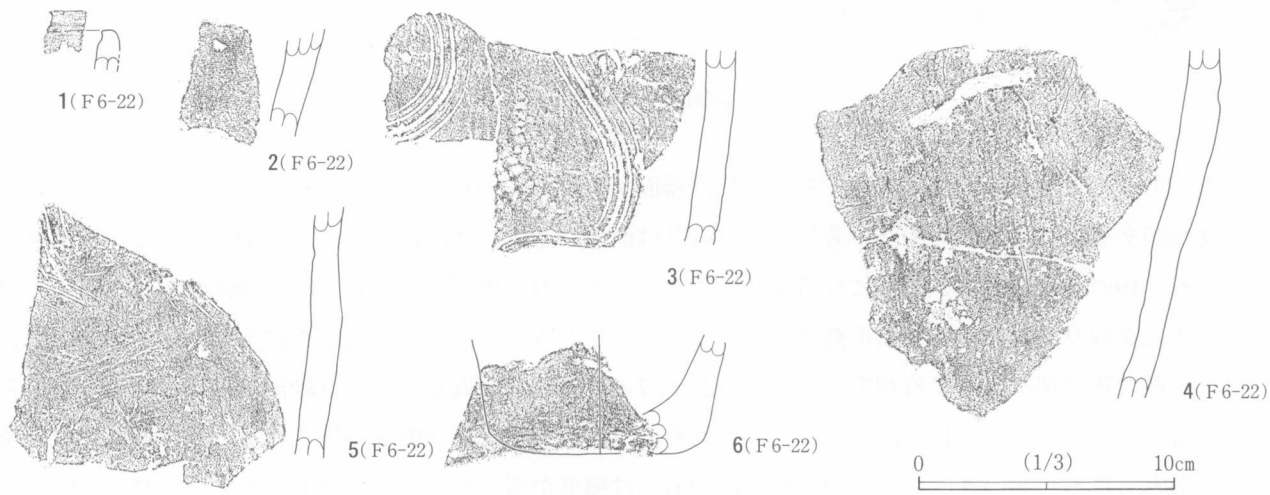
第66図は第４群土器である。１は表裏とも貝殻条痕文が施される。

第67図は第５群土器である。１～５は胎土に繊維を多量に含み，縄文を地文とする。６は，数条で一単位となる結節浮線文によって，菱形など幾何学的な文様が描かれている。７・８は同一個体とみられる。集合沈線を地文とし，２条の結節浮線文が垂下する。２個ずつ対になった小さなボタン状貼付文が施される。９はラッパ形に開く器形を呈すると考えられ，西御祈祷谷古墳群の土器（第26図５）と同一個体と考えられる。僅かに隆起する隆線上に爪形文が施される。10～13は半截竹管による並行沈線が施される。

第68図は第６群土器である。いずれも同一個体と考えられる。地文はほとんど無文のようであるが，大粒の浅い縄文が認められる破片もある。後期堀之内式に比定される深鉢と考えられる。全て同じ地点からまとまって出土したが，周辺を精査しても住居などの遺構は確認できなかった。



第67図　第５群土器



第68図　第６群土器

第21表　新開2遺跡　縄文土器表

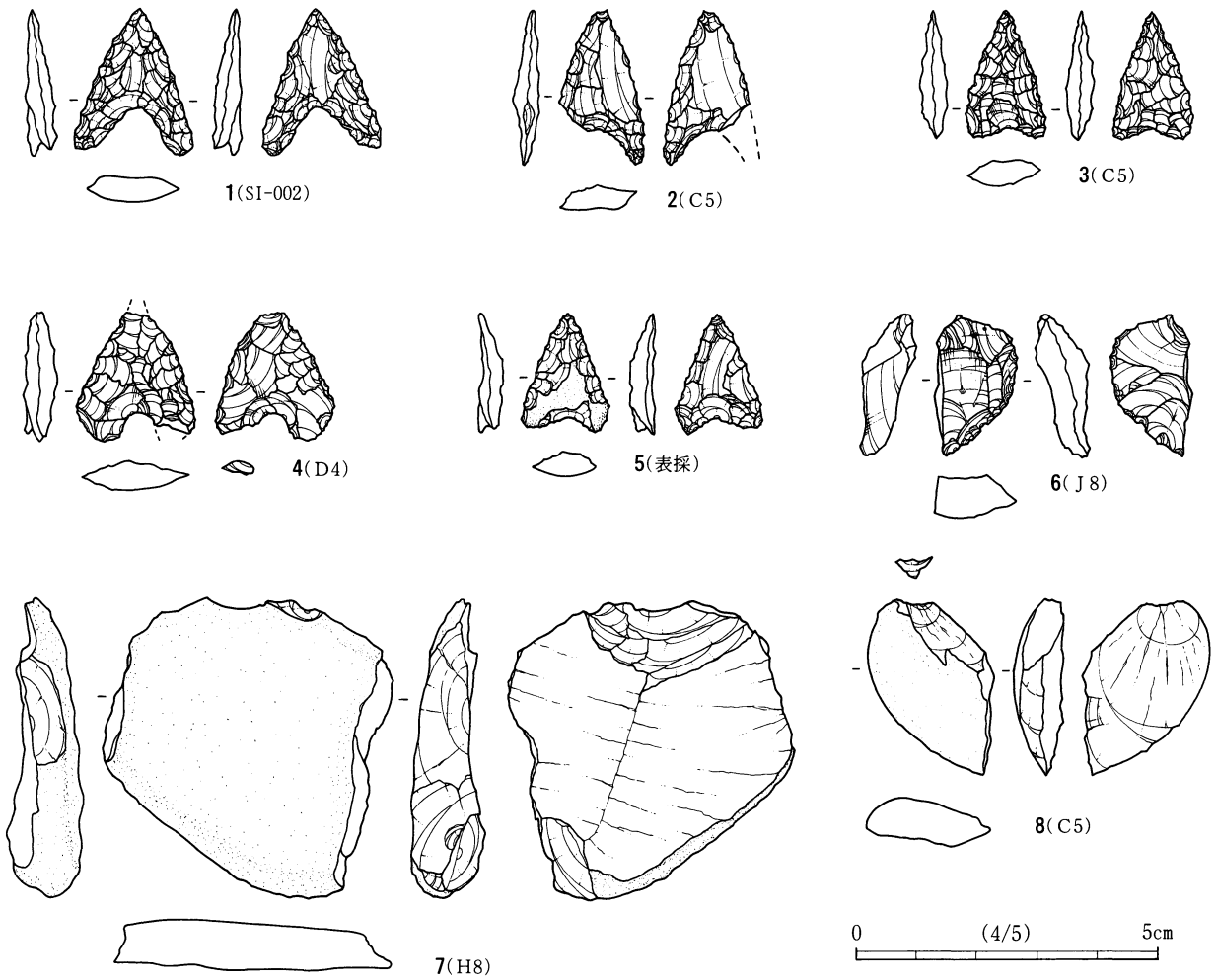
遺構番号	1群	2群	3群	4群	5群	6群	不明	合計
SI-001		6						6
		81.8						81.8
SI-002		2						2
		49.6						49.6
SI-004	2	2	1					5
	30.2	37.8	14.6					82.6
SD-003		3	1					4
		70.2	5.8					76.0
SD-006		1	2					3
		23.2	10.8					34.0

遺構番号	1群	2群	3群	4群	5群	6群	不明	合計
SD-007			1			1		2
			11.8			5.0		16.8
SD-008			2					2
			19.6					19.6
SD-011			2					2
			21.0					21.0
SM-009			9					9
			121.8					121.8
C4-98			6					6
			50.0					50.0
C5-70			20	2	2			24
			253.0	21.6	33.8			308.4
D5-10			1		1			2
			4.0		24.4			28.4
E5-07			5					5
			40.6					40.6
F6-11			1					1
			39.8					39.8
F6-22						11		11
						671.0		671.0
J9-43			1					1
			22.6					22.6
C4		2	16		4			22
		19.8	155.0		93.2			268.0
C5			58	1	9			68
			723.4	17.6	129.4			870.4
D4			2		3		1	6
			13.2		49.8		10.8	73.8
D5			1					1
			18.8					18.8
F5			1					1
			6.0					6.0
H8		4	5					9
		48.4	63.0					111.4
J8			1					1
			9.0					9.0

※上段…個数（単位：個）　下段…重量（単位：g）

（2）石器（第69図，図版38）

1～5は石鏃である。1は凝灰岩製である。2は安山岩製で，左基部を欠損している。側縁の調整は，正面・裏面とも，左側に集中的に施される。3は黒曜石製である。4は透明感のない黒曜石製である。右基部を欠損する。先端部もわずかに欠損しているとみられる。5はチャート製で，裏面はほぼ平坦であるが，正面は自然面を残し，断面形が丸みを帯びる。6は楔形石器で，右側縁に微細な剥離痕が観察される。7はホルンフェルス製の剥片で，背面は自然面，腹面はほとんど節理面である。8は安山岩製の剥片で，背面に自然面を大きく残している。



第69図　縄文時代石器

第22表　新開2遺跡　縄文時代石器観察表

挿図番号	出土位置	遺物番号	種　類	石　材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備　考
第69図1	SI-002	0024	石鏃	凝灰岩	23.65	18.90	4.71	1.06	
第69図2	C5	0001	石鏃	安山岩	24.90	14.10	4.15	1.00	
第69図3	C5	0001	石鏃	黒曜石	20.45	13.50	4.30	0.83	
第69図4	D4	0001	石鏃	黒曜石	21.09	19.59	5.41	1.41	
第69図5	表採	0001	石鏃	チャート	19.58	14.60	4.01	0.88	
第69図6	J8(1T)	0001	楔形石器	黒曜石	23.30	13.35	8.70	1.96	
第69図7	H8	0002	剥片	ホルンフェルス	49.15	47.48	11.98	34.63	
第69図8	C5	0001	剥片	安山岩	28.40	20.91	8.20	5.49	

第23表　新開２遺跡　縄文時代石器組成表

	石鏃	楔形石器	剥片	計
SI-002	1			1
	1.06			1.06
C5	2		1	3
	1.83		5.49	7.32
D4	1			1
	1.41			1.41
H8			1	1
			34.63	34.63
J8(1T)		1		1
		1.96		1.96
表採	1			1
	0.88			0.88
計	5	1	2	8
	5.10	1.96	40.12	87.18

※上段…個数（単位：個）　下段…重量（単位：ｇ）

第24表　新開２遺跡　縄文時代礫組成表

	砂岩				チャート				流紋岩				安山岩				泥岩				ホルンフェルス				その他				計
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	
SI-001					2 3.7	2 5.2									1 87.8						1 498.9								6 595.6
SI-002		1 49.6							1 911.2																				2 960.8
SI-004		7 601.2			7 217.5	8 208.1	2 87.1																			4 87.2	1 53.9		29 1255.0
SI-013	3 216.5	6 285.2			7 929.9	8 326.1	1 86.4		4 1022.2	2 132.7																2 14.2			33 3013.2
SI-014	2 98.3	4 126.1			2 261.4	1 22.7			1 117.5	1 24.7																2 33.5			13 684.2
SD-003					1 179.1	1 219.7				2 155.9																			4 554.7
SD-005	1 93.8					1 11.4				1 9.6																			3 114.8
SD-006		1 24.4																											1 24.4
SD-007					4 260.7	2 128.9	1 140.6																						7 530.2
SD-008	4 311.1	1 215.6			10 508.4	8 371.1																							23 1406.2
SD-009						1 22.7																							1 22.7
SD-011					2 401.2	1 104.3			1 18.7																				4 524.2
SD-012					1 18.3	1 13.2			1 123.7																				3 155.2
SM-009	4 526.5	10 838.7			5 328.8	3 334.1	2 63.3		1 75.5	4 237.6			1 55.6																30 2460.1
D4-26	1 216.8				2 15.6																								3 232.4
F6-02		1 14.2																											1 14.2
J9-43						1 24.8			1 218.8																				2 243.6
C4	3 57.7	4 83.3			3 77.1	7 150.9	2 63.8	1 7.8	2 324.8	1 17.8											1 31.8								24 815.0
C5		7 423.9			2 114.5	12 241.6				2 441.3																			23 1221.3
D4	1 106.1								1 390.6																				2 496.7
D5						4 430.6				1 28.5																			5 459.1
E5	3 17.3	3 57.7				3 84.3	2 12.3			3 163.1								2 7.2											16 341.9
H8	1 41.2	3 562.2							1 65.9	1 50.1																			6 719.4
I8		2 93.8			1 73.8	1 85.8																							4 253.4
J8		1 6.9								1 7.5																			2 14.4
表採					1 208.8					1 43.7																			2 252.5
計	23 1685.3	51 3382.8	0 0.0	0 0.0	50 3598.8	65 2785.5	10 453.5	1 7.8	14 3268.9	20 1312.5	0 0.0	0 0.0	1 55.6	0 0.0	1 87.8	0 0.0	0 0.0	2 7.2	0 0.0	0 0.0	2 530.7	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	8 134.9	1 53.9	0 0.0	249 17365.2

※Ａは焼成完形礫，Ｂは焼成破損礫，Ｃは自然礫（無焼成完形礫），Ｄは破損礫（無焼成破損礫）
上段…個数（単位：個）　下段…重量（単位：ｇ）

第３節　弥生～古墳時代

新開２遺跡で検出された弥生～古墳時代に比定される遺構は，竪穴住居跡５軒である。出土遺物はなるべく出土遺構とともに掲載したが，明らかに混入品とみられるものは遺構外出土遺物（第５節，第80図）として掲載した。

１　竪穴住居跡

SI-001（第70図，図版19・42・43・44）

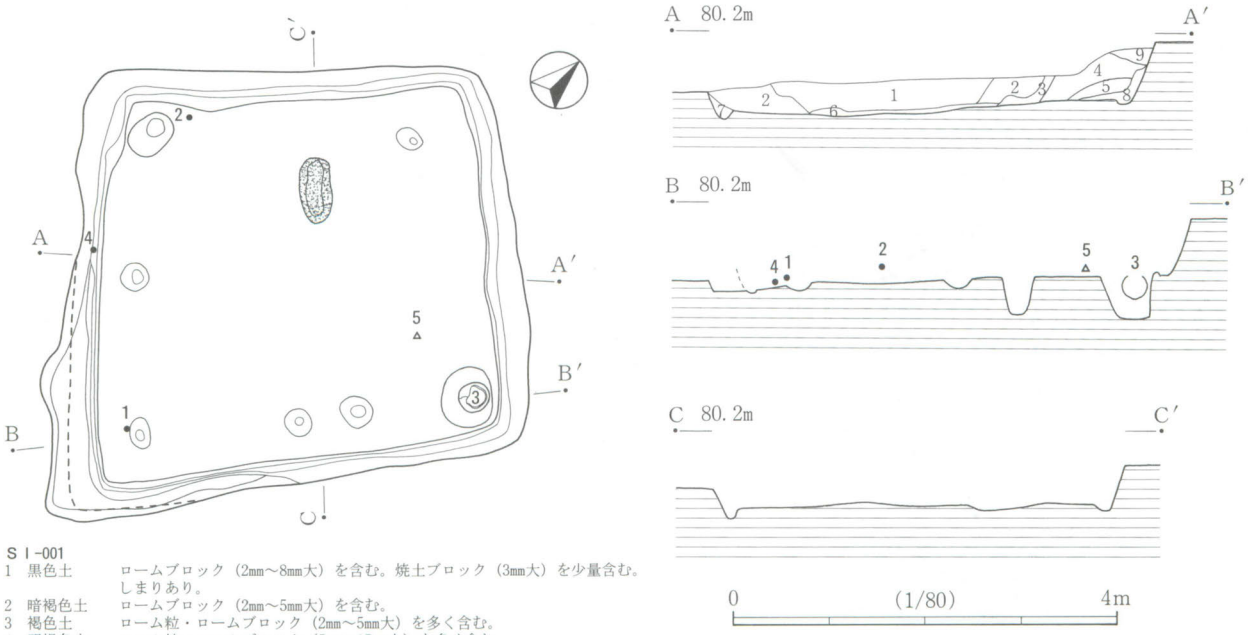
G7-14・23～25・33～35・44グリッドに位置する。南コーナー部は撹乱のためやや不明確ではあるが，プランはほぼ隅丸方形を呈する。北東壁の上部をSD-001に切られる。規模は北西－南東軸が4.3m，北東－南西軸が4.7mである。主軸方位はN-47°-Wである。床面はほぼ平坦であるが，顕著な硬化面は認められなかった。壁溝は，深さ最大約６cmほどで，全周する。床面からピットがいくつか検出されたが，東コーナー部のもの以外は，いずれもしっかりした掘形ではなく，機能は明らかでない。東コーナー部で検出されたものは貯蔵穴とみられ，中から胴部以下がほぼ完形の壺（第70図３）が正位で出土した。炉はほぼ中央ライン上に位置し，平面形は長径70cm，短径33cmの長楕円形を呈し，深さは約７cmである。火床はよく焼けて赤化していた。

図示した遺物は５点である。３はピット中からの出土，そのほかは床面近くの覆土中からの出土である。１・２は土師器高杯の杯部で，いずれもナデ調整によって仕上げられ，内外面とも赤彩が施される。２は器面が磨耗している。３は壺で，胴部以下が完全に遺存している。器面が磨滅しているが，外面は赤彩が施されているとみられる。内面は最大径以下で特に磨滅・剥落が著しい。底部は丸みを帯び，やや不安定である。４は小型甕で，同一個体とみられる上半部と下半部を図上で復元したものである。口縁部は全周するが，上部からみると正円形ではなく楕円形状を呈する。体部最大径付近はかなり器厚が薄くなるようである。５は滑石製の勾玉である。最大長16.8㎜，最大幅10.8㎜，最大厚4.0㎜，重さ0.88ｇで，両面穿孔とみられ，孔径は1.6㎜である。

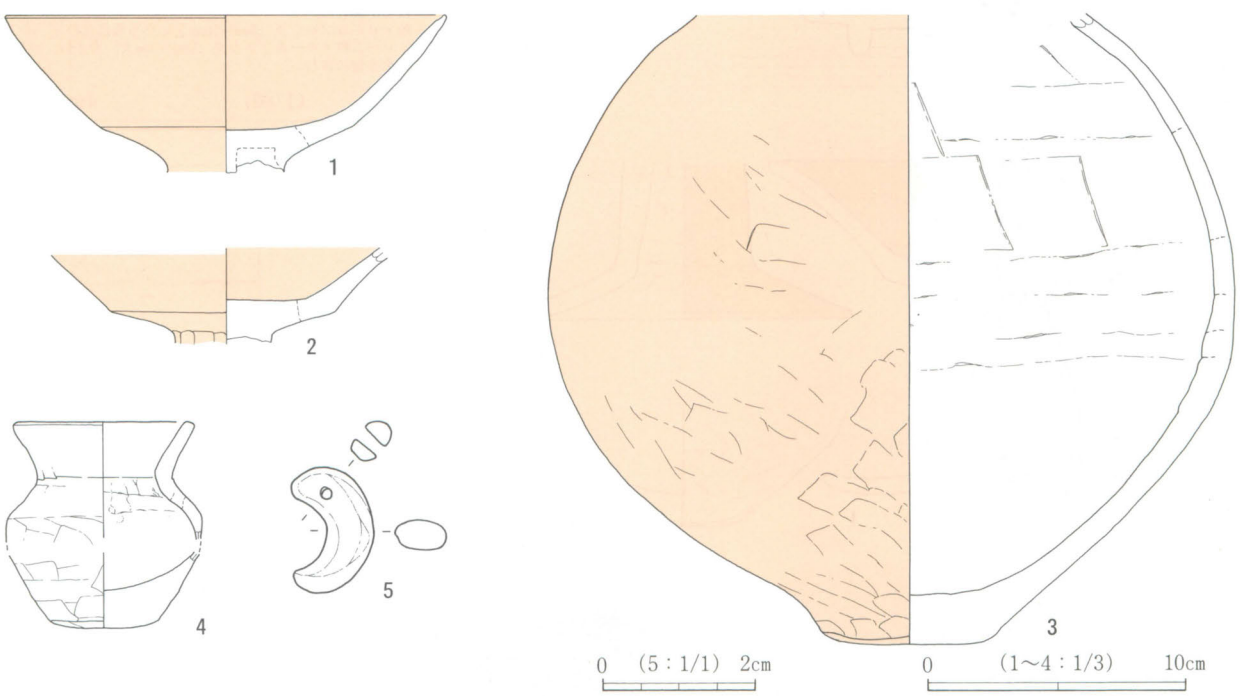
SI-002（第71図，図版20・42）

G6-49・59・69・G7-40・41・50～52・60・61・70・71グリッドに位置する。南向きの斜面に立地し，検出時には大きな住居が小さな住居を内包するように切り合う２軒の住居と思われたが，結果的には谷状の落込み部に営まれた１軒の住居であることが判明した。プランはあまり明確には捉えられなかったが，北西辺から北コーナー部，北東辺にかけての壁が本来の形状をほぼとどめていると考えられ，隅丸方形を呈すると考えられる。規模は推定で北西－南東軸が4.1mである。北東－南西軸は，南西部が調査区外にあり，計測不能である。主軸方位はN-55°-Wである。床面はほぼ平坦であるが，顕著な硬化面は認められなかった。床面からはピットがいくつか検出されたが，いずれもしっかりした掘形ではなく，主柱穴と考えられるものはない。中央にあるのは，床面で検出した土坑で，深さは約10cmである。住居とは関係のない土坑と考えられる。炉はほぼ中央ライン上に位置し，平面形は長径56cm，短径48cmの楕円形を呈し，深さは約７cmである。火床はあまり焼けていなかった。

図示した遺物は８点である。４～６・８は床面近くから，その他は覆土中からの出土である。１・２は

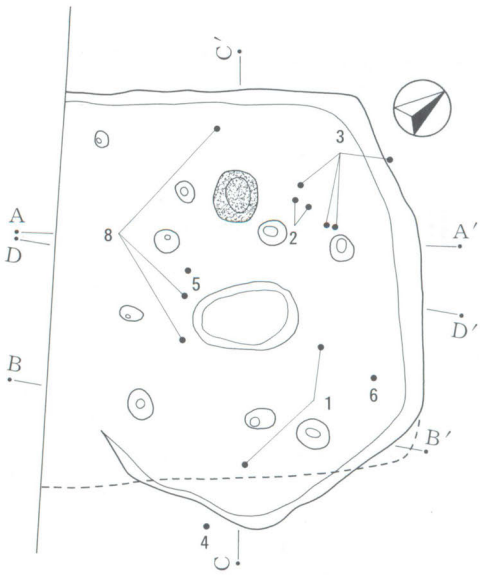


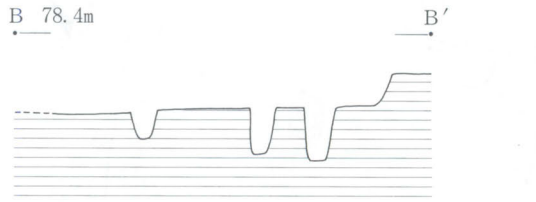
SI-001
1 黒色土　ロームブロック（2mm～8mm大）を含む。焼土ブロック（3mm大）を少量含む。しまりあり。
2 暗褐色土　ロームブロック（2mm～5mm大）を含む。
3 褐色土　ローム粒・ロームブロック（2mm～5mm大）を多く含む。
4 明褐色土　ローム粒・ロームブロック（5mm～15mm大）を多く含む。
5 褐色土　ローム粒を含む。黒色土粒を少量含む。
6 黄褐色土　黒色土粒を少量含む。
7 暗黄褐色土　暗褐色土を含む。
8 暗黄褐色土　ローム粒・暗褐色土を含む。
9 暗褐色土　ローム粒を少量含む。

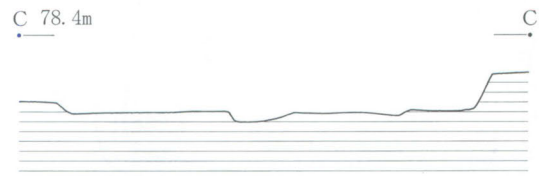


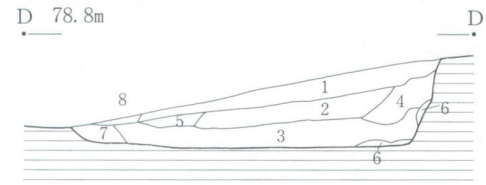
第70図　SI-001と出土遺物

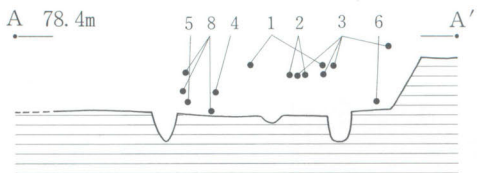
土師器高杯である。１の脚部内面は，絞り目を消すようにヘラケズリが横方向に施され，裾部内面はヨコナデとなっているが，その境界の屈曲部には帯状に布目痕が観察される。２は器面が磨耗している。３は口縁部がほぼ全周する土師器甕である。内面頸部付近に輪積み痕が観察される。４～７は底部で，５の内面にはミガキが施される。６は輪積み部で破損している。７は胎土が粗く，器面が磨滅しているが，外面に赤彩が施されている。８は器面が磨耗してはっきりしないものの，外面に赤彩が施されているとみられる。復元胴部最大径は36.0cmを測る。







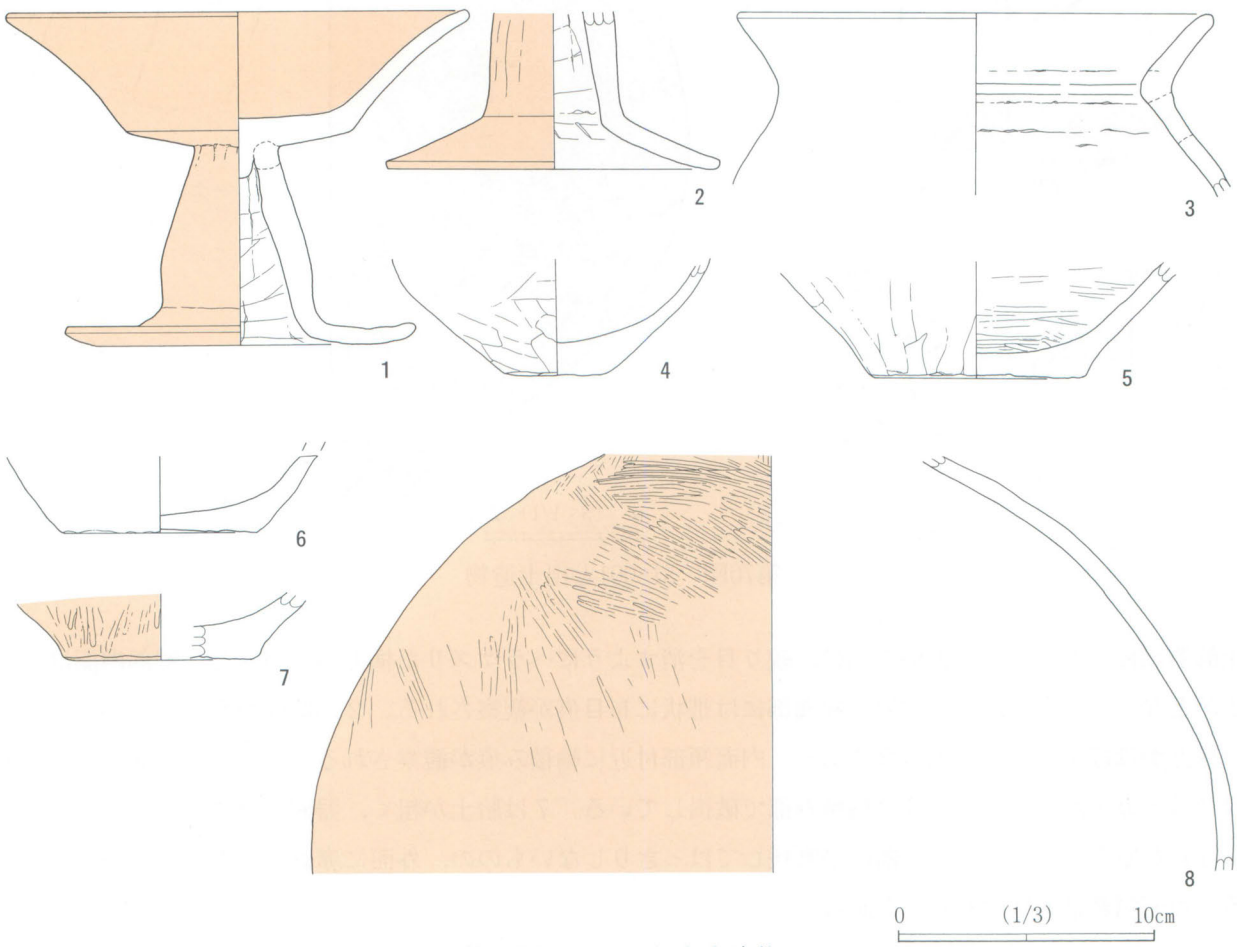




S I -002

1 暗褐色土　ローム粒・ロームブロック（5mm大）・黒色土を含む。
2 黒褐色土　黒色土を多量に含む。ローム粒・ロームブロック（3mm～5mm大）を少量含む。黒味の強い色調。
3 暗褐色土　ローム粒・ロームブロック（5mm～15mm大）を多量に含む。
4 黒褐色土　黒色土を含む。ローム粒・ロームブロック（3mm大）を少量含む。
5 黒褐色土　ローム粒を少量含む。
6 黄褐色土　ローム粒・ロームブロック（5mm～10mm大）を多量に含む。
7 暗褐色土　黒色土・ローム粒・ロームブロック（2mm～3mm大）を含む。
8 黒褐色土　ローム粒を多量に含む。

0　(1/80)　4m



第71図　SI-002と出土遺物

SI-004（第72図，図版20・42・43）

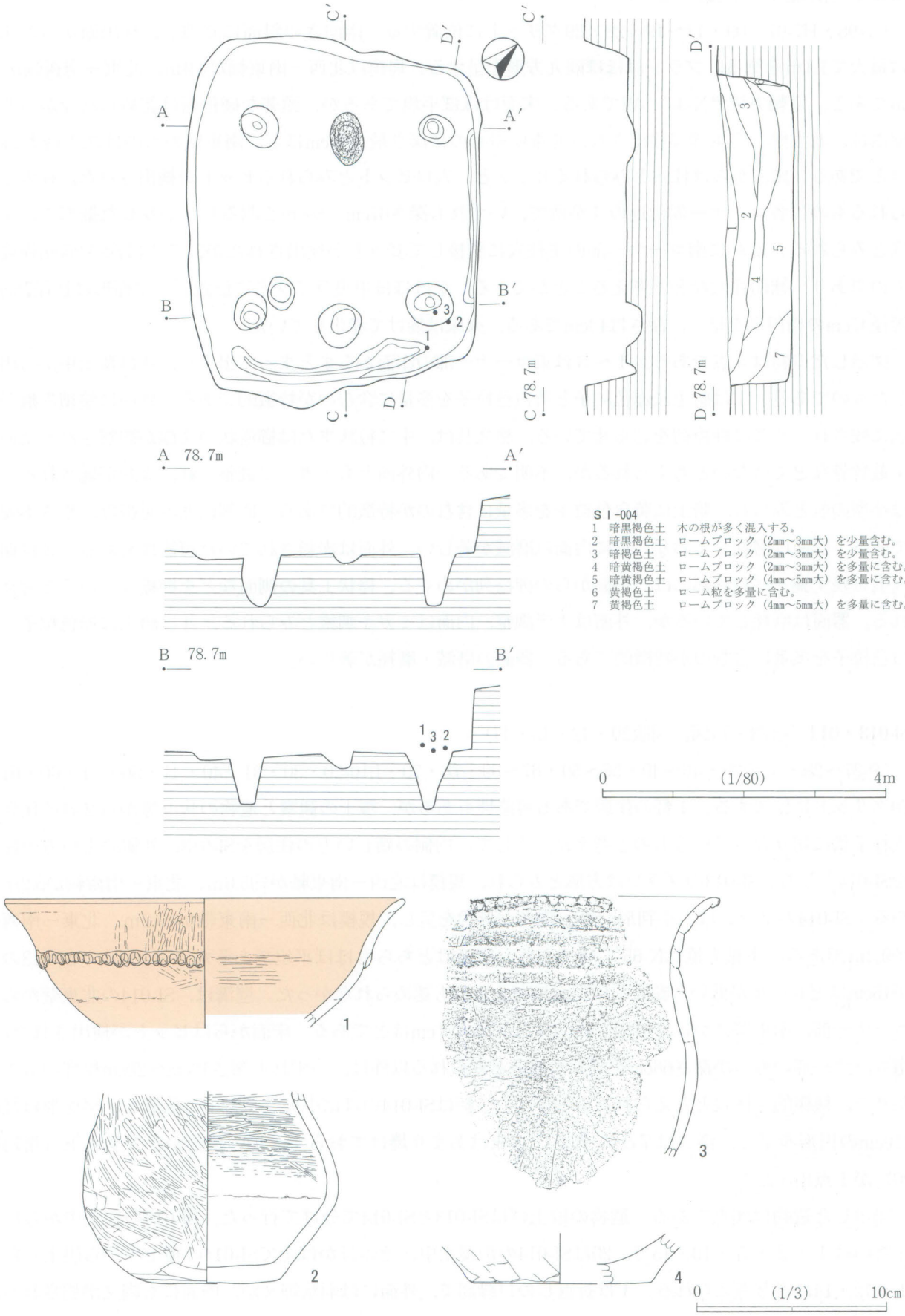
G7-98・H7-07～09・17～19・28・29グリッドに位置する。南向きの斜面に立地し，検出面からの深さは最大で1.1mを測る。プランはほぼ隅丸方形を呈する。規模は北西－南東軸が4.9m，北東－南西軸が4.1mである。主軸方位はN-44°-Wである。床面はほぼ平坦であるが，顕著な硬化面は認められなかった。壁溝は，北東壁と南東壁で検出され，北東壁のものは深さ最大３cmほど，南東壁のものは深さ最大14cmほどである。床面からは柱穴とみられるピットと，入口ピットとみられるピットが検出された。柱穴とみられるものは各コーナー部付近の４か所で，いずれも深さ67cm～89cmを測るしっかりした掘形で，主柱穴とみられる。ほかに南コーナー部の主柱穴に隣接してピットが検出されたが，これは深さ25cm程度のものであり，補助柱穴などと考えることができる。炉はほぼ中央ライン上に位置し，平面形は長径75cm，短径47cmの楕円形を呈し，深さは14cmである。火床は焼けて赤化していた。

図示した遺物は４点である。１～３は東コーナー部の床面からまとまって出土し，４は覆土中から出土したものである。１は胎土に赤色粒子と黄白色粒子を多量に含むのが特徴的である。外面に輪積み痕が段状に残され，そこに押捺列を廻らせている。施文具は，中に粒状または櫛歯状の文様が観察されるため，半截竹管などではないと考えられるが，不明である。内外面ともミガキで調整され，赤彩が施される。２は小型の壺とみられ，胎土に黄白色粒子を多量に含むのが特徴的である。底部は丸みを帯び，やや不安定である。器面は磨耗しており，特に内面は磨滅が著しい。外面は赤彩されていた可能性もある。３は輪積み痕を残す甕で，口唇部には，正面からの押捺列がめぐる。棒状工具の側面などを押捺していると考えられる。器面は磨耗しているが，外面はナデ調整，内面はミガキ調整とみられる。４は胎土に赤色粒子と黄白色粒子を多量に含むのが特徴的である。器面の磨滅・磨耗が著しい。

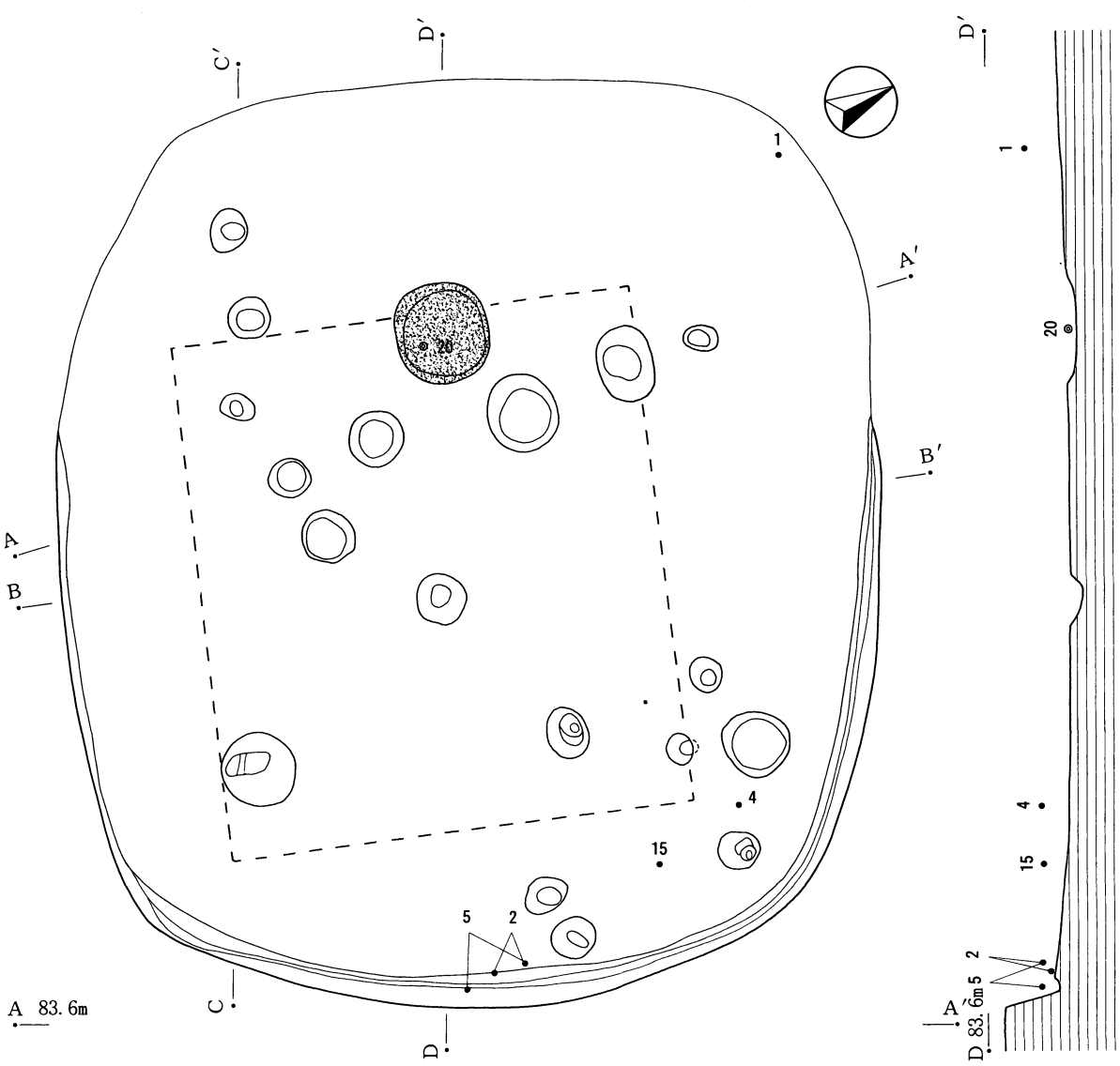
SI-013・014（第73・74図，図版20・42・43・44）

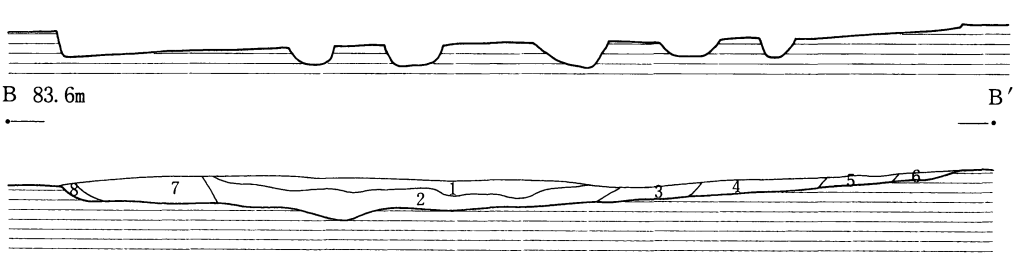
L9-27～29・37～39・46～49・56～59・67～69・78・79・L10-20・30・31・40・41・50・51・60・61・70グリッドに位置する。１軒の住居である可能性もあるが，覆土の観察と遺物の状況等から２軒の住居が入れ子状に切り合っているものと考えた。そして，内側の新しい方の住居をSI-013，外側の古い方の住居をSI-014とした。SI-013のプランは方形とみられ，規模は北西－南東軸が約5.6m，北東－南西軸が5.2mである。SI-014のプランは，小判形ないし隅丸方形状を呈し，規模は北西－南東軸が10.2m，北東－南西軸が9.2mである。主軸方位はN-65°-Wである。床面はどちらもほぼ平坦であるが，SI-014よりSI-013の方が15cmほどレベルが低い。顕著な硬化面はどちらにも認められなかった。壁溝は，SI-014の北東壁から東コーナー部，南東壁にかけて検出され，深さは最大７cmほどである。床面からはピットが検出されたが，南コーナー部のものが深さ66cmを測り，柱穴とみられる以外は，いずれも深さ10cm～20cm程度のものばかりで，積極的に柱穴と考えられるものはない。炉はSI-014のほぼ中央ライン上に位置し，平面形は径約110cmの円形を呈し，深さは７cmである。火床はあまり焼けておらず，炉の覆土からガラス玉（第74図20）が１点出土した。

図示した遺物は20点である。遺物の取上げはSI-013とSI-014で分けて行った。SI-013の覆土中から出土したのは１・２・５・10・15で，20はSI-014の炉覆土中，そのほかは全てSI-014の覆土中から出土した。１～12・14は壺と考えられる。１は折返しの口縁部で，外面には羽状縄文が，内面にも縄文が施される。２も折返しの口縁部で，折返し端部にヘラ状工具による刻み列が施される。内外面とも赤彩が施される。



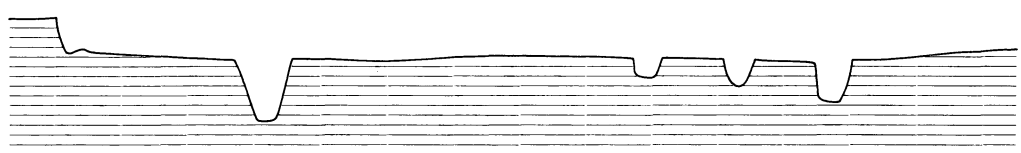
第72図　SI-004と出土遺物





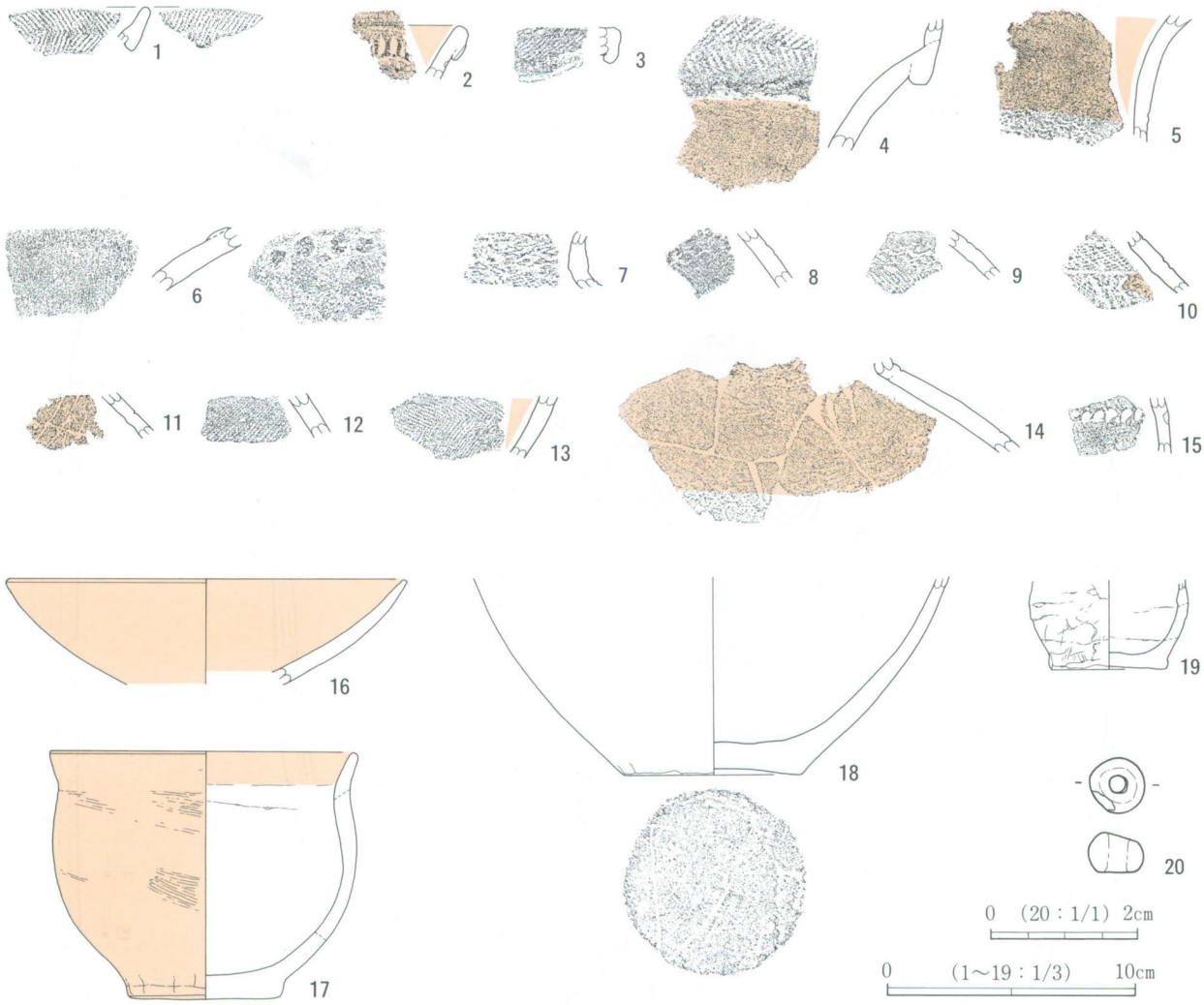
S I -013・014

1	黒色土	ロームブロック（3mm～5mm大）を含む。
2	黒褐色土	ローム粒・ロームブロック（2mm～3mm大）を少量含む。
3	暗褐色土	ロームブロック（2mm～5mm大）を含む。
4	暗褐色土	ローム粒・ロームブロック（3mm～10mm大）を多量に含む。
5	暗褐色土	ローム粒・ロームブロック（2mm～3mm大）を少量含む。
6	暗黄褐色土	ロームブロック（2mm～3mm大）を少量含む。
7	暗褐色土	ロームブロック（2mm～3mm大）を含む。ローム粒を少量含む。
8	暗褐色土	ローム粒・ロームブロック（2mm～3mm大）を少量含む。7層より明るい色調。



0 (1/80) 4m

第73図　SI-013・014



第74図　SI-013・014出土遺物

３は外面に縄文が施され，平坦な口唇部にはＳ字状結節文が施されているとみられる。４は折返し部に羽状縄文が施され，外面無文部に赤彩が施される。内面も赤彩の可能性があるが，器面が磨耗してはっきりしない。胎土に雲母粒が目立つ。５は破片下端部にＳ字状結節文が施される。施文部以外は赤彩されている。内面にも赤彩がみられるが，下端部には施されていないようである。６は大きく口の開く器形の壺と考えられる。器面の磨滅・磨耗が著しく，調整等の観察はかなり困難だが，内面上部には縄文と円形浮文が，下部にはＳ字状結節文が施されているとみられる。外面は無文とみられる。内外面とも赤彩の可能性がある。７は頸部破片で，器面の磨滅が著しいが，屈曲部上部にはＳ字状結節文が，下部には網目状撚糸文が施されているとみられる。８はＳ字状結節文が施される。器面が磨耗して明らかではないが，赤彩の可能性がある。９は破片中央部にＳ字状結節文が，下部に縄文が施される。器面が磨耗しているが，赤彩されている可能性が高い。10は沈線区画内に斜格子文を施し，無文部は赤彩される。11は鋭い沈線が施される。12は非常に節の細かい縄文が施文されている。13は鉢で，外面には羽状縄文が施される。内面は赤彩される。14は破片上端部と下端部にＳ字状結節文が施される。15は輪積み痕部に刺突列の廻る甕である。16は内外面とも器面の磨耗・剥落が著しいが，赤彩が施されている。17は内面，特に底部の磨滅・剥落が著しい。18の底部は上げ底気味で木葉痕がみられる。内面は煤けて黒色を呈する。19は土師器の小型甕と考えられる。胎土に赤色粒子を多量に含むのが特徴的である。外面に赤彩が施されている可能性もある。20はガラス玉で，径7.5㎜，最大厚5.7㎜，重さ0.34ｇである。色調はコバルトブルーを呈する。

第４節　奈良・平安時代以降

新開２遺跡で検出された奈良・平安時代以降に比定される遺構は，塚１基と溝状遺構11条である。

１　塚

SM-009（第75・76図，図版21～23・42・44）

J9-98・99・K9-08・09・18・19・28・29・J10-90・91・K10-00・01・10・11・20・21グリッドに位置する。東側は削平されているとみられる。調査前は，周辺よりはやや高まっていたものの，西御祈祷谷古墳群の塚のように盛土があるようには見えなかった。しかし，御神木とみられる太い木があり，その根本に明治紀年名の石祠（図版21）があったため塚と考え，SM-009の遺構番号を付して，古墳転用の可能性も考慮しながら調査を行った。その結果，塚は近世以降，低い盛土を伴って造られたもので，古墳の転用の可能性はないことが明らかになった。盛土の高さは20cmほどであった。盛土除去後，盛土の下に溝状遺構と焼土の堆積が検出された。焼土の堆積は塚に伴う可能性もあるが，溝状遺構はSD-016とつながる道である可能性が高い。

また，この塚に南接して，人骨が１体出土した。掘込みははっきりしなかったが，塚の盛土下で検出された溝状遺構に一部切られていた。古寛永１枚を伴っており明らかに近世以降の人骨と考えられるため，発掘調査は行わず，古寛永のみ取り上げ，掲載した（第80図８）。

図示した遺物は５点である。いずれも盛土中，あるいは裾部から出土したものである。１は恵比寿様を象ったとみられる土製品である。中空である。型押しによって腹側と背側をそれぞれ別に作り，貼り合わせた後，下部を別の粘土で閉じているようである。２は石祠の扉の破片と考えられる。折損しているが，宝珠形の透窓があるとみられる。正面は丁寧な造りであるが，裏面は粗雑なままである。３はメノウ製の火打石と考えられる。稜線に磨耗がみられる。最大長20.5㎜，最大幅22.2㎜，最大厚15.5㎜，重さ7.56ｇである。４は寛永通宝で，古寛永である。５は竜半銭銅貨である。

２　溝状遺構

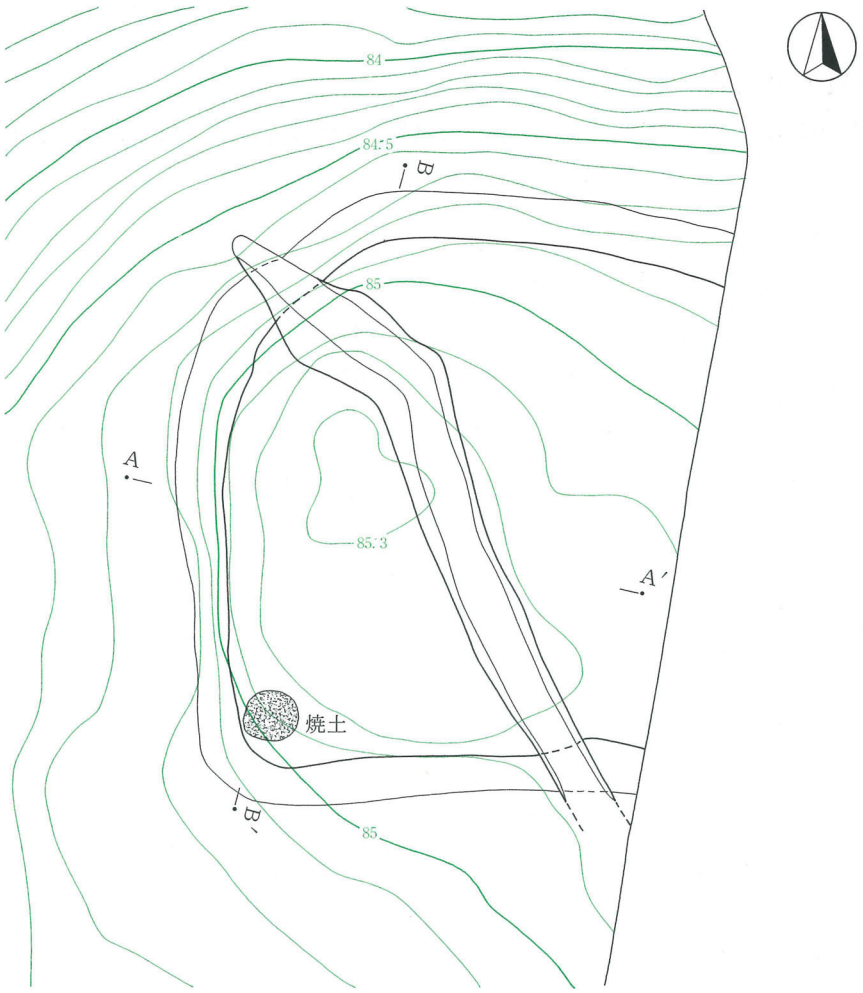
SD-003（第30・77図，図版23・44）

南向きの緩斜面を，北西－南東方向に，SD-004・SD-005と並行するように直線的に伸びる溝状遺構である。いったん削平により途切れるが，検出された長さは復元値で約58m，幅は約0.9m～2.1m，深さは20cm～30cmで，断面形は緩いU字形である。覆土は黒褐色土や暗褐色土を主体とする。底面のみでなく，間層に複数の硬化面がみられ，遺物や遺構の状況などから，平安時代～中世頃機能していた道と考えられる。

図示した遺物は２点である。１はロクロ土師器の口縁部から体部上半の破片である。２は灰釉陶器瓶類の頸部片である。外面黄緑色，内面灰白色の釉が見られる。

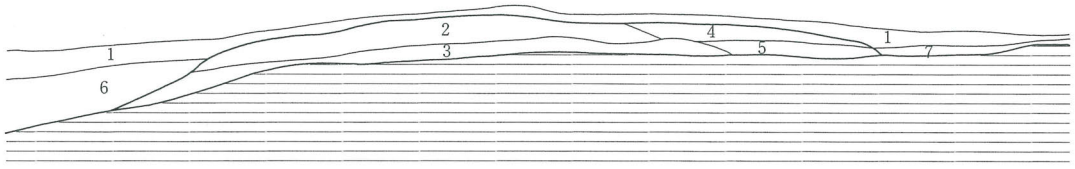
SD-004（第30図，図版23）

南向きの緩斜面を，北西－南東方向に，SD-003・SD-005と並行するように直線的に伸びる溝状遺構である。検出された長さは全体で約11m，幅は約0.6m～0.8m，深さは15cm～20cmで，断面形は緩いU字形

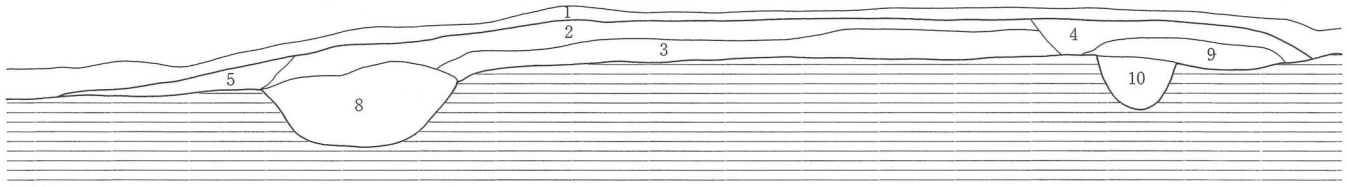


0 (1/80) 4m

A 85.8m　　A′



B 85.8m　　B′



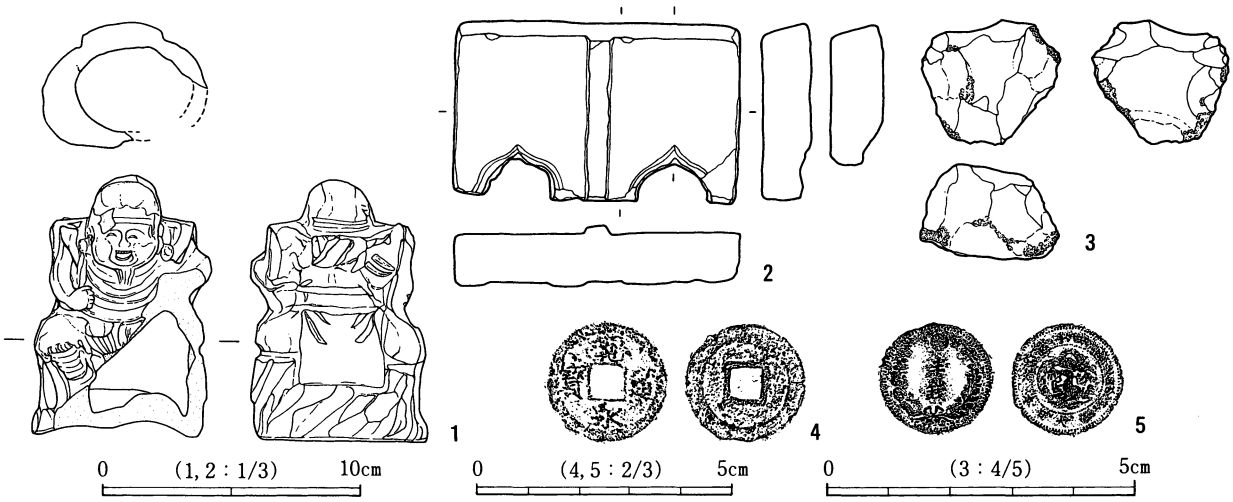
SM-009

1　腐葉土　全くしまりなし。
2　黄褐色土　ロームブロック（5mm～10mm大）を多量に含む。しまりなし。
3　暗褐色土　ロームブロック（5mm大）を含む。ややしまりなし。
4　暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロック（5mm大）を含む。ややしまりなし。
5　暗褐色土　ロームブロック（5mm～10mm大）を多量に含む。しまりなし。3層・7層より明るい色調。
6　暗褐色土　ローム粒を少量含む。
7　暗褐色土　ローム粒を少量含む。6層より明るい色調。
8　黒褐色土　ローム粒を少量含む。ややしまりあり。
9　暗褐色土　焼土ブロック（5mm大）を少量含む。
10　暗褐色土　焼土粒・焼土ブロック（5mm大）を多量に含む。

※1層：表土層、2層～5層：盛土層、6層・7層：崩土層、8層：盛土下溝覆土、9層・10層：盛土下焼土堆積ピット覆土と考えられる。

0 (1/40) 2m

第75図　SM-009



第76図　SM-009出土遺物

である。覆土は黒褐色土や暗褐色土を主体とする。底面が硬化しており，遺構の状況などから，平安時代～中世頃機能していた道と考えられる。遺物は出土していない。

SD-005（第30図，図版24）

南向きの緩斜面を，北西－南東方向に，SD-003・SD-004と並行するように直線的に伸びる溝状遺構である。検出された長さは全体で約18m，幅は約1.6m～2.3m，深さは40cm～55cmで，断面形は緩いU字形である。覆土は暗褐色土を主体とする。底面のみでなく，間層に複数の硬化面がみられ，遺物や遺構の状況などから，平安時代～中世頃に機能していた道と考えられる。

SD-006（第30図，図版24）

調査区の北端で，互いに直交するSD-001とSD-002を斜めにつなぐように位置する溝状遺構であるが，両者との新旧関係は明らかでない。検出された長さは全体で約４m，幅は約0.4m～0.8m，深さは約10cmで，断面形は緩いU字形である。覆土は暗褐色土を主体とするが，一部平面形が膨らむ部分に炭化物の堆積がみられた。硬化面もみられず，遺物も出土していない。

SD-007（第30・31図，図版24）

尾根筋を走るSD-008と並行して直線的に伸びる溝状遺構である。検出された長さは全体で約25m，幅は約0.8m～1.1m，深さは約15cmで，断面形は緩いU字形である。覆土は５㎜～10㎜大のロームブロックを含む暗褐色土であった。検出面に近いレベルに硬化面があり，方向からSD-003とつながる道である可能性もあるが，遺構底面が硬化していないなど，SD-003とは異なる状況もみられる。遺物は土師器が僅かに出土したが，遺構の状況から中世以降の道とするのが妥当と考えられる。

SD-008（第30・31・79図，図版25・44）

尾根筋を走るSD-001に続くように伸びる溝状遺構であるが，途中からＹ字状に分かれている。調査時は，重複する部分の土層の観察により，新しくてSD-001に続くと思われる方を「SD-008上」，古くて南側緩斜面に向かう方を「SD-008」と呼び分けたが，ここではまとめて報告することとした。もともとは南

向き緩斜面を下っていくような溝状遺構であったのが，やや軸を変えて尾根筋をSD-001につながるような溝状遺構になったと考えられる。検出された長さは，直線的に伸びる「SD-008上」で最大約60m，分岐した「SD-008」の部分のみは約20mである。幅は約1.0m～2.2m，深さは10cm～55cmで，断面形は緩いU字形を呈する。SD-009と交差するが，土層断面の観察により，SD-009より新しいと判断される。覆土は暗褐色土・黒褐色土を主体とし，遺構底面のみでなく間層に複数の硬化面がみられた。道として機能していたものと考えられる。遺物は多くはないが，近世陶磁器が主体的である。

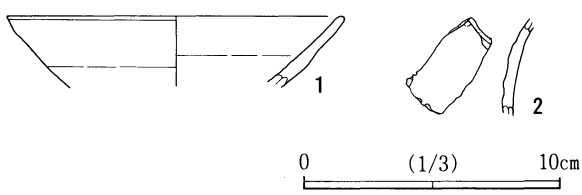
図示した遺物は２点である。いずれも凝灰岩製の砥石で，１は最大長37.2mm，最大幅37.5mm，最大厚23.2mm，重さ41.85ｇである。折れていると考えられるが，この状態のままで二次焼成を受けているとみられ，折れ面も含め全面的に黒く煤けている。２は最大長40.8mm，最大幅40.5mm，最大厚30.5mm，重さ66.33ｇである。１ほどではないが，やや煤けている。

SD-009（第31図）

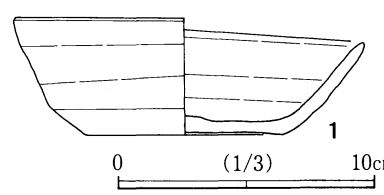
南向きの緩斜面に沿って，北西－南東方向に伸びる溝状遺構である。検出された長さは約21m，幅は約0.75m，深さは15cm～25cmで，断面形は緩いU字形である。覆土は暗褐色土を主体とするが，上層に宝永火山灰の薄い堆積層がみられた。土層断面の観察から，重複するSD-008よりは古く，SD-010よりは新しいと判断される。底面のみでなく間層に複数の硬化面がみられ，道として機能していたと考えられる。遺物は近世陶磁器が少量出土した。

SD-010（第31図，図版25）

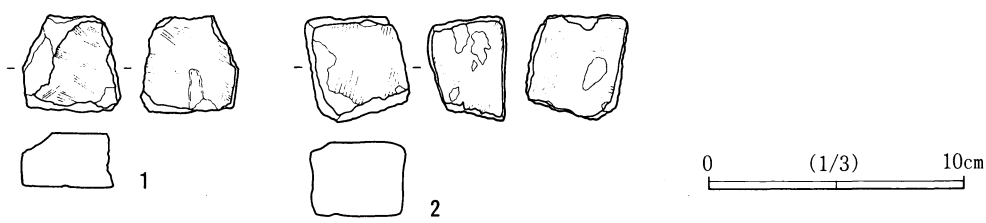
南向きの緩斜面に，北西－南東方向に伸びる溝状遺構である。検出された長さは約９m，幅は約1.0m，深さは約13cmで，断面形は緩いU字形である。検出面の状況から，重複するSD-009より古いと判断される。底面が硬化しており，道として機能していたと考えられる。遺物は出土していない。



第77図　SD-003出土遺物



第78図　SD-012出土遺物



第79図　SD-008出土遺物

SD-011（第31図）

尾根筋に向かって緩斜面に直交するように，ややカーブを描きながら北東－南西方向に伸びる溝状遺構である。南端と北端はそれぞれ調査区外の現道につながっていくようである。検出された長さは約40m，幅は約1.4m～2.6m，深さは約20cmで，断面形は緩いU字形である。覆土はローム粒（5㎜大）やロームブロック（5cm大）を含む暗褐色土を主体とし，底面が硬化していた。道として機能していたと考えられる。遺物は土師器が少量出土したが，遺構の状況から中世以降の所産と考えられる。

SD-012（第30・78図，図版25・42）

南向きの緩斜面を，北西－南東方向に直線的に伸びる溝状遺構である。南側は途切れるが，北側は調査区外へ続く。検出された長さは約24m，幅は約0.8m～2.7m，深さは約45cmで，断面形は緩いU字形である。覆土は黒褐色土や暗褐色土を主体とする。底面が硬化しており，遺物や遺構の状況などから，平安時代～中世頃に機能していた道と考えられる。

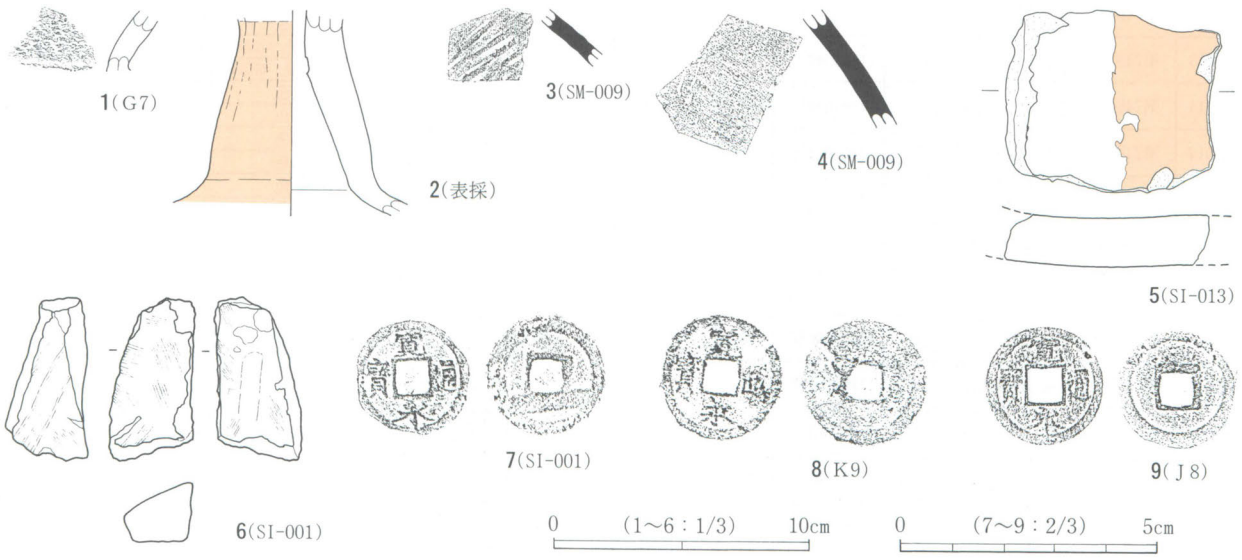
図示した遺物は1点である。1はロクロ土師器杯である。遺構の底面近くから出土した。体部外面下半及び底部外面には回転ヘラケズリが施される。9世紀中葉を中心とする年代が考えられる。

SD-013（第30図）

南向きの緩斜面を，北西－南東方向に直線的に伸びる溝状遺構である。底面と斜面上側の立ち上がりがわずかに検出されたのみである。南北両端は途切れ，SD-003やSD-007などに続く可能性もあるが，明らかではない。検出された長さは約10m，深さは約5cmである。底面が硬化しており，遺構の状況などから，中世以降に機能していた道と考えられる。遺物は出土していない。

第5節　遺構外出土遺物（第80図，図版42・44）

ここでは基本的に新開2遺跡の遺構外から出土した遺物を図示する。ただし，遺構覆土から出土していても，その遺構に伴わないと判断されるものも含む。



第80図　新開2遺跡　遺構外出土遺物

1はS字状結節文が施される。赤彩の可能性もあるが，器面が磨滅しており，はっきりしない。3・4は須恵器甕の破片と考えられる。5は瓦片である。凹面，凸面ともにヘラケズリにより，布目，タタキ目は全く認められない。凹面右半はベンガラ朱のようなものの付着が認められるが，1次使用によるものか，2次使用によるものかは不明である。前部破面右半に煤の付着が認められ，関連も考えられよう。6は凝灰岩製の砥石である。最大長63.5mm，最大幅34.8mm，最大厚32.0mm，重さ67.63gである。7～9は寛永通宝で，いずれも古寛永である。

第25表　新開2遺跡　掲載土器観察表

遺構番号	挿図番号	時代	種別	器種	遺存度	法量(cm)					技法	色調	胎土	焼成
						口径	底径	頸径	胴径	器高				
SI-001	第70図1	古墳	土師器	高杯	杯部の50%遺存	(16.9)	-	-	-	(6.1)	ナデ ナデ	赤褐色(赤彩) 赤褐色(赤彩)	乳白色微細粒・赤色粒子多量	○
SI-001	第70図2	古墳	土師器	高杯	杯部の30%遺存	-	-	-	-	(3.7)	ナデ ナデ	明褐色 明褐色	砂粒・赤色粒子	△
SI-001	第70図3	古墳	土師器	壺	胴部～底部のみ遺存	-	6.8	-	26.7	(24.4)	ヘラケズリ後ナデ ヘラナデ	明褐色～黒色 明褐色	砂粒・赤色粒子多量	○
SI-001	第70図4	古墳	土師器	小型甕	全体の70%遺存	6.6	4.2	5.3	(7.6)	(8.0)	口縁部横ナデ・体部ヘラケズリ後ナデ 口縁部横ナデ・体部ナデ	暗褐色～黒褐色 暗褐色～黒褐色	砂粒	○
SI-002	第71図1	古墳	土師器	高杯	全体の60%遺存	18.0	(13.6)	3.3	-	12.9	ナデ 脚部ヘラケズリ・裾部横ナデ	赤褐色(赤彩) 赤褐色(杯部赤彩)	砂粒・赤色粒子	○
SI-002	第71図2	古墳	土師器	高杯	脚部の60%遺存	-	(12.9)	-	-	(6.0)	ナデ 脚部ヘラケズリ・裾部横ナデ	赤褐色(赤彩) 淡褐色	緻密・砂粒少量	△
SI-002	第71図3	古墳	土師器	甕	口縁部～頸部の90%遺存	18.7	-	15.3	-	(7.0)	口縁部横ナデ・頸部ナデ 口縁部横ナデ・頸部ナデ	褐色～黒褐色 明褐色	砂粒少量	○
SI-002	第71図4	古墳	土師器	甕	底部のみ全部遺存	-	4.2	-	-	(4.5)	ヘラケズリ後ナデ ナデ(器面磨滅)	暗褐色 淡暗褐色	砂粒	○
SI-002	第71図5	古墳	土師器	甕	底部のみ全部遺存	-	8.4	-	-	(4.5)	ナデ ミガキ	淡暗褐色 淡暗褐色	砂粒・乳白色微細粒・赤色粒子	○
SI-002	第71図6	古墳	土師器	甕	底部のみ全部遺存	-	7.4	-	-	(3.0)	ナデ ナデ	暗赤橙色 淡褐色	砂粒	○
SI-002	第71図7	古墳	土師器	壺	底部の40%遺存	-	-	(7.6)	-	(2.5)	ミガキ(器面磨滅) ナデ？(器面磨滅)	胴部赤褐色(赤彩)・底部黒褐色 黒褐色	赤色粒子多量・砂粒	△
SI-002	第71図8	古墳	土師器	壺	頸部～胴部上半の30%遺存	-	-	-	(36.0)	(16.2)	ミガキ ナデ	淡褐色 淡褐色	白色針状物質・赤色粒子少量	◎
SI-004	第72図1	古墳	土師器	高杯？	口縁部の50%遺存	(20.9)	-	-	-	(6.7)	ミガキ・輪積み痕部に押捺列 ミガキ	赤褐色(赤彩) 赤褐色～黒色(赤彩)	赤色粒子・黄白色粒子多量	△
SI-004	第72図2	古墳	土師器	壺	胴部下半のみ全部遺存	-	7.4	-	13.3	(10.0)	ヘラケズリ後ミガキ ミガキ(器面磨滅)	淡明褐色 淡明褐色	黄白色粒子多量	○
SI-004	第72図3	古墳	土師器	甕	口縁部の20%遺存	-	-	-	-	(13.5)	ナデ・口唇部押捺列・輪積み痕 ミガキ	暗褐色 明褐色	赤色粒子多量・白色針状物質少量	△
SI-004	第72図4	古墳	土師器	甕	底部の40%遺存		(9.4)			(2.7)	ヘラケズリ後ナデ ナデ	赤橙色 黒色	赤色粒子・黄白色粒子多量	△
SI-013	第74図1	弥生	弥生土器	壺	口縁部破片	-	-	-	-	(1.8)	折返し口縁部縄文 縄文	淡褐色 淡褐色	赤色粒子・砂粒	○
SI-013	第74図2	弥生	弥生土器	壺	口縁部破片	-	-	-	-	(2.2)	折返し口縁部刻み列 ミガキ	赤褐色(赤彩) 赤褐色(赤彩)	赤色粒子・砂粒	○
SI-014	第74図3	弥生	弥生土器	壺	口縁部破片	-	-	-	-	(1.5)	口唇部S字状結節文・折返し口縁部縄文 不明(器面剥落)	淡褐色 淡褐色	砂粒多量	○
SI-014	第74図4	弥生	弥生土器	壺	口縁部破片	-	-	-	-	(5.4)	ナデ・折返し口縁部縄文 ナデ	明褐色・一部赤褐色(赤彩) 明褐色	砂粒・雲母多量	○
SI-013	第74図5	弥生	弥生土器	壺	口縁部破片	-	-	-	-	(5.1)	ミガキ・S字状結節文 ミガキ？(器面磨耗)	明褐色～暗赤褐色(赤彩) 明褐色～暗赤褐色(赤彩)	黄白色粒子多量	○
SI-014	第74図6	弥生	弥生土器	壺	口縁部破片	-	-	-	-		ナデ 円形付文・縄文・S字状結節文	淡褐色 明褐色	砂粒多量	○
SI-014	第74図7	弥生	弥生土器	壺	口縁部破片	-	-	-	-	(2.5)	網目状撚糸文？(器面剥落) ナデ？(器面磨滅)	淡褐色 淡褐色	砂粒多量	○
SI-014	第74図8	弥生	弥生土器	壺	口縁部破片	-	-	-	-	(2.4)	S字状結節文・縄文 ナデ	淡褐色 淡褐色	砂粒	○
SI-014	第74図9	弥生	弥生土器	壺	口縁部破片	-	-	-	-	(1.9)	ミガキ・S字状結節文・縄文 ナデ？(器面磨耗)	淡褐色 淡褐色	砂粒多量	○
SI-013	第74図10	弥生	弥生土器	壺	口縁部破片	-	-	-	-	(2.3)	沈線文？網目状撚糸文？ 不明(器面剥落)	明褐色 黒褐色	黄白色粒子多量・砂粒	○
SI-014	第74図11	弥生	弥生土器	壺	口縁部破片	-	-	-	-	(1.8)	沈線文 不明(器面剥落)	明褐色 明褐色	砂粒	○
SI-014	第74図12	弥生	弥生土器	壺	口縁部破片	-	-	-	-	(1.8)	縄文 ヘラナデ	淡暗褐色 淡褐色	砂粒・黄白色粒子	○
SI-014	第74図13	弥生	弥生土器	鉢	口縁部破片	-	-	-	-	(2.4)	縄文 ヘラナデ	淡褐色 淡褐色(赤彩)	砂粒・黄白色粒子	○
SI-014	第74図14	弥生	弥生土器	壺	口縁部破片	-	-	-	-	(3.7)	ミガキ・S字状結節文 ヘラナデ	暗褐色・一部赤褐色(赤彩) 淡褐色	砂粒・黄白色粒子	○
SI-013	第74図15	弥生	弥生土器	甕	口縁部破片	-	-	-	-	(2.1)	ナデ・輪積み痕部に押捺列 ヘラナデ	淡褐色 淡褐色	赤色粒子多量	○
SI-014	第74図16	古墳	土師器	高杯	口縁部の15%遺存	(16.0)	-	-	-	(4.2)	ナデ？(器面磨耗) ナデ？(器面磨耗)	赤褐色～明褐色(赤彩) 赤褐色～明褐色(赤彩)	黄白色粒子・砂粒少量	○

遺構番号	挿図番号	時代	種別	器種	遺存度	法量(cm)					技法	色調	胎土	焼成
						口径	底径	頸径	胴径	器高				
SI-014	第74図17	古墳	土師器	鉢	全体の60%遺存	(12.4)	6.0	(7.7)	(12.2)	9.9	口縁部横ナデ・体部ナデ 口縁部横ナデ・体部ナデ?(器面磨滅)	赤褐色(赤彩)・体部明褐色 口縁部赤褐色(赤彩)	赤色粒子・砂粒	○
SI-014	第74図18	古墳	土師器	甕	底部のみ全部遺存	-	7.2	-	-	(7.9)	ナデ・木葉痕 ヘラナデ	明褐色～黒褐色(一部煤付着) 黒褐色(煤付着)	砂粒	○
SI-014	第74図19	古墳	土師器	小型甕	底部のみ全部遺存	-	4.6	-	(6.4)	(3.6)	ナデ ヘラナデ	暗褐色～赤褐色 暗褐色～赤褐色	赤色粒子多量	○
SD-003	第77図1	古代	土師器	杯	口縁部の15%遺存	(13.0)	-	-	-	(2.7)	ロクロ調整 ロクロ調整	明褐色 明褐色	乳白色微細粒・赤色粒子少量	○
SD-003	第77図2	古代	灰釉陶器	長頸瓶	頸部破片	-	-	-	-	(3.8)	ロクロ調整・釉 ロクロ調整・釉	暗緑色 明灰色	緻密	○
SD-002	第78図1	平安	土師器	杯	ほぼ完形	13.5	7.6	-	-	4.6	ロクロ調整・回転ヘラケズリ ロクロ調整	明褐色 明褐色	砂粒・乳白色微細粒	△
G7	第80図1	弥生	弥生土器	壺	頸部破片	-	-	-	-	(2.7)	S字状結節文 ナデ	明褐色 明褐色	砂粒多量	○
表採	第80図2	古墳	土師器	高杯	脚部のみ遺存	-	-	-	-	(8.0)	ナデ ヘラケズリ	赤褐色(赤彩) 明褐色	乳白色粒子	○
SM-009	第80図3	古墳?	須恵器	甕	胴部破片	-	-	-	-	(2.6)	平行叩き タタキ	黒灰色 灰褐色	砂粒少量	◎
SM-009	第80図4	古墳?	須恵器	甕	胴部破片	-	-	-	-	(4.5)	平行叩き タタキ	黒灰色(自然釉) 灰褐色	砂粒少量	◎

※技法・色調：上段…外面　下段…内面
焼成：◎…良好　○…普通　△…やや不良

第26表　新開2遺跡　掲載銭貨一覧表

挿図番号	遺構番号	銭種	書体	外縁外径(mm)		外縁内径(mm)		内郭外径(mm)		内郭内径(mm)		外縁厚(mm)	内面厚(mm)	量目(g)
				縦	横	縦	横	縦	横	縦	横			
第76図1	SM-009	寛永通宝	真書	23.4	23.4	19.5	19.5	8.0	8.0	7.0	6.5	1.5	1.2	3.4
第76図2	SM-009	竜半銭銅貨		22.1	22.2							1.0	1.0	3.3
第80図7	SI-001	寛永通宝	真書	22.9	23.8	19.0	18.0	8.0	7.0	6.5	6.5	1.1	0.8	2.3
第80図8	K9(SK-003)	寛永通宝	真書	24.1	24.2	20.5	20.5	8.0	7.5	7.0	6.5	1.1	0.7	1.7
第80図9	J8(1T)	寛永通宝	真書	23.0	22.9	19.5	19.5	7.5	8.0	6.5	7.0	1.0	0.7	2.1

第27表　新開2遺跡　非掲載遺物重量表（単位:g）

遺構番号	弥生土器	土師器壺・甕・鉢類	土師器杯・高杯類	須恵器	灰釉陶器	中世陶磁器	近世陶磁器	土製品類	瓦	石	合計
SI-001		191	48							6	245
SI-002		2,179	426								2,605
SI-004		1,026	370								1,396
SI-013										1	1
SD-003			64							1	65
SD-005		8	147								155
SD-007		3	2							1	6
SD-008		2	35				289				326
SD-009							78				78
SD-011		36								1	37
SM-009		15					5				20
C4										1	1
G7		22	19								41
H8		15									15
I8							86				86
J8		15	8								23

第6章　まとめ

西御祈祷谷古墳群・新開１遺跡・新開２遺跡は，便宜上境界線が引かれ，報告も遺跡毎に章立てて行ったが，実際は同じ尾根筋上に立地する一つの遺跡とみることが可能である。そのため，発掘調査は遺構番号も通し番号にして調査を行った。ここでは，改めて境界線を取り払い，時代別に遺跡を概観してまとめとしたい。

第１節　縄文時代

新開１遺跡のK10・L10グリッドを中心とする平坦地において，縄文時代早期を中心とする遺物包含層と炉穴などの土坑が検出され，連続する西御祈祷谷古墳群や新開２遺跡においても，新開１遺跡と同様の土器や礫が出土した。

縄文土器については，本文では基本的に以下のように分類を行った。

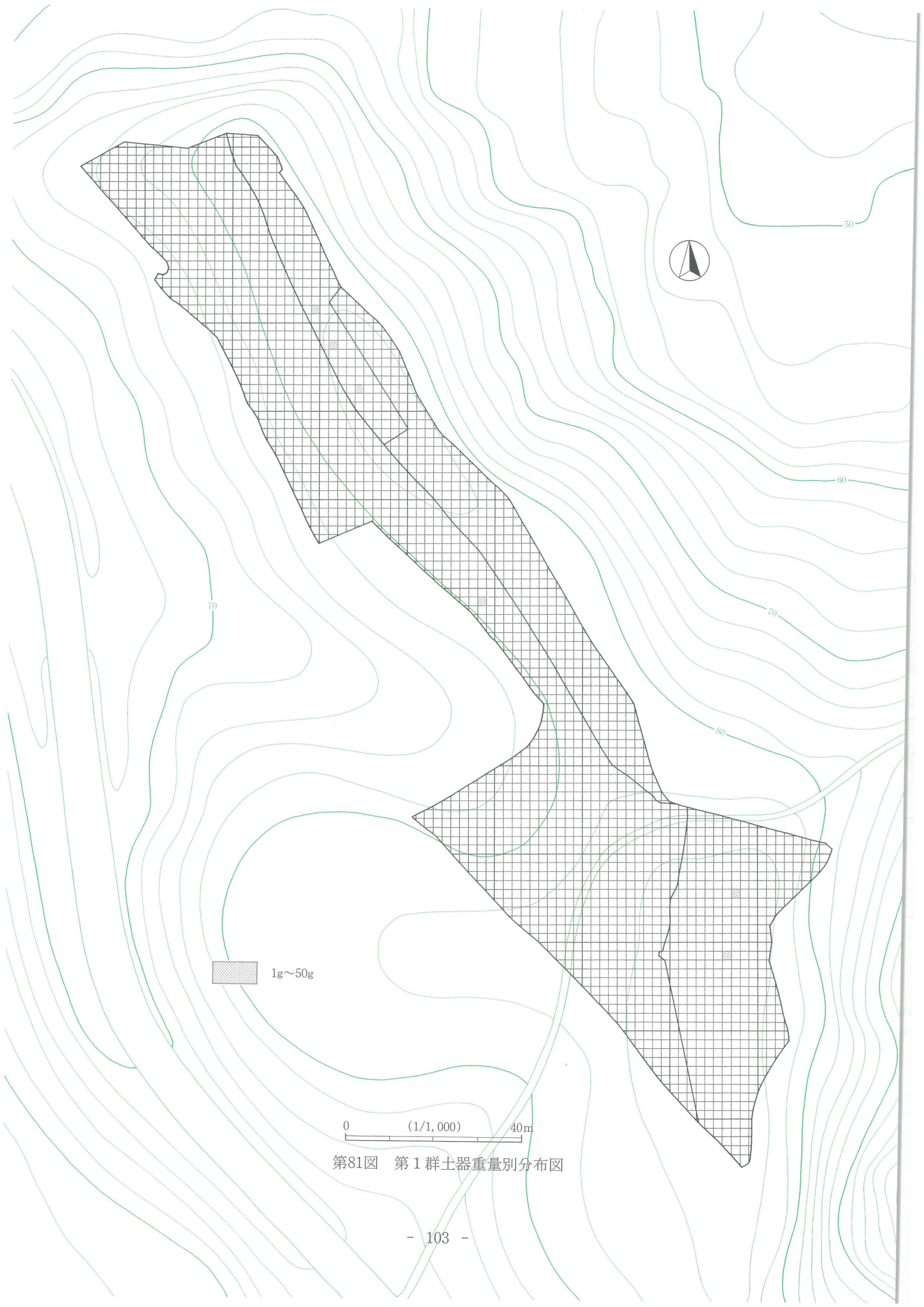
第１群土器　撚糸文系土器
第２群土器　三戸式・田戸下層式に比定される沈線文系土器
第３群土器　田戸上層式～子母口式に比定される沈線文系土器～条痕文系土器
　胎土に繊維を含まないか少し含むもので，器面に雑な擦痕や条痕が施されるか，または無文のもの
第４群土器　条痕文系土器
　胎土に繊維を含み，表裏に貝殻条痕文の施されるもの
第５群土器　縄文時代前期の土器
第６群土器　縄文時代中期以降の土器

これに基づき，各遺跡・出土遺構（グリッド）毎に縄文土器の破片数と重量をまとめたのが，それぞれの「縄文土器表」（第６・13・21表）である。ここではこの表を，第81～86図のように，時期別に図化してみた。

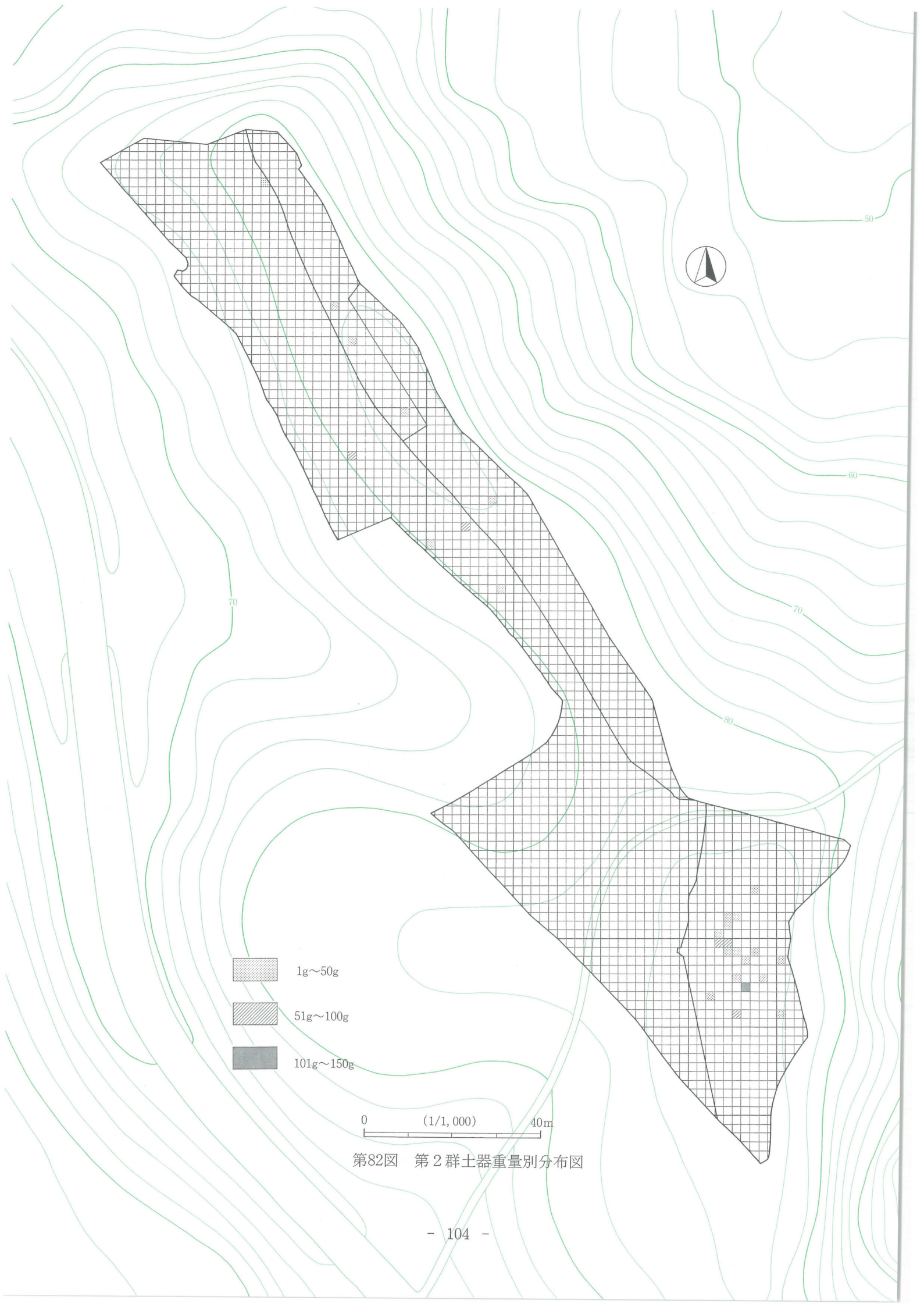
なお，西御祈祷谷古墳群の塚については，明らかに新開２遺跡や新開１遺跡出土のものと同一個体と見られる縄文土器が盛土中から出土しており，周辺の土を盛土して造られているものと考えられる。つまり，平面的にはそれほど原位置を動いていないと想定できるため，盛土出土遺物も，塚の所在するグリッド出土遺物として図化した。また，弥生時代以降の遺構覆土出土の場合も，それほど原位置を動いていないとの想定のもとで，遺構の所在するグリッド出土遺物として図化した。

また，図化は重量別・個数別の両方で行ったが，重量別のみで個数別と同様の傾向をより詳細に表現できたことから，重量別の図のみを掲載することとした。

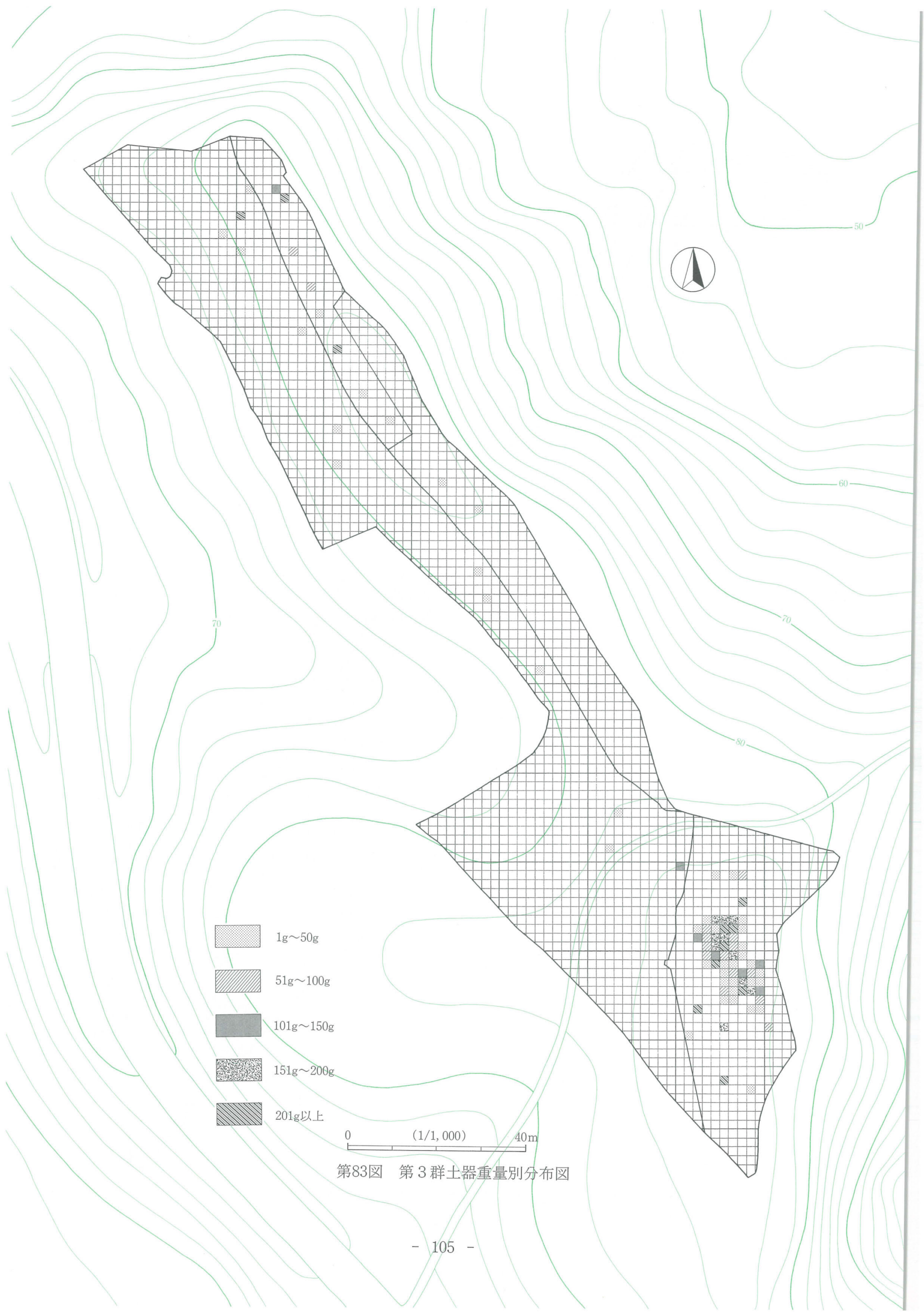
第１群：撚糸文期（第81図）　土器の絶対数も少なく分布状況も散漫でありながら，K10・L10グリッドを中心として展開している様子が窺える。この付近には，第１章第２節４(１)で述べたとおり，褐色土の堆積がみられ，ほとんど全ての縄文土器・礫がその土層中から出土している。この遺物包含層の主体となる時期は田戸上層式～子母口式期とみられるが，撚糸文期から既に包含層の形成が萌芽していたと考えら



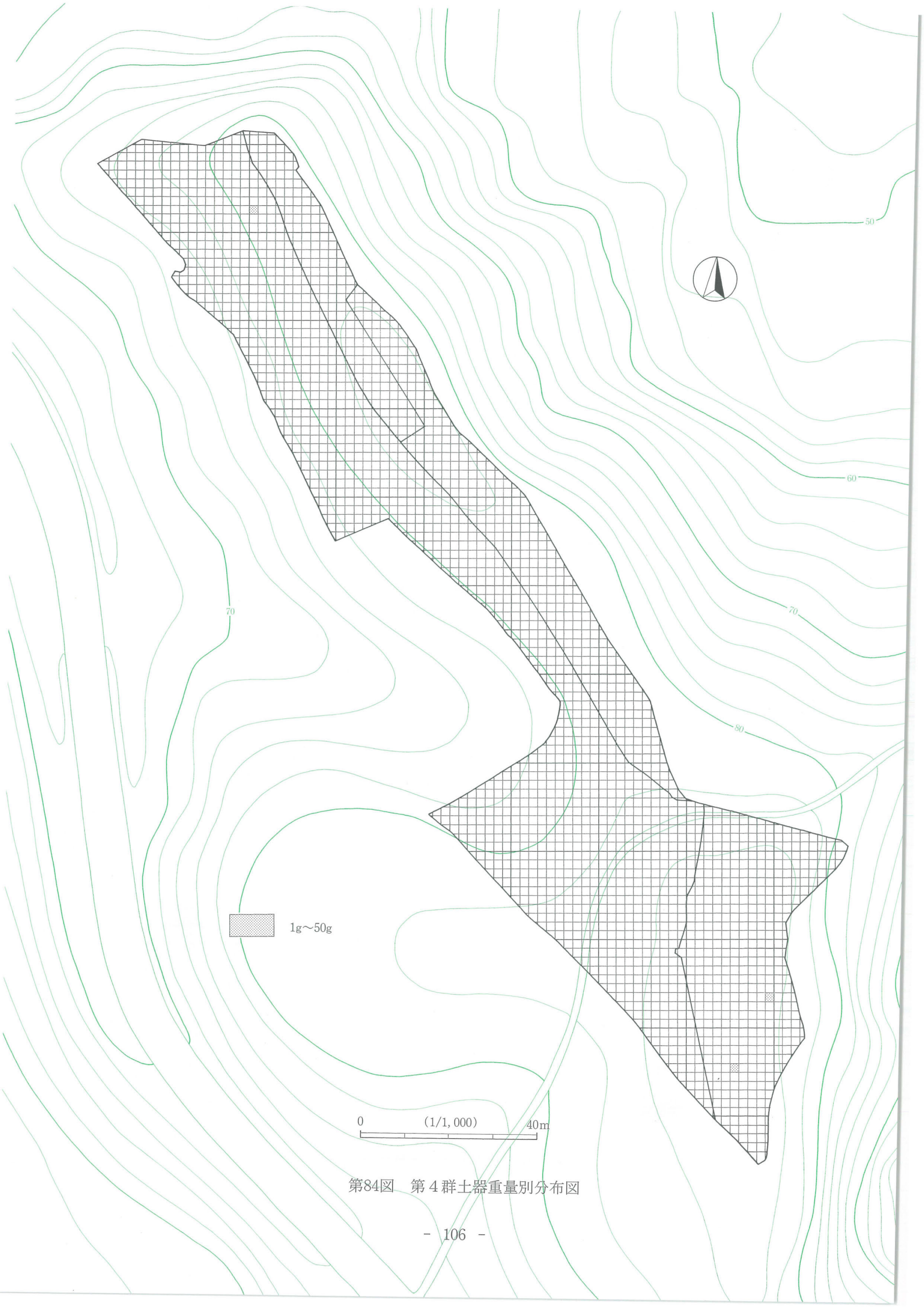
第81図　第１群土器重量別分布図



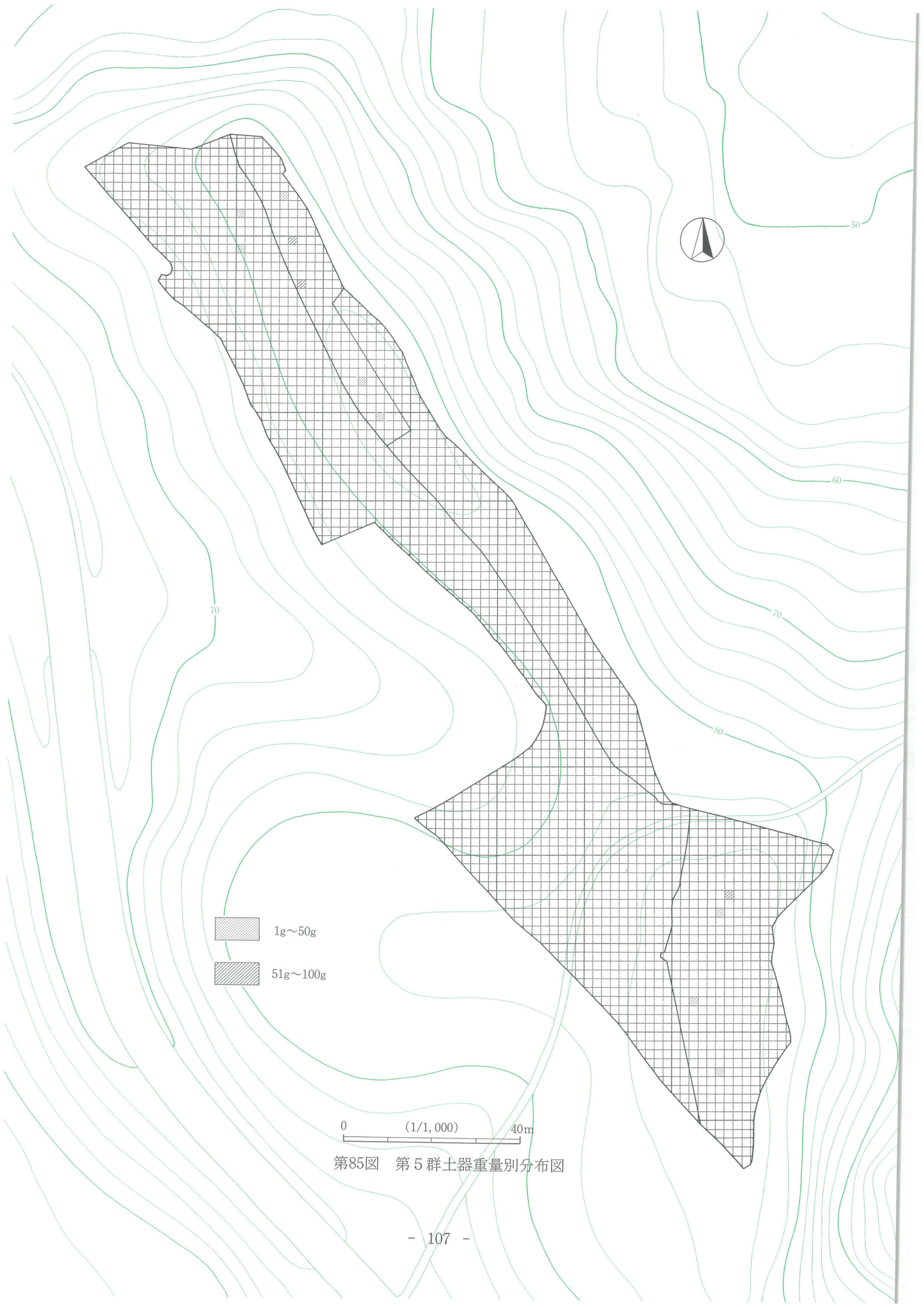
第82図　第２群土器重量別分布図



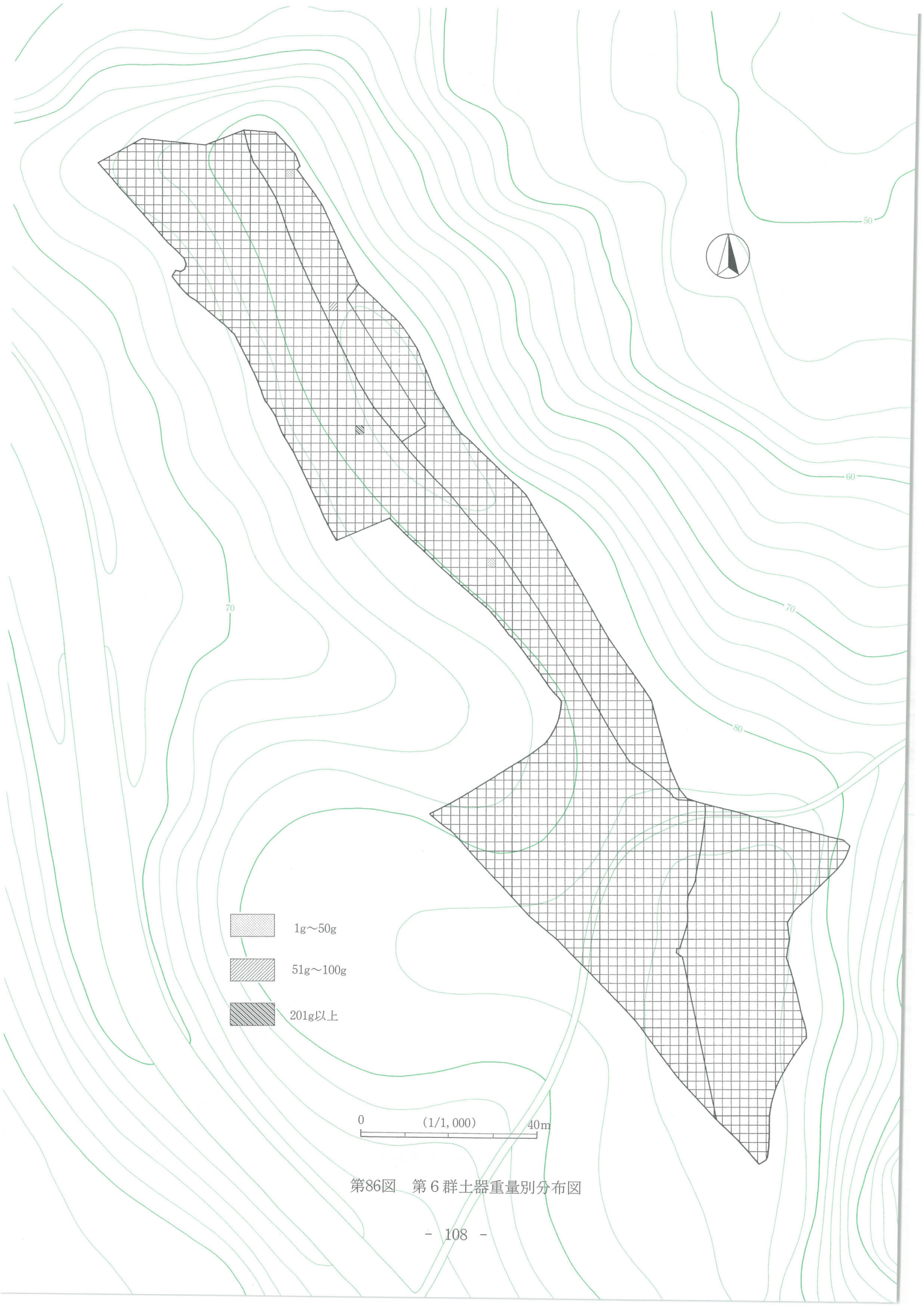
第83図　第３群土器重量別分布図



第84図　第４群土器重量別分布図



第85図　第５群土器重量別分布図



第86図　第６群土器重量別分布図

れる。また，新開１遺跡や新開２遺跡において出土状況がこのように散漫であるにも関わらず，二次堆積である西御祈祷谷古墳群の塚盛土中にも当該時期の土器片が混入しているのは注目される。

第２群：三戸式・田戸下層式期（第82図）　K10・L10グリッドを中心として土器が分布する様子がやや明確化してくる。それと同時に，新開２遺跡の緩斜面にも分布が見られるようになる。また，第２群土器も第１群土器同様，西御祈祷谷古墳群の塚盛土中にも含まれる。

第３群：田戸上層式～子母口式期（第83図）　新開１遺跡平坦地の遺物包含層の主体となる時期である。K10・L10グリッドを中心として遺物が密に分布している。縄文時代の土坑と考えられるSK-002やSK-005からもこの時期の土器片が主体的に出土している。

また，この時期新開２遺跡の緩斜面における分布域も拡大する。特に北方のC4・C5・D4・D5グリッド付近は，第１章第２節４(３)で述べたとおり黒色系の土が厚く堆積しており，土器はその黒色系土の中から出土している。西御祈祷谷古墳群の塚盛土中からもかなりこの時期の土器片が出土しており，K10・L10グリッド同様，遺物包含層としてみることも可能であろう。ただ，新開１遺跡の平坦地と比較すると散漫な状況である。

第４群：条痕文期（第84図）　この時期は，一旦波が引いたようになる。しかし，K10・L10グリッドを中心とする新開１遺跡の平坦地と，新開２遺跡の北方緩斜面に集中して分布する形は保持している。

第５群：縄文時代前期（第85図）　これまでの，２か所に集中して分布する形を保持しつつも，主体はどちらかというと新開２遺跡の北方緩斜面に移る感がある。いずれにせよ，量は縄文時代早期に比べると激減する。

第６群：縄文時代中期以降（第86図）　土器はほとんどみられなくなる。辛うじて新開２遺跡の緩斜面のみに少量が分布し，K10・L10グリッドを中心とする新開１遺跡の平坦地では皆無となる。

縄文土器については，以上のように，①縄文時代早期，なかでも田戸上層式～子母口式に比定される土器が圧倒的に多い，②K10・L10グリッド付近に集中して出土している，という傾向を指摘できよう。

このような土器の状況を踏まえた上で，礫の個数別・重量別出土状況を図化してみたのが第87・88図である。もとにした表は各遺跡の礫組成表（第９・16・24表）である。礫については石材別に分類し，それぞれについて焼成完形礫（A）・焼成破損礫（B）・無焼成完形礫（C）・無焼成破損礫（D）の４つに区別しているため，全ての区別毎に図化すべきかもしれないが，ここではひとまず全ての礫を合わせて分布状況を見てみた。

その結果，礫についても，K10・L10グリッドを中心とする新開１遺跡の平坦地に最も集中しているという事実が指摘できよう。また，新開２遺跡の緩斜面や西御祈祷谷古墳群の塚盛土中からも多く出土しており，このような分布の形は，縄文時代早期～前期，特に第３群の分布傾向と類似する。それが何を表すのかは，これだけでは明確ではないが，少なくともこの時期の土器に伴うと考えることはできるだろう。

次に，礫についてデータの集計を行ってみた（第28表・第89・90図）。

まず，石材の別を超えて焼成完形礫（A）・焼成破損礫（B）・無焼成完形礫（C）・無焼成破損礫（D）の割合を，個数別・重量別それぞれで合計して調べてみた。焼成礫か否かについては，表面が赤化している，または煤けたように黒くなっているなど，被熱の痕跡と考えられる現象が観察できるものについてのみ「焼成礫」と判断したので，被熱した事実があったとしても，痕跡として表れていなければ，「無焼成」に分類されることになる。従って，判断時のエラーが生じる可能性があるが，それでも個数別でみても重

量別でみても，焼成礫が全体の90％以上を占めることが明らかとなった。

また，個数別・重量別に石材別占有率を集計してみたところ，第89図のように，砂岩・チャート・流紋岩の３種類で全体の95％が占められていることが明らかになった。ところが，これら３種について，個数別・重量別の見方により，占有率に逆転が生じた。すなわち，個数別で見るとチャートが約半数を占めるのに対し，重量別で見ると流紋岩が約半数を占める。

この原因については，チャートは重量の割に個数が多くしかも焼成破損礫（B）が多いことから，熱を受けて小さく割れたものが多く，流紋岩は一つ一つが比較的重い，ということが一つ考えられるだろう。これを証明するには，実際に一つ一つの礫を計測・観察して集計する必要があるだろうが，残念ながら整理作業の中では行うことができなかった。

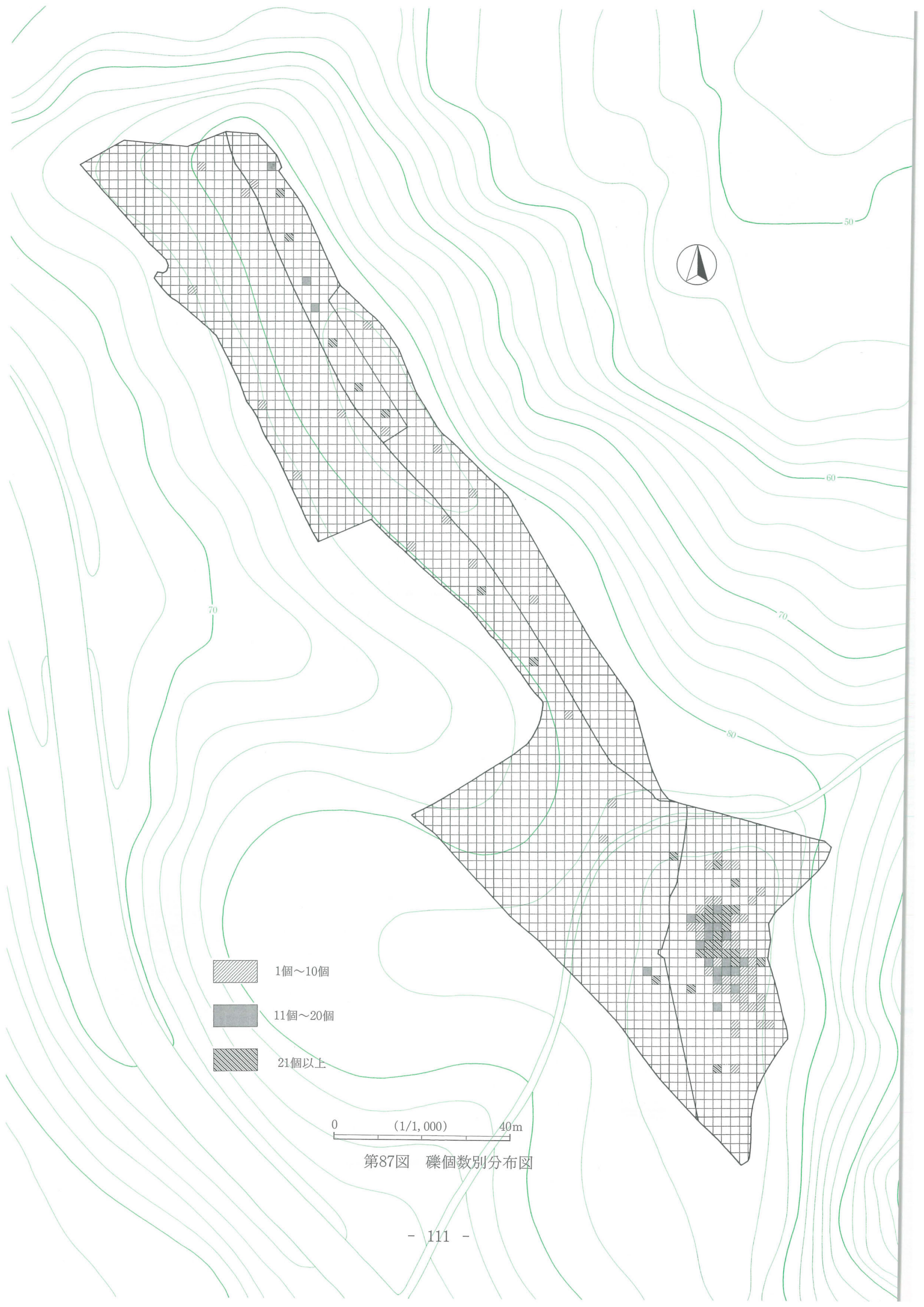
そこでこのことについて，重量計を個数計で割って平均重量を算出することにより調べてみたところ，平均重量ではチャートより流紋岩のほうが圧倒的に重いことが明らかになった。しかしこれでは，自然の摂理として，例えばチャートは熱を受けて小さく割れやすく，流紋岩は割れにくいなどという性質が表れているのか，それとも当時の人間の意図的な選択性が表れているのかがはっきりしない。そこで，それぞれの焼成礫・無焼成礫の完形礫の平均重量を破損礫の平均重量で割って，完砕率を出してみた。

すると，焼成礫では砂岩，チャート，流紋岩，安山岩で50％を超えることが明らかになった。つまり焼成礫では，チャートも流紋岩も，割れていても半分より大きい個体ばかりが多く存在していることを示している。これは自然状態ではあり得ないことであろう。小さい破片を回収しきれなかった，発掘時のエラーも考慮されるべきであるが，焼成破損後，比較的大きめの礫を選択して遺跡に持ち込んでいる可能性が高いということになるだろう。

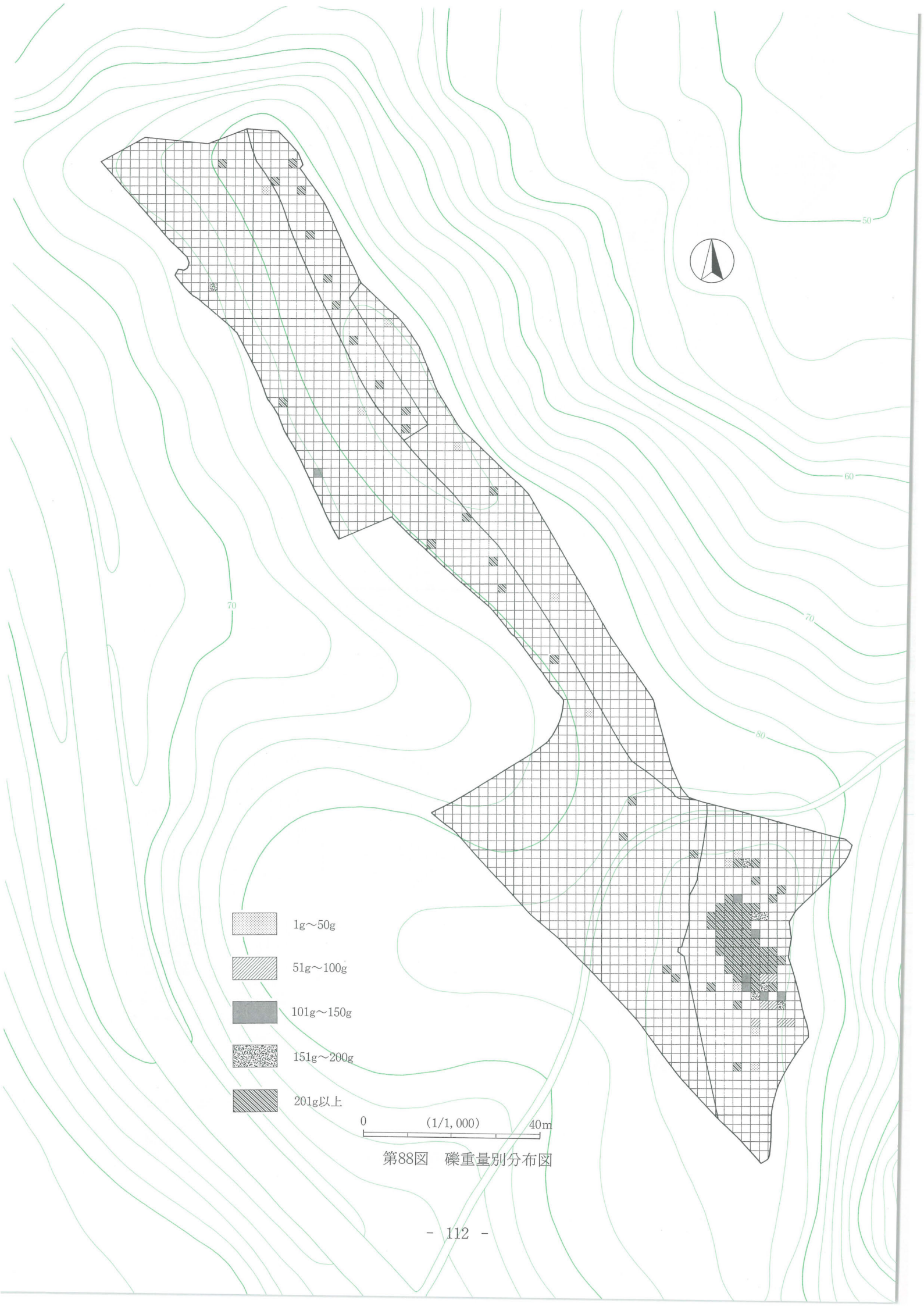
無焼成礫（自然礫）については，完砕率はほぼ50％より低くなっており，ほぼ自然状態と考えることができる。チャートと流紋岩で50％より大きい数値が出ているが，チャートについては，赤チャートなど焼成の痕跡が判断しにくいものが，「無焼成」としてかなりカウントされているであろうことが原因として考えられる。また，流紋岩については，数も少ない上，重量で突出するものが含まれるため，平均化するのが難しいということが考えられよう。

いずれにせよ礫については，①田戸上層式～子母口式期を主体とする縄文時代早期の土器の出土分布と重なる，②石材別では砂岩・チャート・流紋岩でほとんど占められる，③他所で焼成を行った後，割れても大きめの礫を選択して遺跡に持ち込んでいる可能性が高い，などということが指摘できるのではないだろうか。

西御祈祷谷古墳群・新開１遺跡・新開２遺跡では，炉穴とみられる土坑は数基存在するものの，住居など，ほかに縄文時代の所産とみられる遺構は検出されなかった。ただ，特定の時期の遺物が，位置的に集中して出土する事実は明らかになった。周辺遺跡でも縄文時代早期を主体とする遺構や包含層は比較的多く見つかっており，今後その成果と比較・検討していく必要があるだろう。



第87図　礫個数別分布図

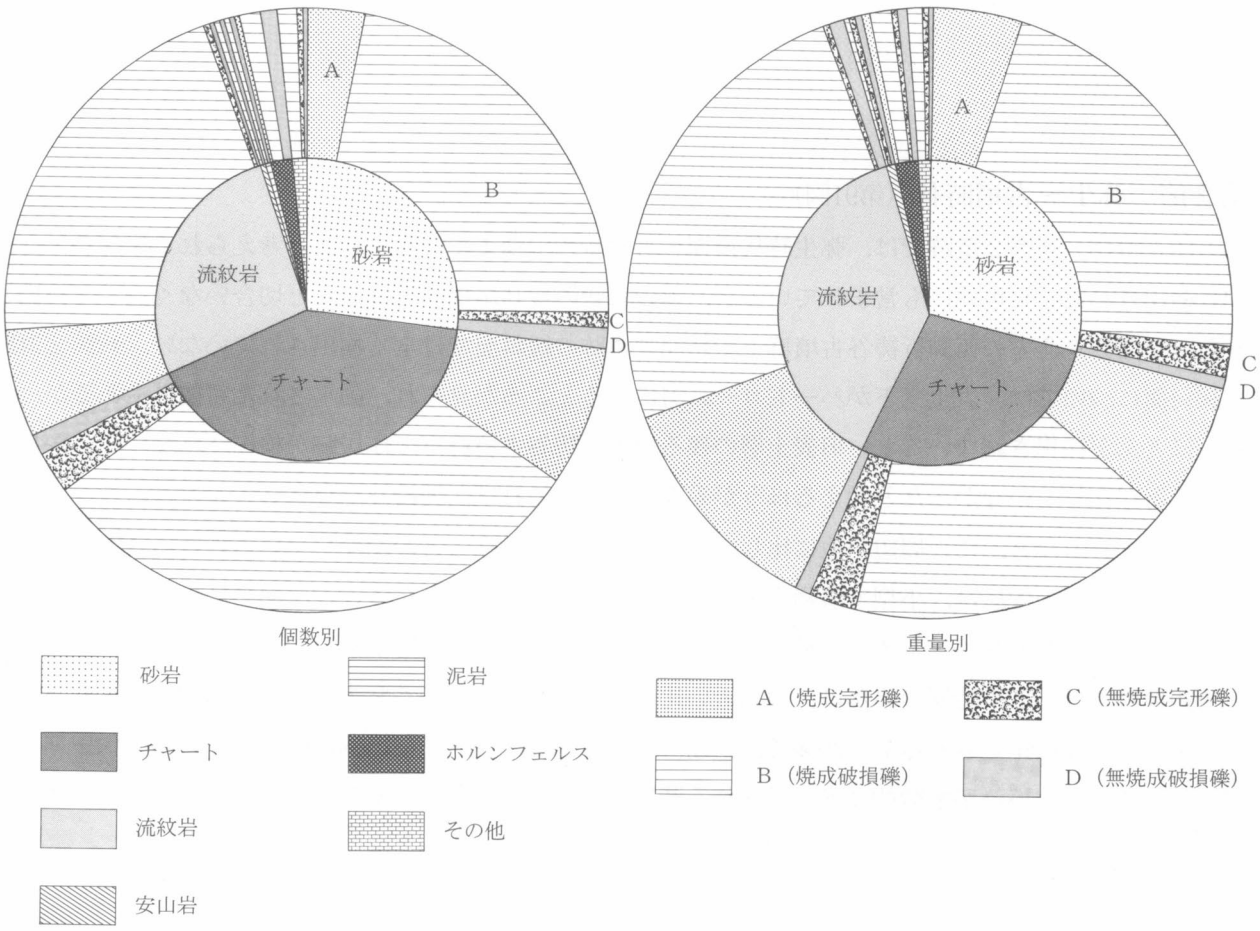


第88図　礫重量別分布図

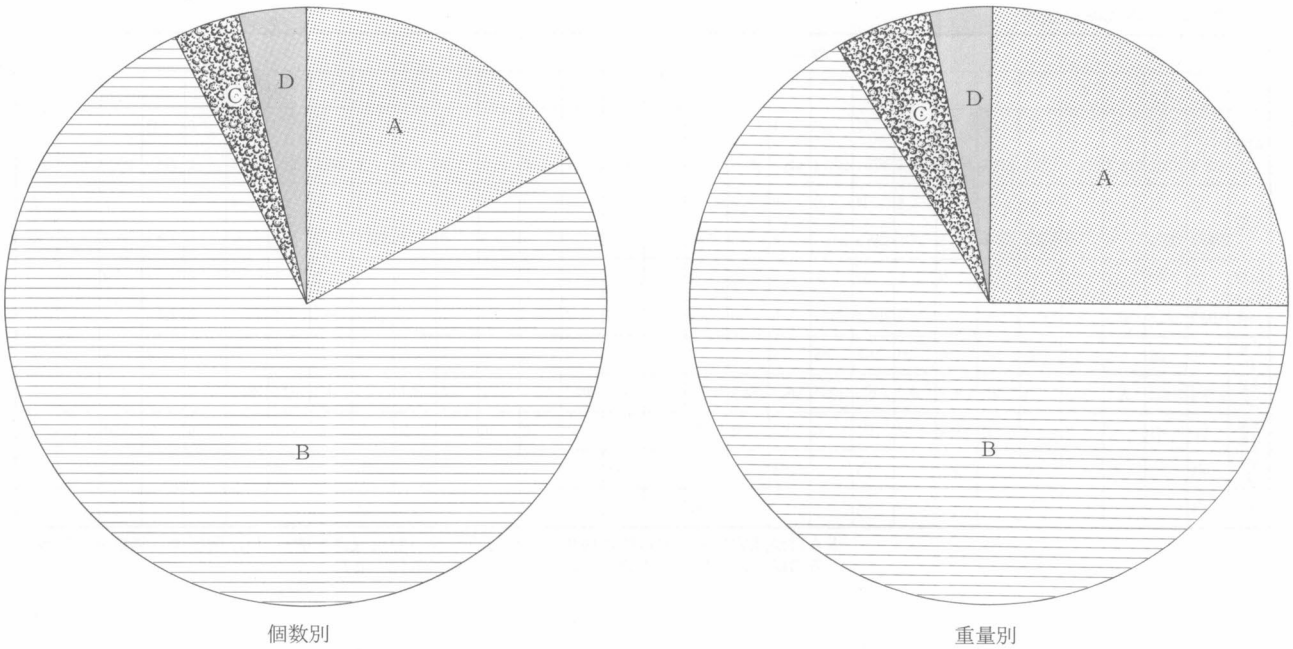
第28表　縄文時代礫組成表

	砂岩				チャート				流紋岩				安山岩				泥岩				ホルンフェルス				その他				計
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	
新開1	16	307	15	19	41	452	29	19	57	327	4	5	0	4	1	4	0	4	0	1	0	21	2	11	0	13	5	5	1362
	3136.4	22462	2125.3	931.6	2852.6	18330.0	2892.4	1050.5	9878.1	28771.2	546.1	964.5	0	190.3	181.5	203.2	0	86.9	0	20.6	0	1440.0	332.3	884.3	0	772.9	487.5	195.3	98735.5
新開2	23	51	0	0	50	65	10	1	14	20	0	0	1	0	1	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	8	1	0	249
	1685.3	3382.8	0	0	3598.8	2785.5	453.5	7.8	3268.9	1312.5	0	0	55.6	0	87.8	0	0	7.2	0	0	530.7	0	0	0	0	134.9	53.9	0	17365.2
西御祈祷谷古墳群	20	49	1	1	51	46	0	0	37	38	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	4	2	0	0	0	1	0	0	252
	1418.8	3082.5	60.5	8.3	2961.2	2493	0	0	3190.4	3201.4	0	0	49.8	14.9	0	0	0	0	0	0	494.7	29.1	0	0	0	110.5	0	0	17115.1
個数計	59	407	16	20	142	563	39	20	108	385	4	5	2	5	2	4	0	6	0	1	6	23	2	11	0	22	6	5	1863
重量計	6,240.5	28,927.3	2,185.8	939.9	9,412.6	23,608.5	3,345.9	1,058.3	16,337.4	33,265.1	546.1	964.5	105.4	205.2	269.3	203.2	0.0	94.1	0.0	20.6	1,025.4	1,469.1	332.3	884.3	0.0	1,018.3	541.4	195.3	133,215.8
平均重量	106	71	137	47	66	42	86	53	151	86	137	193	53	41	135	51	0	16	0	21	171	64	166	80	0	46	90	39	72
完砕率	67%		34%		64%		62%		57%		141%		77%		38%						37%		48%						
全完砕率	49%				63%				97%				49%								43%								

※Aは焼成完形礫，Bは焼成破損礫，Cは自然礫（無焼成完形礫），Dは破損礫（無焼成破損礫）
各遺跡上段…個数（単位：個）　下段…重量（単位：g）



第89図　礫石材別組成



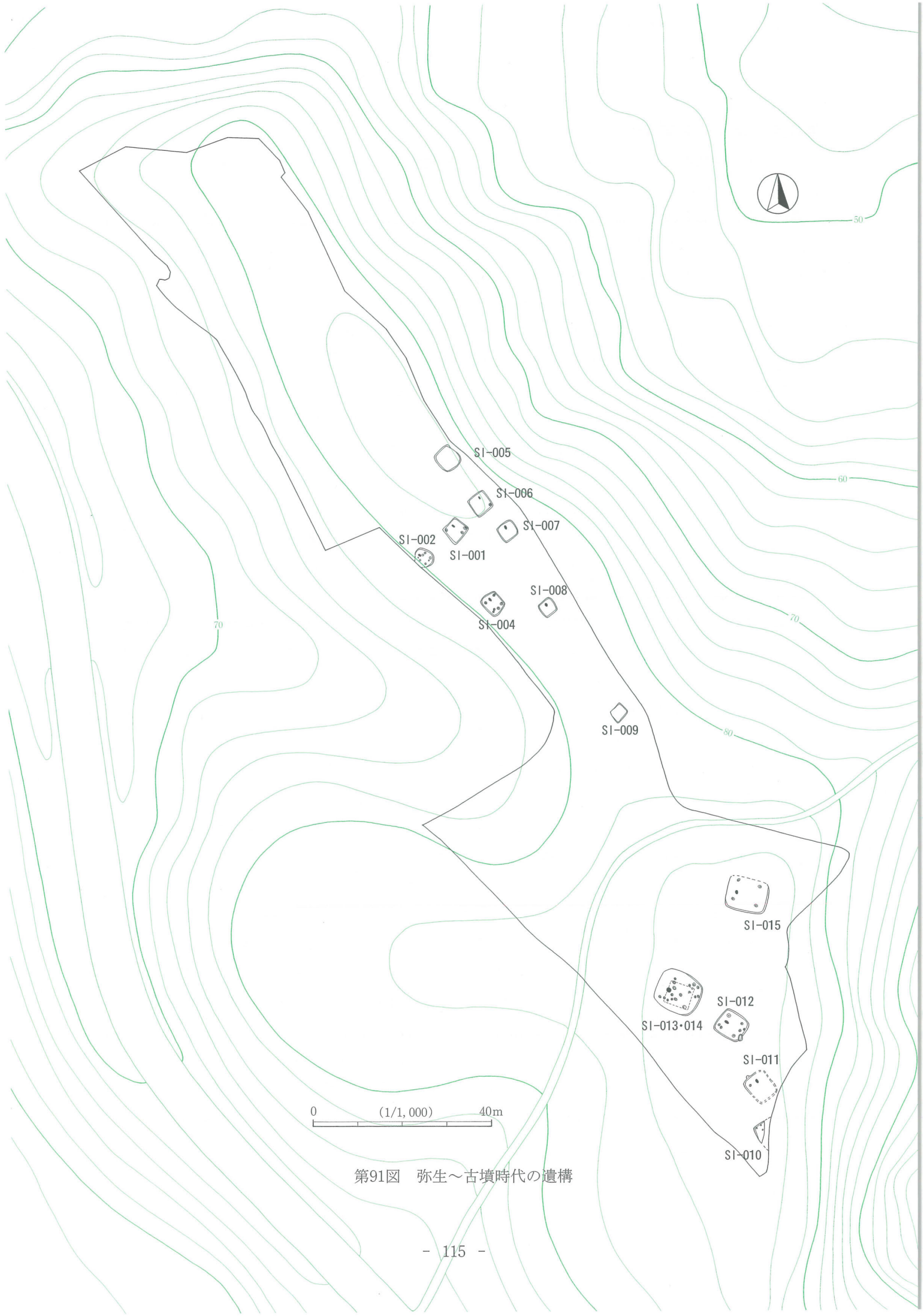
第90図　礫被熱率

第２節　弥生～古墳時代（第91図）

新開１遺跡・新開２遺跡では，弥生時代後期～古墳時代中期までに営まれたと考えられる住居が，合計14軒検出された。平坦地にも営まれているが，馬の背状の痩せ尾根にもほとんど切合いなく並んで検出された。ただし，北方の西御祈祷谷古墳群下や新開２遺跡の緩斜面では全く検出されていない。新開２遺跡の緩斜面については，表土直下がハードローム層になるところが見られ，削平された可能性もあるが，遺物がほとんど採集されないこと，旧表土層の残る西御祈祷谷古墳群下で住居跡が検出されないことから，もともと存在していなかったと考えるほうが妥当である。これは，埋没谷が存在していたり，スコリア層が堆積しているなど，この周辺が他に比して不安定な地質であることが関係しているのだろうか。

また，これらの住居は，小型で遺物も少量しか出土しなかったものが多い。床面の硬化も顕著でなく，炉の焼け方も比較的甘い。全体的に長期的な居住とは考えにくい傾向を示していると言える。

周辺遺跡では，この時期の集落は，川に近い比較的広い平坦地に多く営まれる傾向にある。それらは特に古墳時代前期に比定されるものが多く，中期～後期となると住居の検出例は少ない。古墳時代中期～後期は，周辺では古墳群が特徴的に多く営まれる時期であり，周辺遺跡のあり方と合わせ考えると，興味深い。



第91図　弥生～古墳時代の遺構

第３節　奈良・平安時代（第92図）

奈良・平安時代の遺構は方形周溝状遺構２基，溝状遺構７条，遺物は８世紀代の須恵器杯，長頸瓶，瓦，９世紀～10世紀代の土師器杯である。

溝状遺構は，調査区の北端で検出されたSD-002のみが痩せ尾根を横断し，その他の溝は尾根の南西側を縦断している。いずれも硬化面等が検出され，道路状遺構と考えられる。これらの溝及びその周辺からは９世紀～10世紀代の土師器杯が検出された。

調査区北側SM-006塚の盛土下から検出された溝状遺構（SM-006下遺構）は隅丸方形を呈し，SM-006盛土内から須恵器長頸瓶が出土したことから，SM-010方形周溝状遺構やSS-001方形周溝状遺構と同様の性格が考えられるため，併せて各遺構の規模と構造を概観し，その性格を論じてみたい。

SM-006下遺構は南西部をSD-001に切られて欠くほか，東隅，南隅が検出されていない。北側の溝は中央部で緩やかに屈曲し方形周溝状遺構の北東辺と北西辺の２辺を構成するものと思われる。東隅が途切れ，再び出現する南東側の溝は，南東辺を構成するものと判断される。南西辺は前述のとおりSD-001により削平されるが，南東側の溝とSD-001の間にわずかな溝が検出されており，南西辺の溝の南端と判断し，計測にあたっては，わずかに残された溝を南西辺の内側として計測した。その結果，SM-006下遺構は南北軸方向N-37°-E，概ね４m四方の隅丸方形を呈する方形周溝状遺構と判断される。

SM-010は調査時に北西隅を深く下げているが，遺存状況は良好で深さ約1.0m，断面逆台形の溝が方形に廻る。南北軸方向N-26°-W，概ね10m四方の方形を呈する。

SS-001は南半部を検出することが出来なかったが，コ字状に検出された溝の南東端がわずかに内側に入り込むため，この部分を南東辺にあたるものと考え計測した。その結果，南北軸方向N-25°-W，概ね４m四方の方形を呈するものと判断される。

SM-010は規模，構造，出土遺物から考えて，方形墳墓と考えて差し支えないであろう。隣接するSS-001は規模が小さくなり，欠損部も多く判断に苦慮するが，SM-010を方形墳墓とすれば同様の性格を有していた可能性が高い。SM-006下遺構は明確な方形ではないが，須恵器長頸瓶が出土し，SS-001方形周溝状遺構と同規模であることから，方形墳墓と考えることも可能であろう。

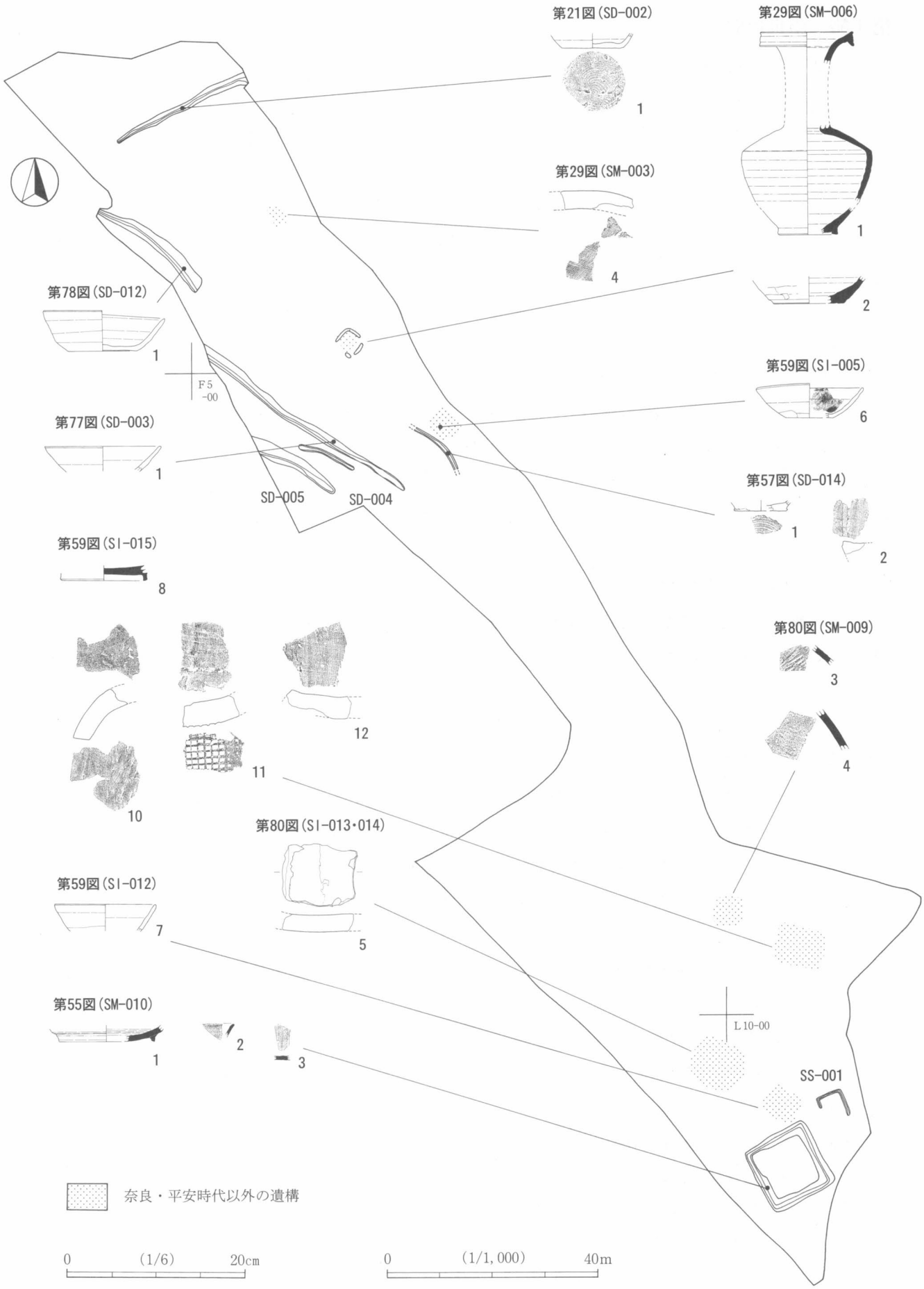
これらの方形墳墓から出土した遺物は，わずかではあるが８世紀第２四半期を中心とした時期が考えられることから，この地域が墓域として機能したのは８世紀中葉以降と思われる。

道路と考えられる溝状遺構から出土した遺物が９世紀～10世紀のものであり，方形墳墓との関わりについては明確ではない。しかしながら，古墳時代中期と考えられる竪穴住居跡SI-005から出土した10世紀のロクロ土師器杯は油煙痕があり，灯明として使用されたものと判断される。方形墳墓が10世紀代まで信仰の対象とされ，それに伴う道路であった可能性も考えられる。道路は方形墳墓の西側に位置し，方形墳墓の東側は玉野の支谷最奥部に面した斜面となっており，方形墳墓と玉野谷津との関連も想定される。

旅衣　八重着重ねて　寝ぬれども　なほ膚寒し　妹にしあらねば

（万葉集巻20　4351番）[1)]

天平勝宝７年（755年）２月頃に防人として北九州に赴く途中，郷里の家族を偲んで詠んだ望陀郡上丁玉作部国忍は玉野の出身という説もある[2)]。方形墳墓は国忍，もしくは国忍の所属した集団の長などの墓と考えることも可能であろう。



第92図　奈良・平安時代の遺構と遺物

第4節　中世以降

1　西御祈祷谷塚群の築造理由

塚には次のような種類がある。

①墓所，供養塚　　多数の戦死者や遭難者などを埋葬したり供養するために築いた塚。塚にまつわる伝説が残っていることが多い。

例　百人塚，入定塚，首塚など

②祭　　場　　祭，信仰のために，平地よりも一段と高い場所に築く。境界であることが多く，この世(現実界)とあの世(冥界，他界)を分ける場所でもある。

例　十三塚…真言系の僧，行者が修法を納めた場所，富士塚，三山塚など

③標　識　塚　　例　一里塚

今回の調査で，塚群からは骨その他埋葬，供養を示す遺物は出土しなかった。また，塚の所在する玉野集落には塚に関する伝説，伝承は残っていなかった。また，地域には塚が所在することさえ認識されていなかった。字名が西御祈祷谷であること，所在地が袖ケ浦市と木更津市との境界に位置していることなどから，信仰のための祭場として築かれた可能性が高い。しかし，所在自体が忘れ去られていることから，かなり早い時期に信仰が途絶えてしまっていた可能性が高い。

2　西御祈祷谷塚群の特徴

規　　模　　袖ケ浦市域内の最多塚群は尾畑台塚群の6基であり，基数の面から最多の塚群となる。

形態について　　袖ケ浦市域内の塚群25群中方形の塚は5群と少ない。方形と円形の違いは何を意味するのか。築造時期を示すものなのか。調査例が増え今後明らかになることを期待したい。

塚の規模は一定ではない

各塚群とも西側が溝状遺構により削平されてはいるものの，南北方向の規模は築造時の規模を遺存していると考えられる。推定される各塚の規模はおおよそ次の通りである。

SM-001	1辺3.7m	SM-002	1辺5.3m	SM-003	1辺4.0m
SM-004	1辺3.1m	SM-005	1辺5.4m	SM-006	1辺4.1m
SM-007	1辺4.8m	SM-008	不確実		

塚間の距離は比較的一定なので，時期差を持って順番に造られた可能性も考えられる。

3　塚の築造時期について

SM-002の旧表土直上から6枚，SM-003の旧表土直上から2枚の銭貨が出土した。

SM-002出土銭貨

開元通寶（初鋳年621年，唐）	2枚
皇宋通寶（初鋳年1038年，北宋）	1枚
紹聖元寶（初鋳年1094年，北宋）	1枚
永楽通寶（初鋳年1408年，明）	1枚
不明	1枚

SM-003出土銭貨

天聖元寶（初鋳年1023年，北宋）	1枚
皇宋通寶（初鋳年1038年，北宋）	1枚

いずれも中国からの渡来銭である。SM-002は，永楽通寶の鋳造年代以降に築造されたことが想定できる。また，ＳM-003は，皇宋通寶の鋳造年代以降に築造されたことが想定できる。

我が国の本格的な公的銭貨の鋳造は，最後の皇朝十二銭である天徳２(958)年の乾元大寶から，寛永13(1636)年の寛永通寶まで実施されていない。この間の670余年間は渡来銭流通の時代ということになる。永楽通寶流通時に唐の銭貨である開元通寶も同時に流通していたことが明らかとなった点は興味深い。

注１　高木市之助ほか　1962　『萬葉集』四　－日本古典文学大系７－　岩波書店
「多妣己呂母　夜倍伎可佐祢弖　伊努礼等母　奈保波太佐牟志　伊母尓志阿良祢婆」
２　若山三郎　1992　『市民のための袖ケ浦の歴史』　袖ケ浦市教育委員会

写　真　図　版

遺跡周辺航空写真（平成12年撮影　1：10,000）

SB-001（南西から）

SB-001（北から）

SB-001（東から）

西御祈祷谷古墳群・新開１・新開２遺跡　調査前状況（北から）

西御祈祷谷古墳群・新開２遺跡　調査前状況（南西から）

図版4

西御祈祷谷古墳群

調査前全景（北西から）

盛土除去後全景（北から）

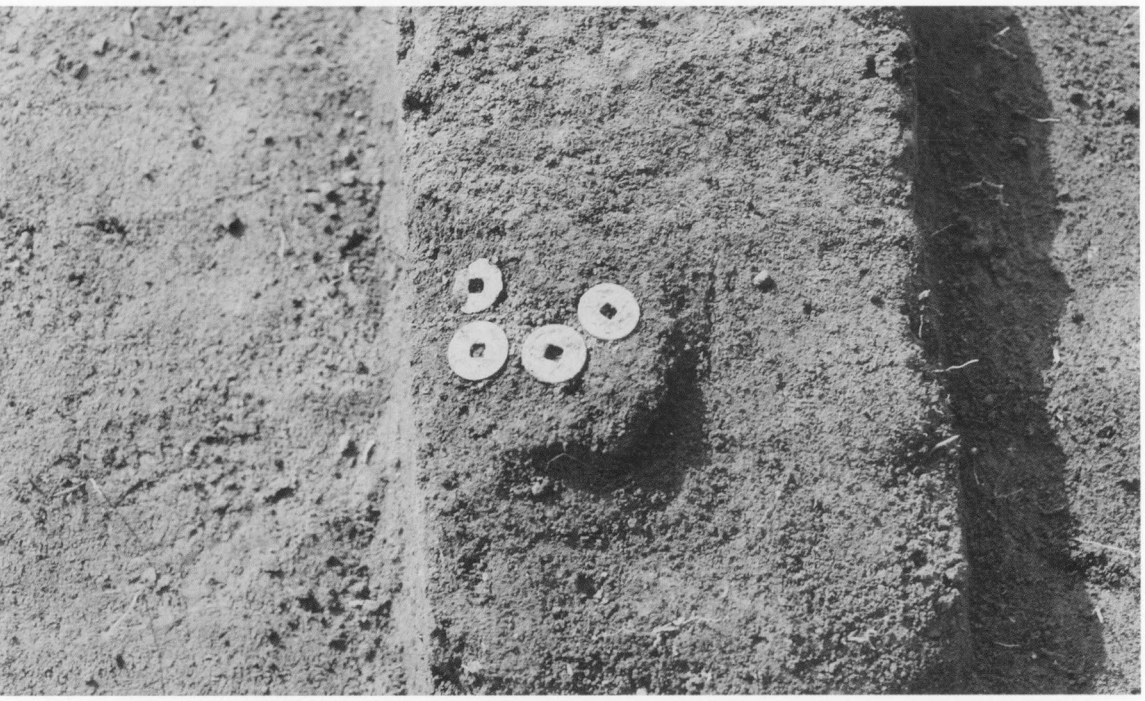
盛土除去後全景（北西から）

SM-001・008
調査前状況(西から)

SM-001・008
盛土除去後(北西から)

SM-002
表土除去後(北西から)

SM-002
盛土除去後(北西から)



SM-002
銭貨出土状況

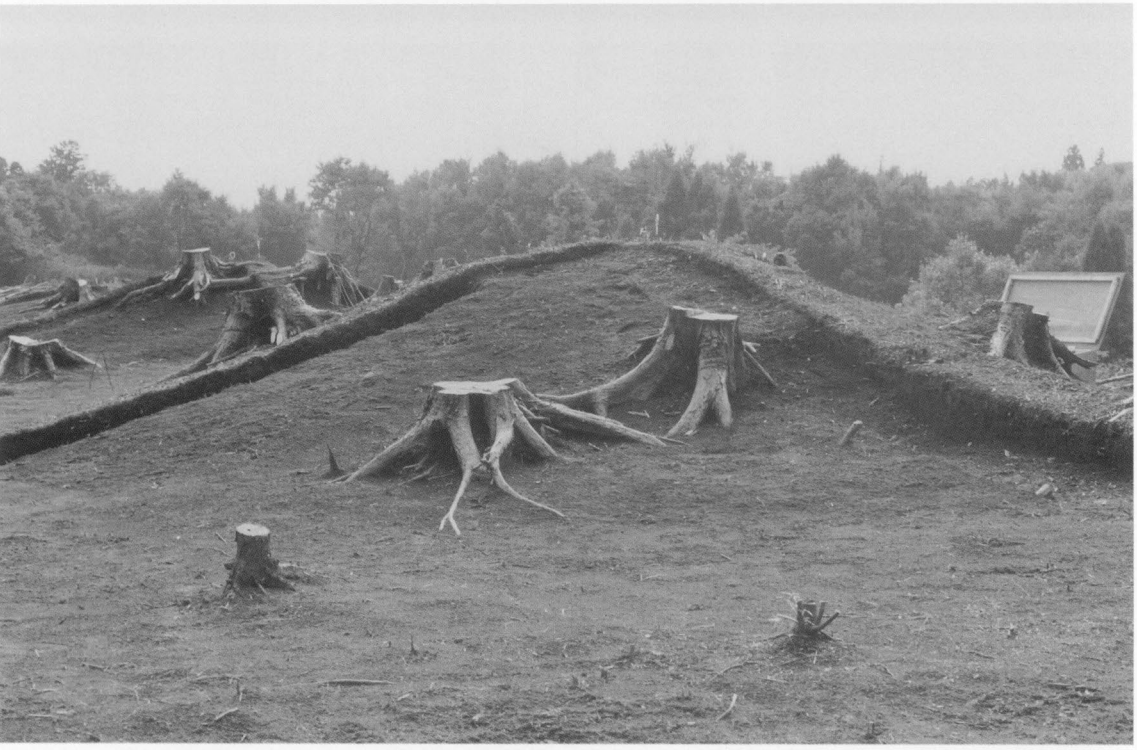
SM-003
調査前状況(南西から)

SM-003
盛土除去後(南から)

SM-004
調査前状況(北西から)

SM-004
盛土除去後(北から)

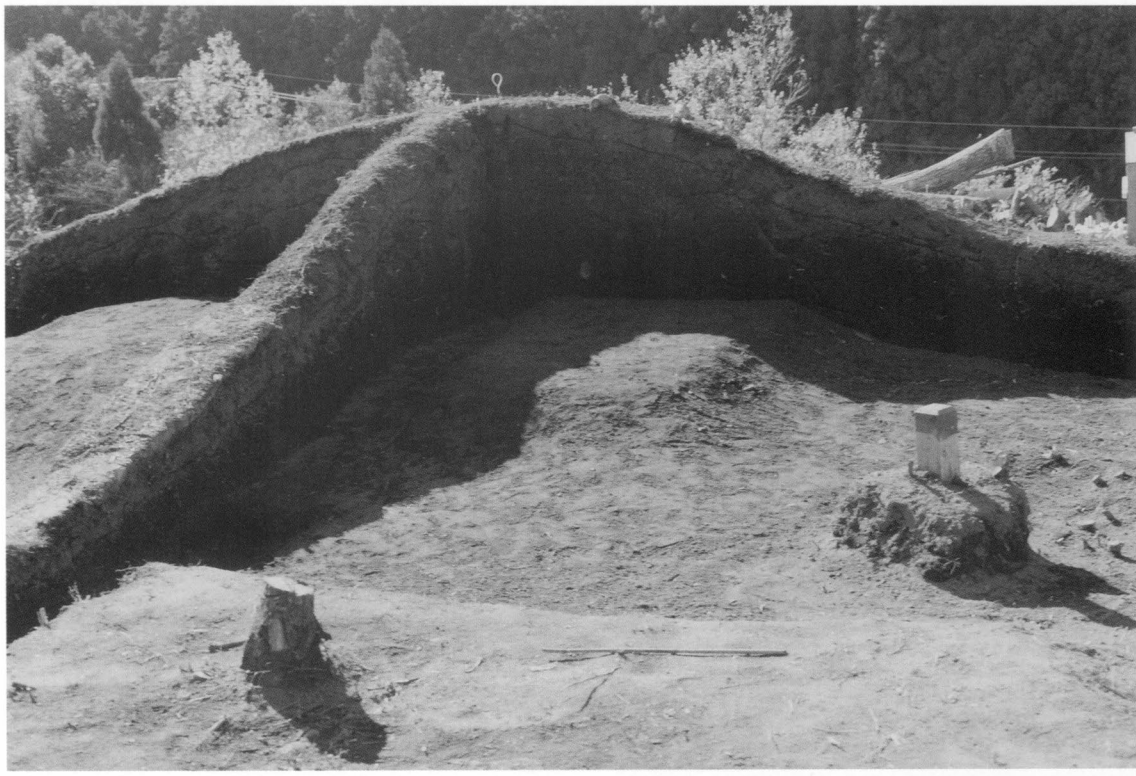
SM-005
調査前状況(南東から)



SM-005
表土除去後(東から)

SM-005
盛土除去後(西から)

SM-006
調査前状況（南東から）



SM-006
盛土除去後（東から）

SM-007
調査前状況（北西から）

SM-007
表土除去後(南から)

SD-002(西から)

SM-006下遺構(南から)

新開１・新開２遺跡　完掘状況（北から）

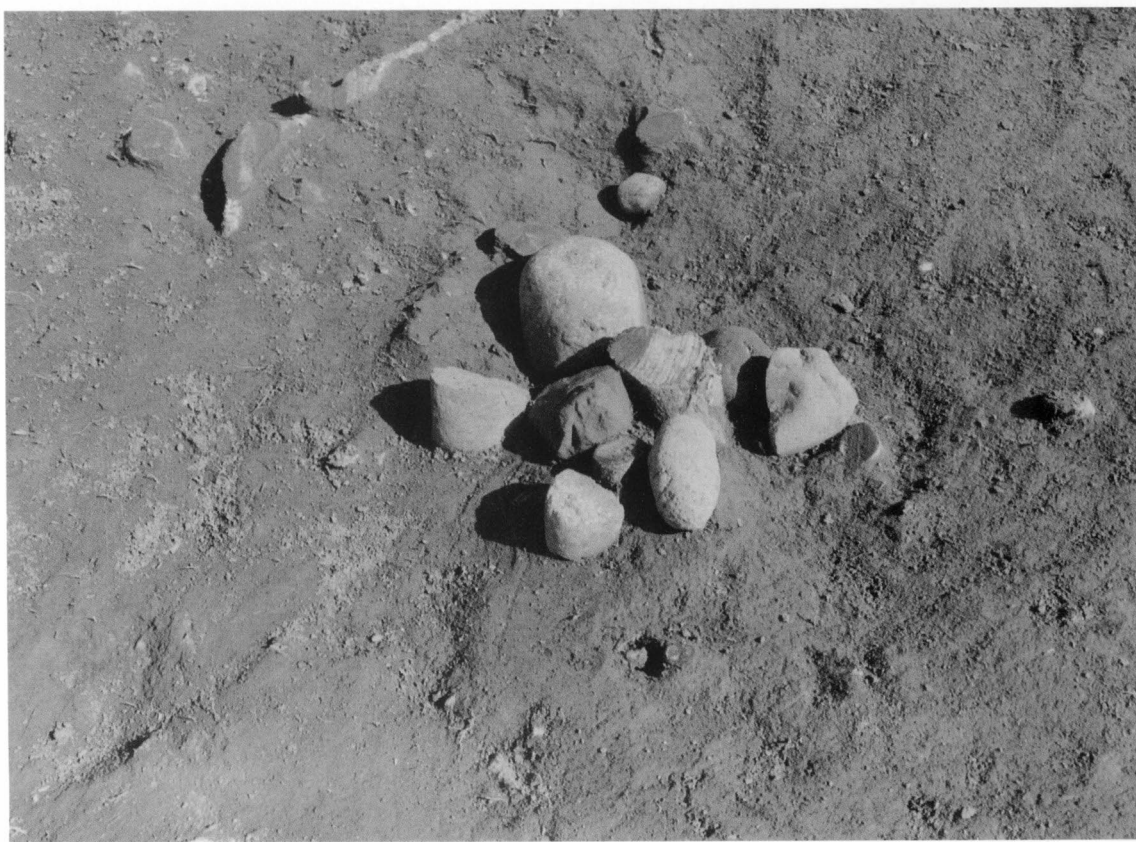
新開１・新開２遺跡　完掘状況（南から）

新開１・新開２遺跡　完掘状況（南西から）

新開１遺跡　完掘状況（西から）

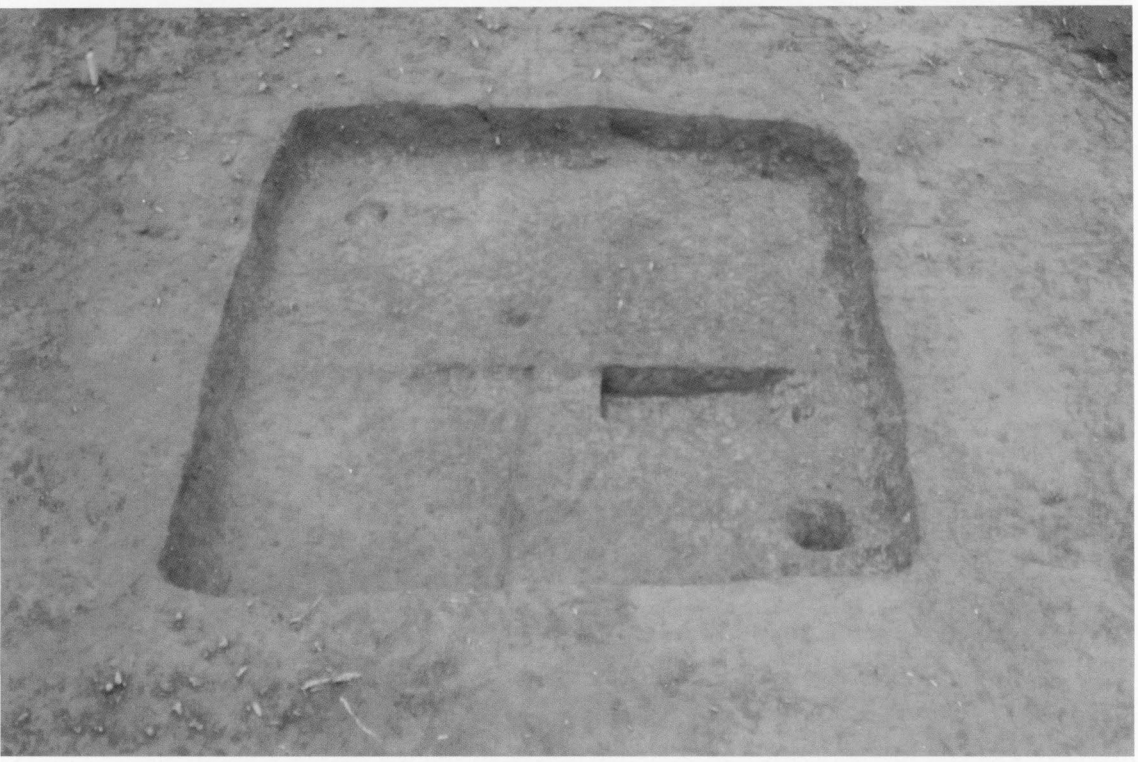
SK-002・004・005
（南から）

SK-002（西から）



礫群

SI-005（北から）



SI-006（南から）

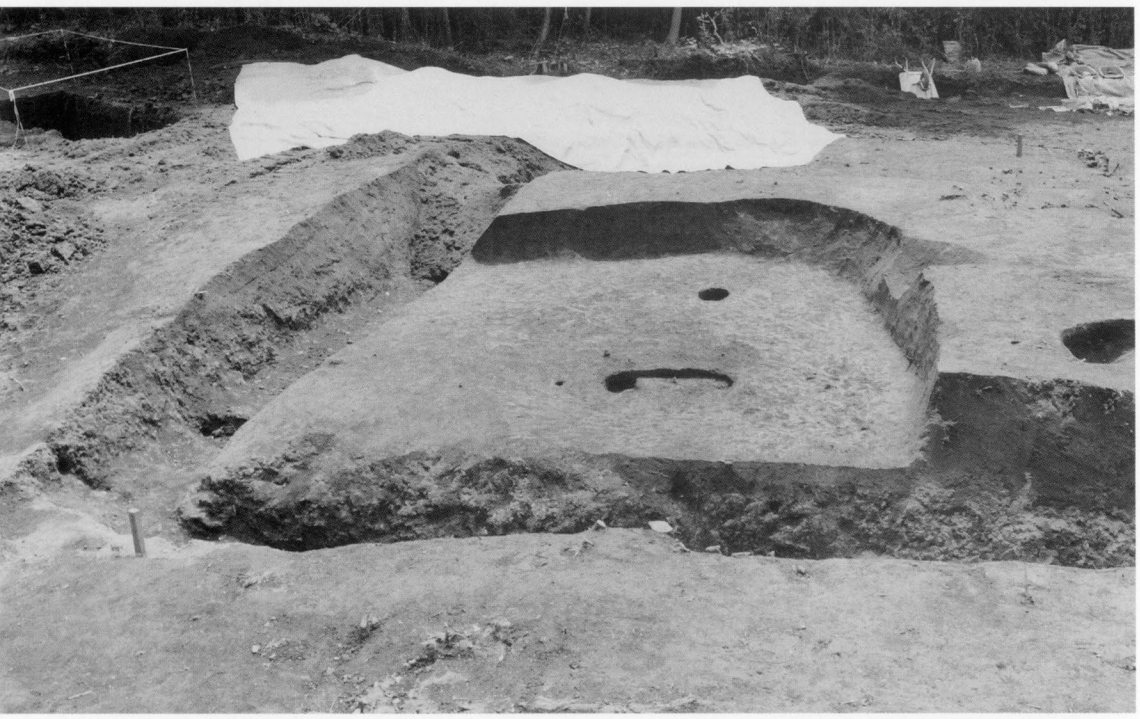
SI-006
遺物出土状況（西から）

SI-007(南から)

SI-008(南から)

SI-009(北から)

SI-010（南から）



SI-011（北から）

SI-012（東から）

SI-015(西から)

SI-015遺物出土状況

SM-010とSD-016
(北西から)

SM-010周溝断面

SS-001（西から）

SK-001（西から）

E5-46拡張区
東壁セクション

SI-001（南東から）

SI-001
遺物出土状況（西から）

新開２遺跡

SI-002(南東から)

SI-004(南から)

SI-013・014(北から)

SM-009石祠(正面)

SM-009石祠(側面)

SM-009石祠(側面)

SM-009
調査前状況（北から）

SM-009
表土除去後（西から）

SM-009
盛土除去後（西から）

SM-009下溝状遺構
（東から）

SD-003（南から）

SD-004（南から）

SD-005（南から）

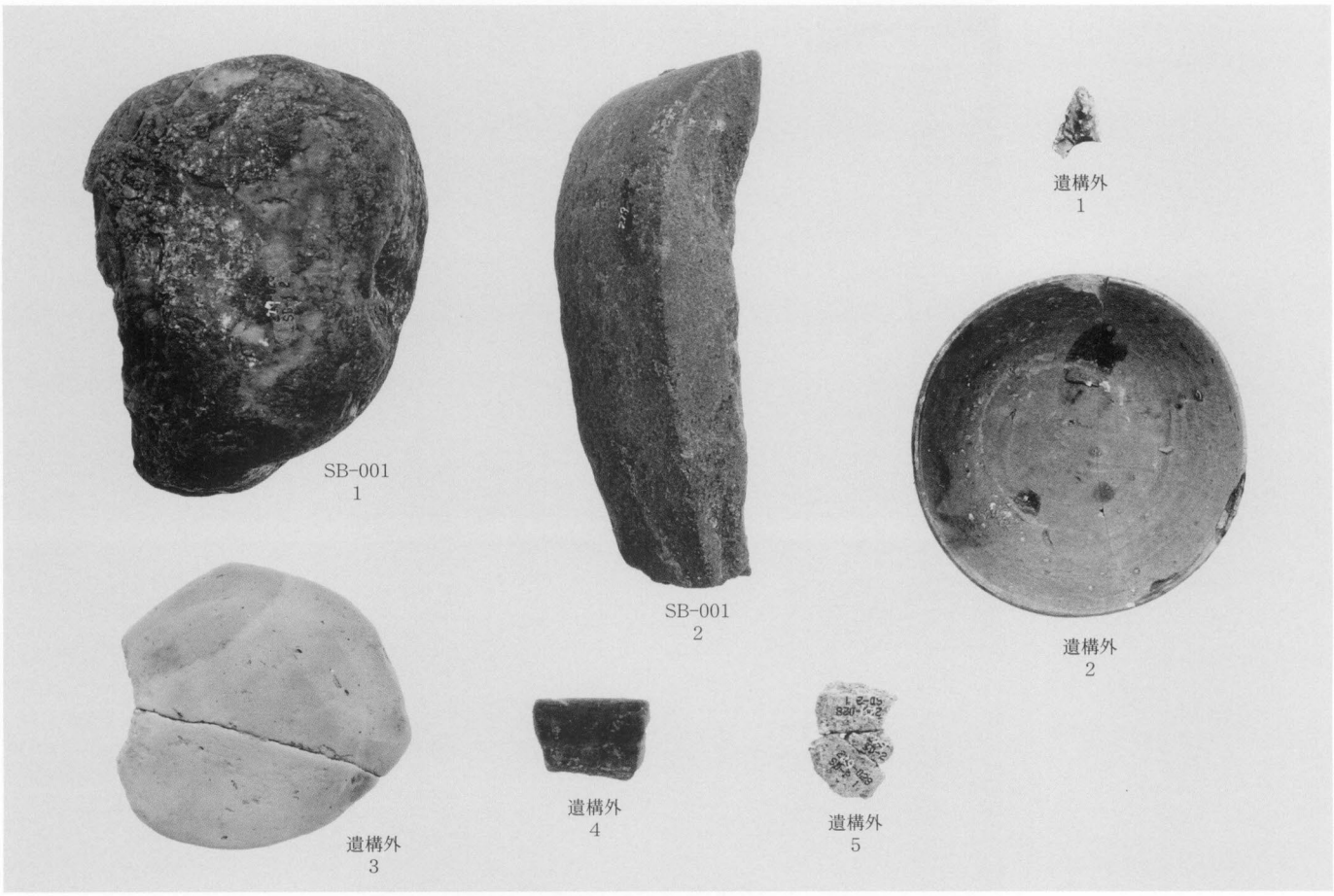
SD-006（西から）

SD-007（北西から）

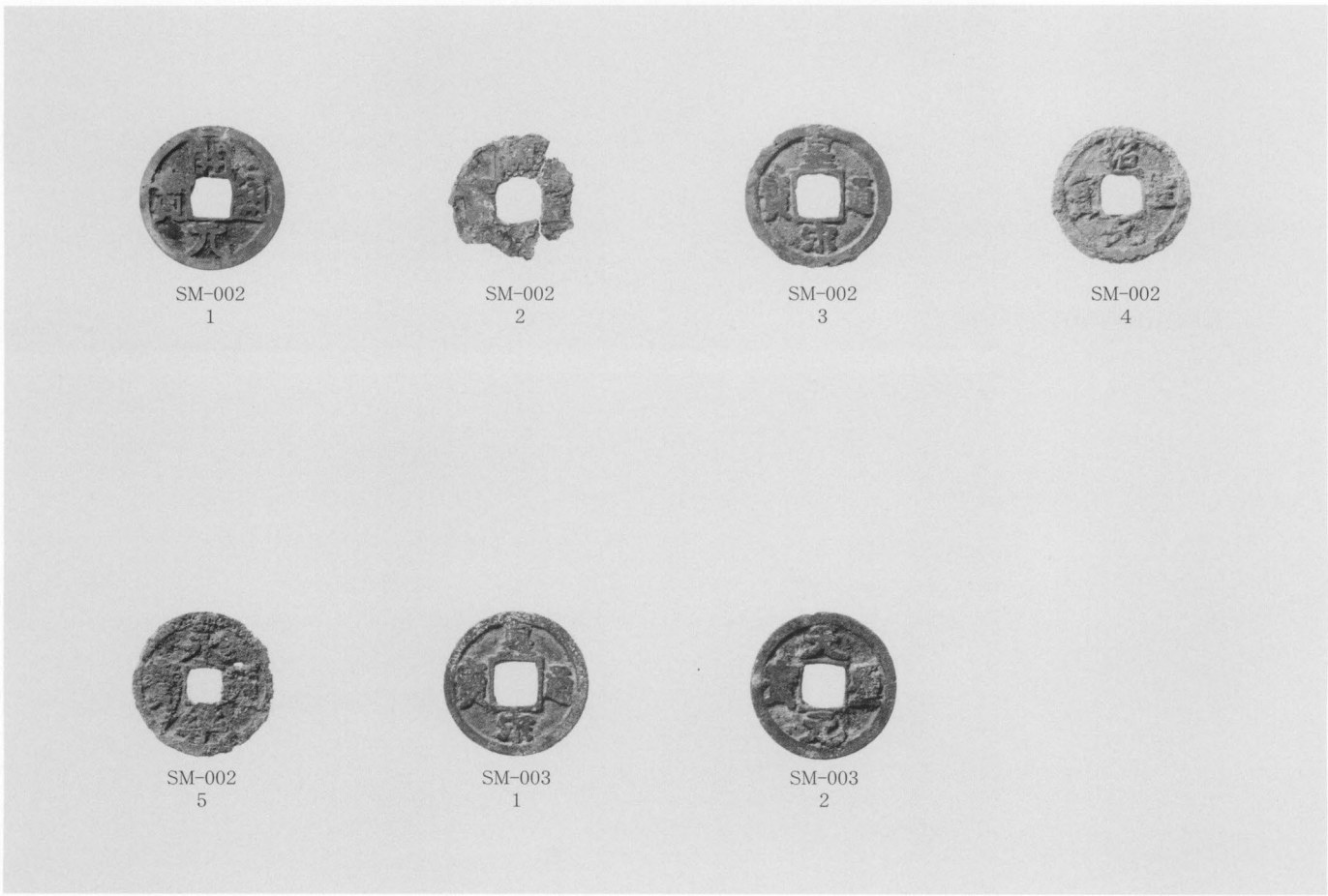
SD-008（南から）

SD-010（西から）

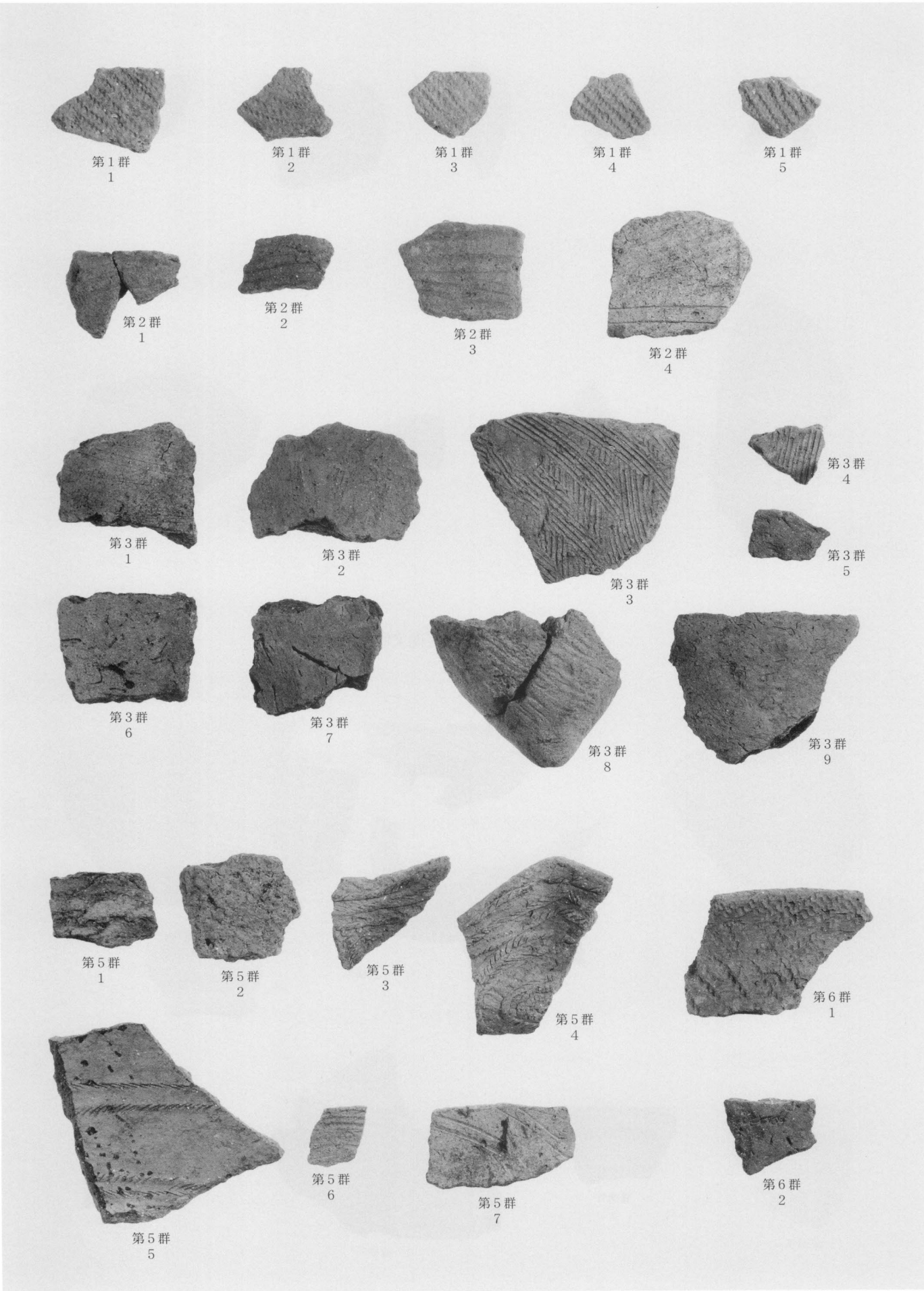
SD-012（南東から）



南岩井作遺跡（吉野田遺跡）出土遺物



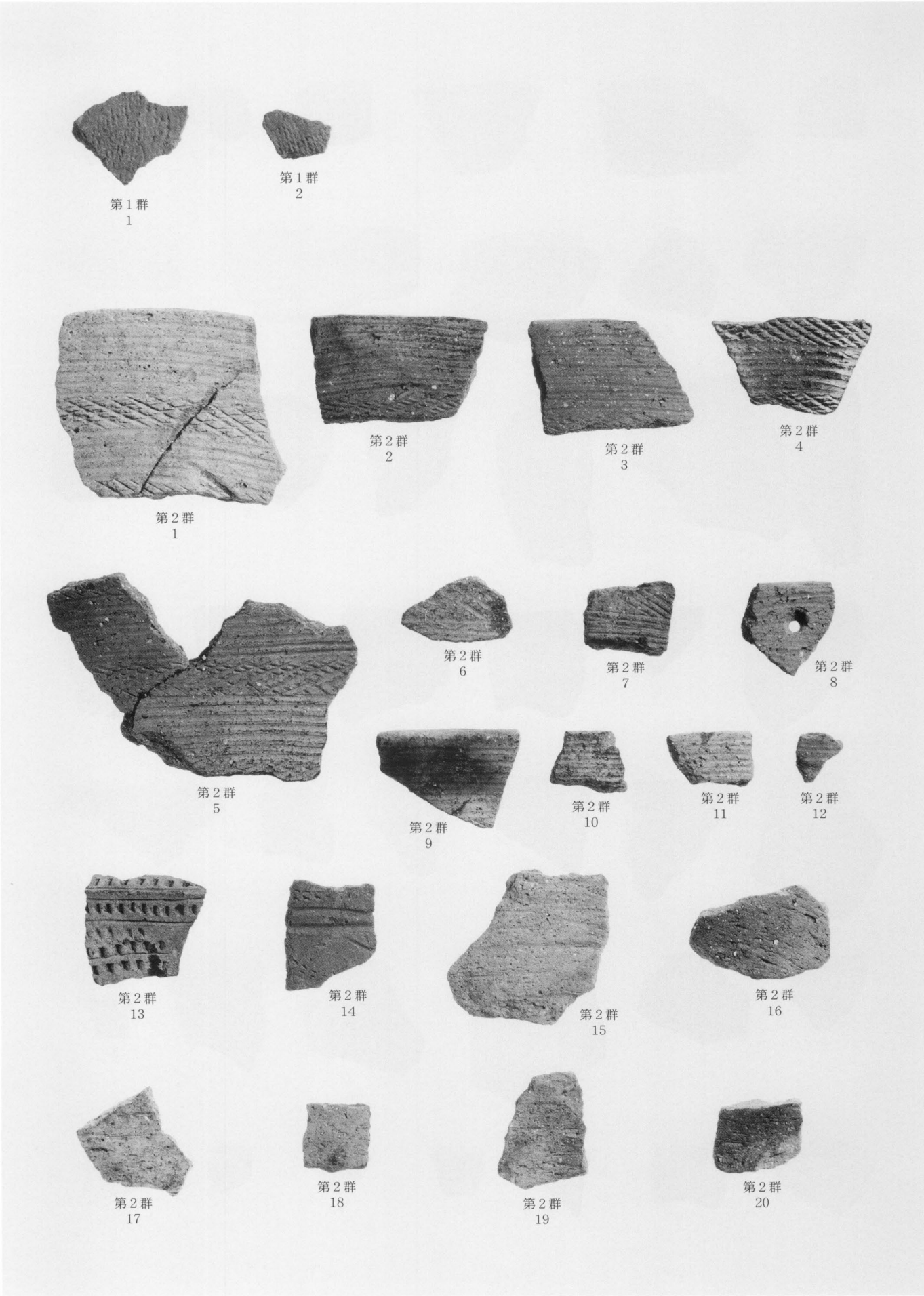
西御祈祷谷古墳群出土銭貨



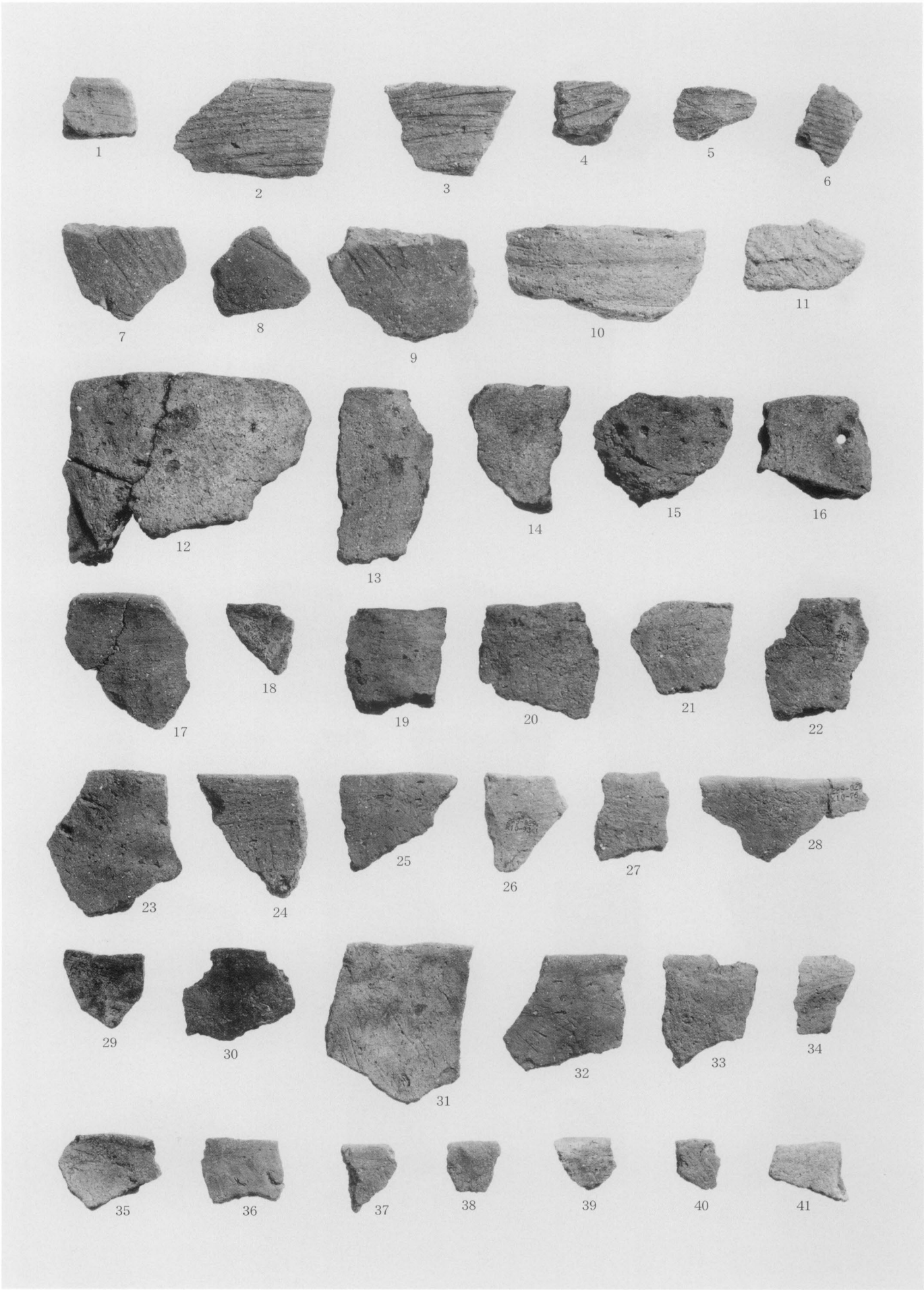
西御祈祷谷古墳群出土縄文土器

西御祈祷谷古墳群出土縄文時代石器

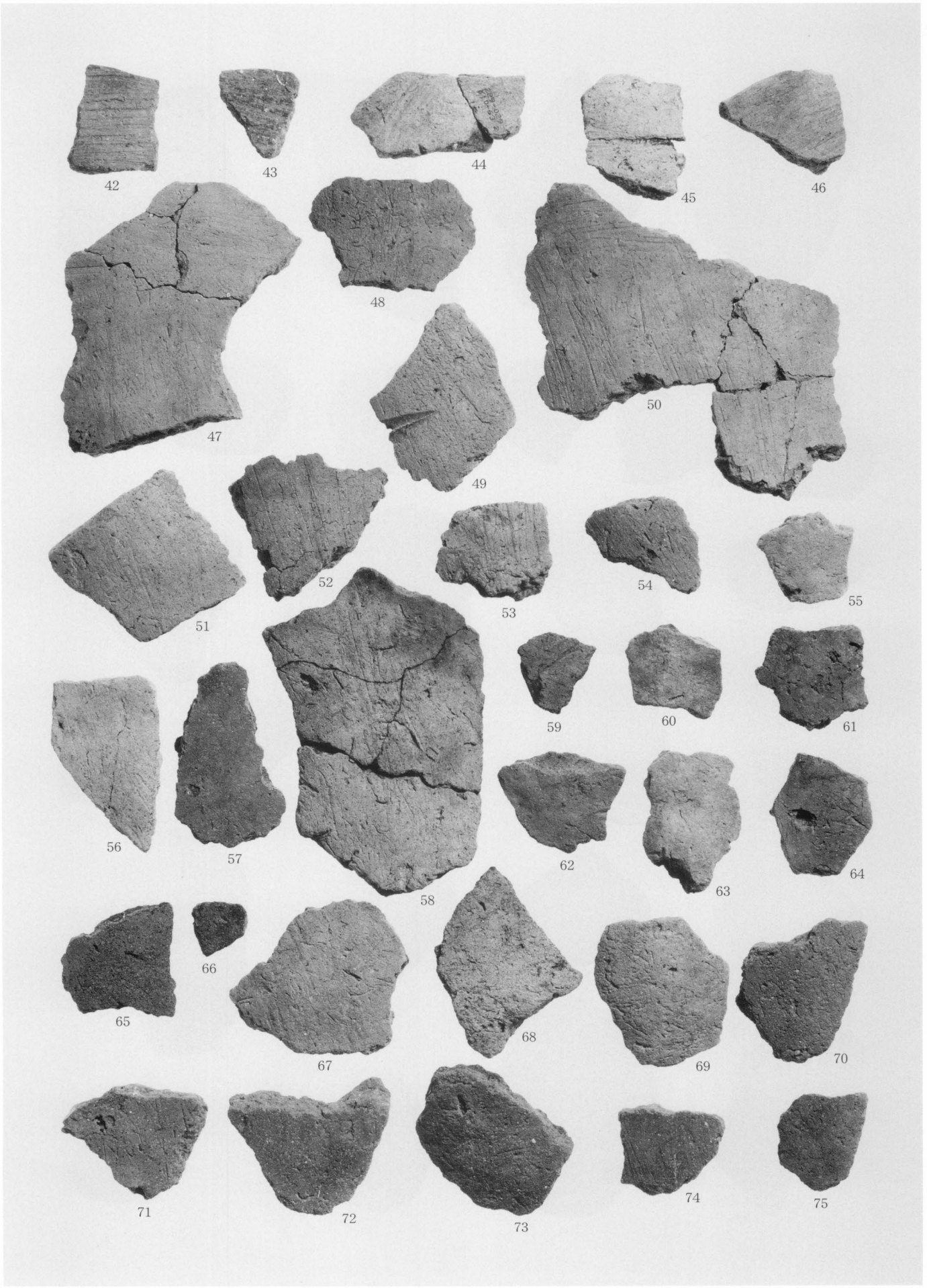
西御祈祷谷古墳群出土奈良・平安時代以降遺物



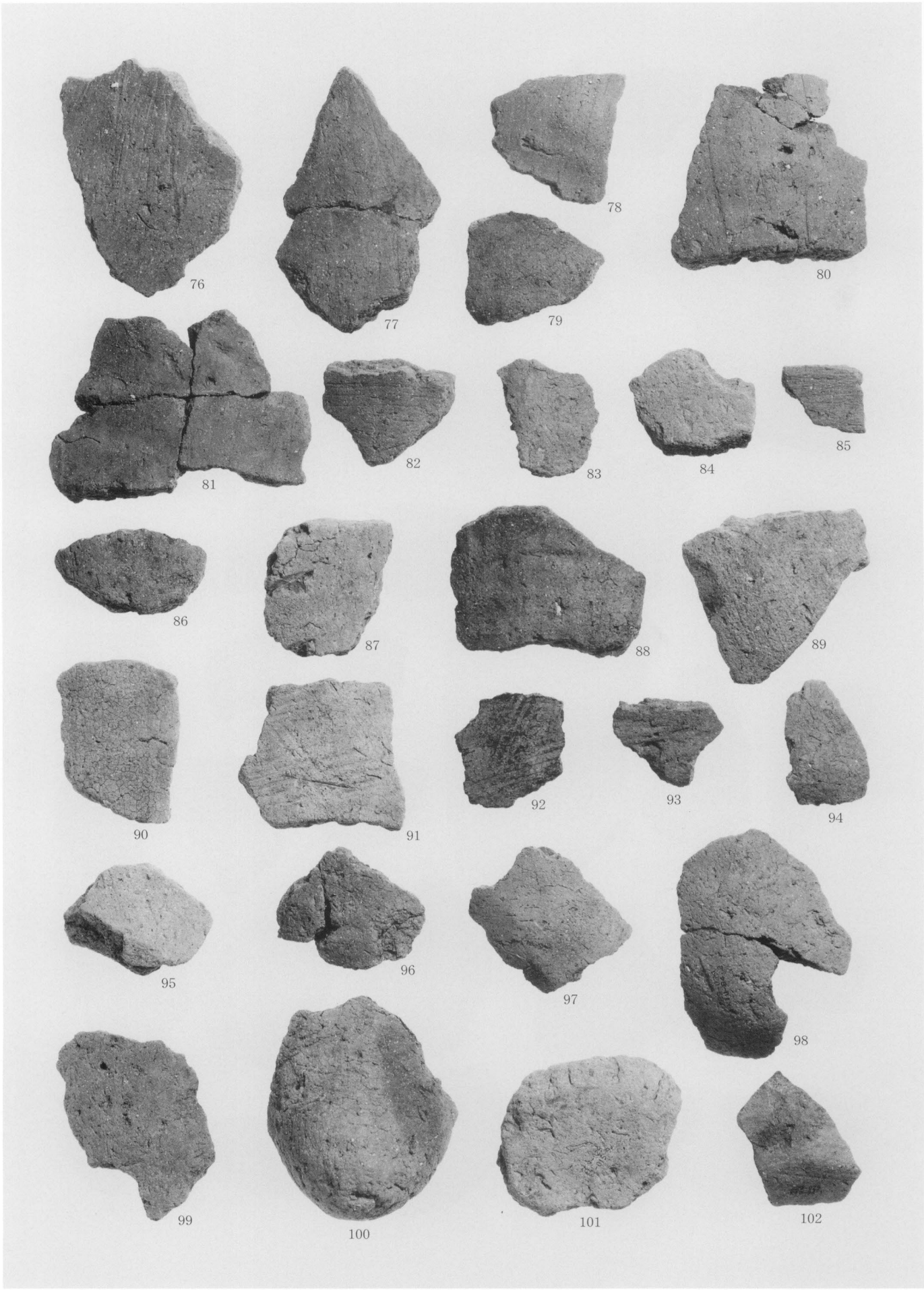
新開1遺跡出土縄文土器（第1・2群）



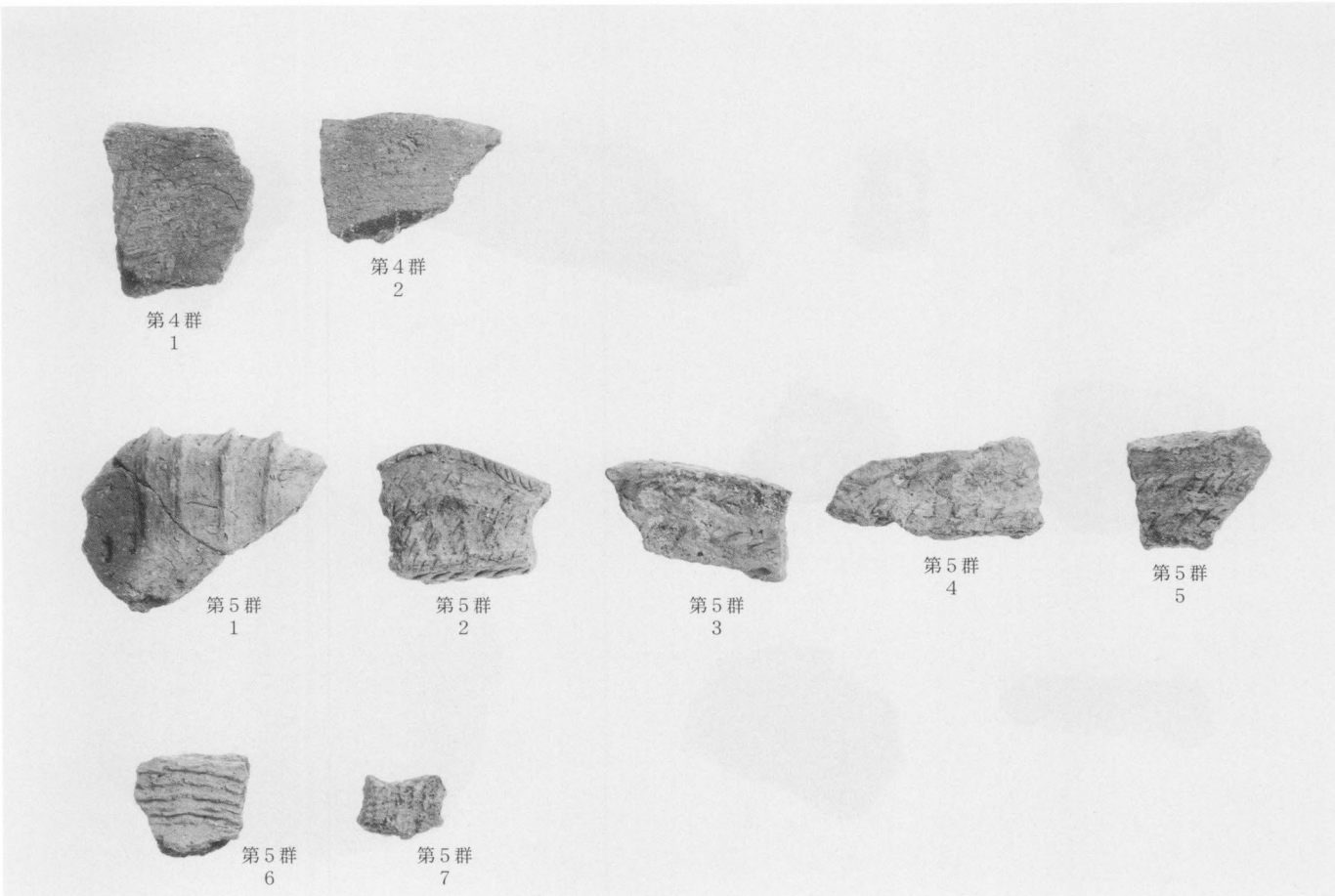
新開１遺跡出土縄文土器（第３群）（１）



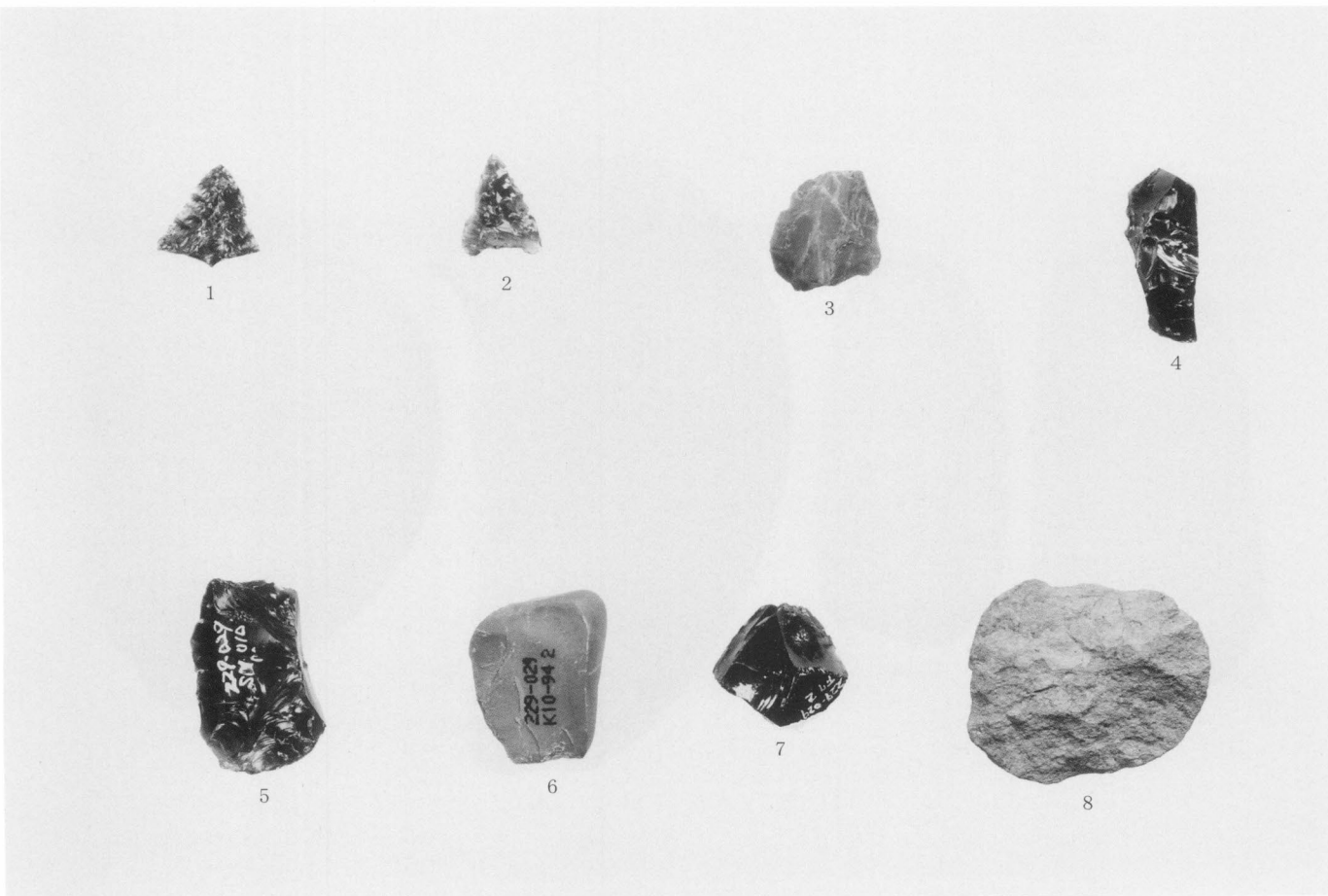
新開１遺跡出土縄文土器（第３群）(2)



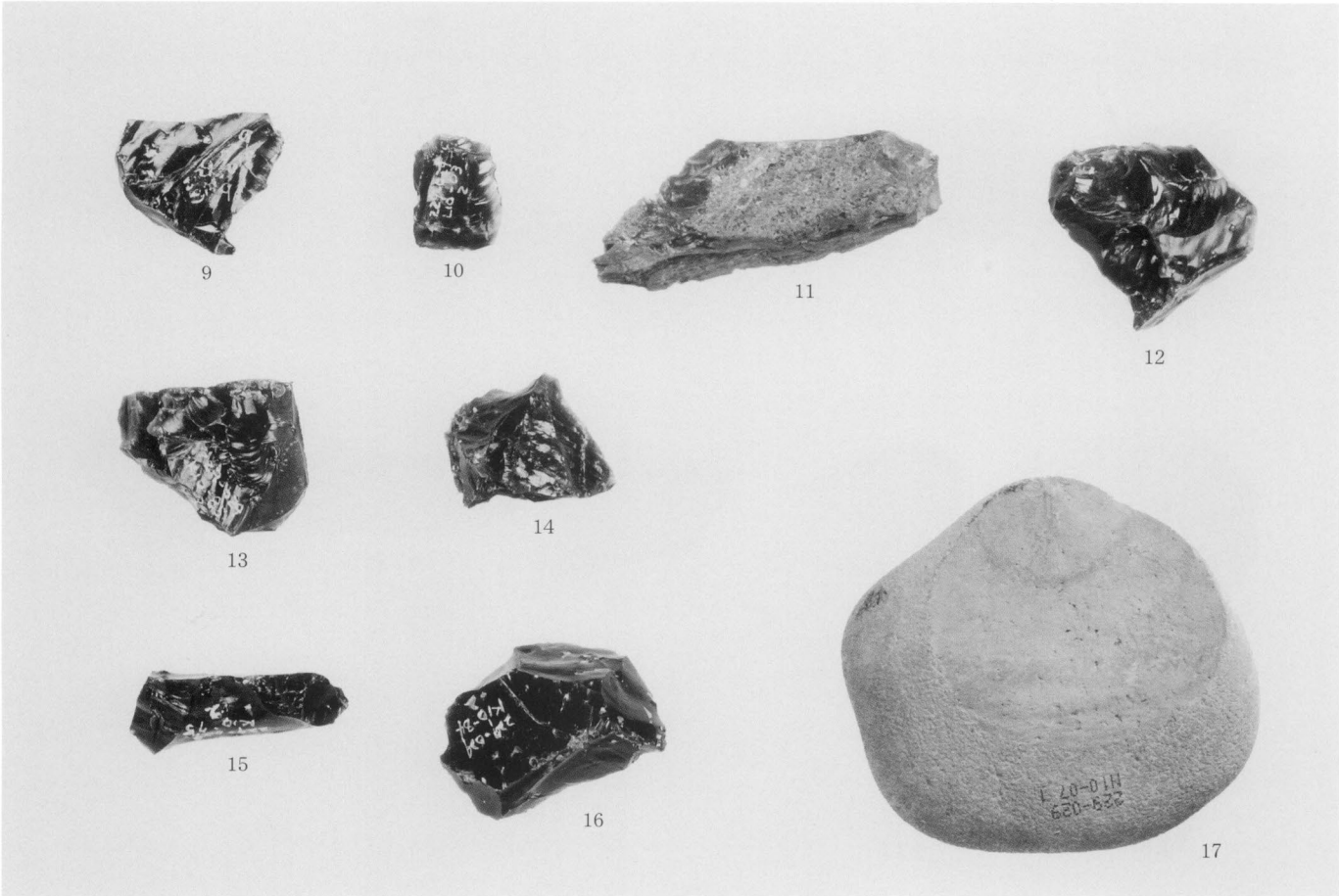
新開１遺跡出土縄文土器（第３群）(3)



新開１遺跡出土縄文土器（第４・５群）



新開１遺跡出土縄文時代石器（1）



新開１遺跡出土縄文時代石器（2）

新開１遺跡出土縄文時代石器（3）

SI-006
1

SI-010
1

SI-015
7

SI-006
2

SI-011
1

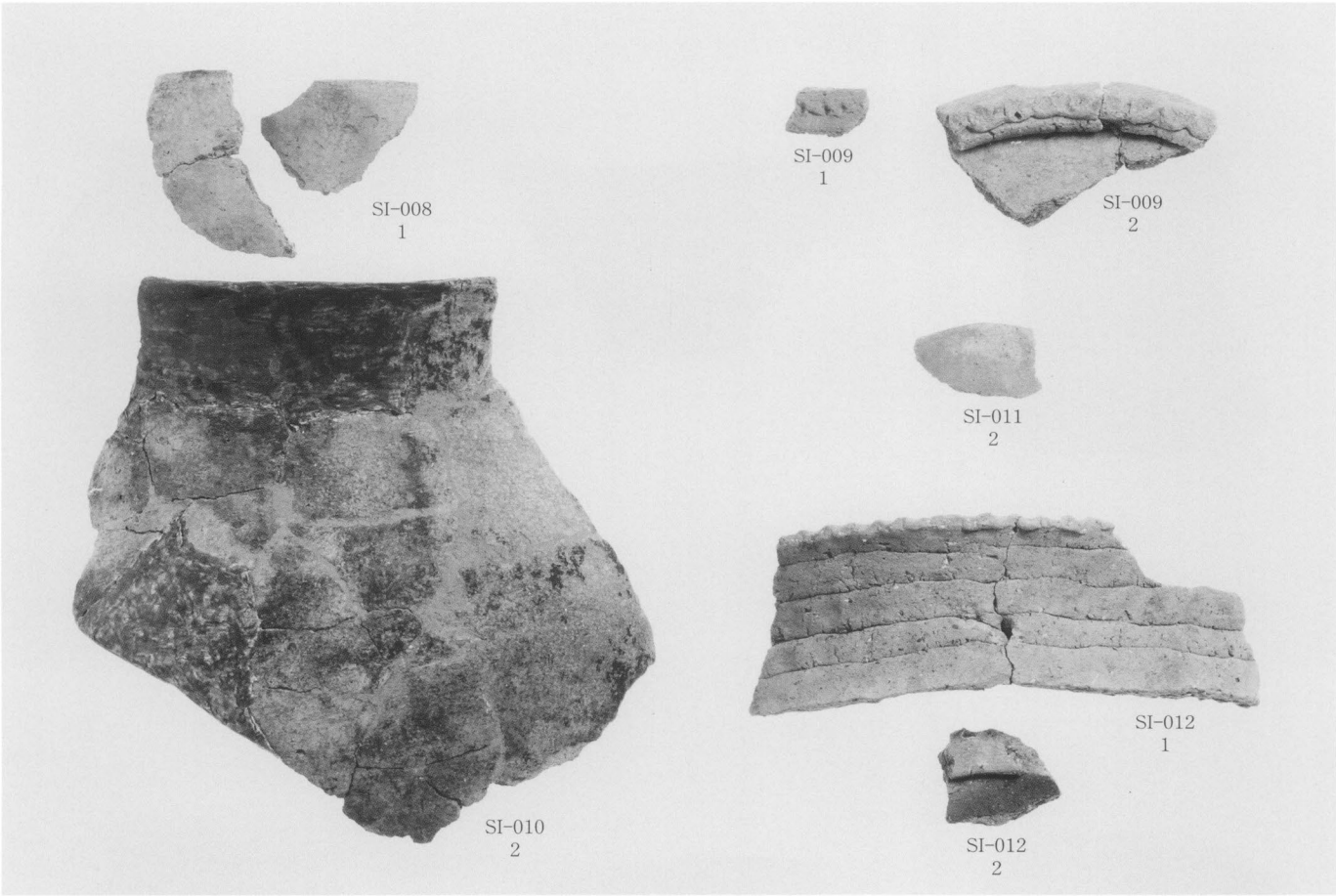
SI-015
8

SI-007
1

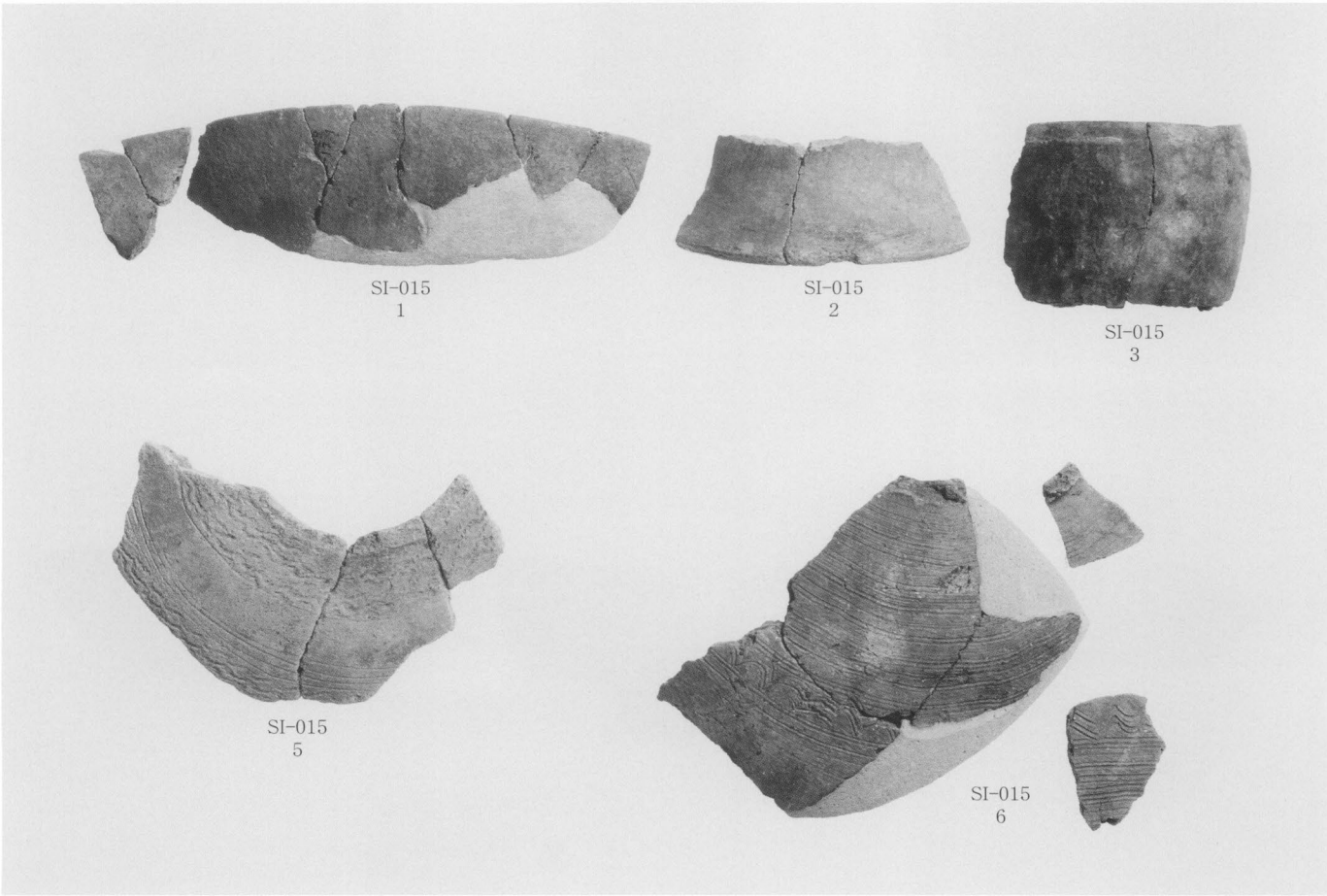
SI-015
4

遺構外
6

新開１遺跡出土土器（1）



新開１遺跡出土土器（2）



新開１遺跡出土土器（3）

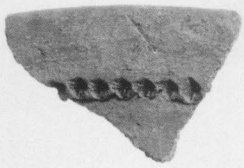
SM-010
1

SM-010
2

SM-010
3

SD-014
1

SD-014
2


遺構外
1

遺構外
2

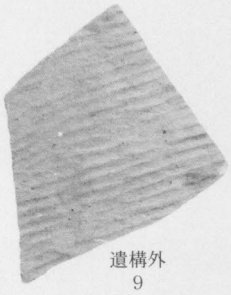
遺構外
3

遺構外
4

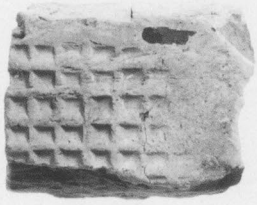
遺構外
5

遺構外
7

遺構外
8


遺構外
9

遺構外
10


遺構外
11

遺構外
12

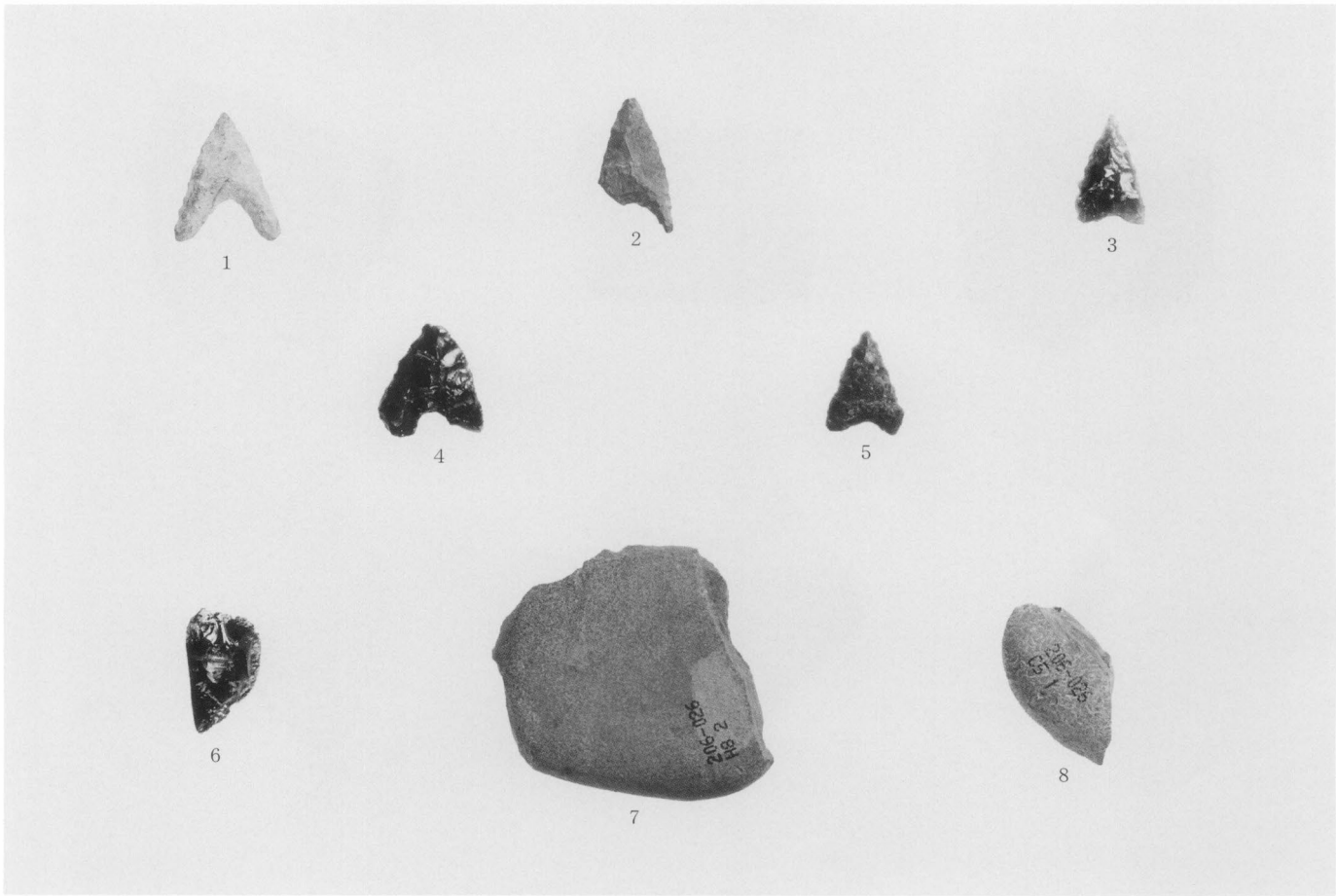
遺構外
13

遺構外
14

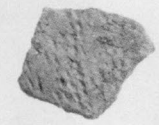
遺構外
15

新開１遺跡出土遺物

新開２遺跡出土旧石器



新開２遺跡出土縄文時代石器


第１群
1

第１群
2

第２群
1

第２群
2

第２群
3

第２群
4

第２群
5

第２群
6

第２群
7

第２群
8

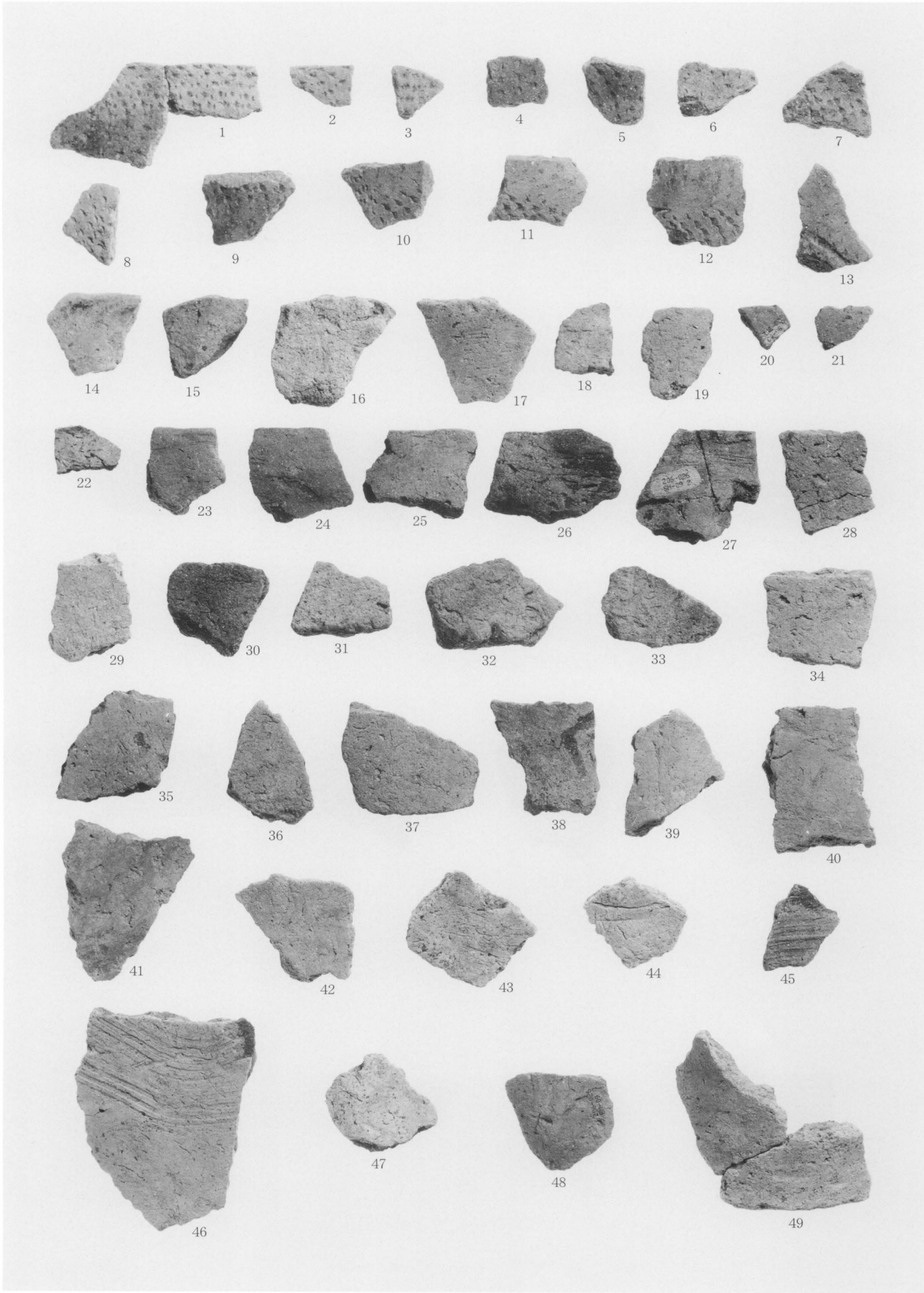
第２群
9

第２群
10

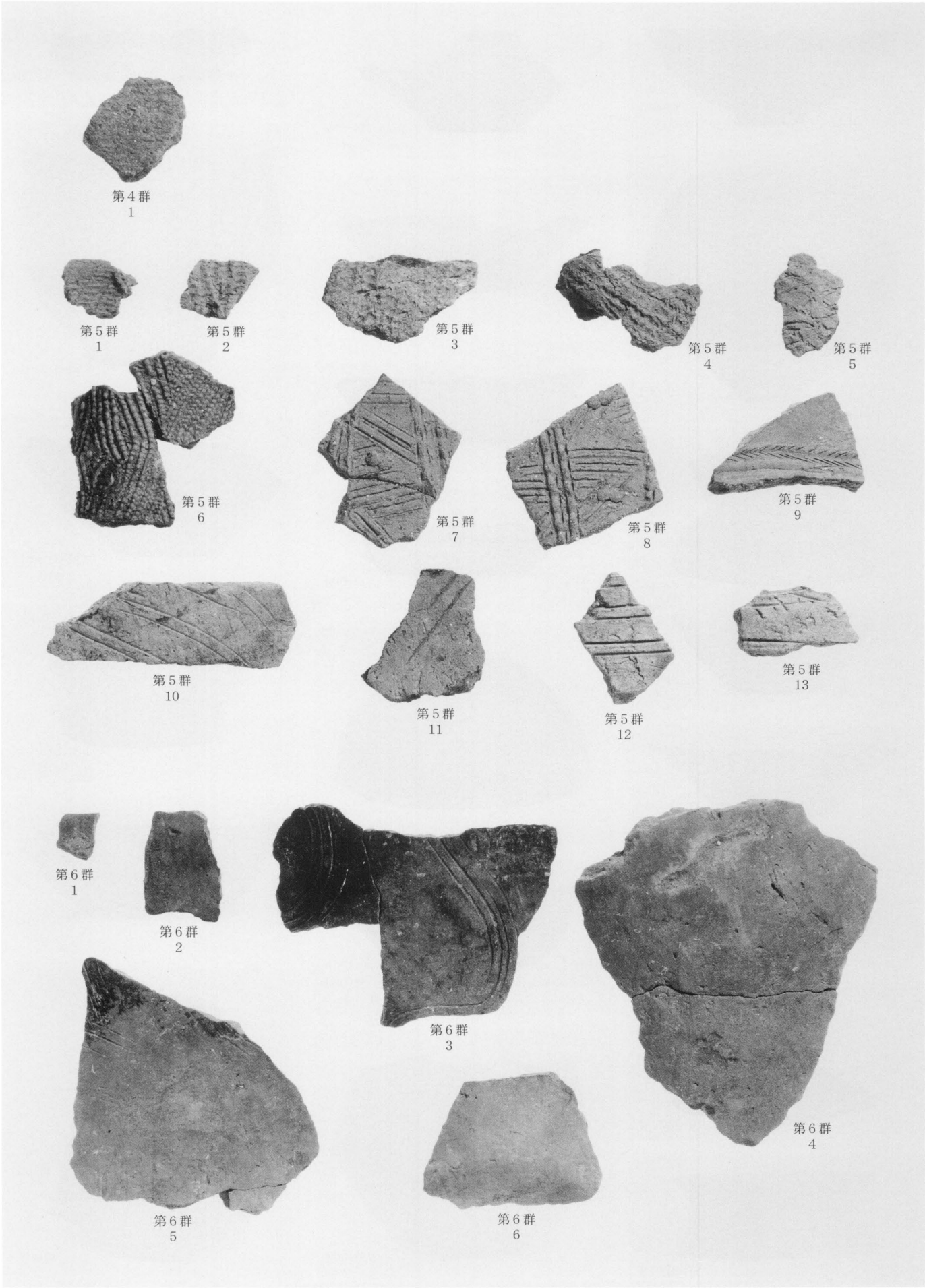
第２群
11

第２群
12

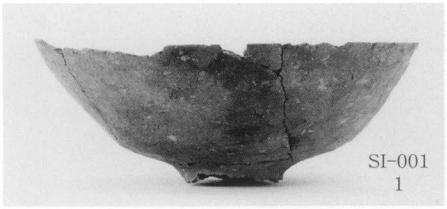
新開２遺跡出土縄文土器（第１・２群）

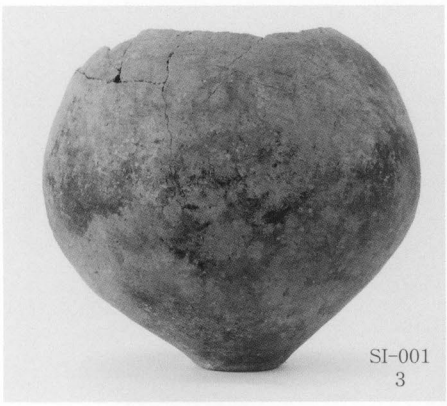


新開２遺跡出土縄文土器（第３群）



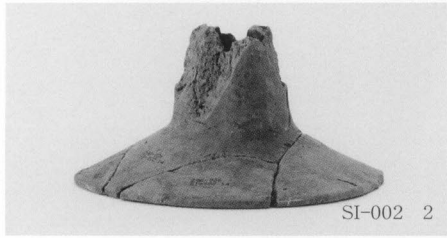
新開2遺跡出土縄文土器（第4・5・6群）

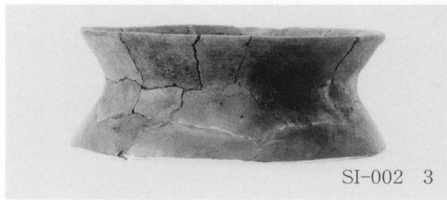

SI-001
1


SI-001
3

SI-001
4

SI-002　1


SI-002　2


SI-002　3

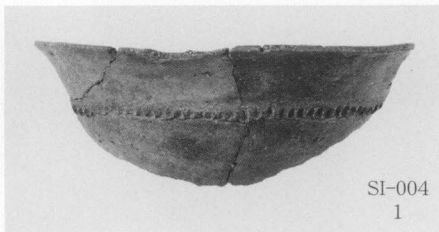
SI-002
4

SI-002
5

SI-002
6

SI-002
7

SI-002
8


SI-004
1

SI-004
2

SI-004
4

SI-013・014
17

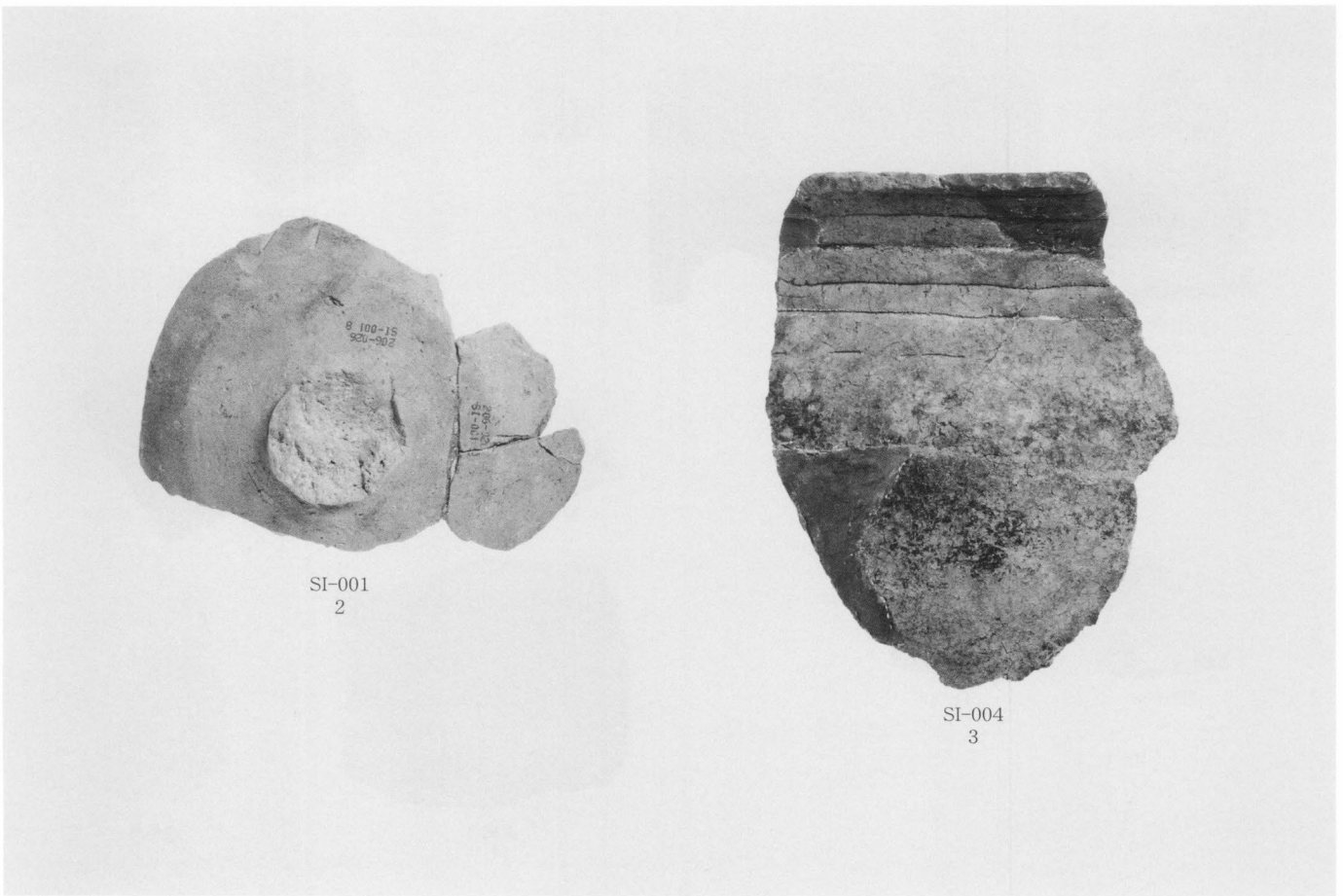
SI-013・014
18

SI-013・014
19

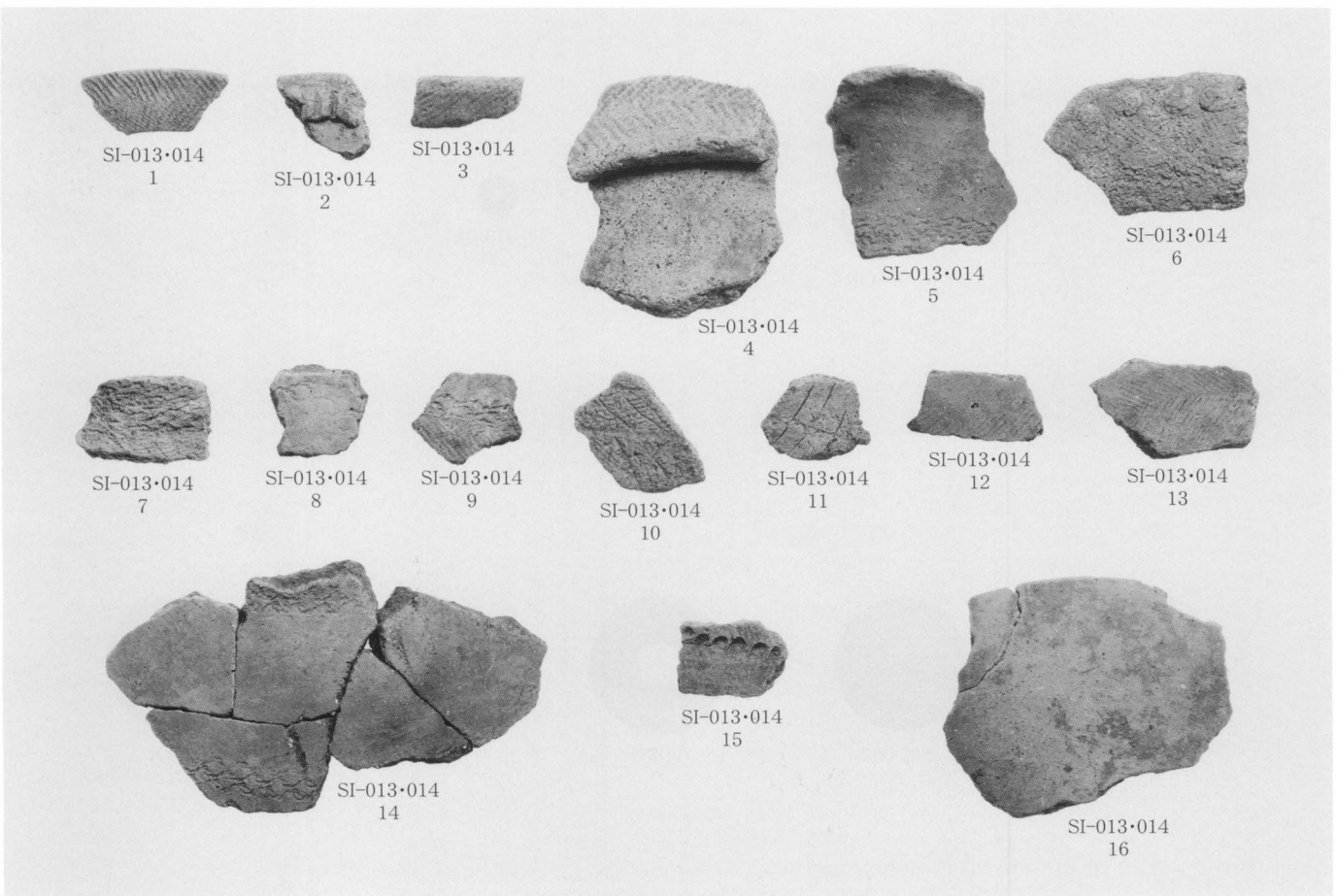
SD-012
1

遺構外
2

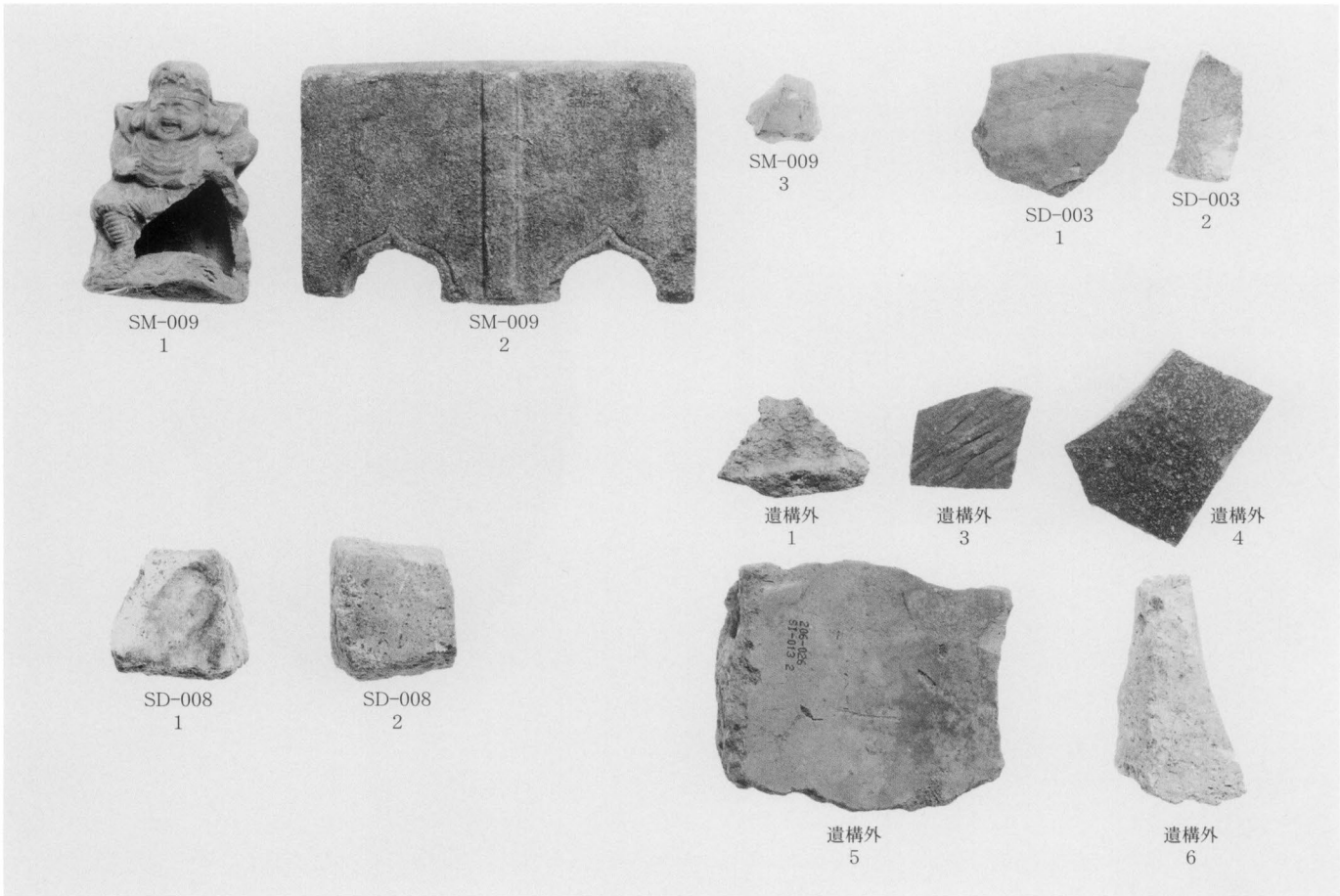
新開２遺跡出土土器（1）



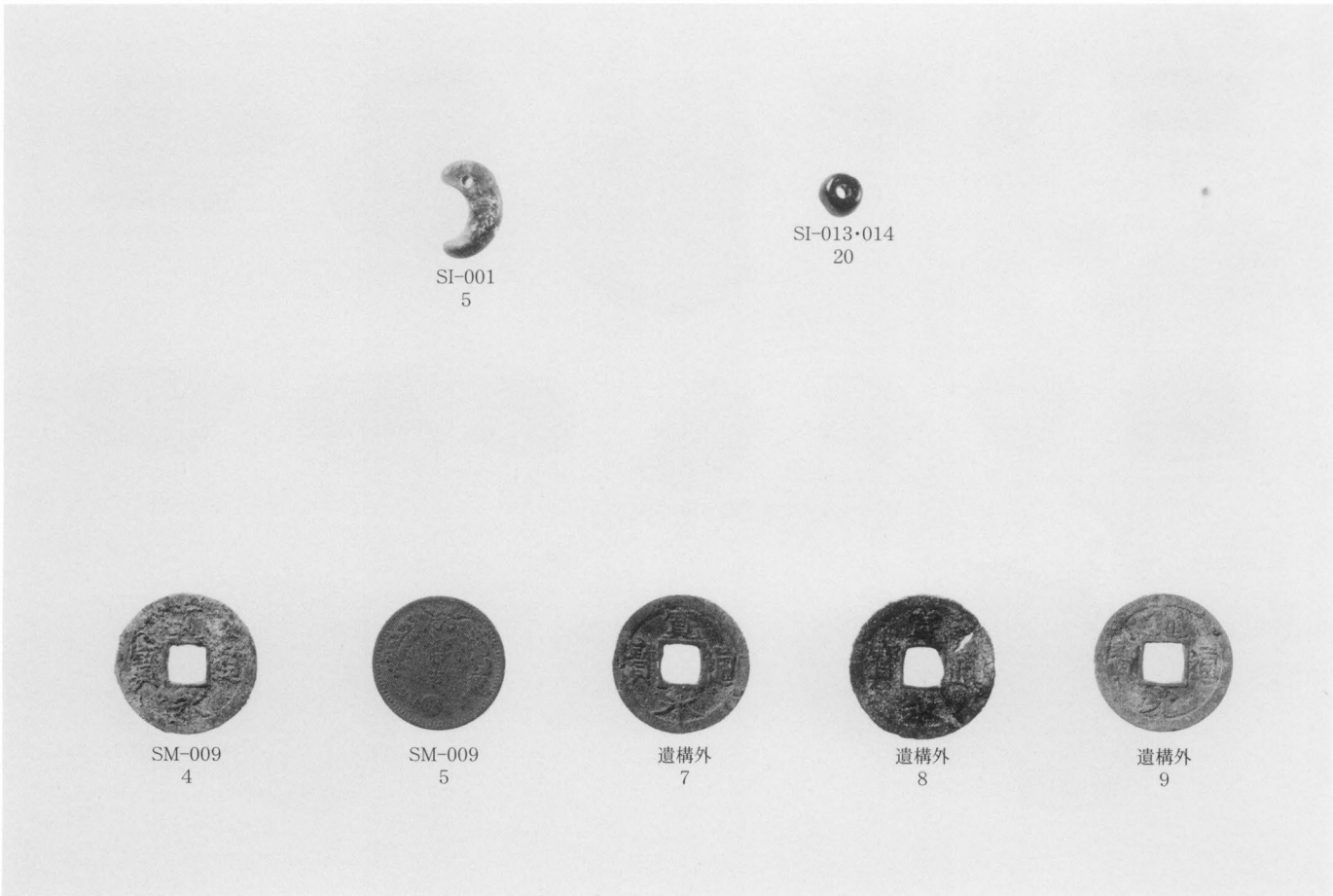
新開２遺跡出土土器（2）



新開２遺跡出土土器（3）



新開２遺跡出土遺物



新開２遺跡出土玉類・銭貨

報告書抄録

ふりがな	しゅとけんちゅうおうれんらくじどうしゃどうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書
副書名	袖ケ浦市南岩井作遺跡(吉野田遺跡)・西御祈祷谷古墳群・新開１遺跡，木更津市新開２遺跡
巻次	1
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第497集
編著者名	土屋治雄・半澤幹雄・高梨友子
編集機関	財団法人　千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809-2　　TEL 043-422-8811
発行年月日	西暦2004年12月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みなみいわいさく 南岩井作遺跡 よしのだ (吉野田遺跡)	そでがうらしよしのだ 袖ケ浦市吉野田 あざみなみいわいさく 字南岩井作19-2	12229	028	35度 21分 35秒	140度 00分 22秒	20020501～ 20020531	780㎡	道路建設に伴う埋蔵文化財調査
にしごきとうやつ 西御祈祷谷 古墳群	そでがうらしたまの 袖ケ浦市玉野 あざにしごきとうやつ 字西御祈祷谷 1,201ほか	12229	027	35度 21分 48秒	140度 00分 12秒	20011015～ 20020215	塚８基	
しんかい 新開１遺跡	そでがうらしよしのだ 袖ケ浦市吉野田 あざいわいさく 字岩井作47-2	12229	029			20020603～ 20020731 20040201～ 20040227	2,540㎡	
しんかい 新開２遺跡	きさらづしいずしま 木更津市伊豆島 あざしんかい 字新開1,201-1	12206	026			20020401～ 20020628	3,200㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南岩井作遺跡 (吉野田遺跡)	集落跡	中・近世	掘立柱建物跡，溝状遺構	中・近世陶磁器，砥石	
西御祈祷谷 古墳群	祭祀	中・近世	塚	中・近世陶磁器，銭貨	
新開１遺跡	包蔵地 集落跡 墓域	縄文時代 弥生～古墳時代 奈良・平安時代 中・近世	早期包含層・土坑・竪穴住居跡 方形周溝状遺構 溝状遺構	縄文土器・石器 弥生土器，土師器，須恵器 土師器，須恵器，瓦	
新開２遺跡	包蔵地 包蔵地 集落跡	旧石器時代 縄文時代 弥生～古墳時代 奈良・平安時代 中・近世	竪穴住居跡 溝状遺構 溝状遺構	石器 縄文土器・石器 弥生土器，土師器，須恵器 土師器，瓦	

千葉県文化財センター調査報告第497集

首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書１

－袖ケ浦市南岩井作遺跡（吉野田遺跡）・西御祈祷谷古墳群・新開１遺跡，木更津市新開２遺跡－

平成16年12月22日発行

編　　集　　財団法人　千葉県文化財センター

発　　行　　国土交通省関東地方整備局
千葉国道事務所
千葉市稲毛区天台5丁目27番1号

財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地2

印　　刷　　三陽工業株式会社
市原市五井5510番地1